序

(भूमिका)

インドの憲法によって 新たにインド連邦の国語として認定されるに至ったヒンディーの本格的な文法書というものは 今日まで我が国に存在しなかった。

昭和18年の早春 日本外務省と財団法人啓明会との後援のもとに出版された拙著「印度文典」(1)は いわゆるヒンディー語の文法書ではなく 英領印度時代の哲学語であり公用語であったウルドゥー語の文法書で ペルシャ文字使用書であった。そのウルドゥー語は 今や新興 パキスターン国の公用語に指定されているが インドでは一地方語と化してしまった。

周知の通り ヒンディーのペルシャ語化したのが ウルドゥーなのである。両者間の主なる相違といえば 用語の語原的要素や使用文字以外に見出せない。従って 幾種かの存在が想定されるヒンディーにおける純度の査定は 文法組織の如何に因ることではなく ウルドゥーと全然共通である動詞・代名詞・単一後置詞以外の諸品詞に見られるペルシャ語やアラビア語の含有量の程度によって決まることである

ヒンディーとは ペルシャ語「ヒンド」即ち「インド」に由来し いわゆる「ヒンドゥスターン」(2)即ち現在の「ウッタル・プラデーシュ」つまり「北部州」を本場とする北印のインド語であることにおいて いわゆる「ヒンドゥスターニー語」と異ならない。そして 本語はそれぞれ数種が

---

(1) 丸善株式会社刊 A5版430ページ

(2) 「インド教徒の国」の意のペルシャ語 広義ではインド全土が意味される

ら成る西ヒンディー方言群(1)、東ヒンディー方言群(2)、ヒハーリー方言群(3)、ラージャスターニー方言群，パハーリー方言群(4)などに分たれている。

さて，本書は昭和25年度，文部省科学研究費によって成された「ヒンディー語法の研究」を初学者にも利用され得るように整えたもの。これで，本言語に関する限り，その「韻文法」や「方言比較文法」を除く一般文法はすべて述べ尽したつもりである。しかしながら，やゝもすれば文法組織の体系づけに徹底を欠く憾みのあるのは，古来文法よりも慣用が重視されて来た本言語における特殊事情に起因するものである。(5)

なお，本書の重点を「文章論」に置いたのは当然としても，紙面の都合で「詩形論」を単なる序説程度のものに終わらせたのは甚だ遺憾であった。

また，本書の文例における主要な用語を集録して，文法書としては型破りの「語集」を添付したのは，本邦にも「インド語辞典」が出現するまでの一時的方便からである。

終わりに臨み，本書の刊行に当り，大阪外国語大学からモノタイプのデーヴァ・ナーガリー文字母型の貸与に預かったことを記して謝意を表する。

1960年1月

著者識す

---

(1) 本語を初め，ウルトゥーやヒンドゥスターニーの諸語と最も関係の深い Khaṛiboli 語〔使用人口約530万〕や Braj 語〔使用人口約790万〕ほか3種から成っている。アーグラ，アリーガル，マトゥラーの3市周辺で話されている。

(2) U P 州，つまり北部州の東部において約1,420万の住民によって話される Awadhi 語ほか2種から成る。

(3) ボージプル地方の約2 000万住民に用いられる Bhojpuri 語やガヤー地方の約1,500万住民によるマガダ語（Magahi）などが含まれる。

(4) 「山の」意で，ヒマーラヤ山脈の南側，シムラからネパール王国までの間に話される数種の方言が意味される。ネパール語もその一つである。

(5) 350 ページ「慣用は文法に優先」の項参照。

目　次 (विषय सूची)

第一編　文字論 (वर्णलिपिविज्ञान)

第二編 品 詞 論 (शब्दरूप)

第三編　文章論 (कारक प्रक्रिया)

第四編 詩 形 論 (छन्द शास्त्र)

凡　　例

(व्याख्या)

(1) 本書における (　) 印は省略可能なもの, (=) 印はそれに先立つ語と全然同一なもの, 〔= 〕印はその場限り代用可能なもの, そして単なる〔　〕印は単に参考のためにそこに置いてみただけのものが意味される。

(2) * 印は女性名詞, ** 印は男女両性兼用語を意味する。

(3) 名詞の右下に添付したイタリック体ローマ字の小さい略語中, *S* はサンスクリット語, *A* はアラビヤ語, *P* はペルシャ語, *T.* はトルコ語, *E* は英語, *Po* はポルトガル語, *G* はギリシャ語を示す。何も略字の添付されてない分がいわゆるヒンディー語である。

(4) 邦字の略語では次の通りである。〖卑〗=「卑語」, 〖俗〗=「俗語」, 〖方〗=「方言」, 〖文〗=「文法」, 〖複〗=「複数」, 〖動〗=「動詞」, 〖他〗=「他動詞」, 〖自〗=「自動詞」, 〖副〗=「副詞」, 〖形〗=「形容詞」, 〖古〗=「古語」, 〖女〗=「女性語」, 〖樹〗=「樹木」, 〖獣〗=「動物」, 〖果〗=「果物」。

インド文典

第一編　文字論 (वर्णलिपिज्ञान)(1)

I.　字母表 (वर्णमाला-चक्र)(2)

ヒンディー語に用いられるいわゆる Deva Nagarî (देवनागरी)(3) 文字の字母は，音声学上世界で最も科学的に組織立てられたもので，一々その発声器官の位置まで考慮されながら発音順に配列されている。

すなわち，先ず母音に始まって子音に移り，半母音を経て摩擦音で終わるようになっている。そうして，舌の動きに基いて，口中の異なった位置から発声される各々の音群に分類される。

ローマ字同様，Nagarî 文字もやはり左書きである。そして，その50文字が，そのまま本言語に使用されるわけでなく，使用されるのは16母音中の13字と34子音中の33字だけである。これにヒンディー特有の2子音字 (ड, ढ) が加えられるので，現代ヒンディーの字母は差し引き46字ということになる。その配列は次の通りである。

---

(1) ヒンディー語の文法用語はすべてサンスクリット由来語である。varn も lipi* も「字母」の意。jñān は「知識」の意。
(2 mâlâ* とは「列」「鎖」の意。
(3) 単に Nâgarî* とも称される。「都会語」の意。deva は「神」の意。

अ आ इ ई

उ ऊ ऋ ए

ऐ ओ औ

क ख ग घ ङ

च छ ज झ ञ

ट ठ ड ढ ण

त थ द ध न

प फ ब भ म

य र ल व श

ष स ह

備考 1) サンスクリットの字母表にない ड़ と ढ़ は，ヒンディーの字母表でもよく省略される。省略されない場合には，末尾に置かれることが多い。しかし，それぞれ ड と ढ の次に置くのが至当であろう。

2) 辞書は上表の字母順に従って引かれる。そして，上表中 ङ, ञ, ण, ड़, ढ़ の5字は一語の冒頭に用いられない。

1. 母 音 表 (स्वर-चक्र)

発音器官 (स्थानवर्ग)	短母音 (ह्रस्व)			長母音 (दीर्घ)		
	頭 音	中間母音(1)	発 音	頭 音	中間母音	発 音
の ど (कण्ठ)	अ(1)	(2)	a ア	आ	ा	â アー
口 蓋 (तालु)	इ	ि	i イ	ई	ी	î イー
唇 (ओष्ठ)	उ	ु	u ウ	ऊ	ू	û ウー
舌 (मूर्द्धा)	ऋ	ृ	ṛi リ			
のど・口蓋 (कण्ठ-तालु)	ए	े	e エー, エ	ऐ	ै	ai アイ
のど・唇 (कण्ठ-ओष्ठ)	ओ	ो	o オー, オ	औ	ौ	au アウ

備考 1) サンスクリット母音中，舌音 ॠ ṝî, 歯音 ऌ lṛ (または lṛi) ॡ lṝ (または lṛî) 及び子音の舌音・流音 ळ ḷh(a) はヒンディーに用いられない。

2) 上表中，頭音字とは一語または一音節の初めに用いられる文字のこと。例 अब ab「いま」 मई ma'î *ｆ「5月」。

3) 標準的な字形 अ, आ などの代りに अ, आ などの形もよく用いられる。また，ऋ は ऋ や ऋ とも書かれる。

4) サンスクリットの字母表では母音扱いされる鼻音化母音 Anusvara (अं aṅ, aṃ) と喉摩音化母音 Visarga (अः aḥ) とは，ヒンディーに関する限り，単なる鼻音符と気音符とに過ぎない。両者とも母音の後に発音されるもので，特に後者は明瞭に聴取し得る気息音である。悉曇(シッタン)文字では，前者は「空点」後者は涅槃(ネハン)点と称される。〔次節II〔備考〕2) の末尾 および5項参照〕

5) ヒンディーの本場である北印以外の地方では，इ, ई, उ, ऊ, ए, ऐ, ऋ

(1) mâtrâ と称される。

(2) サンスクリトでは，Virâm「断止符」〔्〕の無い子音字はすべてa音を伴う。断止符のある子音は hal「母音を伴はぬ子音」と称される。

などの文字が時々 अि, अी, अु, अू, अे, अै, अृ などと書かれることがある。

例 इस=अिस「この」 भाई=भाअी「兄弟」 ऊपर=अूपर「上に」, एक=अेक「1」。

6) ऋ はサンスクリット語からの借用語にだけしか見出されない。

2 子音表(1) (व्यञ्जन-चक्र)

発音器官 (स्थानवर्ग)	無声音(硬音) (अघोष)		有声音(軟音) (घोष)		
のど音 (कण्ठ्य)	無気音 (अल्पप्राण)	有気音 (महाप्राण)	無気音 (अल्पप्राण)	有気音 (महाप्राण)	鼻音 (अल्पआनुनासिक)
口がい音 (तालव्य)	क k(a) ク(カ)	ख kh(a) ク(カ)	ग g(a) ク(ガ)	घ gh(a) グ(ガ)	ङ ṅ(a) ン(ナ)
舌音 (मूर्धन्य)	च ć(a) チ(チャ)	छ ćh(a) チ(チャ)	ज ȷ(a) (ジ)ジャ	झ ȷh(a) ジ(ジャ)	ञ ñ(a) ン(ニャ)
歯音 (दन्त्य)	ट ṭ(a) ト(タ)	ठ ṭh(a) ト(タ)	ड ḍ(a) ド(ダ)	ढ ḍh(a) ド(ダ)	ण ṇ(a) ヌ(ナ)
口びる音 (ओष्ठ्य)	त t(a) ト(タ)	थ th(a) ト(タ)	द d(a) ド(ダ)	ध dh(a) ド(ダ)	न n(a) ヌ(ナ)
	प p(a) プ(パ)	फ ph(a) プ(パ)	ब b(a) ブ(バ)	भ bh(a) ブ(バ)	म m(a) ム(マ)
摩擦音 (ऊष्म)	のど音 श sh(a) シュ(シャ)		半母音 (अन्तस्थ)(3)	のど音 य y(a) イ(ヤ)	
	舌音 ष ś(a) シュ(シャ)			舌音 र r(a) ル(ラ)	
	歯音 स s(a) ス(サ)			歯音 ल l(a) ル(ラ)	
	気音 ह h(a) フ(ハ)			口びる音 व v(a), w(a), o ウ(ヴァ) ウ(ワ) オ	
	反転音 ड़ ṛ(a) ル(ラ)	ढ़ ṛh(a) ル(ラ)			

(1) 本表は大体の字母順に基きながら有声 無声の両音が一目して分るように配列されたもの。

(2) anta stha とは「内部または中間に位置した」の意。これらの4文字は他の子音と摩擦音との中間に位置するからである。

【註】 1) 縦の各列の文字，計25文字は子音群の主要部を成すもので，一括して Varga (वर्ग् = वर्ग) 「組」「部類」と称される。そして，क から प までの各初字を冠して，それぞれ कवर्ग, चवर्ग, टवर्ग, तवर्ग, पवर्ग などの組といわれる。

2) झ, ण, ल などの別形 झ, ण, ल はボンベー式の文字である。いわゆるヒンディー形の文字はマラティー語，即ちマーラッタ語 (मराठी) やボンベー地方で出版されるサンスクリット語の本には用いられない。なおまた，ख も，ख でもよい。

3) サンスクリット語の字母表に無い反転音字 (ड़, ढ़) は，ややもするとヒンディー字母表中にも省略されることがある。便宜上，上記の字母表では両文字を末尾に置いてみた。

4) ङ, ञ, ण, ष などの文字は梵語からの借用語にしか用いられない。

5) ヒンディー字母に採用されている国際ローマ字では，ऋ は ṛi，श は ś(a)，ष は ṣ(a) となっているが，ウルドゥー語をも含めたいわゆるヒンドゥスターニー語全体の立場から観るとき，s は ص に，sh は ش に当てる方が一層適切と思う。国際ローマ字々母で，ṛ を ऋ に当てたのも，ड़ の字と対比するとき問題であろう。

6) ॐ om 即ち ओम् = ओं は，प्रणव praṇav 即ち神聖なつづり字で，インドの三大神の結合を示す神秘的な名が意味される(1)。

7) ペルシャ語やアラビヤ語などからの借用語のための特別な当て字については次節II．7．参照のこと。

8) ヒンディー用文字として最も一般的な Deva Nâgarî のほかに2・3特殊な文字が一部の職業に限って使用される。いずれも，Deva-Nâgarî の変形で，上の横棒を省略したものである。かつ，いずれも一種の速記用である。例えば，単

---

(1) अ は Vishnu 神，उ は Śiva 神，म् は Brahma 即ち梵天を示すもの。〔後節VI．「音便変化」1 参照〕。この om はお祈の前，めでたいあいさつを述べるとき，聖典 Veda の読み初めや読み終りの時に唱えられる。

にかくと書いて करे(1) kar करें karen, करो karo などと読ませる すなはち主としてパトナ市を中心とする地方に行われる Kaithi 文字（別名 Kâyathi＝Kâethi－Kaithi Nâgari）とは Kâyath すなはち主として paṭwari 書記 を主職とする階級の間に使用され ベナーレス市を中心とする地方に行われる Mahajani 文字（＝Ṣarrâfiā 文字）とは Mahâjan（＝Ṣarraf ）すなはち主として金融業者によって使用されるものである そして主としてディラー ート市以東における一般の小売商 すなはち baniyāñ によって使用されるものが Banauti 文字である。

一方 デリー市を中心とする地方においては それら3種の名称をもって呼ばれることなく 概ね Kaithi 文字に該当する草書体が Muṛiya または Mundî（あるいは Muṛiyâ Hindi または Mundi Hindi）などの名称をもって呼ばれているに過ぎない。

II 発 音 (उच्चारण)

1 母 音 (स्वर)

母音は短母音 (ह्रस्व hrasva), 長母音 (दीर्घ dirgha) 二重母音 (संयुक्त स्वर san yukt svar) に分たれる。

(1) अ [ʌ](2)—— 口を幾分円く，半開のまま 舌の中間をやや上げ，つまり幾分圧縮しつつ発音される中間母音。

(2) आ [ɑ]—— 舌を低くしながら彼かに発せられる長い後舌母音。

(3) इ [i]——前舌面を充分上あご〔硬口蓋〕に高く上げながら発声される前舌母音。

---

(1) いはゆるグジャラート文字も 梵字における上の横線を除去した一形態に相違ない また いはゆるベンガール文字や西蔵文字も同しく梵字の一変形にほかならぬ ヒンディーの手紙でも グジャラート語同様 横線がよく省かれる。

(2) 本項の見出しに限り 音標文字で示すことにした。

(4) ई [ī]——इ よりも長音であるうえに，舌と上あごとの間のすき間を一層狭めて発音される。

(5) उ [u]——口を円めつつ，舌の後部を軟口蓋に高くしながら発声される後舌母音。

(6) ऊ [ū]——उ よりも長音であるうえに，舌を一層緊張させて発音される。つまり，इ と ई との関係に似ている。

(7) ऋ [ri]——これは単に サンスクリット語の字母表で母音扱されている関係で，ヒンディーでも因習的に母音の仲間入りをしているが，事実上，ヒンディーでは母音でなく，単に子音と短母音とが結合したまでに過ぎない。

(8) ए [e]——口を半閉にして発声される長音の前舌母音。しかし，ヒンディーでは，短音になる場合もある。例えば，एक ek [1] では長音であるが，देहली dĕhli* 「インド首都名」では短音である。

(9) ऐ [æ]——即ち，いわゆる ai の音で，半開の前舌母音。

(10) ओ [o]——半閉・長音の後舌母音。ए の場合と同じく，これも梵語ではたとえ長音でも，ヒンディーでは時折短音に発音されることもある。例えば，छोटा čhoṭā 「小さい」では長音であるが，मोहर mŏhar* 「刻印」では短音である。

(11) औ [ɔ]——即ち，いわゆる au の音で，半開・長音の後舌母音。

注意　ए や ओ の音の長短を区別するために，特に短音を示すために，横線の斜線を波形にするといった試みもあったが未だ一般化されるに至っていない。例えば，邦語の「広告」にしても कोकोकु としか書けないので，長音と短音との区別ができない。

なお全母音は有声であること無論である。

2. 子　　音 (व्यञ्जन)

（1）क 部類——後舌を軟口蓋に接触させながら発声されるので，つまり軟口蓋音である点で同列の５字とも同じである。そのうち，鼻音 ङ [ŋ] 以外の क [k], ख [kh], ग [g], घ [gh] は破裂音でもある。

（2）च 部類——前舌を上歯の歯くきの背後部即ち硬口蓋に接触させながら発声される。鼻音 ञ (ñ) を除いた च [c] छ [ch], ज [j], झ [jh] は，呼吸によって作られる破裂音か空気の摩擦をもたらす所のいわゆる破擦音である。

（3）ट 部類——ट [t], ठ [th], ड [d], ढ [dh], ण [ṇ] とも舌端の下面を後方に巻き上げながら硬口蓋に触れさせて発声される反転音。また，ण 以外は破裂音でもある。

（4）त 部類——त [t], थ [th], द [d], ध [dh], न [n] とも舌端を上歯に広く接触させながら発音される。舌端を歯茎に付けて発音される鼻音の न 以外は歯音の破裂音である。

（5）प 部類——प [p], फ [ph], ब [b], भ [bh], म [m] とも上下の口びるを一緒に接合させた後の急速な分離によって生ずる両唇音である。そして，म 以外はやはり破裂音。

注意　1) 以上，5部類25個の破裂音中の ङ, ञ, ण, の3鼻音とも語の初めに用いられない。そして，その ङ と ञ とが常に次に来る他の子音と結合するだけで，決して単独に用いられぬに対し，反転的鼻音 ण は語の終りや一音節の初めに用いられることがある。

2) ङ は例えば रङ्ग [raŋ] などと g 音を伴う場合が多い関係で ng=[ŋ] と発音される。そして，ञ (ñ) は弱音であり，न や म は英語のそれらと変らない。

以上，5つの鼻音とも，それぞれの組に属する各4つの子音字を初め，4つの半母音字，4つの摩擦音字及び他の鼻音字と結合するのが原則的である。即ち，ङ् はその列の कवर्ग の4子音字や न や म の鼻音字と結合し，ञ् はその चवर्ग や ञ と，また ण् は टवर्ग 所属の4子音字以外に य, व, ह 及び ण, म の2鼻音字と結合する。更に，न् はそれ自身の तवर्ग 所属の4子音字のほかに य, व の2つの半母音字， श, स, ह の3つの摩擦音及び न, म の2鼻音と字結合し，म् は पवर्ग 子音字のほかに，4半母音字，श, स, ह の3摩擦音字，及び ण, न, म の3鼻音字と結合する。

しかしながら，以上の5鼻音字とも，4半母音字や4摩擦音字などの文字における場合と同様，5 वर्ग の各子音字の前でも，いわゆる Anu svâra（ं）がよく代って用いられる。(1)

例．अङ्ग ang s「手足」=अंग，शङ्ख shankh s「貝がら」=शंख，पञ्जाब pañjâb「州名」=पंजाब，अण्डा aṇḍâ「卵」=अंडा，चन्द्र s ćandra [illegible] ćandar「月」=चंद्र，लम्बा lambâ「長い」=लंबा(2)（上記5項参照）

3）上記「ट 部類」の5舌音は邦語や英語などには見出せないものではあるが，それぞれの国語の近接音を採り入れて，英語の t や d に ट, ड などの舌音字を当てている実情であるに対し，邦語の「ト」「タ」や「ド」「ダ」には，त, द などの歯音字を当てるのが至当であろう。

（9） 半母音 (अन्तस्थ)——ऋ が子音の性格を備えた母音とすれば，य や व も明らかにそうである。

（1） य [y]——一語の末字のとき，いわゆるヒンディー語では y 音になる．例 गाय gây「雌牛」; चाय ćây「茶」。ただし，サンスクリット借用語では，他の子音字で終る場合同様，たとえ原語の正音ではすべて ya 音

---

(1)「ट 部類」及び時々 ण と置き換えられることのある ड़ の前では ण のように，また「प 部類」と व の前では म のように発音される。

(2) ただし，तुम्हारा その他若干語では置き換え不能。

て終るとしても，伶音の用いられる現代語では単に軽い y 音になること か多い，例 जय* jaya, jay「勝利」，राज्य rajya, rajy「統治」。

そして，この य は，ヒンディーにてよく ज に代用される。例 यमुना Yamuna* s「河名」→जमुना, योगी yogi s「行者」→जोगी。

なわまた ये や यी はそれぞれ ए や ई とも書かれる。例 चाहिए=चाहिये「要る」「ねばならぬ」，लिये lıye=लिए li'e「のために」，गयी gayı=गई ga'ı「行った」《女性単数形》。

(ii) र [r]——英語の r とは全く違って，巻舌にしなから上歯の歯くきを舌端で素早くたたいて得られる。

(iii) ल [l]——空気か口の両側から漏れる間に，舌端で硬口蓋，即ち上歯の歯くきを圧しなから発せられるいわゆる側音である。英語の l よりも一層音勢か強い。

(iv) व [v]——下唇を上歯と上唇とに接触させながら空気をそれらの間に通して発せられる歯唇音である。その間，自然に摩擦も起こるわけであるから，次項の摩擦音の部類に属させることもできる。そして，この半母音は語原や一語における位置の相違によって多少の音変化が見られる。すなわち，例えば，अभाव abhâ o s「貧困」「不足」，भगवान् bhag wan s「神」，भाव bhava s 《俗》 bhâ'o「感情」「相場」などにおけるように，w や o やの伶音も聞かれぬではないか，原則的にはサンスクリット1の音は v 音である。例 वायु vayu「風」「空気」，जीवन jivan「生活」，जीव jiv「生物」「動物」。

現代語の場合，概して語や一音節の冒頭や中間では w に近い音となるか，それらの末尾においては一定しない。例 वह wah「彼」「それ」，वहाँ wahan「そこに」，चावल câwal「米」「飯」，गाँव gańw, gâń'o「村」。

なお，梵語の व は，ヒンディーに借用されると，よく ब に変る。例 वन van「森林」=बन；वेद veda「インド教聖典」=बेद bed。

備考 因習上，半母音とされる上記の4文字中，音声学上真に半母音と称し得るのは य と व(1) だけである。

（7）摩擦音（ऊष्म）——硬口蓋によるこれら無声の3摩擦音は，次の気音摩擦音 ह と違って，共に「しゅう」類似の音声を持つ歯擦音である。

(i) श [ʃ]——舌端を上あごに接触させて発音される点では次の ष と似ている。ただ，舌の接触点において，ष の方が श よりも幾分後方であるというだけの相違である。しかし，ヒンディーに関する限り，両者間に変わりがない。

(ii) ष [s](2)——梵語からの借用語にしか見当らない。しばしば誤って स と同一に発音されるばかりでなく，実際時々 ख に書替えられもする。例 भाषा* s「言語」「方言」=भाखा H。また，ख に変ることもある。例 धनुष् s「にじ」=धनुख H。

(iii) स [s]——上歯を舌端で圧しながら発声。

(iv) ह [h]——声門によって調音される摩擦音である。

（8）反転音 ड़ [ṛ] と ढ़ [ṛh]——この2字は梵語と無関係な唯一のヒンディー特有文字で，一切の外来語にも用いられない。この両文字こそ代表的な有声反転音で，舌端を後方へ巻き上げながら硬口蓋をできるだけ広くたたいて発せられる音である。この ड़ も他の有声反転音 ड と取り

---

(1) Urdu 語では वह は woh と発音される。同様，Hindi の यह yah「これ」も，Urdū では yeh と発音される。しかし，Hindi でも Urdu 式に発音されることが多い。〔前ページ (iv) 参照〕

(2) 一般に s が当てられるが，Urdū の場合の ص がやはりそうなので当て字を改めたまでのこと。

替えられることもある。例　द्राविड drāvid*s*「ドラーウ　タ（種族）」—→ द्राविड。

3. 無気子音 (अल्पप्राण)(1) と有気子音 (महाप्राण)(2)

この関係は，「無気の断止音」と「有気の断止音」または「清・濁音」と「清・濁気音」の関係とも言うことができる。前記5 वर्ग のほかに ड़, ढ़ の無気・有気の断止音を加えれば合計11個の無気・有気の断止音につき言及したことになる。実際問題としては，独立文字こそないか，なお歯茎音鼻音の nh, 歯茎音側音の lh, 歯茎音反転音の rh, 両唇音鼻音の mh, 歯唇音摩擦音の vh その他の有気音の成立も可能なのである。

ただ，ここに注意を要するのは，すべての気音字の気音は極めて軽い。例えば，खाना khānā「食事」「食べる」は，クハーナーでなくて寧ろカーナーに近い音である。फल phal*s*「果物」「報い」「刀身」も，プハルでなくパルといったぐあいに気音は文字に写せぬほどに微かに聞える程度である。そして，基礎文字と気音字との間に母音が置かれる。つまり前の文字に a 音が入るような場合には，例えば，कहाना kahānā「言わせる」「名づけられる」; पहल pahal「側」「一房」（綿や棉花などの）などと，全く別語になる。

4. Tatsama (तत्सम) と Tadbhava (तद्भव)

これは語原に関する問題である。語原の如何は発音を初め，ある程度文法にも影響するので，これを常に心得ておくことは相当に必要である。ヒンディー構成語の大部分を占めるサンクリット由来語中，原語の形そのま

---

(1) alpa「小さい」, prān「呼吸」の意。

(2) 同じく「大きな呼吸」の意。

のものか Tatsama「それ（梵語）と同一の」と称され，原形の崩れたもの，即ちなまった形が Tadbhava「それ（梵語）に起原した」と称される。前者が特に文学語の名詞や形容詞に多く使用されるに対し，後者はあらゆる品詞を通じて最も多く使用される。例えばサンスクリットの सूर्य sûrya「太陽」，त्रिगुण triguṇa「3倍の」，अग्नि agni「火」などが，それぞれ सूरज sûraj，तिगुना tiguna，आग âg などの現代語になまった類である。また，後者の部類では，否定詞 न na 以外，語の末字の子音字が a 音を有しないに対し，前者の部類では，原語通り，よく a 音が発声される。例 बुद्ध buddha「仏陀」，इन्द्र indra「雷雨の神」。

備考 1) Tadbhava 語の多くは俗語 Prakṛt (प्राकृत) や卑語 Apabhransha (अपभ्रंश) などの過程を経て現代化されたもの。しかし，現代の文学語では Tatsama 語使用の傾向が漸次著しくなっている。

2) サンスクリット系統の語以外に，主として南方の Drâvida 諸語に由来するものを初めとして，アラビヤ語，ペルシャ語，トルコ語などを話す回教徒の侵入や近世におけるポルトガル人，イギリス人，フランス人などによる来攻に起因して，それら数々の外来語が少なからず混入していることも自然である。

5　鼻音符 Anusvâra (अनुस्वार) と Anunâsika (अनुनासिक)

長短の母音の上に一点を置いて表わされる Anusvâra=Anusvâr「母音の後に」と，同じく長短の母音の上に置かれる一点を半月印で包んだ記号 (ँ) で表わされる Anunasika「鼻を経て」とは，互によく似ているので甚だ紛らわしいものがある。後者の記号は candrabindu (चन्द्रबिन्दु)「月（印ある）点」と呼ばれている。

Anunâsika は長短母音の鼻音化を示すだけで，それ自身何ら明確な音を持っていない。例 हँसना hansnâ「笑う」，हूँ hûn「である」〔ア1人称、

所以」, वहाँ wahân「そこに」, दाएं बाएं dâ'en bâ'en「左右に」。しかしながら，この ˇ 印は必ずしも厳格に守られない。たとえ，原則的には長母音や二重母音の鼻音化に ˇ が用いられなければならぬとしても，ただの一点,即ち Anu svâra を以ってされることが少なくない。殊に,横線上にへ,ˆ,ˆ などの母音結合字体が用いられている場合にはなおさらそうである。例 मैं maiṅ「私」→ मैं ; में men「(の)中に」→ में , कहीं kahîn「どこか」→ कहीं.

一方，Anu-svara が母音に従いながら ङ, ञ, ण, न, म など鼻音字の代用として当該部類の子音字を初め，一切の子音字の前で,(1) 母音または短母音 a にて発音される時の子音字の上に置かれることは既述の通りである。例えば，गंगा gaṅgâ〔河名〕=गङ्गा s の ङ は ग と ङ と ङ との結合体であるに対し，गँवार ganwâr「田舎者」「野卑な」の गँ は短母音 अ の鼻音化した अँ が ग と結合したものなのである。

ただ，明確に言えることは，Anu nâsika は常に「ン」としか発音されないが，Anu-svâra は次に来る子音字の種類如何で ङ「ン」, ञ「ニャ」, ण「ヌ」, म「ム」などと多様に発音されることである。〔8ページ〔備考〕2）参照〕

〔注〕 更に之に限らなく，鼻音化母音さえ Anu svâra で表わされながら Anu nâsika のように発音される場合も少なくないため両者の識別はますます混乱するほかない。一般に手紙などでは Anu nâsika を用いないし，辞書にさえ Anu svâra だけで済ましているものもある。

6 弱気音符 Vi sarga (विसर्ग)(2)

サンスクリット語の字母表では，摩擦音化母音として扱われていても，現

(1) ただし，य の前では ञ のように発音される。例，संयुक्त sañyukt「結合した」。
(2)「分離」「放出」の意。

代語ヒンディーでは無声の ह を示す記号として，母音字または短母音 a に発音される子音字の後に置かれる。サンスクリット からの借用語に用いられることが多い。例 पुनः punaḥ「再び」; प्रायः prāyaḥ「一般に」。

ただし，次の語例では Vi-sarga の省略も可能である。छः cha「6」; दुःख dukh「苦痛」; प्रातःकाल pratah kāl「朝早く」。

7. 外来音 (विदेशी ध्वनियाँ)

前掲の子音字母表には f や z の音が欠けている。そのほか，ペルシャ語やアラビヤ語に特有な音も欠けている。それらの外来音を示すためにはある特定な Nāgari 字母の下に点を打つことになっている。例 क़＝ق q，ख़＝خ kh，ग़＝غ g，ज़＝ذ z，ز z，ژ zh，ض z，ظ z，फ़＝ف f

(i) क़ [q]——ペルシャやアラビヤからの借用語にしか見出されない。できるだけ，のどの奥から出される有声音。

(ii) ख़ [x]——元来，アラビア語由来の子音なので同語やペルシャ語からの借用語に用いられる場合が圧倒的に多い。普通の ख よりも一層奥から出される無声音の軟口蓋音摩擦音である。振り仮名で表わすことが許されるならば，ख がク（カ）ならば ख़ はフ（ハ）またはすなのである。

(iii) ग़ [g]——ग や ख़ よりも一層奥に発せられる軟口蓋音の摩擦音である点で ख़ と同一であるが，異なるのはうがいをする時に発音される「グ」音に似た有声音であること。

(iv) ज़ [z]——これには，上で表示される通り，ペルシャ語に特有な zh＝[ʒ] を含む５種の z から成る軟音有声の口蓋摩擦音が包括される。４種の z とも区別して発音されるアラビヤ語の音ではあるが，ヒンディーではペルシャ音の zh を含めた５字とも一様に z の音である。それどころか，無教育者間では ज と同音に発音されている。つまり，彼らの間

では，字母表そのままに，ज़ 音は無いのである。

(v) फ़ [f]——下唇で上歯を圧しつゝ発せられる無声の歯唇音摩擦音。

注意 1) 上記の5外来音とも正しく発音される場合のことで，一般大衆の間では特に ज़ の場合と限らず क़, ख़, ग़, फ़ も क, ख, ग, फ 同然に発音されることが多い。そのために下の点さえよく省かれる。例 ज़मीन zamîn 『「地」「土地」「土地」 → जमीन jamîn, ख़ाली khâlî 』「空しい」「からの」「ただ」「独りで」 → खाली。

以上のほかにも ع a ʻi u ط t, ص ṣ ض s, ح ḥ などの外来音のためにそれぞれ अ, इ, उ, त, स, ह などの文字の下に点が打たれるが(1) これらの点は一層よく省略される。例，अ़रब arab「アラビア」，इ़त्र itr 』「香水」，उ़मर umar』「年齢」，सन्दूक़ sanduq 』「箱」，साहब 』 sâḥab「だんなさん」「さん」。

2) 一語の末字として a 音になる場合の Urdû 語の ة h が Hindi に移されると ほとんど常に आ â で表わされるが，まれに Visarga で表わされることもある。例 چه cha「6」 छ=छः，درجه darja 』「程度」「位」「教室」=दर्जा=दरजा=दरजः。

その結果，前者，すなわち आ で表わされる場合と Urdû 語の alif (ا) で終わる場合とが区別し難いことになる。そのため，せめて本書で採用のローマ字では a 音で発音される場合の ة は単に a をもって，alif の場合は â をもって表わすことにした。

Ⅲ 文字の結合 (अक्षरों की मिलावट)

(1) Nagari 文字を結合させる場合と単に横に並べる場合とでは発音が違う。例えば，ローマ字は単に並列されるだけで決して結合することが

(1) 例 अ़, त़, स़

ない。नरक narak *s*「奈落」「地獄」という語も，単なる文字の並列であって，結合でない。

（2） 結合に使用される「中間母音」の形については既に「母音表」中に紹介済みである。用例 का kâ, कि ki, की ki, कु ku, कू kû, कृ kṛ(i), के ke, कै kai, को ko, कौ kau。

上記の通り，短母音 इ に限り，発音順に並置されない。母音字の結合に関してのもう一つの例外は उ や ऊ が子音字の र と結合するとき正規の中間母音を र の真下に置かないで，रु ru, रू rû といったように別個の字形が用いられることである。

注 Urdu 語に盛んに用いられるペルシャ語からの借用接続詞兼関係代名詞 کہ は Hindi にて कि ki と書かれながらも，実際は本場のイラン国における場合同様，kěh と発音される。同じく，接続詞 क्योंकि kyoṅ ki「なぜならば」も，「キョーン・ケ」と発音される。

（3） 結合の重要性は，母音の場合よりも子音の場合において一層大きい。それは，Nâgari 文字が邦語の仮名文字同様，原則としてすべての子音字が短母音 अ a で終るようになっているからである。この a 音を表わさない，つまり子音字をして本来の子音即ち默音にするためには，前記の通り，子音字の下に Virâm (विराम)「停止」の符号 (्) を置くか，次の文字と結合させるかのほかにない。この Virâm の符号のある子音字が Hal (हल्)「母音を伴わぬ子音」または Halanta (हलन्त)「子音で終れる」と称される。例 ग् g。しかし，この「断止符」(्) はよく省略される。

各文字は，それぞれの字形に基いて4種の結合法に大別される。

---

(1) ऋ の中間母音がその他の子音字に付いた時の例をなお若干掲げてみよう。 तृ, दृ, ढृ, पृ, मृ, हृ。

(ｉ) 垂直線(1)で終るもの・ー

क ka ー क् k,　ख kha ー ख् kh,　ग ga ー ग् g,

घ gha ー घ् gh,　च ća ー च् ć,　ज ja ー ज् j,(2)

झ jha ー झ् jh,　ञ ña ー ञ् ñ,　ण ṇa ー ण् ṇ,

त ta ー त् t,　थ tha ー थ् th,　ध dha ー ध् dh,

न na ー न् n,　प pa ー प् p,　फ pha ー फ् ph,

ब ba ー ब् b,　भ bh ー भ् bh,　म ma ー म् m,

य ya ー य् y　ल la ー ल् l,　व va ー व् v

ष sha ー ष् sh,(3)　श śa ー श् ś　स sa ー स् s

結合例。क्या kyâ「何」, भाग्य bhâgya *s*「運」, सन्त sant *s*「聖人」, सभ्यता sabhyatâ *s*「文明」, साहित्य sâhitya *s*「文学」

注 本項所属のある種の文字は横にも縦にも任意に結合される。例、 त्त=त्त tt(a); न्न=न्न nn(a)。 このほか、同一文字では क्क, च्च, ल्ल などがよく縦に結合されるばかりでなく(4) ञ と च, प と त, ब と न, श と न, ग と न, म と न, प と ठ などもよく縦にも結合される。(5)

(ii) 垂直線の無いもの：ー

ङ, छ, ट, ठ, ड, ढ, ड़, ढ़, द, ह の類で、これらは一般に縦に結合される。例 ङ्ग ṅg(a); ङ्ख ṅkh(a); ङ्घ ṅgh(a); ट्ट ṭṭ(a) ड्ड ḍḍ(a); ड्ढ ḍḍh(a) 特に、द や ह が他の子音字を伴うとき縦に結合される。例。द्द dd(a),

(1) 垂直線 । は पाई と称される。

(2) 同一字の結合例。 ज्ज。

(3) 他字との結合 例。 ज्ञ, श्च, स्न, श्व。

(4) 例。 क्क, च्च, ल्ल。

(5) それぞれ ञ्च, प्त, ब्न, श्न, ग्न, म्न, प्ठ などとなる。なお、क्ष=क्+ष्+अ がよく用いられるほかに、ञ्ज, ध्न, ग्र, श्न, ह्न, ह्य, ष्ट, ञ्ज, ष्ट などもまれに見られる。

द्ध ddh(a)；द्ब db(a)；द्व dv(a)；द्य dy(a)；द्भ dbh(a)；ह्ल hl(a)；
ह्न hn(a)；ह्व hv(a) ह्य hy(a)。

注意 1) この群の字型の文字を横に結合するためには，先立つ文字の下に Vi râm の記号が置かれる。例 ट्ठ ṭṭh(a)=ट्ठ；ड्ड ḍḍ(a)=ड्ड；ह्म hm(a)=ह्म。

2) य が本項所属文字に伴われる時に限り य の形になる、例 ड्य, ठ्य。

(III) र् の場合：—

र が ऋ や ॠ と結合すると，ऋ や ॠ の形になることは既説の通りである。この र が長短の母音に先立たれながら無声になる場合，ˆ の形を採り，次の子音字または長短の母音字の上に置かれる。例 स्वर्ग svarg*s*「天国」；दर्जन darjan*ₘs*「ダース」，कार्य kârya*s*「仕事」，मूर्ति mûrti*ₘs*「像」；मूर्च्छा mûrććhâ*ₘs*「気絶」。

そして，र が無声子音に先立たれると，その子音字の結合字体の真下に短い斜線を接合して表わされる。例. क्र kr(a)；ग्र gr(a)，ज्र jr(a)，त्र tr(a)(1)；द्र dr(a)；प्र pr(a)，फ्र phr(a)；ब्र br(a)，व्र vr(a)(2)。

また，र に先立つ文字が ट, ठ, ड, ढ, ह などのように垂直線の無いものであるとき，その文字の下に ˛ 印が置かれる。ट्र ṭr(a)；ड्र ḍr(a)。

(IV) क्ष=क्ष；ज्ञ=ज्ञ(3)：—

この2種の合字は，上記の त्र と共に特別扱いされ，ヒンディー辞典において，字母表の末字 ह の後に順次配列されることさえある。क्ष kś(a)

---

(1) 結合字体は त्र。

(2) ग्र，ग्र，र्घ，ग्र，ह्र など皆同様である。これらの末音 a は，一語の末尾における他の子音字同様，たとえサンスクリットからの借用語であっても発音されない。例 चन्द्र candra *s*「月」→ ćandr。俗音で ćandar と発音されることさえある

(3) ग्यँ のように発音される。

は क् と ष との合字であり, ज्ञ jña (または gya) は ज् と ञ との合字である。

なお, 古典梵語の発音を有する ज्ञ にあっては, jña 音はサンスクリットの音で, gya 音の方が現代のヒンディー音である。例 ज्ञान gyân, jñân s 「知識」, प्रतिज्ञा pratigya, prati-jñā s 「約束」, आज्ञा âgya, âjñā s 「命令」「許可」。

注 क्ष, ज्ञ の結合字体は, それぞれ क्ष, ज्ञ となる。

IV 文字の書き方 (अक्षर लिखने की रीति)

いわゆる筆まわしについて一言するならば, 大体次のような順序で書かれる。(i) 基本となる文字, (ii) 中間母音 (iii) Anu-svâra [1] (iv) 上の横線 個々の字形にも因るが, 本言語が左書きであるだけに, 概して左上から右下へと運筆される。

次に個々の文字の筆法について述べてみよう。

(1) अ, आ, ओ, औ などでは, 先ず ३ で始まり ३ から अ となる。そして, 本文字の異形 अ は ›, ३, अ の順で書かれる。

(2) ड や ड़ は, ローマ字のSを書く場合と似ている。即ち ड, ड़ の順である。下記の ट, ठ, ड, ङ, ढ, द, र など垂直線の無い文字も皆同様な筆使いである。また, 同じく垂直線の無い ह は, 先ず外形と運筆においてローマ字のSに似たものを書いてから ह の形にする。

(3) क の土台をなす उ は, अ の場合同様, アラビヤ数字の3を書く時の要領と異ならない。つまり, उ も क も ३ や ऊ の形を書いてから上の左出張りに右の出張りを添付する。

---

(1) 本書では Anu-nâsika (ँ) と一々区別されない。

の順で，म は म म म の順で書かれる。

備考 1) 梵語やマラーティー語に使用される ळ は先ず左上から右下へとアラビア数字の8を左横に寝せて ∞ と書いてから ळ の如く右上に短いひもを付ける

2) かつての西洋における羽ペンのように，インドでは今なお各地において，さきに幾分幅広に削って作ったいわゆる竹ペンが用いられている

V 語の発音 (शब्दों का उच्चारण)

いまのヒンディーはサンスクリットに由来するといっても，その単語の発音は，Tatsama であるか Tadbhava であるか，また外来語であるかによって，それぞれ違った制約のもとに発音されている。そして，本節の記述が勢いヒンディー単語の最大多数を占める Tadbhava 即ちサンスクリットのなまった語本位になりがちなのはやむをえない。語，即ち単語の内容がどうであろうと，短母音 a の無いことを意味する子音字の結合字体や長短の母音を伴う子音字の発音は論ずる必要のないほど明確であるが，個々独立の子音字が幾つか並んでいたり，あるいは一子音字が長短の母音の間に介在したりする場合の発音がまぎらわしい。つまり，これは音節の切り方の問題でもある。これについては，今日まで未だ確定的な規定がない。従って，ここでは単に多数の語例に徴しながら，ある程度の規定らしいものを作成しようと試みたまでである。(1)

（1）語の初めでは，語原の如何に関係なく短母音化する。例 जल jal「水」，मन man「心」。

（2）語の末尾では Tatsama 語でない限り短母音化しない。例 व्यापार vyopār「商売」，व्याज byaj「利息」。

---

(1) 以下，本節でいう「子音字」とは，いわゆる「結合字体」でない独立字体が意味される

（3）長短の母音に先立たれる3子音字語では，その第2子音字も短母音化する。例　लहर lahar* 「波」「感情」，गाजर gajar* 「人参」，पूरब pûrab 「東」，भीतर bhitar 「内側に」，पैदल paidal 「徒歩で」，मेंढक men ḍhak 「かわず」。(1)

（4）前項同様の3子音字語であっても，末字が長母音を伴う場合，長短の母音とこの長母音を伴う子音字との間に介在する子音字は短母音化しない。例　आगरा agra 〔市名〕，देहली dehli 〔市名〕，पटना patna 〔市名〕，शिमला shimli 〔市名〕，अपना apnā 「自身の」，कमरा kamrā 「部屋」，कितना kitna 「どれほど」，घुटना ghutna 「ひざ」，दूसरा dûsra 「第2の」，लोमड़ी lomri 「きつね」。この場合，先立つ母音が鼻音化していても同様であること，前項（3）と変りかない。例　कुंजड़ा kunjra 「八百屋」，झोंपड़ी jhonpri* 「小屋」　ठिंगना thingna 「ちびの」「背の小さい」。

ただし，(i) 元々母音を伴わぬ原語が単にある種の接尾辞を添付されたために　その末字が長音化されたような場合とか　(ii) 断止符があったり，結合字体ででもない限り，常に全子音字が短母音化される習慣の終語由来語であれば，元の通り短母音化したままである。例 (i) अरबी árab-ī* 「アラビア語」，तीतरी titar ī* 「鶉しゃこ」，मगरी magar ī* 「鰐わに」。(2)　(ii) अथवा athav a s 「または」，जनता janata* s 「大衆」「人の集り」，योजना yojana* s 「手段」「計画」。

注意　了(完)語尾 ना nā を取除いた3子音字から成る動詞の語根は前項（3）に該当するものではあるが　その完了形や使役形において第2子音字が短母音化

---

(1) ただし　外来語ではこの規則はあてはまらぬものも見出される　例　रस्म rasm 「習慣」　しかし　これは रसम と分り易く書かれることもある。

(2) これらの3例中　第1例は「言語」を示すための接尾辞 ī が　その他の2例とも「性」を示す接尾辞が添付されたために子音が長母音化したもの。

から非短母音化に変るために 所属が本項に変更される結果になる。例 समझना samajhnâ「了解する ——→ समझा samjha 了解した」——→ समझाना samjhanâ「了解させる」説得する」, डपटना dapaṭnâ 脅迫する せきたてる 「ななとを)」——→ डपटा dapṭâ「脅迫し， 追いたてた ——→ डपटाना daptanâ 「ななとを) せきたてさせる。

(5) Tatsama 語にして，短母音と 子音字を伴う長母音との間に介在する子音字も短母音化する。例 अपमान apamân「恥」 अपराध aparadh「犯罪」, उपकार upakar「親切」恩恵」, उपदेश upadesh「忠告」, रमणीक ramanık 快適な」。

また この場合，「人」を示す接尾辞 ई が添付されても同じことである。例 अपराधी aparadhı「罪人」, उपकारी upakarı「恩人」。

注意 ただし アラビヤ語やペルシャ語からの借用語であれば短母音化しない。
例 (1) इजलास ıjlâs ᐃ「会期」， तकदीर taqdır* ᐃ 運命」, परवाह par wâh* ᐃ 心配」, अलमास almas r 金剛石。

(6) 4子音字語では交互に短母音化する。例 गडबड garbar*「混乱」, खटमल khaṭmal「南京虫」, मलमल malmal「モスリン」。この場合，末字が長母音化されても同じことである。例 कलकत्ता kalkatta (市名)。

(7) 接頭辞の直後にある子音字は常に短母音化する。例 अधजला adh jala「半焼の」, अनुभव anu bhav s「推量」, दुर्गन्ध dur gandh*s「悪臭」, निडर ni ḍar「恐れない」, पराजय para jay s「敗北」, प्रवचन pra vaćan s「宣言」, संगति saṅ gatı s「会合」「交際」。

(8) 接尾辞の前では短母音化したり，しなかったりする。すなわち，(a) 是語の女性接尾辞 ता や男性接尾辞 त्व の前では短母音化は一定しないが，(b) その他一切の接尾辞の前ではほとんど短母音化しない。例

(i) सहाय sahay, saha e *s*「助け」+ता=सहायता sahayata *s*「援助」, सफल sa phal *s*「成功せる」+ता=सफलता sa phal(a)ta* *s*「成功」, दास dasa dâs *s*「奴隷」+त्व tva=दासत्व das(a)tva *s*「隷属」=दासता dâsata* *s*。

(ii) देशभक्त desh bhakt *s*「愛国者」, धनवान dhan van *s*「金持ち」, नरकवासी narak vasi *s*「地獄の住民」, नाचना nać na「踊る」, बालहट bal hat「子供の気まま」, लड़कपन larak pan「少年時代」, समझदार samajh dar「賢い」「分別のある」, जयपुर Jay pur〔市名〕(「勝利の町」の意)

注 語尾 ना の前における子音字が短母音化 即ち a 音を伴わぬのは動詞の不定法と限らず他の品詞の場合にもいえることである。例 डरावना darâona 恐ろしい, सूचना sûćnâ* *s* 通知「報告」ただし Tatsama 語は一定しない

(9) 短母音化せぬ子音 即ち結合字体子音字の直前・直後の子音字は短母音化する。例 आकर्षण akarśan *s*「魅力」, उत्सव utsav *s*「祭」, महत्व mahatva *s*「偉大」「威厳」, शर्म sharma *s*「幸福」「喜び」

注 1) ただし たとえ Tatsama 語であっても 現代の発音では短母音化されない。例 मूर्खता mûrkhata* *s* 愚」, प्रार्थना prârthanâ* *s*「祈」「要請」, प्रसन्नता pra sannatâ* *s* 上きげん」などは 一般にそれぞれ mûrkhtâ prârthnâ pra sanntâ などの発音の方が用いられている。つまり前記(8)の(i)項が(ii)項に転移したことになる 同様 चित्र *s* ćitra 発音 ćtr「絵」である

2) Visarga や Anu svâra を含む一切の鼻音の前では短母音化することも既述の通りである。例 अतः atah *s* 従って「それ故」, ग्रंथ granth *s* 本」, सम्बन्ध sam bandh *s* संबंध「関係」「縁故」

VI 強 音 (स्वर)

アクセントの問題は，地方別とか標準語と方言との別とかの諸要因によ

って必ずしも全土一定というわけにゆかないことは他の口語の場合と変らない。本語における大体の標準形を示せば次のようになる。

1　二音節語の場合

（1）第1・2音節とも，(i) 短音節か，(ii) または長音節だけであるとき，前の方に強音か置かれる。例　(i) कृषि kṛ́-ši*s「農業」，स्वयं(1) svá yan s「自身」　(ii) आशा a'-shâ*s「願望」，चूना ćû'-nâ「石灰」，चौकी caú ki*「腰掛け」。

（2）両音節か長短の両音節から成れば，強音は長音節の上に置かれる。例. घड़ी gha ṛi'*「時計」「24分間」，जाति jâ'-ti*s「種類」「階級」「種族」，हिंसा hin sâ'*s「殺害」。

（3）次のような場合には平たん音になる。

(i) 第1音節か長母音か二重母音かにして，第2音節が子音を伴う長母音であるとき。例. भूचाल bhû ćâl「地震」，दीवार dî-wâr*F「壁」；चौपाल cau pâl「村の集会所」。

(ii) 両音節とも短音節にして，後者のみが子音字を伴うとき。例 चतुर ca tur s「賢明な」「上手な」，भजन bha-jan s「礼拝」「聖歌」；उपज u-paj*s「収穫」。

(iii) 第1音節か短音節，第2音節が長音節にして，両者とも子音字を伴うとき。例　अभ्यास abh yâs s「練習」；सन्देह san deh s「疑い」，सम्राट sam rât s「国王」「皇帝」。

(iv) 第1音節が子音字を伴う短音節，第2音節が長音節で終る場合。例　कन्या kan yâ*s「娘」；चिन्ता ćin-tâ*s「心配」；लिखना likh nâ「書く」。

---

(1) Anusvâra は記号であって文字として数えられない。

(v) 両音節とも子音字を伴う短音節にして，第1音節が इ 音，または उ 音を有し，第2音節が अ 音を有するとき。例．इन्धन in-dhan*s*「薪」；उत्सव ut sav*s*「佳節」「祝祭」；सुन्दर sun-dar*s*「美しい」。

しかし，अनबन an ban*「不和」「けんか」や जगमग jág-mag*「きらめき」などは，अ 音のある第1音節に強音がある。

2. 三音節語の場合

強音が一語の前にあるか後にあるか，それとも全然無いかの3種が二音節語に見られたが，この三音節語の場合でも，強音が前に起る時，中間に起こる時，および前と後とに同時に起る時との3種がある。

（1）一般に第1音節が子音を伴うと否とに関係なく，(i) 3音節とも長音節である時，(ii) または3音節とも子音字を伴う短音節である時，共に第1音節に強音か置かれる。例 (i) आगामी â'-gâ-mî*s*「来るべき」「未来の」，पाठशाला pa'th shâ lâ *s*「学校」。(ii) निस्सन्देह ní's san-deh「疑のない」「確実な」「もちろん」。

また，(i) 第1音節が長音節，第2・第3音節が子音を伴う短音節である時，(ii) 第1・第2音節が長音節，第3音節が短音節にして，子音字が第1音節と第3音節とにのみ存在する時も同様である。例 (i) आवश्यक â'-vash yak *s*「必要な」「重要な」。(ii) मेमसाहब mém-sâ-hab*s*「奥さん」。[1]

（2）3音節とも短音節にして，(i) 子音字を全然伴わぬとき (ii) 子音字が第2・第3音節にのみ存在するとき，(iii) および第1音節が短音節にして，第2・第3音節が長音節である時には，共に強音は第2音節の上

[1] インドの召使達が外国人の大人に向って用いる語。これは俗語で，mem sâhiba が正しい。

に置かれる。例 (i) अतिथि a-tí thi s「客」, सुमति su má-ti* s「良い心」「良識」。(ii) परिश्रम pa rísh ram s「骨折」「勤労」, अधिकतर a dhík-tar s「より多い」「最大の」。(iii) अनोखा a no-khâ「奇異な」「めずらしい」, विरोधी vi-ró-dhî s「敵」。

また，第1音節か短音節，第2音節か長音節にして，第3音節か子音字を伴う長音節か短音節かである時にも同様である。例 लिखावट li-khâ′ wat*「書き方」, बनावट ba nâ′-waṭ*「構造」「偽造」, लगातार la gâ′ târ「絶え間のない」「続いて」。

(3) 次のような場合には，第1音節と第3音節とに強音か置かれる。

(i) まず，第2音節が一様に短音節であるということを前提として，両端の音節が長音節であるか，または子音字を伴う短音節であるかによって，さらに四つの場合が生ずる。

a) 両端が長音節のとき。例 धारणा dhâ′-ra-ṇâ′* s「記憶」, भीतरी bhî′-ta-rî′「内側の」; वाटिका vâ′-ṭi kâ′* s「小庭」。

注意 कांटा kâ′n ṭâ「とげ」「小さい秤」, फारसी fâ′r-sî*「ペルシャ語」「イランの」; बालटी bâl ṭî*=बालटी「バケツ」「おけ」などは，たとえ外観は似ていても，共に2音節語だから問題外である。

b) 両端とも子音字を伴った短音節のとき。例 पदपङ्कज pád pan káj s「はすのような足をした」。

c) 第1音節が長音節にして，第3音節が子音字を伴った短音節のとき。例 सावधान sâ′-va-dhâ′n s「注意深い」, नागरिक nâ′-ga rik s「市民」; हानिकर hâ′-ni kár s「有害な」。

d) 第1音節が子音字を伴った短音節，第3音節が子音字を伴ったり伴わなかったりする長音節であるとき。例 उत्कंठा ut-kan ṭhâ* s「心配」

「不安」, वर्तमान var ta ma'n s 「現在の」。

(11) 第1・第2音節が短音節 第3音節が長音節にして 全音節とも子音字を伴うとき。例 हिन्दुस्तान hın dus tâ n s 「インド」(1)。

3 四音節以上の場合

(1) 全部が短音節から成るとき，末尾から第2位のものに強音が置かれる。例 अनुपस्थित a nu pás thit s (2)「出席しない」「欠席の」, प्रतिनिधि pra tı ní dhı s 「代理人」。

備考 この規定は短音節だけから成る3音節語にも適用可能である。例 अरुचि a rú ći* s 「嫌悪」。

(2) 長音節が一つしかないとき，その上に強音が置かれる。例 अभिवादन a bhı vâ' dan s 「会釈」, उदाहरण u da' ha ran s 「見本」。

備考 कुमुदिनी ku mu-dı nı * s 「水蓮」のように 他が皆短母音であって末尾 नी が唯一の長母音であるような場合は別として それに先立つ短母音の中に他の子音字でも伴うようなものが存在すれば 強音はその方に置かれる 例 पवित्रता pa vit ra tâ * s 「純潔」。

(3) 長音節が二つあれば前の方が強音化する。例 पारितोषिक pa rı to-śık s 「賞」 सहानुभूति sa ha' nu bhû tı *s 「同情」。

(4) 短音節で始まり 3長母音から成る語では，その第2と第4の長音節の上に強音が置かれる。例 परोपकारी pa ro pa ka rı's 「同情深い」, विश्वासघाती vısh vâ's gha tı' s 「裏切人」「不信者」。

備考 ⼭業の抑揚もまた各国における場合同様 地方別によって多少の相違がある

(1) 「インド教徒の国」の意 狭義ではヒンドウスターニー語の本場である?? のウッタル・プラデーシュ 即ち北部州のこと

(2) an は否定接頭辞 upasth t は「出席せる」「準備せる」の意。

れるとともに，一般に下降調と上昇調とに区別することができる。上昇調といっても，最後の強音化音節に達するまでは下降調の音調と異ならない。そうして下降調が，ある一定の事柄を表示する普通の陳述，命令，または疑問詞を有する疑問に，また上昇調が要求あるいは諾否の返答を求める質問などの場合に起こることも他国語と変らない。

Ⅶ. 音 便 変 化 (सन्धि)

Sandhi*「(音の) 接合」とは，「一語の末字と次語の初字との音便的接合」が意味される。その主要な場合は次の通りである。(1)

1. 母音の場合

（1）同種母音

अ と अ, अ と आ, आ と अ, आ と आ, これら長短両母音の接合は共に आ になる。例 परम parama「最高の」+आत्मा âtmâ*「魂」=परमात्मा paramâtmâ「最高の魂」「神」; विद्या vidyâ*「知識」+आलय「家」=विद्यालय vidyâlay「専門学校」。

同様，इ と इ, इ と ई, ई と इ, ई と ई とはすべて ई になり，उ と उ, उ と ऊ, ऊ と उ, ऊ と ऊ との接合が一様に ऊ になる。例 मुनि「聖人」+इन्द्र「諸神の王」「雷雨の王」=मुनीन्द्र munindra〔「仏陀」の異名〕，विधु「月」+उदय uday「上昇」=विधूदय vidhûday「月の出」。

（2）母音転換

文法上，母音転換（गुण「属性」）とは，母音の派生的転換をいう。ここでは，अ や आ が異種母音と接合する場合である。すなわち，अ と इ,

(1) この Sandhi に関する知識は，梵語の場合ほどに必要でないので，本言語の初学者には本節を全然省略したからとて左程の不便不自由をも感じない。

なお，本節に掲げられた例題はすべて梵語由来語であるため本節では語原を省略した。

आ と ई の各接合は共に ए となり，同様，अ や आ が उ や ऊ と接合すれば一様に ओ となり，また अ や आ が ऋ と接合すれば अर् となる。これらの ए, ओ, अर् が，それぞれ इ や ई, उ や ऊ 及び ऋ の Guṇ と称される。例　परम+ईश्वर=परमेश्वर parameshvars, parmeshvar „「最高神」「ヴィシヌ神」，महा「大きい」+उत्सव「祭」=महोत्सव mahotsav「大祭」，महा+ऋषि「聖人」=महर्षि maharśi「大聖人」。

（3）二重母音転換

文法上，二重母音転換（वृद्धि「拡大」「増加」）とは，母音の特別な延長拡大を意味する。例えば，आ は अ の Vṛddhi であり，ऐ は इ, ई, ए の Vṛddhi であり。औ は उ, ऊ, ओ の Vṛddhi である。अ や आ が ए や ऐ と接合する四つの場合とも ऐ になり，同じく，अ や आ が ओ や औ と接合する四つの場合とも औ になる。例　सदा「常に」+एव eva「もまた」=सदैव sadaiv「常に」，महा+औषधि*「薬」=महौषधि mahauśadhi*「特効薬」。

（4）異種母音

（1） ए, ओ, ऐ, औ が他の母音と接合すると，それぞれ अय्, अव्, आय्, आव् になる。例　जे(=ज्+ए)+अ=जय* jaya, [illegible] jay「勝利」，नौ*「舟」+इक「1」=नाविक「船員」「舟の」。

（2） इ, ई, उ, ऊ, ऋ が異種母音と接合すると，次のようにそれぞれの同族半母音に変わる。

(1) इ や ई が他の母音と接合すると य् になる。(1) すなわち，इ や ई と

---

(1) यण सन्धि と称される。

अ とでは य, इ と उ とでは यु, そして इ と ए とでは ये となる。例 इति「これだけ」+आदि「等々」=इत्यादि「等々」, अभि「前に」+उदय「日の出」=अभ्युदय abhyuday「日の出」, प्रति「各」+एव「1」=प्रत्येक pratyek「各々の」「各人」。

(11) उ →ऊ か他の母音と接合すれば व् になる。(1) すなわち これらが आ と合音すれば वा になる 例 सु「良い」「良く」+आगत「到来し」=स्वागत svâgat「歓迎」

注 1) Anu svâra が母音を伴えば म になる。例 सं sam (=सम् と共に の意を示す接頭辞)+आचार「習わし」=समाचार sam âcâr「報道」。ただし Anu svara が子音字を伴えば その音価は同じ組の鼻音に変わるのが目的であるが、Anu svâra のままである場合も多い。例 सं+तोष「満足」=सन्तोष「満足」。

2) その他, ऋ が他の母音と接合して र् になり, ए と अ とで ए になり, आ と अ とで आ になったりする。

3) ए 及び ओ の直後における अ 音省略を示すためのサンスクリットの母音省略符 Avagraha (अवग्रह) 即ち (S) 印がまれに Tatsama 語に見られることがある。

2 子音の場合

(1) 五つの基本子音字中の各組第1文字が ह を伴うと、その第1文字がその組の第3文字に変わると共に, ह 自体がその組の第4文字に変わる。例 उत् (「上に」の意を示す接頭辞)+हार** 「損失」「敗北」=उद्धार uddhâr「借金」。

---

(1) यण सन्धि と称される。

注 1) ただし，त् に限り，次に来る文字の如何に因り，多種多様に変化する。(i) 鼻音に伴われると न् に変わり (ii)(ii) 母音を初め ग, घ, द, ध, ब, भ, य, र, व に伴われると द् に変わる。また (iii) ज や ल の前ではそれぞれ ज् や ल् になり，(iv) च् や छ の前では共に च् になるといったぐあいである。

2) ह か द に伴われる時にも同様，上記（1）と同し結果になる。例 उद् (=उत्)+हत「打った」=उद्धत uddhat「高慢な」。

（2）त् 以外の क्, च्, ट्, प् など 4 Barg「組」の第 1 文字が，(i) 長短の母音を初め(2)，(ii) 半母音や（iii）その組の第 3 文字を伴えば，それぞれ ग्, ज्, ड्, ब् などと，その組の第 3 文字に変わる。例 (i) दिक्(3)「方位」「地域」+अन्तर「内部」=दिगन्तर dig antar「大気」，(ii) दिक्+विभाग「部分」=दिग्विभाग dig vi bhag「方角」，(iii) दिक्+गज「象」=दिग्गज dig gaj(a)「八つの方角の一つにいるといわれる想像上の象」(4)。

（3）स् か他の子音字や母音字を伴うと，次のような変化が起こる。

(i) च や छ を伴えば श् になる。例 दुस्〔「悪い」意の接頭辞〕+चरित「行い」「行なった」=दुश्चरित dush ćarit「邪悪(な)」，निस्〔否定を示す接頭辞〕+छल「詐欺」「策略」=निश्छल nish chal「偽りのない」「策略のない」。

(ii) अ や आ 以外の母音に先立たれながら क, ख, प, फ を伴えば ष् になる。例 दुस् + कृत*「結果」=दुष्कृत duś krit「悪行」「罪」=दुष्कर्म

(1) 鼻音字を伴えば ट や ठ もそれぞれ ड や ण に変わり，प や द はそれぞれ म や न に変わる。

(2) 鼻音字は別として，短母音 अ 音で発声される各子音字も含まれる

(3) दिश्* から来たもの。ここでは 一種の接頭辞として用いられている。

(4) 他の七つの方角にいる象と共に，世界を支えていると想像される。

duś karm ; दुस् +प्रकृति 「性質」=दुष्प्रकृति duś-prakriti 「性質の悪い」。

注 1) ट を伴う場合も同様である。例. दुस् +टर$_{H}$ 　かん固」=दुष्टर duś-ṭar 「打勝てない」=दुस्तर dus tar(1)。

2) स か अ や आ 以外の母音に先立たれる時にも ष になる。例 वि 〔「不統一」の意を示す接頭辞〕+सम 「平らな」「等しい」=विषम vi sam 平らでない」「高低のある」。

(iii) अ 音に先立たれなから क, ख, प, फ を伴えば Visarga に変わる。例 मनस् 「心」「観念」+क्षेप 「(舟などの) ひとこぎ」=मनः क्षेप manaḥ kśep 「人心の動揺」, मनस् +पति 「主」「支配者」「夫」= मनः पति manaḥ pati 「ヴィシヌ神」; पयस् 「汁」「乳」「水」+कुण्ड 「水差し」=पयः कुण्ड payah kund 「水差し」「ミルク入れ」。

(vi) अ 音に先立たれながら長短の母音を伴えば ओ になる。例 मनस् +रथ 「車」「乗物」=मनोरथ mano rath 「願望」「希望」。

注 य が ओ と接合する時にもよく ओ になる。例 दत्य dañtya 「歯音」+ओष्ठ्य ośṭhya 「唇音」=दतोष्ठ्य dañtośṭhya 「歯唇音」。

(v) अ や आ 以外の母音に先立たれながら長短の母音(2)や半母音を伴えば र् になる。例 दुस् +गति (=गत$_{H}$)*「運命」=दुर्गत dur gat* 「不運(な)」; दुस् +जन 「人」=दुर्जन dur-jan 「悪人」「邪悪な」, दुस् +दशा*「状態」=दुर्दशा dur-dashā* 「不幸」「禍」, दुस् +मुख 「顔」=दुर्मुख dur-mukh 「醜い人」, दुस् +यश 「名声」=दुर्यश dur-yash 「不評」「悪評」; निस् +वचन 「話すこと」=निर्वचन nir-vaćan 「口をきかぬ」「黙した」。

---

(1) त や थ の前では स् は変化しない。

(2) a 音を伴う時の子音字も含まれる。

3　気音符の場合

（1）ं 音に先立たれながら अ 以外の母音を伴えば気音符（Visarga）は消失する。例　हिम himaḥ[1]「氷」「雪」+आलय âlaya「住い」=हिमालय himâlaya〔山の名〕，अत ataḥ「だから」+एव eva[2]「また」=अतएव at-eva「そのために」。

（2）短母音に先立たれながら र を伴う時にも気音符は消失し，その短母音が長母音化するのが原則的である。例　नि［否定接尾辞=निर्］+रस「汁」=नीरस ni ras「汁気のない」。

（注）1）र 以外の子音字を伴えば変化せぬこと無論である。例　नि +संदेह「疑い」=निः संदेह niḥ sandeh「疑いのない」「確かに」，नि +प्रयोजन「使用」=निः प्रयोजन niḥ prayojan「役に立たない」。

2）ただし，इ や उ に先立たれながら क, ख, प, फ などを伴えば ष に変わることもある。例　नि +फल「果物」「報い」=निः फल=निष्फल=निस्फल$_H$「果物のない」「不成功な」，दुः +पुत्र「息子」=दुष्पुत्र dus putr「悪い息子」。

（3）気音符が च, छ, श を伴えば श になる。例　दुः +चेष्टा「動作」=दुश्चेष्टा dush ćeśṭa「悪行」「悪意」，नि +छल「偽り」=निश्छल nish ćhal=निः छल「策略のない」「単純な」，नि +शक्त「力強い」=निश्शक्त nish-shakt「弱い」。

（4）अ や आ 以外の母音に先立たれながら，(i) 母音，(ii) 半母音，(iii) ह，及び (iv) 基本子音字各組の第3，第4，第5の文字を伴えば気音符は र् になる。例　(i) नि +आदर「尊敬」=निरादर nir adar「無礼」「軽べつ」。(ii) नि +वृक्ष「樹木」=निर्वृक्ष nir vṛkś「樹木のない」。(iii)नि +

---

(1) Visarga は原則として常に母音に先立たれる。

(2) Tatsama 語中　特に ए と ऐ とは現代語においてもよく a 音が伴って発音される。

हिम「雪」=निर्हिम nir-him「雪のない」。(iv) दु (=दुस्)+गन्ध*「香」=दुर्गन्ध dur-gandh*「悪臭」，नि +भय「恐れ」=निर्भय nir-bhay「恐れない」；दु +नाम「名」=दुर्नाम dur-nâm「悪名」「恥辱」。

（5）逆に र् か क, प, श などを伴えば気音符になる。例 अतर「内部」「心」+शरीर「身体」=अत शरीर antah sharîr「魂」，अतर+पुर「家」「町」=अत पुर antah pur「ハレム」「後宮」，अतर+करण「感覚器官」=अत करण antah-karaṇ「心」「魂」「良心」。

（6）स् も स や श の前では，よく気音符になる。例 दुस्+समय「時間」=दु समय duh samay「悪い時」「困難時」，दुस्+शील「品性」=दु॰शील duh shil「邪悪な」「下品な」，दुस्+शासन「支配」「統御」=दु शासन duh-shâsan「御し難い」=दुःशासन。しかし，時々，この स् は श の前で श् sh となり，स の前では स् のままにとどまる。例 दुस्+शासन=दुश्शासन dush shâsan=दु शासन，दुस्+सह$_H$「我慢強い」「辛抱」=दुस्सह dus sah「辛抱できぬ」=दु सह。

注意 現代ヒンディーにおいても，それ自身特有の軽度な Sandhi が強意詞 ही を伴う場合や主格形・従格形複数語尾を添付する場合に見られる。例 अब「今」+ही=अभी「たた今」；बेटी「娘」+या〔女性主格複数語尾〕=बेटियाँ；हिंदू「インド教徒」+ओं〔従格複数語尾〕=हिंदुओं；बहू$_H$（=वधू$_S$）「息子の妻」「嫁」+एँ〔女性主格複数語尾〕=बहुएँ（=वधुएँ）。〔75ページ「人称代名詞」の「用法」(4)，および78ページ「指示代名詞」の「用法」(4)参照〕

第二編　品　詞　論 (शब्दरूप)

第一章　名　詞 (संज्ञा)

I. 名詞の種類 (संज्ञा के भेद)

名詞は「具象名詞」(पदार्थवाचक) と「抽象名詞」(भाववाचक) とに2大別され，前者は更に「普通名詞」(जातिवाचक)「固有名詞」(व्यक्तिवाचक)「集合名詞」(समुदायवाचक) とに細分される。[1]

II. 性 (लिंग)

名詞の種類やその固有語・外来語の如何にかかわりなく，すべての名詞が「男性」(पुल्लिंग) か「女性」(स्त्रीलिंग) かに分類される。そうして，「生物」を示す名詞にして，「男性」を意味するものは言語的にも一切男性扱いされ，「女性」を意味するものは一切女性扱いされるという原則以外性別に関する多くの規定には例外もまた少なくない。

1. 男性名詞 (पुल्लिंग संज्ञा)

（1）आ で終る Tatbhava 語——例　आटा「粉」，चमड़ा「皮革」，झगड़ा「けんか」。

主なる例外——गुफा「ほら穴」，पछवा「西風」，मैना「むく鳥」。なお，次のような外来語も女性扱いされる。例　दवा A[2]「薬」，परवा P「心配」，सजा P「罰」，हवा P「風」「空気」。

---

(1) 以上諸名詞の原語に一々 संज्ञा の語を入れてもよろしい。

(2) 外来語なので，व はすべて w 音。

(2) व で終るもの——例　घाव$_{(1)}$「傷」, बर्ताव「取扱い」 बहाव「流れ」「下流」。

主なる例外——टेव$_{(2)}$「習慣」, नाव$_{(3)}$「舟」, नेव$_{(4)}$=नीव$_{(5)}$「基礎」「支ん」。

〔注〕 उ, ऊ ओ औ などで終る名詞にも男性が多い。例　आलू「じゃがいも」 जौ–जव jav「大麦」, पशु s「家畜」, वायु s「空気」「風」

例外——आयु s「年齢」, ऋतु s「季節」 खो–खौ「ほらあな」, तराज़ू P「はかり」, दारू P「薬」「治療」, बाज़ू P「腕」 बालू「砂」, बू P「香」

(3) पन, पा, आव त्व などの接尾辞で終るもの——例　चौड़ापन「幅」, बुढ़ापा「老年」, गहराव gahrao「深さ」, दासत्व dâs tva s「奴隷の身分」「隷属」。

(4) आब で終るもの——例　गुलाब P「ばら」〔植〕, जवाब A「返答」, जुलाब A「下剤」, हिसाब A「勘定」「計算」。

例外——किताब A「本」, जुर्राब A「くつ下」, ताब P「熱」, रकाब「あぶみ」, शराब A「酒」。

(5) आन や आर で終るもの——例　इन्कार A「拒絶」, बाज़ार P「市場」, मकान A「家」, सामान P「貨物」「家具」。

例外—— तकरार A「議論」「口論」, दुकान A「店」, सरकार P「政府」。

(6) इ や ई で終り,「人」や「職業」を示すもの——例　ऋषि s = मुनि「聖人」, यात्री s「巡礼者」, दोषी s「罪人」, यात्री H =यात्रिक s「旅人」, साथी「仲間」, यूनानी A「ギリシャ人」, माली「植木屋」。

〔注〕 उपदेशक s「教師」, गवैया「歌手」, भक्त s「信仰者」「信者」などのように末字の如何に関係なく,「人」や「職業」を示すものの多くは男性であるが　例

(1) これら3ヒンディー語のは o 音。　(2) tew te o。　(3) náw na o　(4) new ne o
(5) ninw (10ページ6(iv)参照)。

外といえば जुरी (jury) E 「陪審員」(1), पुलिस (police) E. 「巡査」(1), प्रजा s 「人民」; सवारी P 「乗客」「乗物」(2) ぐらいなものである。

（7）国名・都市名・山岳名——例　मिस्र A 「エジプト」, यूनान A 「ギリシャ」, बनारस 「バナーラス」; हिमालय s 「ヒマーラヤ」。

例外——अयोध्या s （市名）; देहली=दिल्ली 「デリー」; बम्बई 「バンバイー」(3), लंका s 「セイロン」。

（8）年月日や週日の名——例, संवत s 「紀元」; वर्ष s 「年」=बरस=साल r, चैत 「インド教暦第12月」=चैत्र s ; मास s 「月」=महीना, सप्ताह s 「週」=हफ्ता r, दिन 「日」「ひる」。

注　ただし, 「日」よりも短い時間的区分になるとまちまちで घण्टा 「時間」や मिनट E 「分」は男性であるが, रात 「夜」, शाम P 「夕暮」=संध्या s, सुबह A 「朝」などは女性である。

（9）金属や宝石の名——例　सोना 「金」, रूपा 「銀」, नीलम 「サファイヤ」「青玉」; पन्ना 「エメラルド」「緑柱玉」, पुखराज 「黄玉」; मोती 「真珠」; लाल 「ルビー」「紅玉」。

例外——चाँदी 「銀」, चुन्नी 「小さいルビー」, मणि 「宝石」。

(10) 感情を示すサンスクリット語——例　अनुराग 「愛着」, उत्साह 「喜び」, कष्ट 「苦悩」, क्रोध 「怒り」, तरंग 「感情」「有頂天」, प्रेम 「愛」, शोक 「悲しみ」。

例外——घृणा 「きらい」「憎悪」, प्रसन्नता 「喜び」, प्रसन्नता 「喜び」

(11) 星の名——例　केतु s 「ほうき星」; चन्द्र s 「月」; शुक्र s 「金星」

(1) 半円括弧内は英語のつづり。
(2) 「乗客」の意味でも, その主格複数は सवारियाँ と女性複数形になる。
(3) これらデリー, ボンベー両都市名は次項2に準拠して女性とする人が多い。

例外——आकाश गङ्गाs「天の川」, पृथ्वीs「地球」「地」

(12) 樹木の名——例　पीपल「ぼだい樹」, वृक्षs =पेड़ *n*「樹木」, सागौन =सागोन=सागून「チーク樹」(1)。

(13) 穀物の名——例　गेहूँ「小麦」, चावल「米」, मटर「えんどう」。

例外——जई「オート麦」「えんばく」; दाल「小粒な小豆様のもの」 सरसा「からし」。

(14) इ, ई, ऋ(2)以外の字母。

2　女性名詞 (स्त्रीलिंग संज्ञा)

(1) आ にて終る Tatsama 語——例　आत्मा「魂」, जनसंख्या「人口」, छाया「陰」「保護」, दया「同情」, सभा「会」, सेना「軍隊」。

(2) ई や इ にて終る語——例. धोती「男の腰巻」, रोटी「パン」, लड़ाई「戦争」「けんか」, जातिs「階級」; तिथि *s*「日附」, भाँति *s*「種類」。

例外——घी(3)「ギー」, जी「心」, पक्षीs「鳥」; पानी「水」, हाथी「象」。

(3) ता にて終る Tatsama 語——例. आवश्यकता「必要」, मूर्खता「愚」, स्वतन्त्रता「独立」。

(4) इया にて終るもの——例. कटिया「魚つり針」, गौरिया「すずめ」, खड़िया「チョーク」「白墨」; चिड़िया「鳥」; डिबिया「小箱」; ठिलिया「土びん」「陶器製水差し」; पुड़िया「散薬」。

主なる例外——दरिया *r*「河」, भेड़िया「おおかみ」, पहिया「車輪」。

【注】 गड़रिया=गडरिया「羊飼い」「牛飼い」, बहेलिया「野鳥猟者」, भुसिया「地

---

(1) 2, 3の例外もないではないが, 日本にない樹木なので省略。

(2) これら3文字だけが女性扱い

(3) 牛乳から造られる調味料。

主」 रसोइया「料理人」など すべて「人」を示すものは男性。

(5) त や ट にて終るもの ——例 जीत「勝利」 बात「話」「事柄」, चोट「負傷」, हाट「市場」, प्लेटE「皿」。

主なる例外——

(i) サンスクリット——जगत「宇宙」, जीवित「生活」, तट「川岸」「海岸」, पवत=पर्वतH「山」 प्रायश्चित「罪滅し」「償い」, मत「宗派」, मरुत「風」「風の神」, वसन्त=बसंतH「春」 वेदान्त「インド六派哲学の一」, वृत्तान्त「話」, संकेत「しるし」「暗示」「表示」, संगीत「音楽」, संवत「紀元」。

(ii) ヒンディー——अखरोट「くるみ」, ऊँट「らくだ」[駱], खेत「畑」 गीत「歌」, घाट「波戸場」「河畔の洗たく場」「峠」 घूँट「ひとのみ」「一杯」, चेत「感覚」「知覚」, जमघट「群集」「混雑」 झूट=झूठ「うそ」「偽り」, दाँत「歯」, नरकट「よし」「あし」[植], परत「(着物の) ひだ」, पात「葉」, पेट「胃」, व्रत「断食」, भात「御飯」, माट「大きな土器」, रहट「つるべ」 राज-पाट「王国」, सूत「糸」。

(iii) ペルシャ語——गोश्त「肉」, तख्त「王座」, दरख्त「樹木」 दस्त「手」, दोस्त「友人」, बख्त「運」, बुत「偶像」。

iv) アラビヤ語——ताबूत「棺」, शर्बत「糖蜜」, वक्त「時間」, सबूत「立証」「証拠」。

(v) 英語——कोट「上衣」, टिकट「切符」, फुट「尺」, सूट「一着(着物の)」, स्लेट「石盤」。

(6) स にて終るもの——例 आस「希願」「期待」 ओस「露」 कपास「棉花」, टेनिसE「庭球」, नस「血管」, प्यास「のどの渇き」, फीसE「月謝」「診察料」(1), बकवास「むだ話」, बास「香」, मिठास「甘味」

(1) फ़ीの複数形 fees.

例外——जलूस*a*「行列」, निकास「根源」「発端」「開始」, प्रयास*s*「努力」, बाँस「竹」, बन-बास「追放」, माँस=मास[1]「肉」, रस*s*「汁」, विश्वास*s*「信頼」, साहस*s*「勇気」, अभ्यास*s*「練習」, इतिहास*s*「歴史」

（7）ペルシャ由来語にして श 特に इश で終るもの——例 आतिश「火」, वारिश「雨」, कोशिश「努力」, सिफारिश「推薦」。

例外——जोश「熱情」, दरवेश「たくはつ僧」, होश「感覚」。

備考 ペルシャ由来語以外は ほとんど皆男性となる。例 ताश「カルタ」「カード」, देश*s*「国」, प्रवेश*s*「入場」, फर्श*a*「じゅうたん」, नक्काश*a*「彫刻家」

（8）動詞の語根が抽象名詞化したもの——例 भूल「忘却」「誤り」, माँग「需要」, महक「芳香」, लात「(足で)けること」, नाप「寸法」。

主なる例外——खेल「遊戯」, डर「恐怖」, दखेल「押し」「衝き」; नाच「舞踊」, निचोड「精」「粋」「真髄」, नोच「ひっかき」「つねり」, विचार*s*=विचार=सोच「考え」。

備考 動詞の語根必ずしも抽象名詞とならない。例 थूक「つば」「だ液」, मोड「曲り角」「河川の曲り」。

（9）河名——例 गङ्गा=गंगा, जमुना=यमुना。

例外——ब्रह्मपुत्र, सिंधु, सोम[2]。

（10）言語名——例 अँग्रेजी「英語」, उडिया「ウリヤー語」, उर्दू「ウルドゥー語」, तुर्की[3]「トルコ語」, चीनी[3]「中国語」, जापानी[3]「日本語」, यूनानी[3]「ギリシャ語」; भाषा*s*「言語」[4]。

---

(1) サンスクリットの由来語の意の時には「月」の意。
(2) ガンガー河の支流。ナーグプール地方を流れてパトナー市の上流で合流。
(3) それぞれ「トルコ人」「中国人」「日本人」「ギリシャ人」, または「トルコの」「中国の」「日本の」「ギリシャの」の意ともなる。
(4) すべての言語名に本女性名詞を添付してもよい。

(10) 乗物の名——例　अगिनबोट*S E*「蒸汽船」; टमटम「馬車の一種」; टैक्सी*E*「タクシー」; ट्रैम*E*(1)「電車」; मोटर*E*(1)「自動車」; रेल*E*(2)「汽車」; साइकिल*E*「自転車」。

主なる例外——गुब्बारा *P.*「軽気球」; ताँगा「一頭二輪馬車」; जहाज *A*「汽船」。

(11) 香料・薬味の名——例　कढ़ी「カレー」; कस्तूरी「じゃ香」; केसर「サフラン」; मिर्च「こしょう」; लौंग「ちょうじ」; सोंठ「土しょうが」; सोंफ(3)「アニスの実」; हींग(3)「あぎ」【植】。

例外——अजमूद=अजमोद「パセリ」; मुश्क*S*=मुश्क *P*「じゃ香」; लहसुन「にんにく」。

【註】 अदरक「しょうが」は男女両性に用いられる。

(12) 全然不規則なもの——例

(i) サンスクリット——किरण「日光」「光線」; तान「糸」「音階」「調子」; धार「流れ」「川」「刀身」; भरमार「たくさん」「豊富」; शरण「保護」「避難」。

(ii) ヒンディー——कीचड़「どろ」, आँख「眼」; आँच「火」; उमग「有頂天」; ऊन「羊毛」; कल「機械」; कोंपल「芽」; खाल「皮膚」, गेंद「まり」「球」, नाक「鼻」; नींद「睡眠」; बान「習慣」; मूँछ「鼻ひげ」; रान「もも(股)」; लाज「恥」, लहर「波」「感情」「年輪」。

(iii) ペルシャ語——आवाज़「声」; कमर「腰」; गर्दन「首」; पसंद=पसन्द「好み」「愛好」; चाय「茶」; चीज़「物」; चेचक「天然痘」「ましん」; जान

---

(1)これらに女性名詞にーゝ गाड़ी「車」を添付してもよい。

(2) せき止めの薬にもなる。

(3) 調味料としてばかりでなく，胃腸の清浄剤としても用いられる。

「生命」, जमीन「土地」「地球」, मेज「机」, शाम「夕方」 सरकार「政府」

(iv) アラビヤ語——उमर「年齢」, किताब「本」 किस्म「種類」 कौम「国民」「種族」「階級」 कैद「監禁」 खबर「消息」「報道」 दुकान「店」 नहर「運河」, नजर「視覚」「一見」 फौज「軍隊」 बंदूक「小銃」 वजह「理由」「原因」。

v) 英語(1)——अपील (appeal)「訴訟」, कमान (command)「命令」 टीम (team)「チーム」「団」「組」 दराज (drawers)「引出し」, निब (nib)「ペン先き」, पलटन (platoon)「小隊」, पाकिट (pocket)「ポケット」, पालिश (polish)「みがき」「つや出し」, पिस्तौल (pistol)「ピストル」, पेंशन (pension)「年金」「恩給」, पेंसिल (pencil)「鉛筆」, फिल्म (film)「映画」, बारिक (barrack)「バラック」「営舎」, बेंच (bench)「長いす」, मशीन (machine)「機械」, मिल (mill)「工場」, रफल (rifle)「小銃」「ライフル銃」, लालटेन (lantern)「ちょうちん」, वोट (vote)「投票」, सिगरेट (cigarette)「巻きタバコ」。

備考 1) ई で終る英語も,「人」や「職業」を示すもの以外は女性扱いされること一般の規定通りである。例 मई (May)「5月」, रायल्टी (royalty)「印税」。

2) 英語からの借用語で男性扱いされるものも少なくない。例 टेलिफोन (telephone)「電話」, रबड (rubber)「ゴム」, स्कूल (school)「学校」。

3) 上記 ii) iii) iv) などの挙例は極く一部分に過ぎない。

4) 地方別によって性別を異にするものも少くない。例 खाद「肥料」, दही「凝乳(2)」, साँस「呼吸」, फिक्र「心配」「考え」, इजलास「会期」。

これらの諸語はいずれもデリー地方で男性扱いされ, ラクナウ地方で女性扱いされる。

---

(1) 以下括弧内は字訳でなく英語つづりである

(2) 牛乳を酸化したもの。一種の液体ヨーグルト。胃腸の清浄用に食事時に常用される。

また，बेंत r.「とう」「とう製品」や तप r n「熱病」「熱」は，約8割までが男性扱いされるに対し，わずかにラクナウ市以東で女性扱いされる。

これに反し，काँच「ガラス」; खजूर「なつめやし」, पुस्तक s「本」, फोटो s.「写真」などは，デリー地方で女性扱いされるに対し，ハナーラブ市以東では男性扱いされる。

なお，खोज「探索」や वस्तु s「物」「事」などは，Urdû で男性扱いされるが，Hindî では女性に扱われる。

3. 複合名詞の性 (समस्त संज्ञाओं का लिंग)

互に性を異にする二つの名詞から成る複合名詞の性は，後に来る名詞の性に従うのが原則的ではあるが，必ずしも一定しない。大体語順に関係なく，(i)「人」を示す場合には男性の複数扱いされるが，(ii) 前の語が後の語の説明語になっているような場合には後の語の性に従う。

例 (i) माँ-बाप＝माता-पिता s「父母」「両親」; भाई-बहिन「兄弟姉妹」; देवी-देवता「善男善女」〔直訳＝「女神と男神」〕。(ii) भाषा* s.「言語」＋शास्त्र s「規定」「科学」＝भाषा-शास्त्र s「言語学」; पाठ s「学問」＋शाला* s「家」「会館」＝पाठशाला s「学校」; जन्म「誕生」＋भूमि*「土地」＝जन्म-भूमि*「誕生地」。

しかしながら，両語が互に同義語か，または類語である時には一定しない。

例 कूडा＋कर्कट*＝कूडा-कर्कट「ごみ」「ちり」; चाल*＋ढाल＝चाल-ढाल*「行儀」, शादी* P ＋ब्याह＝शादी-ब्याह「結婚」; खेल「遊戯」＋कूद*「跳躍」＝खेल-कूद「遊戯」。

備考 1) なおほかに，同一語でありながら，語義の違いて性を異にするものが若干ある。例 उर्दू〔言語名〕* と「軍隊」「野営」「野営地の市場」; ढाल「たて

【形】「風習」様式」と「姿」「類型」, धूप「日光」と「香」, बाल は(松やの)」と「毛髪」, बेर「順番」と「西洋すもも」, शाम「夕暮」と「ソ一国」

2) 性別とは無関係であるが, बन्दर「さる」【動】と「港」のように。語尾の違いで語義を異にするものもある。

4 女性名詞の作り方 (स्त्रीलिंग संज्ञाओं की रचना)

この場合,「人」や「鳥獣」に限られる。そして, 男性名詞から 女性名詞が作られる主なる方法を示せば次の通りである。

(1) आ で終る語は ई にされる。例.

काका「父方の伯〔叔〕父」	काकी「父方の伯〔叔〕母」(1)	दादा「父方の祖父」	दादी「父方の祖母」
मामा「母方の伯〔叔〕父」	मामी「母方の伯〔叔〕母」	नाना「母方の祖父」	नानी「母方の祖母」
कुँवारा「独身男」	कुँवारी「独身女」	कुत्ता「犬」	कुत्ती「雌犬」
गधा「ろば」	गधी「雌ろば」	घोड़ा「馬」	घोड़ी「雌馬」
चूहा「ねずみ」	चूही「雌ねずみ」	तोता「おおむ」	तोती「雌おうむ」
बकरा「山羊」	बकरी「雌山羊」	बछेड़ा「子馬」	बछेड़ी「雌子馬」
बेटा「息子」	बेटी「娘」	पोता「孫息子」	पोती「孫娘」
भतीजा「おい」	भतीजी「めい」	लड़का「少年」	लड़की「少女」
बुढ़ा, बूढ़ा, बुड्ढा(2)「老人」	बुढ़ी, बूढ़ी, बुड्ढी「老婆」	साला「妻の兄弟」	साली「妻の姉妹」
भेड़ा「羊」	भेड़ी「雌羊」	मुर्गा「おんどり」	मुर्गी「めんどり」

【注】 1) बच्चा「子供」には, その女性形 बच्ची「女児」があるにもかゝわらず

---

(1) 同義語 चचा＝चाचा ; चची＝चाची の方が一層普通である。

(2) 卑俗語的用語。

「女児」も含まれる。

2) 次の諸語は「生物」でないから男女両性は互に語義を異にする。例 अगूठा「親指」と अगूठी「石の入った指環」, घड़ा「水差し」と घड़ी「時計」, छाता「かさ(傘)」と छाती「胸」, ताला「じょう前」と ताली「かぎ(鍵)」, माला「花輪」とमाली「庭師」。

（2）次のような子音字で終るものは, ई が添付される。例

कबूतर p「はと」	कबूतरी「雌ばと」	तीतर「しゃこ」	तीतरी「雌しゃこ」
दास s「奴隷」	दासी「女奴隷」	दूत s「使者」	दूती「女使者」
देव s「神」	देवी「女神」	पुत्र s「息子」	पुत्री「娘」
पठान「パターン族の男」(1)	पठानी「パターン族の女」	कंजूस「けちん坊」	कंजूसी「女のけちん坊」
ब्राह्मण s「バラモン」	ब्राह्मणी「バラモンの女」	मेंडक / मेढक「かわず」	मेंडकी「雌かわず」
बन्दर「さる」	बन्दरी「雌さる」	मगर「わに」	मगरी「雌わに」
राक्षस s「悪魔」	राक्षसी「女悪魔」	राजकुमार s「王子」	राजकुमारी s「王女」
सुअर「ぶた」	सुअरी「雌ぶた」	हंस「白鳥」	हंसी「雌白鳥」

注意 「親愛」または「軽侮」の意を表わすために ある種の女性形は ई で終る普通の女性形のほかに इया にて終る別種の形を持っている。例 कुत्ती「雌犬」→ कुतिया, चूही「雌ねずみ」→ चुहिया, बन्दरी「雌さる」→ बन्दरिया, बुढी「老婆」→ बुढिया, बेटी「娘」→ बिटिया。

ただし, भेड़िया「おおかみ」は भेड「雌羊」の女性形でないことは前記の通りで（40 ページ(4)の末行参照）बछिया「雌子牛」は बछवा「雄子牛」の普通の女性形に過ぎない。また, गडेरिया「牛飼い」「羊飼い」の女性形は गडेरिन である。

---

(1) アフガーニスターンの代表的種族。西パーキスターンの北西国境地方の住民である。アフガーン族とも称される。

（3）ある種のサンスクリット語は，男性形に आ を添えて女性形を作る。例

अज「山羊」	अजा(1)「雌山羊」	पण्डित「学者」	पण्डिता「女学者」
प्रिय「恋人」	प्रिया「恋人」	सुत「息子」	सुता「娘」(2)
वैश्य「農工商階級の男」	वैश्या「同階級の女」	शूद्र「奴隷階級の男」	शूद्रा(3)「同階級の女」
शिव「シヴァ神」	शिवा「シヴァの妻」(4)		

注　逆に भैंसा「雄水牛」と भैंस「雌水牛」，भेड़ा「雄羊」と भेड़「雌羊」のように女性名詞から男性名詞が作られた形のものもある。रडुआ「男やもめ」と राँड「女やもめ」との関係も同様似ているが，そのつゞりが幾分不規則である。

（4）職業や身分関係を示す名詞にして，आ や ई で終るとき，इन(5) または अन(5) に変わる。例

कसेरा(6)「しんちゅう細工師」	कसेरिन, कसेरन(6)「同階級の女」(7)
कुँजड़ा「八百屋」	कुँजड़िन, कुँजड़न(8)「　〃　」
तेली(9)「油屋」	तेलिन, तेलन　「　〃　」
दर्जी「仕立屋」(10)	दर्जिन, दर्जन(10)「　〃　」

(1) 前々項の bakrâ bakri の方が一層普通である。

(2) 前々項の putr, putri の方が一般的。更に，beṭâ beṭi の方が一層普通に使用される。

(3) また शूद्री, शूद्राणी ともいわれる。

(4) 女神 Durgâ，即ち Parvati などが意味される。

(5) 前者はラクナウ地方の発音で，後者はデリー地方の発音。

(6) ठठेरा, ठठेरी の方が一層普通。

(7) 古来，インドでは職業世襲の習慣があるために，1職業が1階級を形成されて来た。そのため，同職の女，同職者の妻や娘など，その階級，その家族の全女性が意味される。

(8) kunjri ともいわれる。

(9) 種子油を扱う者。

(10) 正音は darzi, darzin darzan である。

दुलहा「花婿」	दुलहिन, दुलह्न「花嫁」
धोबी「せんたく屋」	धोबिन, धोबन「同階級の女」
नाती「娘の息子」	नातिन, नातनी「娘の娘」
नाई「理髪師」	नाइन, नायन「同階級の女」
पडोसी「隣人」	पडोसिन, पडोसन「女の隣人」
पापी「罪人」	पापिन, पापन「女の罪人」
बढई「大工」	बढइन, बढन「同階級の女」
माली「植木屋」	मालिन, मालन「　〃　」
मोची「くつ屋」	मोचिन, मोचन「くつ屋の妻」
समधी「しゅうと」(1)	समधिन, समधन「しゅうとめ」(1)
हलवाई「菓子屋」	हलवाइन「同階級の女」

（5）子音字で終る（4）と同種の男性名詞にも इन や अन が添えられる。例

अंग्रेज「英国人」	अंग्रेजिन「英国婦人」
अहीर「牛乳屋」	*अहीरन, अहीरिन「同階級の女」*
कहार「かごかつぎ人」	कहारन, कहारिन「同階級の女」
लोहार「鉄かじ」	लोहारन, लोहारिन「　〃　」
सुनार「金かじ」	सुनारन, सुनारिन「　〃　」

なお、इन や अन のほかに、ई や नी をも添える女性形もある。例

कुम्हार「陶器師」	कुम्हारिन, कुम्हारी, कुम्हारनी「陶器師の妻」
चमार(2)「くつ屋」	चमारिन, चमारन, चमारी, चमारनी「同階級の女」

---

(1) samdhi, samdhin とは花婿または花嫁相互の親父、親母の意。

(2) 皮革のなめし屋でもある。

गँवार「村人」　　　　गँवारिन, गँवारी「女の村人」

मालिक A「主人」「持ち主」 मालिकिन, मालिकनी「女主人」

उस्ताद P「学校教師」　　　उस्तादिन H, उस्तानी P H (1)「女教師」

参考　डाकू「強盗」の女性形 डाकिन=डाकिनी（女悪魔の一種）は別種の意味となる。

（6）身分を示す男性名詞に आइन を添えるもの、例

ओझा「魔術師」　　　　ओझाइन「魔術師の妻」

पण्डित「学者」　　　　पण्डिताइन「女学者「学者の妻」

ただし，基礎となる名詞のつづりが幾分変化された上に添えられるものもある。例

बाबू (2)「書記」　　　　बबुआइन「同階級の女」

पाण्डे, पाँडे (3)「パンデー階級の男」　　पण्डाइन, पँडाइन「同階級の女」

दुबे (4)「トゥベー階級の男」　दुबाइन「同階級の女」

（7）単に नी を添えるもの。例

ऊँट「らくだ」　ऊँटनी「雌らくだ」　बाघ「とら」　बाघनी, बाघन「雌とら」

जाट (5)「ジャート族の男」　जाटनी「同種族の女」　मोर「くじゃく」　मोरनी「雌くじゃく」

रीछ「くま」　रीछनी「雌ぐま」　सिंह S「しし」　सिंहनी, सिंही「雌じし」

ただし，स्वामी S「主人」→ स्वामिनी「女主人」や पापी S「犯罪人」→ पापिनी「女の犯罪人」「悪女」は幾分不規則である。

---

(1) やゝ不規則。

(2) 特に英語を使って仕事をする人々。男女の場合とも，一称号としても用いられる。

(3) バラモンの一称号。氏姓としても使用される。僧，教師，店主などの職業に従事。

(4) 4 Veda 中の 2 Veda に通暁するバラモンの一分派名。

(5) Rajpût 族の一派。

ページ (पृष्ठ)	行 (पंक्ति)	誤 (अशुद्धि)	正 (शुद्धि)
39	下から4行目	有項占	有頂天
44	〃 11 〃	ちょうちん	かんてら
46	〃 5 〃	वटा	बेटा
59	10 〃	[illegible] 1) 54	[illegible] 1) 208
60	4 〃	従格複数形	従格単数形
62	下から11 〃	主格主語	主格複数
〃	〃 10 〃	यँ	ये,
65	〃 2 〃	लिखाई	लिखवाई
67	〃 5 〃	「罪人」→	「罪」→
69	〃 3 〃	[illegible]श्वविद्यालय「大学」	विश्वविद्यालय「大学」
75	脚注 (2)	ते य	य
85	14 〃	5) 疑問代名詞	5) 関係代名詞
87	8 〃	टूटा-फटा	टूटा-फूटा
101	5 〃	पौने「一去(の)	पौने「一去(の)」
〃	下から5 〃	[または वेट]	[または बटे]
126	下から3 〃	「過」時相」即ち「不定完了時相」	「過」[illegible] 即ち「不定未完了時相」
149	脚注 (4)	のほかに दवाना か	「抑圧する」で使用の दाबना か
159	2 〃	(142ページ	(140ページ
〃	下から6 〃	数	性
201	5 〃	मालम	मालूम
221	3 〃	単数多詞	単数[illegible]
228	下から7 〃	「引 な高値で」	[illegible]
241	11 〃	मुगघ	मुगध
〃	18 〃	इङ्गलैंड	इङ्गलैंड
250	5 6 〃	मॅंने	मैंने
288	6 〃	~示す時には	[illegible] しばしば
〃	12 〃	でも	[illegible]
295	下から5 〃	[illegible] वसी	[illegible] वया
306	11 〃	जसे	जैसे
〃	脚注 (1)	एमा	ऐसा
357	5 〃	ʃ	s

（8）単に आनी を添えるもの。例.

जेठ「夫の兄」　　जेठानी「夫の兄の妻」

देवर「夫の弟」　　देवरानी「夫の弟の妻」

नौकर P「召使」　　नौकरानी[1]「女の召使」

सेठ「豪商」「銀行家」　　सेठानी「その妻」

पण्डित s「学者」　　पण्डितानी[2]「学者の妻」「バラモンの女」

मेहतर「掃除人」　　मेहतरानी「掃除人の妻」

ただし，सांड＝सांढ「種牛」は सांडनी＝सांढनी になると語義が変わり「乗用雌らくだ」の意となる。

なお，本項に属するものにして，幾分不規則に女性形の作られるものがある。例

खत्री } 「クシャトリヤ
क्षत्रिय } 　階級の男」　　खत्रानी, क्षत्राणी } 「同階級の女」
　　　　　　　　　　　　　क्षत्रानी, क्षत्रिया }

चीता「とら」　　चीतनी「雌とら」

डाक्टर E「医師」　　डाक्टरनी[3]डाक्टरयन[4]「医師の妻」

बनिया } 「穀物商」「商人」　　बणियानी, बणियायन } 「同階級の女」
बणिया }　　　　　　　　　　बनियाइन[4] }

भेड़िया「おおかみ」　　भेड़ीनी, भेड़नी「雌おおかみ」

मास्टर E「先生」　　मास्टरनी, मास्टरयन「先生の妻」

हाथी「象」　　हथनी, हथिनी「雌象」

---

(1) または naukarni。

(2) 前記の通り，全部で3種の女性形が存在する。

(3) 主にデリー地方で使用。

(4) यन yan や इन in で終わるものは 大体 ラクナウやバナラース以東の地方に使用される

（9）全然別語をもってするもの。例

अध्यापक s「教師」	अध्यापिका「女教師」	देवता s (1)「神」	देवी「女神」
पति s「夫」	पत्नी s「妻」	पुरुष s「男」	स्त्री「女」
पिता s, बाप「父」	माता s, माँ「母」	बैल「雄牛」	गाय「雌牛」
		राजा「王」	रानी (2)「王妃」
भाई「兄弟」	बहन, बहिन「姉妹」	शौहर p「夫」	बीबी (3)「妻」
		ससुर, सुसर「しゅうと」	सास, सासू「しゅうとめ」
माम, मामू「母方の伯(叔)父」	मुमानी「母方の伯(叔)母」		

〔備考〕 1) 以上とは逆に女性名詞から男性名詞が作られることは極めてまれである。(前項(3)〔備考〕参照)。例 ननद nanad「夫の姉妹」 ⟶ ननदोई nando'ī「夫の姉妹の夫」, बहिन「姉妹」 ⟶ बहनोई「姉妹の夫」。

2) 鳥獣を総称的に述べる場合「馬」「さる」「ぶた」「白鳥」など多くの鳥獣はその「雄」をもって代表されるが,「山羊」や「羊」は「雌」をもって代表される。((1), (2)〔備考〕参照)。「ねこ」も同様で, 特にその「雄」であることを強調する必要のない限り, बिल्ला「雄ねこ」でなく बिल्ली「雌ねこ」をもって代表される。

3) हरिन=हिरन=हरण「しか」は, हरिना=हिरना=हरना「雄しか」と हरिणी s–हिरनी=हरनी「雌じか」とを含めた代表語であるが, これに反し,「雌雄」の片方しか持たない鳥獣がある。例 उल्लू「ふくろう」, कौआ「からす」; कोयल*「かっこう鳥」, खच्चर「らば」(4), गिद्ध「はげたか」, तेंदुआ「ひょう」;

---

(1) devata 現代音 即ち俗音は dewta または de otā。

(2) ラージプート族の称号である राना「王」の女性形。

(3) जी を添えて「奥さん」の意に用いられる。パンジャーブ地方では बाजी「だんな」に対し बहू जी「奥さん」がよく用いられる。なお, बीबी は元来男女を問わずあらゆる身分の女性の意に用いられる。

(4)「雄ろば」と「雌馬」との雑種。

लगलग$_P$「こうのとり」, चील$_*$「とび」, लोमड़ी$_*$「きつね」, बतख$_{,P(1)}$「かも」「あひる」, मक्खी$_*$「はい」, मछली$_*$「魚」。

このような「雌雄」両形を持たない鳥や野獣の名詞に対し強いて性別をあらわす必要のある場合には ペルシャ語の性別を示す語 नर「男性」 मादा mādı「女性」が用いられる。例 नर कव्वा「雄からす」, मादा कव्वा「雌からす」, नर तेंदुआ「雄ひょう」, मादा तेंदुआ「雌ひょう」。

Ⅲ 複数の作り方 (बहुवचन की रचना)

単数 (एकवचन) から複数を作るには,「てにをは」(विभक्ति) の添否によって2種の複数ができる。すなわち, いわゆる主格複数と従格複数とである。

1 主格複数の場合

(1) 単複同形名詞

(i) 子音字で終る一切の男性名詞

例 पत्र$_s$「手紙」, नाटक$_s$「劇」, मुख$_s$「口」。

(ii) इ, ई, उ, ऊ, औ で終る男性名詞

例 ऋषि$_s$「聖者」, प्रेमी$_s$「恋人」, साधु$_s$「行者」, आड़ू-मतालू「桃」, रेडियो$_E$「ラジオ」。

(iii) आ で終る次のような男性名詞

a) Tatsama 語 ——例 कर्ता「行為者」「神」「主格」, दाता「与える者」「恩人」「神」, देवता「神」, नेता「指導者」, परमात्मा「大霊」「神」, महात्मा「大きな魂」「大聖」, योधा=योद्धा「兵士」, विधाता「神」

(1) 正音は baṭak baṭakh battakh battak,

b) 血族関係を示すもの――例　पिता*s*「父」，चचा「父方のおじ」，नाना「母方の祖父」，परदादा「曽祖父」。

ただし，बाप-दादे「祖先」などと，まれに複数形を採ることもある。(1)

c)「称号 や 職業」を示すもの――例　अगुआ「案内人」「指導者」，बाबा(2)〔老人に対する尊称〕，राजा(3)「王」，राना「王」。(4)

d) ある種の外来語――例　आगा*p* (5)「主人」，खुदा *p*「神」，दरिया*p*「河」。

(2) 前項（iii）所載以外の आ で終る一切の男性名詞

その आ を ए に変えて複数形が作られる。例　बेटा「息子」→ बेटे，केला「バナナ」→ केले。

(3) उ または ऊ にて終る女性名詞――उ の場合 याँ が添付されるに対し，ई の場合にはこれが इयाँ に変えられる。例　जाति*s*「階級」「種類」→ जातियाँ，टोपी「帽子」→ टोपियाँ。

(4) इया にて終る女性名詞――単に，末尾に Anu nâsika が置かれる。例　गुडिया「人形」→ गुडियाँ；बुढिया「老婆」→ बुढियाँ。

注　भेडिया「おゝかみ」や बनिया「穀物商」などは男性名詞だから，それぞれ भेडिये，बनिये(6)=बनियेँ となる。

(5) 前項所載以外の一切の女性名詞――すなわち，子音字で終るすべ

---

(1) 従って，この斜格複数も बाप-दादों ともなる。しかし，बाप दादाओं の方が正しい。

(2) また，乞食が一般人に呼掛けるのに用いられる。時には「軽侮」の意も表わされる。回教徒は「父」に対する呼掛け語として，インド教徒は「父方の祖父」に対する呼掛け語として，及び英国人は「子供」に対する呼掛け語として使用することもある。

(3) まれに राजे となることもある。

(4) Râput 族の。

(5) âqâ。

(6) この形のまゝが，呼格の単数ともなる。

ての女性名詞と आ, उ, ऊ で終る女性名詞にあっては単に単数形に ए が添付される。例　गाय「雌牛」→ गायें，पेन्सिल s「鉛筆」→ पेन्सिलें，दिशा s「方角」→ दिशाएं，वस्तु s「物」→ वस्तुएं，बहू「嫁」→ बहुएं(1)。

備考　1) धुआँ「煙」，कुआँ=कुवाँ=कुँवाँ「井戸」のような आँ や वाँ にて終る男性名詞では，その語尾が ए に変わり，それぞれ धुएं，कुएं=कुवें となる。そして，この主格複数形そのものが従格単数に兼用されること，आ で終る一般普通の男性名詞と異ならない。例　एक कुवें की ओर「ある井戸の方へ」，एक लड़के का「ある少年の」。

2) 女性複数語尾 एँ の代りに，यें も時々用いられるが余りよくない。

3) लोग「人々」や गण s =गन「群」「大勢」その他の語が複数の意をあらわすのに用いられることがある。例　मुनि लोग「聖人達」，कविगण s「詩人達」。ただし，लोग が常に複数扱いされるに対し，गण を初め वर्ग s =वर्ग「群」「組」や वृन्द s「多数」「群」などは単複両様に扱われる。

2. 従格複数の場合

(1) 前項 1. (i)の (i) (iii) 及び同じく(5)に該当する諸名詞は単に原語に ओं を添付するだけである。ただし，その(5)項中の ऊ で終るものに限り短母音 (उ) 化する。例　उपाय s「計画」「手段」「治療」→ उपायों，राजा「王」→ राजाओं (2)，शत्रु s「敵」→ शत्रुओं，डाकू「強盗」→ डाकुओं。

(2) 性別の如何に関係なく，इ で終るものには यों が付けされ，ई で終るものはいったん短母音 इ に変えてから यों が付けられる。例　मुनि s「聖人」→ मुनियों，भूमि * s「土地」→ भूमियों，पोथी * s「本」→ पोथियों。

---

(1) 女性複数語尾の前の長母音が短母音化するのに注意。
(2) राजों は राज s「統治」「石屋」の従格複数形である。

(3) 前項 1. の (2) に該当する आ で終る男性名詞にあっては、その語尾が ओं に変わる。例 कौआ「からす(鳥)」→ कौवों, कुत्ता→कुत्तों, पत्ता「ページ(頁)」→ पत्तों。

また、इया で終る語も、男性、女性に関係なく、その末尾の आ が ओं に変わる。例 गवैया「歌い手」→ गवैयों, बजवैया「[illegible]」→ बजवैयों, चिड़िया「鳥」→ चिड़ियों。

注 1 कुआँ「井戸」, धुआँ「煙」の従格複数形は それぞれ कुओं, धुओं となる。

2 名詞その他の品詞にして、同じ語尾が आ で終るものがあるから、上記 2 の語と混同してはならない。例 [illegible] ……, जोखों - जोखिम「危険」, परसों「一昨日」「明後日」, तरसों「一昨々日」「三日後に」; नरसों「四日前に」「四日後に」, भादों「インド暦第6月」; सरसों「からし」。

3　従格複数特別用法

[a] 副詞として

(1) 単独の場合

(i) 一般的な場合——例. पैरों「徒歩で」; भूखों「飢えて」。

(ii)「時間」「距離」「寸法」などに関連して、ばくぜんと「多数」「多量」の意が表わされる。例 घड़ा「時間」→ घड़ों = घड़ियों[1]「幾時間もの間」; बरसों「幾年もの間」, महीनों「幾月もの間」; कोसों[2]「幾マイルもの間」。

用例——कोसों दूर「幾マイルも遠方に」; भूखों (= भूखा) मरना「餓死する」, घड़ों बैठना「幾時間も座る」。

---

(1) 1 ghaṛī は24分。216ページ参照。

(2) 1 kos 約は約2マイル。

(2) 複合詞の場合

(i) 「強意」のために反復された名詞の前語が従格複数形を採るもの。例 (क) बीचों बीच「(の)真只中に」; रातों रात「真夜中に」; हाथों हाथ「直ちに」。

この場合、まれに両名詞とも従格複数を採ることもある。例 बातों बातों＝बातों ही बातों में「話しているうちに」「話の途中で」。

(ii) 後置詞の省略によるもの。例 उन दिनों(1)「その頃」「当時」, कुछ दिनों(2)「数日間」, अपने कानों(3)सुनना「自身の耳で聞く」; घुटनों(4)चलना「ひざで歩く」「はう」, मेरे हाथों(5)「私の手で」, आप दूधों नहाएं और पूतों फलें।「あなたが大いに栄えますように」。(6)

(iii) 形容詞接尾語を伴って。例 कांटों-दार＝कांटेदार「とげの多い」; तारों-भरा「星で満ちた」＝नक्षत्र-पूर्ण$_s$。

[b] 形容詞として

「金額」や「目方」「容積」などに関連して，ばくぜんと「多量」の意を示しながら他の名詞を修飾する。例

備考 ただし आनों(6) गज「1ヤール数アンナ(価)で」は副詞である、

गाड़ियों(7) कपास「車幾台かの綿花」; मनों(8) फल「幾マウンドかの果物」、

(1) में「において」が省略。本句の単数的言い方は उस दिन「その日」。

(2) तक「まで」「の間」が省略。

(3) (4)(5)(6)共に से「によって」が省略。なお(4)の原形は घुटना。そして，(6)の直訳＝「あなたは、ミルクでもく浴しなさい，そして息子達で実を結ばせなさい」。一般に祝福の言葉として婦人に用いられる。「有難う」の代用語。

(7) 原形は गाड़ी「車」。

(8) मन は約80ポンドの重さ。40 सेर から成る。

[c]　数形容詞の場合

集合数詞の従格複数化もしばしば「多数」の意を表わす。例 दर्जनों भांजे भतीजे「幾ダースもの姉妹の息子達や兄弟の息子達」 बीसियों पुरुष「幾十人もの男」, वह सहस्रों जीव「これら幾千もの生命」 लाखों मन जौ「幾十万ポンドの大麦」。

注 1) ただし「2」という数の従格複数化は「～とも残らず」の意が表わされる。例 दोनों दोनों「両者とも」 दोनों मनुष्य「両人」 तीनों बच्चे「3人の子供とも」, चारों ओर「四方に，周囲に」。

2) 二つ以上の複数名詞が一つの合成語を作る場合，最後のもののみが従格複数化するのが原則である。しかしながら近来の傾向として全名詞が従格複数化する。例 ताना-बाना「縦糸横糸」 ⟶ तानों-बानों का「縦糸横糸の」, मेला-ठेला「押し合いへし合い，混雑」 ⟶ मेलों-ठेलों में「押し合いへし合いにて」 राजाओं महाराजाओं और सरदारों का「王達，大王達および貴族達の」。

IV　格 (कारक)

格には8種が数えられる。(1) 行為の動作者を示す主格 (कर्त्ता)，(2) 他動詞の動作の直接的な対象物，つまり直接目的語を示す対格 (कर्म)，(3) 他動詞の動作が行われる相手，つまりいわゆる間接目的語を示す与格 (सम्प्रदान)，(4) 物の出所，拠り所を示す奪格 (अपादान)，(5) 動作の為されるところの手段となる媒介物を示す具格 (करण)，(6) 主として所属や関係を示す属格 (सम्बन्ध)，(7) 動作の場所や位置を示す位格 (अधिकरण)，(8) 呼掛けや警告に用いられる呼格 (सम्बोधन)。

与格名詞には常に後置詞 को「に」が採られるが，その対格には को「を」

(1) बीसी「20」 102ページ「集合数詞」参照。

が採られたり，採られなかったりする。器格と奪格には共に後置詞 से「をもって」「から」が採られ，属格には後置詞の後に来る名詞の「性」や「数」如何によって，それぞれ का[1]，के[2]，की[3] が採られる。また，位格には में「中に」，पर「上に」，तक=तलक[4]=लग[5]=लों[5]=पर्यन्त[6]「まで」などが用いられる。

なお，呼格には後置詞こそ用いられないが，名詞の単複とも従格化する点で他の従格の場合とほとんど異ならない。ただ異なる点はその複数従格形において ओं の末尾の点が省かれて単に ओ になることである。

（60ページ「活用例」参照）

備考 1) 呼格に用いられる感嘆詞については54ページ(1)参照のこと。

2) भाई=भइया†=भैया†「兄弟」や माँ=मा=माताs=माई=मइया†=मैया†「母」などの名詞における後方の各2語（†印のある分）は特に呼格用語といってもよいほどである。

2) Hindī では動作格を कर्ता「主格」の中に含めているが，やはり Urdū 式に両者を別個に扱う方が便利であろう。従って本書でも後置詞を採らない主格と，後置詞を採る動作格及び後置詞は採らないが後置詞を採る場合同様に名詞の単複が語尾変化する呼格をも含めた対格・与格・奪格・器格・属格・位格などのいわゆる従格とを区別して，両者を対照的に取扱うことにした。

ちなみに，動作格とは，動詞の12時相中の「完了」「現在完了」「可能完了」「過去完了」「仮定完了」「過去可能完了」など，すべて「他動詞の完了分詞」から作られる6時相が用いられるとき，主語に後置詞 ने「によりて」が採られる場合のことである。

---

(1) 男性単数名詞の前に。　(2) 男性複数名詞の前に。　(3) 一切の女性名詞の前に。
(4) 田舎で使用。　(5) 詩に使用。　(6) par yant はまれに使用。

わる男性の市名も副詞化したり，後置詞を伴うとき ए 化されることが多い。कलकत्ता「カルカッタ」; आगरा「アーグラ」; शिमला「シムラ」など，ウルドゥー語つゞりで a 音の ه で終る都市名がそれで，同じく alif (ā) で終る पूना「プーナー」; गया「ガヤー」; अम्बाला「アンバーラー」などは ए 化しない。अयोध्या のような女性の都市名も ए 化しないのは無論である。

2　第二活用 (द्वितीय विभक्ति का रूप)

第一活用に属しない一切の男性名詞，つまり前節，1. (i) (iii) 項該当の आ にて終る男性名詞が含まれる。本活用では従格複数において原形に ओं が添付される以外，主格複数も従格単数も原形のままである。

活用例　राजा「王」。

格	単　数	複　数
主　格	राजा「王が」	राजा「諸王が」
従　格	राजा से「王から」	राजाओं से「諸王から」
呼　格	हे राजा「おお王よ」	हे राजाओ「おお王方よ」

備考 なお，参考までに，本活用に属する (i) गीत「歌」; (ii) मुनि *s*「聖人」; (iii) बढ़ई「大工」; (iv) साधु *s*「行者」の活用例を示してみよう。

(i)	主　格	गीत	गीत
	従　格	गीत	गीतों
(ii)	主　格	मुनि	मुनि
	従　格	मुनि	मुनिओं
(iii)	主　格	बढ़ई	बढ़ई
	従　格	बढ़ई	बढ़इयों
(iv)	主　格	साधु, साधू, साधो	साधु, साधू, साधो

従 格	साधु, साधू, साधो	साधुओं[1], साधा

3　第三活用 (तृतीय विभक्ति का रूप)

इ や ई にて終る女性名詞が含まれる。(54ページ(3)参照)

活用例 (i) लड़की「少女」

	単 数	複 数
主 格	लडकी	लडकियाँ
従 格	लडकी	लडकिया

(ii) हस्तलिपि s「原稿」

主 格	हस्तलिपि	हस्तलिपियाँ
従 格	हस्तलिपि	हस्तलिपिया

4　第四活用 (चतुर्थ विभक्ति का रूप)

इ や ई 以外の文字で終る一切の女性名詞。主格主語において，原形に एँ または यँ यें が添えられる。

活用例 (i) माता s「母」

	単 数	複 数
主 格	माता	माताएँ
従 格	माता	माताओं

(ii) वधू「嫁」

主 格	वधू	वधुएँ
従 格	वधू	वधुओं

(iii) गाय「雌牛」

主 格	गाय	गायें

(1) 長母音で終る語尾が複数語尾の前で短母音化するのに注意。前ページ〔備考〕(iii)参照。

	単数	複数
従格	गाय	गायों

(iv) नाव *F*「舟」

主格	नाव	नावें
従格	नाव	नावों, नाओं

(v) चिडिया「鳥」

主格	चिडिया	चिडियाँ
従格	चिडिया	चिडियों

VI 名詞接尾辞 (संज्ञाओं के प्रत्यय)

1 指小辞 (लघुवाचक शब्द)

（1）語尾 आ を女性語尾 ई に変えて ——例 गाला「砲弾」「やしの実」→ गोली「小銃の弾」「丸薬」，घटा「鐘」「時間」→ घटी「鈴」，झण्डा「旗」→ झण्डी「小旗」，डिब्बा「箱」「車輛中の一区切り」→ डिब्बी「小箱」，थैला「大袋」→ थैली「小袋」「財布」，पोथा「大きな本」→ पोथी「本」。

注 आ にて終る男性名詞と，ई にて終る女性名詞とが，(i) 同義になる場合と，(ii) 異義になる場合とがある。例 (i) कुरता*M* = कुरती*F*「インド式じゅばん」，झोपडा = झोपडी「小屋」，जूता = जूती「くつ」，बोरा = बोरी「ズック袋」。(ii) अगीठा「大火ばち」「金銀冶屋の炉」と अगीठी「火ばち」「暖炉」，ताला「じょう」と ताली = चाबी「かぎ」。

（2）子音字で終る語に女性語尾 ई を添えて——例 छत्र*S*「天蓋」「大がさ（日除用）」→ छत्री「雨がさ」，झाड「大やぶ」→ झाडी「小やぶ」，नगर「市」「町」→ नगरी「小さい町」(1)，पहाड「山」→ पहाडी「小山」「丘」

(1)「町の」「市の」「町民」「市民」などの意ともなる。

「山地の」。

（3）इया を添えて——例 आँख* 「眼」→ अँखिया 「眼」「色目」，डिब्बा 「箱」「車室」→ डिबिया 「小箱」，बेटी 「娘」→ बिटिया 「小娘」

備考 1) 上記の例でも見られる通り，つゝりが多少変更されたものに接尾辞が添へられる場合もある。特に कुआँ=कुवाँ–कूआ–कूप 井戸 → कुँइया または「小井戸」などはこの甚だしい例である。

2) 上記一切の指小接尾辞語は女性名詞となるので（女）*印を付すを省略した。

2 抽象名詞（भाववाचक संज्ञा）

[a] 名詞・形容詞を基礎とするもの

（1）女性語尾 ई を添えて——例 (i) खेत 「畑」→ खेती 「耕作」「農業」，चोर 「盗人」→ चोरी 「盗み」。(ii) ऊँचा 「高い」→ ऊँचाई 「高さ」，भला → भलाई 「善良」。

（2）女性語尾 ता を添えて——この場合，サンスクリット Tatsama 語に限られ，基底となる語が名詞のとき，つねに「人」を示す語であることが特色である。例 (i) कवि 「詩人」→ कविता 「詩」，मित्र 「友人」→ मित्रता 「友情」，शत्रु 「敵」→ शत्रुता 「敵意」。(ii) आवश्यक 「必要な」→ आवश्यकता 「必要」，मूर्ख 「愚かな」→ मूर्खता 「愚」，स्वतन्त्र 「独立の」「自由な」→ स्वतन्त्रता 「独立」「自由」。

（3）女性語尾 हट を添えて——例 (i) त्रिया* 「女」→ त्रियाहट 「女の気まま」，बालs 「子供」→ बालहट 「子供の気まま」，राजs 「王」→ राजहट 「王の気まま」。(ii) चरपरा 「からい」→ चरपराहट 「からさ」「からい味」，चिकना 「なめらかな」→ चिकनाहट 「なめらかさ」「平滑」；सड़ा 「腐った」→

सड़ाहट「腐敗」。

女性語尾 हट は動詞の語根に添付されることもある。例 मुसकुराना「笑う」→ मुसकुराहट「笑い」。

（4）男性語尾 पन を添えて——例 (i) उल्लू「ふくろう」「愚人」→ उल्लूपन「ふくろうらしさ」「愚鈍」, बालs =बालकs =बच्चा「子供」→बालपन =बालकपन=बचपन「子供時代」, लड़का「少年」→लड़कपन「少年時代」。(ii) घना「密集した」→घनापन「密集」「茂り」, पागल「気の狂った」→पागलपन「狂気」, मैला「汚い」→मैलापन「不潔」。

1) 上記の bac pan, laṛakpan は、共にやゝ不規則である。

2) पन, ई の両語尾が任意に使用されることもある。例 चौड़ा「広い」→ चौड़ापन=चौड़ाई*「広さ」「幅」, मोटा「太い」「厚い」→ मोटापन=मोटाई*「太さ」「厚さ」。

また、पा も पन 同様の語尾として時々用いられる。例 बूढ़ा「老いた」「老人」→बुढ़ापा=बूढ़ापन「老年」, बड़ा「大きい」→बड़ापन=बड़प्पन=बड़ाई*「大きさ」「偉大」。

（5）男性語尾 आव を添えて——例 गहरा「深い」→ गहराव=गहराई*「深さ」。

[b] 動詞の語根を基礎とするもの。(1)

（1）女性語尾 ई を添えて——例 घुड़कना「しかる」→ घुड़की(2)「けん責」, बोलना「話す」→ बोली「方言」「言語」「話」, लिखवाना「書かせる」→ लिखाई「書取り」。

（2）女性語尾 आई を添えて——例 चढ़ना「登る」「乗る」→चढ़ाई「登

---

(1) 動詞の語根そのまゝでも、その大部分が抽象名詞になることは既述の通りである。

(2) 発音は ghuṛaknā, ghuṛkī.

り坂」「攻撃」，पढ़ना「読む」→पढ़ाई「勉強」「朗読」「教えること」，लड़ना「戦う」→लड़ाई「戦争」「けんか」。

注意 ई接尾辞添付の抽象名詞には，「動作」とその動作に基く「料金」の2意を示す場合が少なくない。例 धुलना「洗われる」→ धुलाई「洗うこと」「洗たく代」，पकना「料理する」「煮す」→ पकाई「料理すること」「料理賃」，रंगना「染める」→ रंगाई「染めること」「染め賃」，सिलना「縫われる」→ सिलाई「縫うこと」「仕立代」。

（3）女性語尾 आवट を添えて——例 थकना「疲れる」→ थकावट「疲労」，बनना「作られる」→ बनावट「作製」「構造」，सजना「飾られる」→ सजावट「装飾」。

（4）女性語尾 हट を添えて——例 घबड़ाना「当惑する」→ घबड़ाहट「当惑」，चिल्लाना「さけぶ」→ चिल्लाहट「さけび」「騒音」；भिनभिनाना「ぶんぶんいう（蜂などが）」→भिनभिनाहट「うなり」「ぶんぶん」。

（5）女性語尾 अन を添えて——例 उलझना「もつれる」→ उलझन(1)「もつれ」「紛糾」，फड़कना「鼓動する」→ फड़कन(2)「鼓動」；सहना「我慢する」→ सहन「我慢」。

注意 たゞし，उड़ना「飛ぶ」——→उड़ान「飛ぶこと」はやゝ不規則であり，चलना「歩く」——→ चलन「行い」「習慣」が男性名詞になる点が違っている。そのうえ，これは चाल-चलन「行状」「品性」などゝ，複合名詞の一部として用いられることも多い。

（6）男性語尾 आव â'o を添えて——例 चढ़ना「登る」「乗る」→चढ़ाव「坂」「騰貴」「増水」「上流」，चुनना「選ぶ」→ चुनाव「選挙」「選択」；

(1) 発音は ulajhnâ uljhan。

(2) 発音は pharaknâ pharkan。

दबना「圧せられる」→ दबाव「圧迫」。

（7）男性語尾[1] आ を添えて——例. छापना「印刷する」→ छापा「印刷」; झगड़ना「けんか口論する」→ झगड़ा[2]「けんか」「口論」。

（8）男性語尾 त्व tva *s* を添えて——例. दास*s*「奴隷」→दासत्व=दासता *s*「奴隷状態」「隷属」, सती*s* *「殉死」「貞女」→ सतीत्व=सतीता*s*「貞節」。

（9）女性語尾 अत, ती を添えて——例 रंगना「染める」→ रंगत「染色」; बढ़ना「増加する」→ बढ़ती「増加」。

（10）語根の短母音を長母音に変えて——例. मिलना-जुलना「和合する」→ मेल-जोल「親密」; चलना「動く」「歩く」→ चाल*「行動」「行い」。

備考　ペルシャ流やアラビヤ流の抽象名詞や指小辞についてはウルドゥー語の文法書を参照のこと。

3.「人」を示す名詞（मनुष्य-वाचक संज्ञा）

[a] 固　有　語

（1）ई を添えて。[3]——例. अधिकार*s*.「支配」→ अधिकारी*s*「支配人」; व्यापार*s*「商売」→ व्यापारी*s*「商人」; पाप *s*「罪人」→ पापी*s*「罪人」。

（2）वाला wâlâ を添えて。[4]——例　कपड़ेवाला「反物商」; घरवाला[5]「戸主」「夫」; नाववाला「船頭」; रोटीवाला「パン屋」。

備考　動詞の不定形語尾の ए 化したものにも盛んに添えられる。例 जानेवाला「行人」; बेचनेवाला「売手」, रहनेवाला「住民」。

---

(1) いわゆる Tatsama 語でない場合のものの多くは男性名詞になるので。

(2) 発音は jhagaṛnā, jhagṛā.

(3) 38ページ,(6)及びその「例 3」参照。

(4) 90ページ,形容詞接尾辞参照のこと。

(5) 本語の末尾を ई 化すれば「主婦」「妻」の意になる。

（3）हारा=वाला を添えて——例　लकड़हारा(1)「木こり」，पिसनहारा(2)「粉をひく男」，मरनेहारा=मरनेवाला「死ぬ人」。

（4）男性語尾 जन*s*「人」「ともから」「類」「輩」を添えて——例　बन्धुजन *s*「近親」「一門」，साधुजन *s*「行者の類」，स्त्रीजन *s*「女の人」，स्वार्थीजन*s*「利己主義者共」。

（5）男性語尾 दाता*s*「与える者」を添えて——例　अन्नदाता*s*「恩人」，धनदाता「富を与える者」，जीवनदाता *s*「生命を与える者」。

（6）वासी=वासी *s*「住民」(3)を添えて——例　नगरवासी *s*「市民」，स्वर्गवासी *s*「天国の住民」，हिन्द-वासी「インドの住民」。

注意 जन्म *s*「生れ」や जाति **s*「生れ」「種類」も (4)項の जन と同義に用いられる。例　मनुष्य-जन्म（=—जाति）「人類」。

[b]　ペルシャ由来語(4)

（1）ई——例　कैदी「囚人」「捕虜」，जौहरी「宝石商」「宝石の」，हलवाई「菓子屋」。

（2）वान=वान「番人」「人」——例　गाड़ीवान「馬車屋」，दरवान=दरबान「門番」，बागवान「庭師」。

（3）दार「所有者」——例　जमीनदार「地主」，दुकानदार「店主」，सरदार「首領」「頭」。

---

(1) lakaṛ hārā は lakṛī「木材」に由来。

(2) pisan hārā は動詞 pisnā「(粉に) ひかれる」に由来。ここで，hārā の代りに hārī=harīを以てすれば「粉をひく女」の意になる。

(3) 男性名詞と形容詞「に住める」の兼用語である。従って，nagar vāsī は「町に住む」，svarg vāsī は「天国に住む」「死んだ」「故」などの意ともなる。

(4) 用例には Hindī に使用される程度のものだけ挙げることにした。本項で語尾符の無い分は皆ペルシャ語。

注 この場合 आ 音で終る語は本接尾辞の前で ए 化する。例 ठीका*H*「契約」—→ठीकेदार*H*「契約者」, थाना*H*「交番」—→थानेदार「巡査」, पहरा*H*「見張り」—→पहरेदार*H*=पहरेवाला*H*「見張人」。

(4) कार「仕事」——例 काश्तकार「農夫」, ग्रंथकार*H*「著者」, चित्रकार*H*「画家」, नृत्यकार*H*(1)「舞踊家」。

(5) गर「製作者」「職人」——例 कारगर=कारीगर「職人」「職工」, जादूगर「魔法使」, सौदागर「商人」。

(6) गार「行為者」「製造者」——例 खिदमतगार「下男」, गुनहगार「犯罪人」, मददगार「援助者」「手伝人」。

(7) जादा zāda「息子」——例 ब्रह्मणजादा=ब्रह्मपुत्र「バラモンの息子」, शाहज़ादा「王子」, साहबज़ादा「紳士の息子」「坊っちゃん」。(*)

(8) साज saz「製作者」——例 कारसाज「発明家」, घड़ीसाज*H*「時計屋」, रंगसाज*H*=छीपी*H*「染物師」「捺染工」。

[c] トルコ語接尾辞

単に ची「製作者」「左手」が使用されるだけである。例 अफीमची*AT*=अफीमी*H*「アヘン喫煙者」, तोपची*T*「砲手」, नीलामची*PoT*「競売者」。

4 「場所」を示す名詞 (स्थान-वाचक संज्ञा)

[a] 固 有 語

(1) आलय*S*「家」「場所」——例 पुस्तकालय*S*「図書館」, विश्वविद्यालय*S*「大学」。

(2) शाला*S*=सालह*S*「家」「場所」——例 गोशाला*S*「牛小屋」,

---

(1) granth「本」 citr「画」 nṛtya「踊り」などと すべてサンスクリット語が基礎になっている

(1) 末字を ई 化すれば それぞれ「バラモンの娘」「王女」「お嬢さん」などの意となる。

घर्मशाला*s「宿坊」(参拝者や巡礼者の)，पाठशाला*s「学校」。

(3) घर「家」——例 चिड़िया घर「動物園」，डाक घर「郵便局」，तार घर「電信局」。

(4) वाड*=वाड़ी*「場所」「構内」「庭」——例 फुलवाड़ी*=फुलवारी*「花園」，सतीवाड*「殉死する寡婦が亡夫と一緒に焼かれる場所」。

(5) पुर s「市」「町」「城」——例 कानपुर〔市名〕，नागपुर〔市名〕，मनीपुर〔旧藩王国の名〕。

(6) नगर s「市」「町」——例 श्रीनगर「カシミールの首都」，कृष्णानगर〔市名〕。

[b] ペルシャ由来語

(1) आबाद「市」「町」——例 इलाहाबाद(1)〔市名〕，फैजाबाद(2)〔市名〕，हैदराबाद(3)〔市名〕。

(2) खाना「家」——例 कारखाना「工場」，अजायबखाना(4)=अजायबघर「博物館」，डाकखाना=डाकघर「郵便局」。

(3) गाह*「場所」——例 चरागाह*「牧場」，बंदरगाह*「港」，शिकारगाह*「猟場」。

(4) स्तान「場所」——例 परिस्तान「おとぎ話の国」「よう精の国」，हिन्दुस्तान「インド教徒の国」「インド」。

ただし，語幹語の末字が子音であれば इस्तान となる。例 पाक p「神聖な」→ पाकिस्तान〔国名〕，कब्र a「墓」→ कब्रिस्तान「墓地」，रेग* p「砂」→ रेगिस्तान「砂地」「さばく」。

---

(1)「神の町」 (2)「恵みの町」 (3)「ししの町」などの意のアラビヤ語。 (4) 発音 ajā ib khāna.

注 梵語つづりでは स्थान となる。例 निवास-स्थान s「住所」, हिन्दुस्थान「インド」。

（5）दान「容器」——例　उगालदान=पीकदान「たんつぼ」, नमकदान「塩入れ」, पुष्पदान「花びん」。

VII 複合名詞 (समस्त संज्ञा)[1]

前節（VI）も広義の複合語（समस्त-पद）に相違ないが，ここでは接尾辞と無関係な名詞複合語を扱うことにした。

（1）同義語の場合——例　चमक-दमक*「輝き」, चाल-ढाल*「様式」「風習」, दाँव-पेंच「わざ」「手技」, रेल-पेल*「人混み」「混雑」, सुहाग भाग「幸運」。

完全な同義語ではないが，互に似たような語義を持つ語の並用される場合もある。例　घर-द्वार「家」「住い」, घास-फूस「かれ草」, वस्त्र कपड़े「着物」。

（2）単なる口調の良さのために語義なしの示語をするもの——例　झूठ मूठ=झूठ「うそ」「偽り」, धूम धाम*=धूम「華麗」「騒ぎ」, पानी-वानी=पानी「水」, लड़ाई-भिड़ाई*=लड़ाई「戦争」」「けんか」, सपना-वपना=सपना「夢」。

（3）接続詞の省略によるもの——例　गाय-बैल「家畜」, जलवायु s「気候」, ताना-बाना「経緯」, माँ-बाप「父母」「両親」, सुख-दुख「苦楽」。

（4）前語が後語に対し修飾語の役目をするもの——例　जन्म तिथि*s =जनम-दिन「誕生日」, राज-काज「国事」「統治」, राजभवन s「宮殿」「大統領官邸」, शरद् ऋतु*s「秋季」, समाचार-पत्र s「新聞」。

---

(1) sanyukt sangya とも称される。

備考 1) この場合前語が固有名詞でもやはり形容詞的になる。例 गुप्त समय「グプタ時代」, भारत गणराज्य「インド共和国」, यूनान देश「ギリシャの国」, हिमालय पर्वत ヒマーラヤ山。

2) その他属格後置詞で結合されるもの。——例 पीने का पानी 飲み水, मिट्टी का तेल 石油, हाथ की घडी 腕時計。

3 強意のために同一語が結合されることもある 例 दिन का दिन「終日」, रात की रात 終夜。

4) भर「満ちた」を伴うもの。——例 घर भर 全家族」, देशभर 全国」, विश्व भर (में)「世界中(に)」。(92ページ「形容詞」「接尾辞」(vi)および177ページ〔備考〕4) 参照)。

5) まれには形容詞と名詞との結合によるものもある。例 बडा दिन「クリスマス」, महासागर「大洋」。

6) ペルシャ語やアラビヤ語由来の複合名詞の詳細についてはウルドゥー語の文法書参照のこと。

第二章 代 名 詞 (सर्वनाम)

I. 人称代名詞 (पुरुषवाचक सर्वनाम)

1. 第一人称 (उत्तम पुरुष)

मैं 「私」

	単 数	複 数
主 格	मैं 「私は」「私が」	हम 「私達は」「私達が」
動作格	मैंने 「〃」「〃」	हमने 「〃」「〃」
属 格	मेरा [-रे, -री] 「私の」	हमारा [-रे, -री] 「私達の」
与 格	मुझे, मुझको 「私に」	हमें, हमको 「私達に」(1)
対 格	〃 〃 「私を」	〃 〃 「私達を」
器 格	मुझ से	हम से
奪 格	मुझ से 「私から」	हमसे 「私達から」
位 格	मुझ में 「私の内に」	हम में 「私達の内に」

2. 第二人称 (मध्यम पुरुष)

तू (2) 「お前」

	単 数	複 数
主 格	तू 「お前は」「お前が」	तुम 「お前達は」「君達は」
動作格	तूने 「〃」 「〃」	तुम ने 「〃」 「〃」
属 格	तेरा [-रे, री] 「お前の」	तुम्हारा [-रे, -री] 「お前(君)達の」
与 格	तुझे, तुझको 「お前に」	तुम्हें, तुमको 「お前(君)達に」

---

(1) 各種代名詞における単複各種の与格の形のうち，ए や ें で終る形の方が近代的である。

(2) 方言では तें または तैं ともいわれる。

対　格	तुझे, तुझको「お前を」	तुम्हें, तुमको「お前(君)達を」
器　格	तुझ से「お前によって」	तुम से「お前(君)達によって
奪　格	तुझ से「お前から」	तुमसे「お前(君)達から
位　格	तुझ में「お前の内で」	तुम में お前(君)達の内て

用　　法

（1）हम——本語は主として次のような場合に用いられる。

(i) 個人か世論の代弁者として，あるいは団体を代表して語るようなとき。(ii) 君主や高貴な身分の個人によって。(iii) 著作者によって。(iv) 親しい間柄同士の俗語「ぼく」の意に。(v) 無教養・無教育に起因しての誤用から。(vi) 立腹から。(vii) 高慢から。

従って，目上の人に本語を用いることは失礼になる。なお，本語はたとえ単数の意に用いても動詞は常に複数になるので，外形からだけでは単複の区別がつきにくい。よって，特に複数であることを明確にさせるためには集合名詞 लोग「人々」を用いて हम लोग「私達」とする。

（2）तू——これは次のような場合に用いられる。(i) 妻子・親友など，遠慮の要らない間柄の者に。(1) (ii) 目下の者や奉公人に。(iii) 祈願などで神に呼びかけるとき。(iv) 作品の中で，詩人が君主に呼びかけて言うとき。(v) 人を侮辱して言うとき。(vi) 立腹したとき。(vii) 往々，教師が生徒に向って。

（3）तुम——これも複数形でありながら盛んに単数扱いされる。同僚・家族・未婚の若者・労働者・小売商・召使・子供などが本語使用の主なる対象となっている

---

(1) 自身の母・姉妹・弟などに対しても親愛の余りから用いられるが，父・祖父・叔父などに向って用いられることはほとんどない。

なお，本語の場合でも，特に複数であることを強調しょうとすれば，やはり लोग を添付する。

注意 1) हम にせよ तुम にせよ，単複両意に用いられるのは主格・能格を通じてゞある。

2) すべて，人称代名詞や指示代名詞の属格は，その次に来る名詞の数や性および格に応じて，末字 आ が ए または ई に変わるのである。

(4) 強意詞 ही を伴えば「自身」「こそ」の意が暗示される。例 मैं ही「私自身」「私こそ」，मेरा ही「私自身の」「ほかならぬ私の」。

この場合 Sandhi に基いて多少つづりが変わる。例 हम+ही=हमी=हमी，तुम+ही=तुम्ही=तुम्हीं，मुझ+ही=मुझी，तुझ+ही=तुझी。

3. 第三人称 (अन्य पुरुष) 表

II. 指示代名詞 (संकेतवाचक सर्वनाम)(1)

1. यह(2)「彼」「彼女」「これ」

	単数	複数
主格	यह「彼は」「これは」(3)	ये 「彼らは」「これらは」(3)
動作格	इसने 「〃」「〃」	इन्होंने, इनने 「〃」「〃」
属格	इसका [-के, -की]「彼の」「これの」	इनका [-के, -की]「彼らの」「これらの」
与格	इसको, इसे「彼に」「これに」	इनको, इन्हें「彼らに」「これらに」

(1) san ket「指示」の代りに，nish-cay「決った」「確かな」も用いられる。

(2) 文字通りなら yah 音であるが，実際上，ウルドゥー流に yeh 音，むしろ複数形の ये と同様に発音される。本語は「この」等の指示形容詞にもなる。

(3) 単数「これが」「彼が」，複数「これらが」「彼女達が」などでもよい。しかし，これら「近称指示代名詞」は，次項の वह や वे ほどに第三人称代名詞となることが少ない。

(4) 各格を通じて，複数形はまた，人称代名詞の場合に限り，尊敬的に単数扱いもされる。

間柄の者でない限り「人」には用いられない。つまり，「あの方」のような敬語的意味の第三人称としては用いられない。これに反し，両者の複数形 ये や वे は複数として「人」にも「物」にも用いられると共に，हम や तुम 同様，単数扱いされる場合には「あの方」とか「この方」のような敬語的意味にも 用いられる。「物」を示す場合には，この種の制約はなく，正確に遠近の単複が区別される。

また，これら両単数形は，ウルドゥーの影響を受けてか，原形のままよく複数扱いもされる。ただし，この場合，常に複数動詞が採られるので単複の区別は自らつく。ヒンディーにおけるこのような傾向は最近のことで，未だ一般の容認するところとなっていない。従って，避ける方がよろしい。

なおまた，यह と वह とは，一般の事柄や理論に関連して「前者」と「後者」とか，「一方」と「他方」とかの 意を示すのに 用いられる。そして，時間的関係を示す場合，यह が「現在」または「歴史現在」を示すに対し，वह は「過去」を示すのに用いられる。

（2）ये と वे——上記の通り，これら両複数形は，その従格複数形もろとも，尊敬的によく単数扱いされる。そして，その主格複数の場合，その意の単複如何に関係なく，動詞は常に複数になるので紛らわしい。そこで，特に複数であることを強調する必要があれば，やはり वे लोग「彼ら」「彼女ら」となされる。

また，この वे が「神」を第三者として述べるような場合にも用いられる。

（3）指示代名詞が指示形容詞として用いられるとき，その修飾する名詞が後置詞を伴うか否かによって，主格形が採られたり従格形が採られたりすることは指示代名詞自体の場合と同じである。例．वह सैनिक「その兵

士」; उस कुत्ते का「その犬の」, वे घटनाएँ「それらの出来事」, इन लोगों का「これらの人達の」。

ただし，属格で結合された複合名詞を修飾する場合には指示形容詞は従格化しない。例 वह पत्थर का कोयला「その石炭」。

（4）本節所属の代名詞か強意詞 ही を伴う場合の Sandhi の影響によるつづり上の変化は次の通りである。例 वह+ही=वही「彼（彼女，それ）自身」, यह+ही=यही「これ自身」, ये+ही=यही「これら自身」, वे+ही=वही「それら〔彼ら，彼女ら〕自身」, इस+ही=इसी「これ自身」, इन+ही=इन्हीं（または इन्ही）「これら自身」(1), उन+ही=उन्हीं（または उन्ही）「ほかならぬそれら〔 彼ら， 彼女ら〕」。用例 उन्हीं लोगों का「それらの人々の」。

（5）各代名詞とも，その主格主語かよく省かれる。例 (वह) आता है।「(彼が) 来る」。

Ⅲ. 尊敬代名詞 (आदरप्रदर्शक सर्वनाम)

代表的な尊敬代名詞は आप「あなた」で，これは「あなた方」の意の複数扱いされると共に，「あの方」の意の第三人称単数の敬語にもなる。そして，たとえ単数の意に用いられる時でも複数動詞か採られる。従って，複数性強調の場合，やはり लोग が添付される。しかし，動詞 होना「ある」の現在時相とでは हो ではなく，हैं が用いられる。

本語は年長者や見知らぬ人などに向って用いられるのであるか，丁寧な会話において，眼前にいる人のことを話すような場合にも，वे よりは一層多く用いられる。また，神に祈願する時の呼びかけ語として，ウルドゥー畑の者が तू 一点張りであるに対し，ヒンディー畑の者は，तू よりも

(1) 以上，皆「 自身」と訳してみたが「ほかならぬ 」とする方が一層適切。

प を使用することが多い。まれに तुम も用いられることがある。

注 1) ボンベー地方では तुम が最も広く用いられるに対し ラクナウ地方では同僚間ばかりでなく 教師が生徒に対してさえ आप を用いるほどである。

2) 他の一般人称代名詞同様 आप も女性が意味される時には第二人称女性複数の動詞が用いられる。例 आप आ सकती है। 「貴女は来れます」。

そのほか，貴顕や淑女に対する敬語として，男子用の श्रीमान s[1]，पुत s，महाराज s[2]，जनाब A，सरकार P[3] や婦人用の श्रीमती *s[4]，देवी *[5]，जनाब A その他がある。

注 1) 上記 呼掛け用の敬語のほかに 「さん」「君」「氏」などのように 固有名詞や普通名詞に添付される幾つかの敬称がある。例 गांधी जी「ガーンディーさん」，सीता जी「シーターさん」〔女〕，अब्बा जी「お父ちゃん」 बाप जी「お父さん」，बेटा जी「息子さん」，भाई जी「兄さん」，साधु जी＝साधु बाबा「行者さん」。

जी はまた他の敬語にも添付される。例 लाला जी[6]，बाबा जी[7]，श्रीमान जी ［女性は श्रीमती जी］ का शुभ[8] नाम「貴名」。

2) साहब sâhab A「主人」「持主」「紳士」も जी の同義語として「さん」「君」「氏」の意を以て特に回教徒の男子間に広く用いられる。回教徒の既婚婦人や外国人の女性には साहब のアラビヤ語式女性形 साहिबा sâhiba「婦人」「主婦」「妻」が用いられる。例 नेहरू साहब「ネール[9]ーさん」，डाक्टर

(1) 「幸運な」の意

(2) 「大王」の意ではあるが 一般人の日常語である。

(3) 「主人」「閣下」「政府」などの意 主人や国王に対しても用いられる。

(4) 有名な美女の名，クリシュナ神の愛人 Râdhâ の異名でもある。

(5) 「女神」 特に Durgâ 女神が意味される。

(6) 本来 ヴァイシャ階級の者に対する敬称 「父方の祖父」や「商人」に対する敬称。

(7) 「祖父」や一般紳士に対する敬称。

(8) 「幸運な」の意の雅語。 (9) h はほとんど聞き取り難いほどの気音。

直詞の付いたものが代用されることもある。そして，अपना を強めるために，この निज が余分に添付されることさえある。用例

अपनी निज की कुर्सी「自分自身のいす」

3) आप の従格形 अपने のほかに 属格と位格のみに使用される相互代名詞 आपस「互に」がある。用例 आपस का [-के, -की]「お互の」，आपस में「お互に」。

しかし，この意味では，एक दूसरे का [-के, -की]「相互の」，एक दूसरे से「お互に」の方が一層一般的である。

また，परस्पर「お互いに」「お互いの」も用いられる。

4) 再帰代名詞の一層詳細については「文章論」283ページ参照のこと。

V. 不定代名詞 (अनिश्चयवाचक सर्वनाम)

1. कोई「誰か」

(1) 次のように活用する。これには複数形がない。(1)

主　格　कोई「誰かが」

動作格　किसी(2)ने「 〃 」

属　格　किसी का [-के, की]「誰かの」

与　格 / 対　格　किसी को「誰かに」「誰かを」

位　格　किसी में「誰かの内に」

用例——(क्या) कोई है?「誰かいるか」，कोई नहीं「誰もいない」，कोई आता है।「誰かが来る」。

(2) 一種の不定冠詞として，(1)「人」や「物」を示す単数普通名詞

(1) 複数の観念を示すために，主格形，従格形ともしばしば反復される。

(2) ラクナウ地方では किस् が किसी に代って用いられることもある。

特に，形容詞の前では常に副詞化する。

यह कुछ लाल है।　「これは少し赤い」

वह कुछ बड़ा है।　「それは少し大きい」

注 कोई や कुछ を基礎とする各種の複合不定代名詞については「文章論」286ページ参照のこと。

VI 疑問代名詞 (प्रश्नवाचक सर्वनाम)

1. कौन 「誰」「何」

	単　数	複　数
主　格	कौन	कौन
動作格	किस ने	किन्होंने, किन ने
属　格	किस का [-के, -की]	किन का [-के, -की]
与格・対格	किसे, किस को	किन्हें, किन को
奪格・具格	किस से	किन से
位　格	किस में	किन में

注 1) 疑問代名詞の場合，主格・従格に関係なく，主語の時には「誰」の意であるが，たとえ主格形でも，述語において「何」の意になることもある。これに反し，従格形の場合，多くは「人」を示すにしても，まれに「物」を示すこともある。〔「文章論」291ページ参照〕

「人」を示す名詞の前でない限り，疑問形容詞の場合，「何」「どの」「どんな」などの意にのみ用いられる。そして，よく反復もされる。詳細は，すべて「文章論」に譲る。

2) 動作格の複数形は，「人」が意味される時に限り，尊敬的に単数扱いもされる。

3) この主格形は主格形第三人称代名詞兼指示代名詞とよく同格的に用いら

れる。(「文章論」231ページ(5)の本例参照。

4) किन に強意詞 ही が添付されると किन्हीं または किन्ही となる。用例 किन्हीं को, किन्ही से。

2. क्या「何」

主格 क्या「何か」

属格 काहे का [-के, -की]「何の」

与格 काहे को「何に」「なせ」

対格 काहे को「何を」

具格 काहे से「何で」(1)「何から」

位格 काहे में「何の中に」

備考 1) これには，単数形ばかりて，複数形と動作格とがない。

2) क्या の従格形は，古典ヒンディー कहा「何」「どれ「なせ」に由来するだけに，実際的に使用されることがまれである。わずかに，属格か किस वस्तु का「何(物)の」，与格が किस वास्ते=किस लिये=क्यों「なせ」の代りとしてまれに用いられる程度である。用例

यह खिलौना काहे का है?「このおもちゃは何て出来ているか〔何製か〕」

3) 疑問形容詞，感嘆詞その他種々な用法については「文章論」に譲る。なお，主格形第三人称人称代名詞や指示代名詞とよく同格的に用いられる例については「文章論」296ページ(5)参照のこと。

VII. 関係代名詞 (सम्बन्धवाचक सर्वनाम)

जो「…する所の」「…する者〔物〕は」

	単数	複数
主格	जो	जो

(1) この意のとき，器格兼用。

動作格	जिस ने	जिनने, जिन्होंने
属 格	जिसका [के -की]	जिनका [के की]
与 格	जिसे जिस को	जिन्हें जिन को
対 格	जो जिसे जिस को	जो जिन्हें जिनको
奪 格	जिस से	जिन से
位 格	जिस में	जिन में

注 1) जो およびその各格は「人」にも「物」にも用いられる

2) 先行詞が「人」を示す時に限り単数従格形の代りに複数形の जिन が尊敬的に単数の意に用いられることがある。

3) この जो と後出の接続詞の जो「もしも …の副詞 जो 　するとき」とを互に混同してはならない。

4) जिन が強意詞 ही を伴えば जिन्हीं または जिन्हीं となる。用例 जिन्हींने

5) 疑問代名詞に対する正式な相関詞は सो 「彼(ら)・彼女(ら)」で この従格形は単数形において तिस となり 複数形において तिन となる つまり तिस ने तिस से तिस का तिन में などとなる。ただし複数動作格は तिनने または तिन्होंने となり 単数の与格及対格は तिसे または तिस को となり 複数のそれは तिन्हें または तिन को となる。ただし本相関詞は一般の主格形と従格形との別なく今は廃語同然である。

6) しかしながら相関詞としては主格・従格とも वह が सो に代って相関代名詞として用いられる方が一層多い 相関詞の省略は余り好ましいことではないが 特にその主格形がよく省略される

第三章 形容詞 (विशेषण)

I 性質形容詞 (गुणवाचक विशेषण)[1]

1 概 要 (सारांश)

（1）形容詞にいわゆる形容詞的用法 (विशेष्य विशेषण प्रयोग) と叙述的用法 (विधेय विशेषण प्रयोग) のあることは邦語同様である。形容詞に修飾される名詞は विशेष्य *s* と称される。

（2）形容詞的な場合 インド固有形容詞である限り 原則として修飾する名詞の前に置かれる[2]

そして 語尾が आ で終るものが名詞の性や数に従って，ई=ी や ए に変るに反し आ 以外の語尾で終るものは決して語尾変化しない。たゞし 次の数詞のように आ で終わりながら語尾変化しないものもある。例 बढ़िया「上等な」，घटिया「下等な」，दुखिया「悲痛の」「不幸な」，सवा「+士」[3]，जरा「わずかな」「少しの」，दाना *P*「賢い」，उमदा*P* 'umda「立派な」。用例 बड़े बढ़िया लोहे का「非常に上等な鉄の」。

（3）幾つかの形容詞が並用される場合，接続詞は末尾のものの前にだけ入れるのが一般的であるが，必ずしも入れる必要もない。例

छोटी मोटी बातें「大小の事柄」，सवेरे के समय की धीमी, शीतल (और) स्वच्छ वायु。「早朝時の穏かな冷い（そして）清らかな空気」，

---

(1) guṇ「性質」 vācak「説明的な」「説明語」

(2) ペルシャ語由来形容詞 be cāra「孤独な」「気の毒な」は 特によく名詞の後に置かれその先立つ名詞の性や数に支配され語尾変化をする。

(3) ā で終わるこの種の分数詞にして特に語尾変化をしない他の例については 106ページ（付表）1）の末尾参照のこと。

（4）ただし、形容詞が名詞に重複して形容句を形成するような場合，接続詞は挟まれない。例 ऊँचा नीचा 「高低のある」「でこぼこの」，कच्चा पक्का「半熟の」(1)

（5）一種の形容詞句として，(i) 動詞の過去分詞 即ち過去形の結合例 (ii) 単なる語調子のために形容詞に有義語または類似音の無義語を添付したもの，及 (iii) 動詞の過去分詞に無義語を添付したものとうある。例

(i) पका-पकाया「料理してての」(2)，फला फूला「繁栄した」(3)，लिखा-पढ़ा=पढ़ा लिखा「教育のある」(3)，टूटा फूटा「こわれた」

(ii) थोड़ा बहुत「少ない」(5)，बुरा भला「悪い」(4)，भोला भाला「あどけない」(6)，ढीला-ढाला「緩んだ」(6)，चुप चाप「沈黙の」(6)

(iii) बचा-कुचा「残した」「たくわえた」，रहा-सहा「残った」。

用例——टूटी फूटी सेना「支離滅裂の軍隊」，रहा-सहा बल「全力」，भोली भाली लड़की「あどけない娘」，बना-बनाया कोट「出来合いの上着」，सुनी सुनाई बात「うわさ」，यह स्त्री पढ़ी लिखी है।「この女は教育がある」。

（6）属格後置詞を伴う名詞が形容詞の性質を帯びるのは極めて自然なことである。例 आगे का「前の」「先きの」，पीछे का「後の」「うしろの」，नाम का「名ばかりの」，काम का「有用な」，रहस्य का「内証の」，जन्म का「生れながらの」。用例——यह (वस्तु) किस काम की है?「これは何の役にたつのか」，वह भारी डील डौल का है।「彼は大柄な体格（の人）

(1) 直訳—「熟した（と）熟さない」。
(2) 直訳＝「料理された 料理した」
(3) 直訳＝「実が成り 花が開いた」人の栄えることにも用いられる
(4) 直訳＝「[illegible]」
(5) ここでは बहुत「多い」や भला「善い」は単なる添字となっている
(6) 共に後語は意味を持たない。

た」, आगे का पाठ「先きの学課」(1) पीछे के चित्र मे「前の絵で」(2)。

(7) 時折 i) 副詞や ii) 形容詞にさん属格後置詞か添付されて, 新たなる形容詞か作られる。例 (i) वाहर का=बाहरी「外部の」 (ii) पहल का「最初の」, निज (की) चिट्ठी 私信」。

(8) 形容詞の反復は強意になる。例 यह नीला नीला आकाश है।「これは青い青い (即ち「非常に青い」) 空である 。

備考 形容詞を強めるため 形容詞‐副詞の बहुत「多くの 大い」「甚だ」 अतिs =अतीवs अत्यन्त वडा महाs「大きい」「甚だ など の。諸語か形容詞の前に置かれる

2 形容詞の比較 (तुलनावाचक विशेषण)

[a] 比較級 (उपमाजनक परिमाग) —

(1) 最も普通な方法は, 後置詞 से を用いて表わされる。例

यह उस से वडा है।　「これはそれよりも大きい」

अपने से वडा को प्रणाम करो।　「自身よりも年長の人〔先輩〕達に会釈せよ」

(2) (की) अपेक्षा*s(3)「比較」, मुकाबला *m*「比較」「対照」「競争」, आगे (=सामने)「(の)前に」 などを用いて。例

अन्य (=दूसरे) देशो की अपेक्षा「他の国々と較べて」「他の国々よりも」

प्रारम्भिक शिक्षा के मुकाबले में「初等教育に比して」「初等教育よりも」

सूरज के आगे यह पृथ्वी कोई चीज नही।「太陽の前には (即ち 太陽に較べれば) この地球なと何でもない」。

---

(1) これから習もっとする先きの学科の意。
(2) 既に読み終わったページにある絵の意。
(3) 文語でのみ使用。

[illegible]る」などの形容詞的意味に用いられる。例

तुम बुद्धि में मुझ से बढकर [घटकर] हो। 「君は知恵において私よりも優れ〔劣っ〕ている」

तुम बुद्धि मे सब से बढकर [घटकर] हो। 「君は知恵において誰よりも優れ〔劣〕っている。」

このような場合 可抜続分詞とも普通の形容詞 अधिक や कम の用法 となるので 上例においても बढकर の代りに अधिक, घटकर の代りに कम をもってしても一向差支えない。

特に बढकर の方は 比較形容詞の前に用いられるとき मुझ से の意を強化し、格別「優れた」しか表わされない。例

तुम मुझसे बढकर बुद्धिमान हो। 「君は私よりも賢い」

तुम सबसे बढकर बुद्धिमान हो। 「君は最も賢い」

समय सब से बढकर मूल्यवान पदार्थ है। 「時間は最も貴重な物である」。

3 形容詞接尾辞 (विशेषण के प्रत्यय)

〔a〕 名詞に添付されるもの

(i) आ——例 प्यासा「渇した」, भूखा「空腹の」, ठंडा「冷い」「冷い」。

(ii) इक——例 व्यापारिकs「商業の」, सग्रामिकs「戦争の」、ただし, この場合, よく音韻変化が行われる。例 विवाहs ——वैवाहिकs「結婚の」, लोकs ——लौकिकs「世の」「世界の」, कायाs ——कायिकs「身体の」。

(iii) ईय——例 भारतीयs「インドの」, शास्त्रीयs =शास्त्रीs「法的な」「規定の」, पर्वतीयs「山の」, यूरोपीय「ヨーロッパの」。

(iv) ई——例 दुखीs「苦痛な」, सुखीs「安楽な」, देशीs「[illegible]」 प्रेमीs「親愛な」「恋人」。

(v) ईला——例　चमकीला「輝く」, रंगीला「華麗な」; रसीला「汁気の多い」。

(vi) मान्——例　बुद्धिमान् *s*「知的な」「賢人」, शक्तिमान् *s*「力強い」 मूर्तिमान् *s*「人の姿の」。

(vii) वान्——例. बलवान्「力強い」; मूल्यवान् *s*「高価な」, धनवान् *s* = धनी *s*「富んだ」。

【注】 1) その他 पूर्वक *s* や रहित *s* = हीन *s*「…のない」「…に欠けた」を初め, なお数個の形容詞接尾辞が数えられる。

2) ペルシャ語からの借用接尾辞 ईन も時折用いられる。例. नमकीन *P.*「塩の」「塩気のある」; रंगीन *P*「色のついた」「多彩な」。

〔b〕 動詞の語根に添付されるもの

(i) आऊ——जड़ाना「宝石をちりばめさせる」—→ जड़ाऊ「宝石をちりばめた」; टिकाना「続けさせる」「留まらせる」—→ टिकाऊ「永持ちする」「堅固な」; बिकना「売れる」—→ बिकाऊ「売れるに適した」。

(ii) आवना——सुहाना「喜ぶ」—→सुहावना「心地よい」「愉快な」。ただし, डराना = डरावना「恐れさす」「恐ろしい」は形容詞・動詞の兼用語である。

〔c〕 準 接 尾 辞

ここでは, 純接尾辞というよりは, 普通の形容詞または形容詞と他の品詞との兼用語などが, 名詞や代名詞に添付されたりするものが扱われる。

(i) रूपी *s*「…の姿した」「…のような」——これは名詞 रूप *s*「姿」「形」「特色」の形容詞化されたもの。例　पशुरूपी「獣のような」; स्त्री रूपी「女のような」。

(ii) सरीखा「…のような」「…に似た」——この使用は, やゝ旧式化したが, しばしば代名詞に添付されることがある。そして修飾される名詞の

性や数と一致する。例 मुझ सरीखा मूर्ख「私のような愚人」, तुम सरीखे लोग「君のような人達」

(iii) सम्बन्धी=सम्बन्धी s「 に属する」「 と関係のある」——これも，名詞 सम्बन्ध s「関係」「属格」に由来。例 बुद्धि-सम्बन्धी s「知的な」, युद्ध-सम्बन्धी s「軍隊の」, विद्या-सम्बन्धी「学問的な」

(iv) नामक s「 と名づけられる」——用例——मिस्र नामक देश「エジプトと称せられる国」

名詞 नाम n. m.「名」や नाम का も同じように形容詞的に用いられる。例 दशरथ नाम (का) एक राजा「ダシャラトと呼ばれる一人の王」もっとも，こうした語がなくとも，「 という」の意は暗示される。例 "शाहंशाह" शब्द「シャーハーンシャという語」。

(v) वाला「 するところの」——これは名詞接尾辞であると共に，形容詞接尾辞でもある。例

नंगे पैर चलने वाली स्त्रियाँ「裸足で歩く女達」

गायें चराने वाले बालक「牧童達」(直訳＝牝牛ともに草を食べさせる少年達)。

(vi) भर「 で満たされた」——これは，主として「目方」「面積」「寸法」などを示す名詞に添付されて形容詞句を形成する。例 पेट भर「満腹の」, बीघे भर पृथ्वी「1ビーガー一杯の土地」(1), गज भर कपड़ा「1ヤール一杯の布」, सेर भर दूध「1セール一杯のミルク」(2)。

(vii) योग्य s「適する」「可能な」「値する」——

---

(1) 1ビーガーは約8分の5エーカーの面積。

(2) 1セールは約2英ポンドの目方。72ページ,「複合名詞」〔備考〕4) および177ページ,〔備考〕4) 参照。

これは，語尾変化，即ち語尾の ए 化した動詞の不定法や完了分詞に伴われる(1)例

जाने हुए योग्य लोग 「知られるに値する人達」

बेचने योग्य खिलौने 「売れるおもちゃ」

〔d〕 सा の用法；—

この形容詞接尾辞には特に多彩な用法がある。

(i) 名詞や代名詞に添付すれば，「・のような」の意となる。例 महाद्वीप सा「大陸のような」；आप सा「あなたのような」；तुझ सा「お前のような」；हम सा「われわれのような」。用例 तुम से बेटे「君(ら)のような息子達」。

(ii) 形容詞に添付されゝば，「・・らしい」の意になる。अच्छा सा「良く見える」，काला सा「黒みがかった」；पागल सा「狂気じみた」。用例 पीले से रंग का「黄かかった色の」，बड़ी सी बेटी「大きそうな娘」。

たゞし，「量」を示す形容詞に添付されゝば，単に「強意化」するだけである。例 इतना सा「これだけの」，थोड़ा सा「非常に少ない」，बहुत सा「非常にたくさんの」，जरा सा「極くわずかな」「つまらぬ」「取るに足らぬ」。

〔注〕 थोड़े से「極く少数の」や बहुत से「極めて多くの」ように，複数化すれば「不定の数」があらわされる。また，数形容詞 एक に添付された एक सा［女性 एक सी］「似た」「等しい」に対し，एक से は「同一の」の意である。

(iii) 名詞や代名詞の属格に添付されゝば，その属格によって所有される「事物」との「類似物」が表わされる。例 तेरी सी सुन्दरता「お前の(持つ美しさの)ような美しさ」，अपनी सी आँखें「自身の(持つ眼の)ような眼」；उनके से दाँत「彼らの(持つ歯の)ような歯」，उसका डील-डौल मेरा

(1) 190ページ参照。

सा है।「彼の体格は私の（それの）ようだ」。

注 1) 疑問代名詞や不定名代詞に添付された कौन सा [女性 कौन सी]「どれ」, कोई सा [女性 कोई सी]「どれでも一つの」「誰でも 人の」 कुछ सा「やゝ」「幾分」などについては既述の通りである なお कुछ याही सा は「あいまいな」の意。

2) 疑問代名詞や不定代名詞以外の代名詞 及び名詞の後 सा はよく同義語 जैसा や सरीखा に代用される。 उन सा [=—जैसा=—सरीखा]「彼らのような」, बेटे सा —जैसा —सरीखा「息子のような

II 数形容詞 (संख्या वाचक)

1 基数詞 (गणात्मक संख्या)

1	एक	12	बारह	24	चौबीस	35	पैंतीस
2	दो	13	तेरह	25	पच्चीस	36	छत्तीस
3	तीन	14	चौदह	26	छब्बीस	37	सैंतीस
4	चार	15	पद्रह पन्द्रह	27	सत्ताईस	38	अड़तीस
5	पांच	16	सोलह	28	अट्ठाईस	39	उन्तालीस
6	छह छ छै	17	सत्रह	29	उन्तीस	40	चालीस
7	सात	18	अठारह	30	तीस	41	इकतालीस एकतालीस
8	आठ	19	उनीस	31	इकत्तीस एकतीस	42	बयालीस
9	नौ	20	बीस	32	बत्तीस	43	तैतालीस तैंतालीस तितालीस तेतालीस
10	दस	21	इक्कीस	33	तेंतीस तैंतीस	44	चवालीस चौवालीस
11	ग्यारह	22	बाईस	34	चौंतीस		
		23	तेईस				

45 पैंतालीस
46 छियालीस
47 सैंतालीस
48 अड़तालीस
49 उन्चास
50 पचास
51 {इक्यावन / एकयावन
52 बावन
53 {तिरपन / त्रेपन
54 चौवन
55 {पचपन / पचावन
56 छप्पन
57 सतावन
58 अट्ठावन
59 उन्सठ
60 साठ
61 {इक्सठ / एकसठ
62 बासठ
63 {तिरसठ / त्रेसठ
64 चौसठ
65 पैंसठ
66 छियासठ
67 सड़सठ
68 अड़सठ
69 उन्हत्तर
70 सत्तर
71 इकहत्तर
72 बहत्तर
73 तिहत्तर
74 चौहत्तर
75 {पचहत्तर / पछत्तर
76 छिहत्तर
77 {सतहत्तर / सतत्तर
78 {अठहत्तर / अठत्तर
79 उनासी
80 अस्सी
81 {इक्यासी / एकयासी
82 बयासी
83 तिरासी
84 चौरासी
85 पचासी
86 छियासी
87 {सतासी / सत्तासी
88 {अठासी / अट्ठासी
89 नवासी
90 नब्बे
91 {इक्यानवे / एकयानवे
92 बानवे
93 तिरानवे
94 चौरानवे
95 पचानवे
96 छियानवे
97 सत्तानवे
98 अट्ठानवे
99 निन्यानवे
100 सौ, सैंकड़ा
0 {शून्य $_S$ [1] / सिफ़र $_A$
千 {हज़ार $_P$ / सहस्र $_S$
十万 लाख [2]
百万 नियुत $_S$
千万 {करोड़ $_S$ / कड़ोड़
十億 {अर्ब $_S$ / अरब $_H$
千億 {खर्व $_S$ / खरब $_H$
十兆 नील $_S$
千兆 {पद्म $_S$ / पदम $_H$
[illegible] शंख
[illegible] महा शंख [3]

(1) shûnya は khâlî$_P$ 「空っぽの」の同義語としても用いられる。sifar は सिफ़र とも書かれる。

(2) 以下それぞれ sau hazâr「十万」das lâkh「百万」sau lâkh「千万」, sau karor「十億」, sau arb「千億」sau kharb「十兆」sau nîl「千兆」などともいわれる。

(3) これらすべての高い数は、インド人の習慣 s「法典」に基いたもの。

6) 性質形容詞に伴われる名詞がよく複合形容詞句を形成するように，特に「寸法」「目方」「量」「価格」などを示す名詞が数詞に伴われる時にも一種の複合数量形容詞句になる（22ページ12参照）。

7) 「約」の意の表わし方。

i) 数詞の後に एक を添えて。——例 दस एक=कोई दस「約10」; सौ एक(1)=कोई सौ「約100」, कोई चार सौ एक(2)「約400」，このような言い方も，前述の数詞の場合同様，修飾される名詞に先立つのが原則的であるが，まれには，名詞の後に来ることもある。例 चार एक बरस=बरस चार एक「約4年」。

ii) लगभग「約」や प्राय「約」を前に置いて。——前者は形容詞的副詞，後者は副詞で，両者とも「ほとんど」の意にもなる。例 लगभग पचास दिन「約50日」; प्राय बीस पुरुष「約20人の男」。

iii) 近接数詞の並用で。——दो तीन=दो चार「2.3(の)」, तीन चार「3.4(の)」, चार पाँच「4 5(の)」, दस बीस「約10か20(の)」, दस पन्द्रह「約10か15(の)」, बीस तीस「2.30(の)」; बीस पच्चीस「20か25(の)」, दो तीन सौ「2.300(の)」, सौ सवा सौ「100か125(の)」; सौ दो सौ「100か200(の)」。用例 साठ सत्तर रुपये「6 70ルピー」; एक दो दिन「1 2日」, कोई दो ढाई महीने「約2ヶ月か2ヶ月半」; एक आध गज तार「1ヤールか半ヤールの糸」「1ヤールそこそこの糸」。

大きい数が小さい数の前に出されることもある。例 दो एक「1 2(の)」「約2(の)」; दस पाँच「約10(の)」「5 6(の)」, सात पाँच「6 7(の)」「約6(の)」; दो एक सौ「1 2百(の)」 用例 दो एक दिन की छुट्टी「1 2日の休み」。

時々，強意詞 ही が両数詞の間に置かれることもある。例 एक ही दो वर्ष में「わずか1 2年のうちに」。ただし，単なる एक ही は「同一の」「似た」の意。

しかし，上記のような言い方は幾分慣用的であるため無制限な援用は許しま

---

(1) एक सौ एक は「101」。

(2) चार सौ एक は「401」。

なければならぬ。例えば，दो एक, दस पाँच などの数詞を，それぞれ逆にして用いるのは良くない。

8) 基数詞の慣用：

ある種の基数詞は，単独のまゝか並用によって特殊な意味に用いられることがある。

i) उन्नीस と इक्कीस——बीस「20」を以て一つの基準とするインドの習慣から，一つ不足の उन्नीस が「劣った」「年下の」「後輩の」などの意に用いられるに対し，「20」よりも一つ余計の इक्कीस は「優れた」「年長の」「先輩の」「成功する」などの意に用いられる。同様，「40」や「50」も一つの基準と見なされる関係で，इकतालीस「41」や इक्कावन「51」も इक्कीस の同義語としても扱われる。例 वह मुझसे उन्नीस है।「彼は私よりも劣っている（または年下である」，उस माल से यह माल इक्कीस है।「その商品よりもこの商品が優秀である」；आप का यह इक्कीस है।「あなたは成功するでしょう」。

ii) उन्नीस बीस——この複合数詞は「大差なく」の意の副詞句である。なお，उन्नीस बीस का は「ほとんど等しい」意の形容詞。उन्नीस बीस होना は「ほとんど等しい」意の動詞。用例——उन्नीस बीस का भेद「わずかな差異」，कुछ उन्नीस बीस「変化がない」「幾分良好である」(病気などが)。

iii) तीन पाँच——これは「言い合い」「口論」の意の女性名詞になる。(से) तीन पाँच करना は「(と) 言い合いする」「つじつまの合わない弁解をする」である。また，(से) सात पाँच करना も「言い争う」意となる。

iv) तीन तेरह——インドの習慣では3と13の数が最も不吉な数と見なされる。すべて3の字の付くものは不吉であるとの考えから，23 33 43なども3と13ほどではないが，凶数と見なされる。そこで，तीन तेरह は「支離滅裂の」「散らばった」「壊れた」「破滅の」などの意となる。तीन तेरह करना は「散らす」の意である。

v) लाख——時折，「たくさん」の意に用いられる。हजार もまた同様に用いられる。例

उसने मुझको लाख [=हजार] समझाया।「彼は私を大いに説得した」。

注 なお，नौ दो ग्यारह होना は「逃げる」意の慣用句である。

2 序数詞 (क्रमवाचक संख्या)

第6までが不規則である すなわち，पहला=पहिला「第1の」，दूसरा「第2の」，तीसरा「第3の」，चौथा「第4の」，पाँचवाँ「第5の」，छठा=छठवाँ「第6の」，नवाँ「第9の」。

第7．8及び第10以上は，第5同様，すべて基数詞に वाँ が加えられる 例 एक सौ बीसवाँ「第120(の)」。

序数詞の語尾変化は आ または आँ にて終る一般形容詞のそれと同じである。すなわち，男性名詞の前では ए または एँ に変り，女性名詞の前では ई または ईं になる。例 पाँचवाँ वर्ष「第5年」；चौथे स्थान में「第4に」，नवें अध्याय$_s$ (=पैरे$_P$) का「第9課の」；तीसरी पुस्तक「第3読本」बारहवीं शताब्दी ईसा [ईसवी]「西暦第12世紀」。

注 1) この序数詞語尾 वाँ は数字にも附けされる。例 १७वीं शताब्दी「第17世紀」。

2) サンスクリットの序数詞も特に文語に時々用いられる。प्रथम「第1の」द्वितीय「第2の」，तृतीय「第3の」，चतुर्थ「第4の」，पंचम「第5の」；षष्ठ「第6の」，सप्तम「第7の」，अष्टम「第8の」その他。用例——द्वितीय भाग「第2巻」；तृतीय संस्करण$_s$「第3版」，प्रथम शताब्दी ईसा के पूर्व से「西暦前第1世紀から」。

3) 暦日のためにも，また別種の序数詞が用いられている。インドの太陰月は明暗各15日間の2部に分たれる。月のかける前半は कृष्णपक्ष$_s$=कृष्णा「黒い半分」「黒い面」または बदी$_H$「月のかけ」「太陰月の黒い半分」といわれる。

なければならぬ。例えは दो एक, दस पाँच
用いるのは良くない。

8) 基数詞の慣用

ある種の基数詞は 単独のまゝか慣用によ
かある

i) उन्नीस と इक्कीस—— बीस 「20」を以て
慣から 一つ不足の उन्नीस か「劣った」「年下の
られるに対し「20」よりも一つ余計の इक्कीस は
「成功する など」の意に用いられる。同様, 「40」や
れる関係で इकतालीस 「41 や इक्यावन 「51」も ま
われる。例 वह मुझसे उन्नीस है। 「彼は私よりも劣
る」, उस माल से यह माल इक्कीस है।「その商品よ
る」, आप का यह इक्कीस है।「あなたは成功するでし

ii) उन्नीस बीस——この複合数詞は「大差なく」ので
उन्नीस बीस का は「ほとんど等しい」意の形容詞。उन्नीस बी
等しい」意の動詞。用例—— उन्नीस बीस का भेद 「わずかな
बीस 「変化かない」「幾分良好である」(病気などが)。

iii) तीन पाँच——これは「言い合い」「口論」の意の女性
तीन पाँच करना は「(と) 言い合いする」「つじつまの合わな
ある。ま (से) सात पाँच करना も「言い争う」意となる。

iv) तीन तेरह——インドの習慣では 3 と 13 の数か最も不吉
る。すべて3の字の付くものは不吉であるとの考えから 23 33
13ほとではないか, 凶数と見なされる。そこで, तीन तेरह は
「散らばった」「壊れた」「破滅の」などの意となる。तीन तेरह क
す」の意である。

v) लाख——時折 「たくさん」の意に用いられる。हजार もま
いられる。例

ˀは सुदी。
よりである
そして同
より反
数名

月の満つる後半は शुक्लपक्ष$_s$ =शुक्ला「明るい半分」「白い面」または सुदी$_{*H}$ सुदि$_{*s}$「太陰月の明半」といわれる。そして，15日間の名称は次の通りであるが，それらの名称は語原の如何に関係なく，すべてが女性名詞である。そして同一日数名が，毎月の明暗，つまり１日から15日，16日から30日の２回にわたり反復使用される。(1)明暗を区別する必要上，暗半の日付には कृष्णा の語を日数名の前に置くか बदी の語を日数名に後付するかし，逆に明半の時には शुक्ला を前に付けるか सुदी を後に付けるかする。

第１日 परिवा, पड़वा, प्रतिपदा$_s$	第９日 नौमी, नवमी$_s$
第２日 दूज, द्वितीया$_s$	第10日 दशमी$_s$, दसमी
第３日 तीज, तृतीया$_s$	第11日 एकादशी$_s$, एकादसी
第４日 चौथ, चतुर्थी$_s$	第12日 द्वादशी$_s$
第５日 पाँचें, पचमी$_s$	第13日 तेरस, त्रयोदशी$_s$
第６日 छठ, षष्टी$_s$, षष्ठी$_s$	第14日 चौदस, चतुर्दशी$_s$.
第７日 सत्तमी, सप्तमी$_s$	第15日 अमावस, अमावस्या$_s$ (2)
第８日 अष्टमी$_s$,	

4) 西暦に基く日数名には前記のヒンディー序数詞が用いられる。ただし，この場合には「日付」を意味する तिथि$_{*s}$ =तारीख$_{*A}$ と関連されて常に女性形が採られる。例 पहली「第１日」「第１の」; दूसरी「第２日」「第２の」; दसवीं「第10日」「第10の」〔213ページおよび214ページ〔付記〕１３参照〕

5) ヒンディー序数詞はまた代名詞にもなれる。例 दूसरा「他の」「別の」「他人」「第２」; तीसरा「第３(の)」。用例 दूसरों का「他人達の」。

6) 序数詞 पहला は形容詞・副詞的用語として「主要な」「以前に」など

(1) つまり，第１日の日付名は明暗の各初日，即ち１日と16日とに使用される。

(2) これは「暗半」15日間の最終日であるとともに，また「新月の日」の初りでもある。これに対し，「明半」即ち「満月の日」の第15日は पूरनमासी, पूनों पूर्णमासी$_s$, पूर्णिमा$_s$ などと呼称される。

の意になるとともに，時代」などを述べる場合に「過ぎ去った」「初期の」意にもなる。पहले は常に副詞で，「まず」「以前に」の意。

3 分数詞 (अपूर्णांक संख्या)

（1）次のような形容詞を用いて——

पौन「$\frac{3}{4}$(の)」「一$\frac{1}{4}$」(1)，पौने「$\frac{3}{4}$(の)」(2)，सवा「1$\frac{1}{4}$」「+$\frac{1}{4}$」，आधा，आध(3)「$\frac{1}{2}$(の)」=साढे(4)，डेढ「1$\frac{1}{2}$(の)」，ढाई，अढाई「2$\frac{1}{2}$(の)」。

用例 ——पौने दो「1$\frac{3}{4}$」，पौने चार「3$\frac{3}{4}$」，सवा तीन「3$\frac{1}{4}$」，साढे चार「4$\frac{1}{2}$」，पौने सौ「75」，पौने हजार「750」，डेढ सौ「150」，साढे चार सौ「450」，अढाई सौ「250」，सवा सौ「125」，सवा हजार「1250」，पौने आठ सौ「775」，पौने आठ हजार「7750」。

（2）名詞 तिहाई「$\frac{1}{3}$」や चौथाई「$\frac{1}{4}$」を用いて ——用例 दो तिहाई「$\frac{2}{3}$」，तीन चौथाई「$\frac{3}{4}$」。

（3）序数詞に भाग「部分」「割当」=हिस्सा hissa を添えて ——用例 तीसरा भाग「$\frac{1}{3}$」，चौथा भाग「$\frac{1}{4}$」，पाँचवाँ भाग「$\frac{1}{5}$」。

（4）分母と分子との間に बटा［または बटे］「上に」を用いて ——これは最も通俗的であるだけに表現が容易である。用例 एक बटा दो「$\frac{1}{2}$」，दो बटे पाँच「$\frac{2}{5}$」。

なお 整数は सही「正しい」で表わされる。例 एक सही तीन बटे चार =१ सही ३ बटे ४「1$\frac{3}{4}$」。

---

(1) 物に使用。 (2) 分数に使用

(3) 名詞にも転用される。例 इसका आध「この半分」

(4) 常に3以上の数の前に置かれる。

月の満つる後半は शुक्लपक्ष$_{s}$ =शुक्ला「明るい十分」「白い面」または सुदी$_{*H}$ सुदि$_{*s}$「太陰月の明半」といわれる。そして，15日間の名称は次の通りであるが，それらの名称は語源の如何に関係なくすべてが女性名詞である。そして同一日数名が毎月の明暗つまり1日から15日，16日から30日の2回にわたり反復使用される。(1)明暗を区別する必要上暗半の日付には कृष्णा の語を日数名の前に置くか वदी の語を日数名に添付するかし逆に明半の時には शुक्ला を前に付けるか सुदी を後に付けるかする。

第1日 परिवा, पड्वा, प्रतिपदा$_{s}$	第9日 नौमी, नवमी$_{s}$
第2日 दूज, द्वितीया$_{s}$	第10日 दशमी$_{s}$, दसमी
第3日 तीज, तृतीया$_{s}$	第11日 एकादशी$_{s}$, एकादसी
第4日 चौथ, चतुर्थी$_{s}$	第12日 द्वादशी$_{s}$
第5日 पाँचें, पचमी$_{s}$	第13日 तेरस, त्रयोदशी$_{s}$
第6日 छठ, षष्टी$_{s}$, षष्ठी$_{s}$	第14日 चौदस, चतुर्दशी$_{s}$
第7日 सत्तमी, सप्तमी$_{s}$	第15日 अमावस, अमावस्या$_{s}$ (2)
第8日 अष्टमी$_{s}$,	

4) 西暦に基く日数名には前掲のヒンディー序数詞が用いられる。ただし，この場合には「日付」を意味する तिथि$_{*s}$ —तारीख$_{*A}$ と関連されて常に女性形が採られる。例 पहली「第1日」「第1の」; दूसरी「第2日」「第2の」, दसवीं「第10日」「第10の」(213ページおよび214ページ〔付記〕13 参照)

5) ヒンディー序数詞はまた代名詞にもなれる。例 दूसरा「他の」「別の」「他人」「第2」, तीसरा「第3(の)」。用例 दूसरों का「他人達の」。

6) 序数詞 पहला は形容詞・副詞兼用語として「主要な」「以前に」など

(1) つまり，第1日の日付名は明暗の各初日，即ち1日と16日とに使用される。

(2) これは「暗半」15日間の最終日であるとともに，また「新月の日」の初りでもある。これに対し，「明半」即ち「満月の日」の第15日は पूरनमासी, पूनो पूर्णमासी$_{s}$, पूर्णिमा$_{s}$ などと呼称される。

の意になるとともに、「時代」などを述べる場合に「過ぎ去った」「初期の」意にもなる。पहले は常に副詞で、「まず」「以前に」の意。

3. 分数詞 (अपूर्णांक संख्या)

（1）次のような形容詞を用いて——

पौन「$\frac{3}{4}$(の)」「一$\frac{1}{4}$」(1)； पौने「$\frac{1}{4}$(の)(2)； सवा「1$\frac{1}{4}$」「+$\frac{1}{4}$」，आधा, आध(3)「$\frac{1}{2}$(の)」=साढ़े(4)，डेढ़「1$\frac{1}{2}$(の)」，ढाई, अढाई「2$\frac{1}{2}$(の)」。

用例 ——पौने दो「1$\frac{3}{4}$」；पौने चार「3$\frac{3}{4}$」；सवा तीन「3$\frac{1}{4}$」；साढ़े चार「4$\frac{1}{2}$」；पौने सौ「75」；पौने हज़ार「750」，डेढ़ सौ「150」；साढ़े चार सौ「450」；अढ़ाई सौ「250」；सवा सौ「125」；सवा हज़ार「1250」；पौने आठ सौ「775」，पौने आठ हज़ार「7750」。

（2）名詞 तिहाई*「$\frac{1}{3}$」や चौथाई*「$\frac{1}{4}$」を用いて・——用例 दो तिहाई「$\frac{2}{3}$」；तीन चौथाई「$\frac{3}{4}$」。

（3）序数詞に भाग 「部分」「割当」=हिस्सा hissa を添えて：——用例 तीसरा भाग「$\frac{1}{3}$」；चौथा भाग「$\frac{1}{4}$」；पाँचवाँ भाग「$\frac{1}{5}$」。

（4）分母と分子との間に बटा［または बटे］「上に」を用いて・——これは最も通俗的であるだけに表現が容易である。用例 एक बटे दो「$\frac{1}{2}$」，दो बटे पाँच「$\frac{2}{5}$」。

なお，整数は सही「正しい」で表わされる。例 एक सही तीन बटे चार =१ सही ३ बटे ४「1$\frac{3}{4}$」。

---

(1) 物に使用。 (2) 分量に使用。
(3) 名詞にも転用される。例 इसका आधा「この半分」。
(4) 常に3以上の数の前に置かれる。

注 1) 分数は「目方」「寸法」「金額」などを示す語と共にも用いられる。例 ढाई मन「2マウンド半の重さ」, पौन गज「1ヤールの量」, सवा रुपये「1¼ルピー」。

2) पाव「¼」は主として「目方」の सेर〔約2ポンド〕との関連において用いられる。例 पाव (सेर)「$\frac{1}{4}$セール」, तीन पाव (सेर)「$\frac{3}{4}$セール」, आध पाव (सेर)「$\frac{1}{8}$セール」。

4 集合数詞 (समुदाय-वाचक)

(1) 純集合名詞

जोडा=जोडी*「2」「1対」——用例 चार जोडा=-जोडे「4対」。

चौकडा=चोकडी*=चौका「4」——用例 दो चौकडा=-चौकडे「8」。

गण्डा=गडा「4」——本語は主に目方の सेर や貨幣代用の कौडी*「宝貝」を数えるのに用いられる。

पजा「5」——本語が2以上の数詞に伴われると，単複両形の採否は任意でなく，常に語尾が複数化，即ち ए 化する。

गाही*「5」——特に，果物や燃焼用の円くて平たい牛ふん，その他細々しい物を数えるのに用いられる。用例 दस गाही आम「50個のマンゴー」

छक्का「6」——本語も他の2以上の数詞に伴われるとき，語尾は必ず ए 化する。छक्का पजा は「計略」「悪計」「詐欺」などの意。

दर्जन*「1ダース」「12」——用例 दो दर्जन「24」「2ダース」。

कोडी*=बीसी*「20」——用例 तीन बीसी「60」，前者が「竹」「柱」などを数えるのに用いられるに対し、後者は「果物」などを数えるのに用いられる。बीस も卑語的に時々代用される。例 पांच बीस「100」。

मैकड़ा＝सैकड़ा「100」——これはまた「百分(%)」「パーセント」の意にも用いられる。用例 आठ आने सैकड़ा [=सैकड़े]「8アーナの歩合で」，दस रुपये सैकड़ा [=सैकड़े] ब्याज [=सूद P] 1割の利子」。

備考 1) 複数扱いされるとき，上記 आ で終わる男性名詞扱いのものが必ず語尾変化をするものと जोड़ा, चौकड़ा, सैकड़ा のように語尾変化が任意に行われるものとがある。これに対し，ई 語尾で終る女性形は常に原形のまま用いられ，決して女性の複数形にならない。

2) बीसी が「果物」などのほかに「穀類」や「面積」をはかるのに用いられるに対し，同義の बीसा [=बीस+अ] は「着物の枚数」や「牛の数」などを数えるのに，百姓や洗たく屋によって用いられる。また चालीसा「40」は「年数」や「日数」に用いられ「40年目」「40日の期間」などが意味される。なおまた，बत्तीसी*「32」は，すべて32から成る集合体に用いられる。例えばインドの近代作家 प्रेमचन्द（明治21年—昭和11年）の短編集にして प्रेम बत्तीसी「プレームの32物語集」や प्रेम पच्चीसी「プレームの25物語集」というのがある。

（2） 基数詞に ओं を添えて

この場合，ほぼ20の数を境としてそれ以下の小さい数の時には「全部」「残らず」の意になるが，それ以上の数の時には，単にばく然と多数の意を示すことになる。(1) 例 दोना=दोनों「両者(の)」，(2)，छआ—छहों「6全部(の)」「6者とも」，सैकड़ा प्रकाशक s「幾百という発行者」，हजारों लाखों वर्ष पहले「幾千幾十万年前に」。

備考 単なる基数詞の場合同様，本項の場合でも，強意化のために के を隔てて反復される。例 दसों के दसों मर गए।「10人が10人とも死んだ」

(1) ただし 30，40，60などの数に対しては実際上本語尾の添えられることはない。
(2) これだけが例外で，do に no または non が添えられる。

（3） 基数詞に इयों を添えて

この添字は「4 5の」「数 」の意を表わす場合に用いられる。例 दसियों「幾つかの10」「数十」 बीसियों「幾つかの20」「数十」，पच्चीसियां「幾つかの25」。

備考 1） 以上(1)(2)項の場合にも 性や格の如何で語形が変わるようなことはない。

2） 既述の諸例からしても ओं で終る集合数詞もまた代名詞扱いされることが察せられよう。例 दोनों 双方の」「両者」 तीनों 3者(の)」。用例 दोनों के घर「両人の家」 वे चारों 彼ら4人とも 「それら4が4とも」。

5 倍数詞 (गुणन-वाचक संख्या)

（1）原則として基数詞に गुना=गुणा「で掛けられた」が添付される。しかし，2から8までは基数詞の短縮した形に添付される。例 दुगुना दूना, दुना[1]「2倍の」，तिगुना「3倍の」， चौगुना「4倍の」；पँचगुना, पचगुना「5倍の」，छगुना, छः गुना 「6倍の」，सतगुना「7倍の」，अठगुना「8倍の」，नौगुना「9倍の」， सौ गुना「100倍の」。

備考 1） この添字 गुना が性 数および格などに左右されて गुनी, गुने に変わる。また 名詞化もする。例 दुगुने तिगुने पर「2 3 倍に」。そして 比較の対象となる語には後置詞 से が使用される。例

उस से दस गुना पानी 「それよりも10倍の水」

यहाँ गायें बैलों से दसगुनी हैं। 「ここに雌牛が雄牛の10倍いる」

2） 本添字は分数にも付く。例 सवा गुना「1¼倍だけの」，ढाई गुना「2½倍だけの」。

---

(1) また दुगना, दुगुण, दुगुन, दून などともつづられる。

(2) 基数詞に हरा が添付されることもある。例 एकहरा, इकहरा「たゞひとつの」「ひと重ねの」; दोहरा, दुहरा「2重の」「2倍の」, तिहरा, तेहरा「3重の」「3倍の」, चौहरा「4重の」「4倍の」。

これらは主として「寸法」に用いられるのであるが，着物や紙などを折りたゝむ時にも用いられる。例 चौहरा कर लो 「4枚にたゝみなさい」。

注 1) 一般に使用される加 (जोड), 減 (बाकी)$_{*4}$, 乗 (गुण, गुणा)$_{s}$, 除 (भाजन, भाग)$_{s}$ の表わし方は次の通りである。

दो और तीन को जोडना	「2に3を加える」
तीन में से दो को घटाना [=बाकी निकालना]	「3から2を引く」
तीन को दो से गुणना [=गुणा करना]	「2と3とを掛ける」
तीन में दो का भाग देना	「3を2で割る」

ところが，地方によっては，掛算の「九九表」(पहाडा) における被乗数1から10までに次のような特殊用語が使われることがある。(1)

एकम् s「1(の)」(2), दूना(3)「2倍の」「2で掛けられた」, तीया, ती(4)「3(の)」「3で掛けられた」, चौक, चौका(5)「4」, पंचा, पजा(5)「5」, छक्का(6)「6」, सत्ता s(7)「7」, अट्ठा(8)「8」, नम्मा(9), नम(10)「9」, दहाम「10」。

---

(1) 必ずしも全国的に一定しない

(2) 用例 दो एकम दो「2×1−2」.

(3) 10以後の乗数とでは語尾が i 化される。用例 छ दूनी बारह「6×2 12」.

(4) 乗数が3から10までの時に限り使用。乗数11以上の時には普通 तीन が用いられる。例 छ: ती अठारह「6×3−18」.

(5) 共に乗数2以上では語尾が ए 化する。

(6) 乗数10以下の場合に限り語尾が ए 化するが 乗数11以上では原形のまゝ。つまり単数形のまゝ。

(7) 乗数11の時に限り普通の सात が用いられる以外 常に語尾が ए 化して用いられる。

(8) これも乗数11の時に限り普通の आठ が使用される以外 語尾が常に ए 化する。

(9) 乗数11の時には普通の नौ。しかし 乗数2で語尾が ए 化するに対し，乗数3から10までは原形のまま。

(10) 乗数12以上の場合に使用。

〔注〕 1) 一切の動詞中，助動詞（सहायक क्रिया）と作用になったり，「過去可能未完了時相」(1)に欠けたりするのは होना だけである。

2) 他の一切の動詞の「現在時相」に性別があるに対し，होना の第一型の場合に限り性別がない。

3) 名詞は第三人称に代わられる。それに応じて動詞も単数または複数が用いられる。

第　二　型(2)

1	मैं होता हूँ	1 3	हम [वे] होते हैं
2 3	तू [वह] होता है	2	तुम होते हो

〔注〕 1) これには性別があり「現在分詞」即ち「未完了分詞」の形を採っている為動詞の末字 आ や ए が ई 化する。つまり，女性の各人称とも होती となる。

2) 両型の使用別は，第一型が個々の特殊な事実を述べるのに用いられるに対し，第二型は主として一般的普遍的な真理，反復的習慣的な動作，一定事項，あるいはきまり切った当然の事柄などを述べるのに用いられる。例

धुलाई का क्या होता है ?　　「洗たく代は幾らですか」

सौ लाख का एक करोड़ होता है।　　「百ラークは1千万である」

例えば चोटियों पर श्वेत हिम होता है। 「山々の頂に白雪がある」において，あの山頂とかこの山頂とか，個々の山頂に白雪がある意なら है だけでよい。
なお，ここに特に注意を要することは，この第二型と，होना が (i) 形容詞や (ii) 名詞との結合から成る複合動詞と混同してはならないことである。例 (i) खड़ा होना 「立つ」，प्राप्त—「得られる」，बड़ा—「成長する」，पैदा—「産出する」 मालूम—「知る」「思う」「感ずる」，तैयार—「準備される」。(ii) भरती—

(1) 「現在分詞」即ち「未完了分詞」に है の「現在分詞」を添えたもの。（128ページ参照）

(2) 他の動詞の場合なら「現在未完了時相」と称される。（125ページ参照）

「入る」「入学する」「入隊する」，देर— 「遅れる」。これらの複合詞が「現在時相」，つまりいわゆる「現在未完了時相」になると，外観上，第二型と同一になる。

3) この第二型はいわゆる「進行現在」にもなる。しかし，「現在進行」専門の時相は「継続現在時相」(तात्कालिक वर्तमान काल) と称され，本動詞の語根と助動詞との間に रहना 「続く」の過去分詞 即ち完了分詞を入れてあらわされる。例

वह हो रहा [रही][1] है। 「彼は なりつゝある」

2. 過去時相 (भूतकाल)

第　一　型

「 であった」

123　मैं [तू, वह] था [थी]　हम [तुम, वे] थे [थीं]

第　二　型

「 であった」「 になった」

123　मैं [तू, वह] हुआ [हुई]　हम [तुम, वे] हुए[2] [हुईं]

注意 1) 第一型はいわゆる「完了形時相」においてよく助動詞にもなる。第二型はいわゆる「不定完了」(सामान्य भूत) の時相と同形であるが，हुआ है, हुआ था 等々のように，一切の動詞の「過去未完了時相」や「過去完了時相」において助動詞になる。

2) 第一型が単なる一事実または一動作を述べるに対し，第二型は動作なり状態なりが幾分後まで続くような場合，つまり「 であった」よりも寧ろ「 になった」の意に用いられることが多い。例 (तुमको) क्या हुआ? 「(君は)どうしたのか」; कुछ नहीं हुआ 「何もなかった」; कुछ हुआ 「何か起った」;

---

1) 角括弧内の動詞は，すべて女性型，以下皆同じ。

(2) हुये や हुवे は不可。

उससे मेरी भेंट हुई। 「ぼくは彼（または「彼女」）に会った」, वह बहुत प्रसन्न हुआ। 「彼は非常に喜んだ」。この第1例のような場合でも है をもってすることは良くない。特に第二型は副詞的にさえなる。例 एक घंटा हुआ 「1時間前に」, कितने दिन हुए 「幾日前に」(1)。

3) होना の「過去時相」に似たものに होना の「過去未完了」(अपूर्ण भूत) の時相がある。 मैं [तू, वह] होता था [होती थी], हम [तुम, वे] होते थे [होती थीं] の形である。すなわち　　であった　　であるのが常であった」「常に　になった」などの意になる。これは 過去の習慣的反復的事実を述べるのに用いられる。

4) いわゆる「進行過去」は「過去継続時相」(तात्कालिक भूत) と称される。例 मैं [तू,वह] हो रहा था [—रही थी]।。

5) 諸動詞中, 2種の「現在時相」や「過去時相」を持つのは होना だけである。

6) 「現在分詞」即ち「未完了分詞」は, 動詞の語根に ता [女性形 ती] を添えて作られる。しかしながら, 名詞にしてこれらの語尾に終るものも少なくない。例 पोता 「息子の息子」, सोता 「泉」, बस्ती* 「居住地」「人口」。

7) 辞書に掲げられてある動詞の形は「動詞状名詞」(कर्तृवाचक संज्ञा) 即ちいわゆる「不定法」の形である。その「不定法」語尾 ना で終る語は必ずしも動詞であるとは限らない。(i) 名詞, (ii) 形容詞, (iii) 動詞的名詞などで ना で終るものも少くない。例 (i) सूचना*s 「通知」; सेना *s 「軍隊」, (ii) काना 「片眼の」, दहिना, दाहना 「右の」, (iii) खाना 「食事」「食べる」, सोना 「金」「眠る」。

---

(1) これらは分詞的副詞句の直後ではそれぞれ「1週間になった」「幾日になったか」などの意となる。〔131ページ(2)および163ページ脚注3）参照〕

3 不定時相 (सम्भाव्य भविष्यत् काल)(1)

「　であるかも知れぬ」「　になるかも知れぬ」「　である」「　になる」「　であろう」

1	मैं होऊँ	1 3	हम [वे] हों
2 3	तू [वह] हो	2	तुम होओ

〔注〕 1) 方言や口語体では、第一、三人称単数に होए, होय, होवे，第一・三人称複数に होएँ, होयँ, होवें，第二人称複数に होओ も用いられることがある。特に य, यँ や वे, वें で終わる形は旧式であるから避くべきである。

2) 本時相には性別がない。

3) 前項12の否定詞として नहीं が採られるに対し本時相には न が採られる。

4) 前項12.の場合同様 होना の本時相も助動詞的用法である。すなわち「可能未完了時相」や「可能完了時相」においては、助動詞として本動詞に付けされる。〔次ページの〔活用例2〕参照〕

5) 単数の第2人称は「命令形」と同じで (तू) हो「(君は　であれ」，(तुम) होओ ともなる。

4 未来時相 (सामान्य भविष्यत काल)(2)

「　であろう」「　になろう」

1	मैं होऊँगा	1 3	हम [वे] होंगे
2 3	तू [वह] होगा	2.	तुम होओगे

〔注〕 1) つまり、本時相は前項の「不定時相」に「未来時相語尾 गा [

---

(1) 「可能未完了時相」の意。sambhāvya は「可能な」「あり得る」の意

(2) 「普通未来時相」の意。前項2「不定時相」の原語が「可能未完了時相」であるので、これと区別して「普通の」を入れたもの。本書では一々原語を訳出せぬことにした。

गा] を単数の各人称に, गे [女性形 गी] を複数の各人称に添付したものである。ただし、第二人称女性複数形 होगी は会話にてよく होगी の形で用いられる。

2) 方言や口語体では, 単数第一人称に हूंगा, 同じくその第2 3人称に होवेगा [または होएगा, होयगा], 複数第一人称に होवेंगे [または होएंगे, होयंगे], 同じくその第2人称に होगे が用いられることがある。

3) 本時相の否定詞は नहीं。ただし, ラクナウ (लखनऊ) 地方では न を用いる傾向がある。

4) 他の動詞では, 「未来時相」がすべて「未来の推定」に用いられるに対し, ひとり होना のそれは, 「推定未来」以外に, (i) 現在の推定に用いられるばかりでなく, (ii) ほとんど「時」に無関係にさえ用いられる。例

(i) आपकी अवस्था कितनी होगी ?　「お年はお幾つでしょう」
　　वहां दो पहरे होंगे।　「あそこに2人の番人がいよう」
(ii) क्या दाम होगा ?　「幾らでしょう」

【活用例 2】 जाना 「行く」

(1) 語根から作られる時相 (धातु से बने हुए काल)

1. 命　令 (आज्ञार्थोतक)(1)

人称	単　数	複　数
2.	(तू) जा 「お前行け」	(तुम) जाओ 「(君)行きなさい」

(1) 「命令」形は, 普通の「命令」のほかに「禁止」「警告」「要求」の意を表わすのに用いられ, 主語はよく省略される。そして, 単数命令形の用法は第二人称単数代名詞 तू のそれと全く同じで, 神や年少の子供ら時には親友に呼びかけたり, 母や弟妹などに対し愛情的に甘えたり, ある

(1) vi-dhi kriyā や ājñārthak kriyā とも称される。

いは「立腹」や「軽侮」の意を示す場合にも用いられる。

（2）語根に ओ が添付されて作成される第二人称複数命令の形は，それが対象となる तुम のそれと同一の用法を持っている。

（3）尊敬代名詞 आप が対象とされる最も普通の「尊敬命令」は，動詞の語根に इए[1]（＝इये）を添付して作られる。例 （आप）आइये「どうぞ来て下さい」（आप）सुनिए「どうぞお聞き下さい」。

たゞし，次の諸動詞は「尊敬命令」の作法においてばかりでなく，あるものは普通の複数命令においてさえ不規則である。

देना 「与える」 ⟶ दो ⟶ दीजिए

लेना 「取 る」 ⟶ लो ⟶ लीजिए

पीना 「飲 む」 ⟶ पियो ⟶ पीजिए

करना 「す る」 ⟶ करो ⟶ कीजिए[2]

होना 「あ る」 ⟶ हो ⟶ हूजिए[3]

（4）前項の「尊敬命令」の形に「未来」を示す語尾 गा を添付すれば「尊敬未来命令」となり，最上級の尊敬命令として用いられる。そして，この形は女性にも兼用される。例

आप आइएगा। 「お越し下さいますでしょうね」

क्या आप मेरी नमस्ते उनको दे दीजिएगा ?[4]「どうぞ あの方に宜しくいっ

(1) この方が一層好ましい。

(2) करिए も用いられる。上記がよく Urdu で用いられるに対し，これは Hindi 系統の人に用いられる

(3) 今は廃語。正形 होइए はまれにしか用いられない。現今，होजाइए が用いられる。「どうぞ であって下さい」「・ になって下さい」の意。

(4) namaste は地方別によって性別の扱い方が違っている。すなわち，デリー地方では女性に扱われるに対し，U.P 州の東部以東では男性に扱われる。

て下さいませんか」

(5) 主として危険や危急の場合に対する「警告」や人の助けを求める時に用いられる特殊な命令形がある。それは語根に इयो を添付して作られる。例

बैठियो मत। 「座ってはいけません」。

また「祝福」や「のろ(呪)い」の意を表わす時にも用いられる 例

सुखी रहियो। 「ご幸福に」

मरियो।=मर जाइयो। 「死ねばよいか」

【注】 1) U P 州の एटावा 地方では よく「非尊敬命令」の代用をすることがあるだけでなく、語尾は地方的・方言的に「尊敬命令」の形に添付されることさえある。例 कीजियो=कीजो–करियो「しなさい」。

2) また地方的・方言的には一種の「未来命令」として用いられることもある。すなわち普通の「命令」が「即刻の」(प्रत्यक्ष)実行が要望される「現在命令」であるに対し「即刻でない」(परोक्ष)、つまり都合のよい時に実行してよい「命令」の際に用いられる。例

मत भूलियो। 「(いつの間にか)忘れてはいけませんよ」。

(6) 最も普通な「未来命令」として動詞の「不定法」の形そのものが用いられる。そして、この形の「命令」は主として「忠告」「注意」「警告」「依頼」などの意を示すのに用いられる。例

(तुम) न आना। 「(君は)来るべきでない」

छोड़ना मत।=न छोड़ना 「放してはいけませんよ」

न भूलना।=भूलना नहीं। 「忘れてはいけませんよ」

【注】 1) 命令文の否定詞としては मत が禁止命令に限り用いられるに対し न と नहीं とは各種の命令形に用いられる。ただし、नहीं は動詞の直後にしか用

いられない。なお，上例で見られる通り，「命令」として用いられる不定法には न が普通であるが， मत も用いられることがある。

2) 普通の「現在命令」はまた「未来」に関連しても用いられる。なお，「命令」には性別もなければ，いわゆる「進行形」もない。

3) 第三者に対してなされる間接的な命令や要求，および「私(達)に させよ」などの第一人称に対するいわゆる「間接命令」については，次ページ[viii]および161ページ(2)(i)参照のこと。

2. 不定時相 (सम्भाव्य भविष्यत)(1)

「行く」「行くかも知れぬ」「行くだろう」

1.	मैं जाऊँ	1.3	हम(वे) जाएँ
2.3	तू (वह) जाए	2	तुम जाओ

注 前記 होना 以外の本時相では，単数各人称の語幹に，それぞれ ऊँ, ए, एँ, ओ を添えるのが原則である。従って，単数第2.3人称のために जाय や जावे, また複数第1.3人称に जायँ や जावें を代用させるのは旧式なので避ける方がよい。同様の見地からして， आए の代りに आय や आवे, 更に आएँ の代りに आवें を以ってするのは好ましくない。

用　法

（1）本時相は俗にいう「仮定法現在時相」のことである。一方，原語名が「可能未来時相」であるだけに「未来」に関連して，(i)「可能」，(ii)「仮定」，(iii)「不定」，(iv)「願望」，(v)「祈願」，(vi)「祝福」，(vii)「目的」，(viii)「命令」，(ix)「条件」などを述べるのに用いられる。例

(i)　तुम कहो तो मैं भी बोलूँ। 「君が言うなら話そう」

---

(1) 以後 原語時相名における सम्भाव्य の一語を省略する。

(ii) जाऊँ तो कहाँ जाऊँ ? 「行くならば，どこへ行こうか」

(iii) न जाने वह कहाँ है ? 「彼はどこにいるかしら (知らない)」

(iv) जी में आता है कि उससे कुछ पूछूँ। 「彼に少し尋ねてみたい」

(v) बेचारा जान से तो न जाए। 「可哀そうな奴が死なぬように」

(vi) ईश्वर उसको सुखी रखे। 「神が彼を幸福にするように」

(vii) उसने प्रार्थना की कि मैं जीऊँ।[1] 「私が生きるようにと彼は祈った」

(viii) उसे कह दो कि यहाँ आए। 「ここに来るように彼にいいなさい」

(ix) सुने या न सुने, मैं उससे अवश्य कहूँगा। 「(彼が)聞こうが聞くまいが，私は必ず彼に言おう」

(2) 相手の意向を質すような場合にも本時相が用いられる。例

क्या मैं यहाँ ठहरूँ ? 「私はここで待ちましょうか」

(3) 尊敬代名詞と共に用いられゝば，丁寧な「勧告」「要請」が表わされる。例

आप ऐसा न करें। 「あなたは，こんな事をなさらぬがよい」

3. 未来時相 (सामान्य भविष्यत)

1	मैं जाऊँगा	1 3	हम [वे] जाएँगे
2 3	तू [वह] जाएगा	2	तुम जाओगे

注 1) つまり，語根に添付された「不定時相」語尾 ऊँ, ए, एँ, ओ に更に「未来時相」語尾 गा, गे, गी が添付されたまでゝあるが，ある種の語根においては「不定時相」語尾の付け方が不規則である。すなわち，होना の語根には ऊँ や

(1) 「目的」を示す場合の接続詞 कि 同様 ताकि「…するために」に導かれることも多い。

ओ は添付されても，ए や एँ の添付されないことは既述の通りである。また，देना「与える」や लेना「取る」の語根が「不定時相」語尾を添付する前に母音 ए を除去したうえに「未来時相」語尾が添付される。例 दूँगा, देगा, देंगे, दोगे लूँगा, लेगा, लेंगे, लोगे。

なお，語根が長母音 ई や ऊ にて終るものにあっては，いわゆる「不定時相」語尾を添付する前に短母音化される。例 पीना「飲む」→ पिऊँगा, पिएगा, पिएँगे, पिओगे ，छूना「触る」→ छुऊँगा, छुएगा, छुएँगे, छुओगे。

2) होना の場合同様，一般動詞の本時相では，たとえ「不定時相」語尾 ए や एँ に「未来時相」語尾を添付することが正規であるとしても，第二・三人称単数に जायगा や जावेगा が，複数第一・三人称に जायँगे や जावेंगे がよく用いられる。同様 आयगा, आवेगा, आयँगे, आवेंगे などとも書かれ，また पियेगा, पियेँगे などもよく用いられる。

3) 尊敬代名詞としては常に第三人称複数が使用される。(1)例

आप जाएँगे [जाएँगी]　「あなたは行くでしょう」

用　法

(1)「不定未来」「確定未来」「意志未来」などに用いられる。例

वह आज नहीं आएगा।　「彼はきょう来まい」

खेत में बीज उगेंगे।　「畑に種子が生えよう」

मैं अब चली जाऊँगी।　「私はもう出かけます」

(2)「嘆願」「ことわざ」などにも用いられる。例

क्या आप अपना नाम बताएँगे?　「お名前をいって下さいませんか」

जो बोओगे सो काटोगे।　「まく物をかり取ろう」「因果応報」

(3) 時々「…に違いない」などと，「推定未来」としても用いられることは होना の場合同然である。

(1) 80ページ〔備考〕4) 参照。

（4）本時相の「進行形」はまれにしか用いられないが，वह जा रही होगी।「彼女は行きつゝあるだろう」などといわれる。

備考 同一文中に「現在」「過去」「未来」の3時相が併用されることもある。例

वे मुझसे पीछे थे, हैं भी और रहेंगे। 「彼らは私よりも遅れていたし（今でも）遅れており，また（今後も）遅れよう」

〔11〕未完了分詞から作られる時相 (वर्तमान-कालिक कृदन्त से बने काल)

1 不定未完了時相 (हेतुहेतुमद्भूत)(1)

「行ったら」「行ったかも知れない」

123　मैं [तू, वह] जाता [जाती] हम [तुम, वे] जाते [जाती]

用　法

（1）本時相は，いわゆる「現在分詞」即ち「未完了分詞」そのまゝの形である。原語の語義が示す通り，主として「過去の条件」しかも事実と相反したり，実現しない事柄，つまり「不可能条件」について，「現在」「過去」「未来」に関連して用いられる。例

यदि मेरे पास रुपया होता तो मैं तुमको देता। 「もしも私にお金があったら君にあげたのに」

（2）「現在」や「未来」に関連しての「不可能条件」にも用いられる。例

ऊँटों की टाँगें छोटी होतीं तो पेड़ों के पत्ते क्योंकर खाते ? 「らくだの脚が短かかったら木の葉をどうして食べよう」

（3）本時相の否定詞としては न が用いられる。

---

(1)「条件過去」の意。

2. 現在未完了時相 (सामान्य वर्तमान)

「行 く」

1	मैं जाता हूँ	1 3	हम [वे] जाते हैं
2 3	तू [वह] जाता है	2	तुम जाते हो

注 女性形では，単複各人称の主動詞とも語尾の आ や ए が共に ई 化して जाती となる。

用 法

（1）本時相は，いわゆる普通の「現在時相」のことで，一般的な，または個々の事柄，時には習慣的な事柄さえ述べるのに用いられる。また，時間的には即刻実行される動作，つまり「近接未来」にも関連して用いられる。本動詞の「進行形」また「現在」に関連してばかりでなく，「近接未来」として「・するところである」の意に用いられると共に，まれに「近接過去」として「たゞ今・したところだ」の意にさえなる。例

वे अभी यहाँ आ रहे हैं। 「彼らはたゞ今ここに来たところだ」

（2）本時相の否定文では，मैं नहीं जानता ।「私は知らない」のように，助動詞の省かれるのが普通である。そのため，外見上，既述の「条件過去時相」と同形になるので紛らわしい。たゞし，本時相の「進行形」では助動詞は省略されない。

（3）動作を表わす動詞の用いられる本時相の否定文は「拒絶」の意を表わすこともある。例

मैं नहीं जाता । 「私は行かない」「行きたくない」。

3 過去未完了時相 (अपूर्ण भूत)

「行くのを常とした」

1 2 3　मै [तू, वह] जाता था　　हम [तुम, वे] जाते थे

注　女性形では，男性複数の助動詞 थे か थीं になる以外，主動詞・助動詞とも，末字が ई 化する。

用　法

（1）過去の習慣的一般行為を述べるのが本時相の主要目的である。例

वह आप यह बात कहता था।　「彼自身この事をいっていた」

जब मैं पाठशाला में पढ़ता था तो गेंद खेलता था।　「私が学校で学んでいた頃，よくマリ遊びをしていた」

（2）「過去の状態」にも用いられる。例

आप कहाँ रहते थे?　「どちらにお住いでしたか」

झीलें थीं जिनमें कँवल के फूल खिलते थे।　「ハスの花の咲いている池があった」

たゞし，同じく一種の「状態」を示すにしても，動詞次第で余り習慣的になり得ない場合もある。例

क्या आप जानते थे?　「ご存じでしたか」

（3）複文中に本時相が並用されるとき，末尾のもの以外の助動詞は一般に省略される。例

वह मेरी ओर मुड़ मुड़ कर(1) देखता और हँसता था।　「彼は私の方を振り向きながら見て笑っていた」

（4）ところが，単文と複文の別なく，助動詞の省略される特別な形がある。この場合，特に「過去の反復行為」が表わされる。しかし，助動詞省略のために，いわゆる「過去時相」即ち「不定完了時相」とは外観上同形になるので互に混同され易い。そのため，前後の文脈によって，そのどちらであるかを判断するほかない。たゞ一つ，この特別形唯一の特徴は女

(1) 接続分詞。文全体は過去の短時間の状態を示している。

性複数形のみにおいて主動詞の女性語尾 ती が तीं になることである。例

हम जातीं ।　「私達はしばしば行った」

(5) この「過去未完了時相」即ち「過去習慣」の「進行形」は未完了分詞語尾 ता を रहा に変えて作られる。例

हम चल रही थीं ।　「私達は歩いていた」

4. 可能未完了時相 (सम्भाव्य अपूर्ण वर्तमान)

「行くならば」「行くかも知れない」

1	मैं जाता होऊँ	1 3	हम [वे] जाते हों
2 3	तू [वह] जाता हो	2	तुम जाते होओ

注 単数第二・三人称の助動詞には होए や होवे, また複数第二人称には हो も用いられる。そして, 女性形においては, 前項 3 の場合同様 単複の主動詞とも一律に जाती となる。

用　法

(1) 本時相は, いわゆる「現在可能時相」とでも称すべきものである。前項2 の「不定時相」即ち「可能未来時相」が, より多く「未来」に関連しての「願望」「仮定」「条件」その他の事項の「可能」つまり「ありそうなこと」が述べられるに対し, 本時相では, 主として「現在」に関連しての「願望」「仮定」「条件」の起こり得る可能性が述べられる。例

यदि वर्षा होती हो तो बाहर मत जाओ ।　「もしも雨が降っているなら外出してはいけない」

पिता जी सोते हों तो जगाइये नहीं ।　「父さんが眠っているなら, どうぞ起こさないで下さい」

(2) 本時相の「進行形」は「現在分詞」の代りに「語根」に रहा を添えて作られる。例

वे जा रही हों।　　　「彼女らは行きつゝあるかも知れぬ」

〔注〕本時相もそうであるが，特にその「進行形」は前後の文脈次第で いわゆる「近接未来」をあらわすこともある。

5 推定未完了時相 (संदिग्ध वर्तमान)

「行くに違いない」

1	मैं जाता हूंगा	1 3	हम [वे] जाते होंगे
2 3	तू [वह] जाता होगा	2	तुम जाते होगे

〔注〕女性形では 主動詞および助動詞とも，それらの末字の आ や ए が一様に ई 化する。

用　法

（1）原語の語義は「疑問現在」であるが，実際は (i)「現在の疑問」を示すことはまれて，(ii) 寧ろ確実と認める事柄を仮定的推定的に述べるのに用いられる場合が多い。例

(i)　तुम यह न जानते होगे।　　「君はこれを知らないに違いない」

(ii)　ताश के पत्तों को तुम पहचानती होगी।　　「トランプの一枚々々を君(女)は見分けるに違いない」

（2）本時相の「進行形」も「現在分詞」の代りに語根に रहा を加えて作られる。例

वह जा रही होगी।　　「(多分)彼女は行きつゝあるだろう」

6 過去可能未完了時相 (सम्भाव्य अपूर्ण भूत)[1]

「行きつゝあったら」「行きつゝあったかも知れない」

(1) apūrn hetuhetumad bhūt「未完了過去条件」とも言される。

られる。例 खाना「食べる」—→ खाया「食べた」, रोना「泣く」—→ रोया「泣いた」。

例外—— जाना「行く」(本ページ1参照), होना「ある」(115ページ2 第二型参照)

(4) 語根が ई で終わるものは，いったん短母音化したうえに य が中間に置かれる。例 पीना「飲む」—→ पिया「飲んだ」, सीना「縫う」—→ सिया「縫った」。

注 1) 両語の単数女性形は それぞれ पी, पीं や सी, सीं になる つまりその単数形は語根と同形になる。すべて, इया で終る過去分詞の女性形単数は ई, その複数形は ईं や यीं になる。

2) 次の2動詞は全く不規則である。देना「与える」—→ दिया [दिये, दी, दीं]「与えた」, लेना「取る」—→ लिया [लिये, ली, लीं]「取った」。

3) 名詞にして या で終わるものがある。例 छाया *s「陰」「日陰」, तपस्या *s「苦行」, दया *s「同情」。

1 不定完了時相 (सामान्य भूत)

「行った」

123 मैं [तू, वह] गया　　हम [तुम, वे] गये

注 1) 正規の女性形は, गयी や गयीं である。しかし, गई や गईं もよく用いられる。

2) जाना の規則的完了分詞 जाया の形は, 例えば जाया करना「よく行く」「行くのが常である」といったような複合動詞の場合に限って用いられる。

3) गए の形は, この時相の複数男性形としても, また आना における आए の同様に「不定時相」としても用いられない。(1)

(1) 121ページ2「不定時相」参照。

用　法

（1）本時相は，いわゆる「過去時相」のことで，原語の語義は「普通過去時相」である。そして，形は「過去分詞」即ち「完了分詞」そのまゝである。主として，「過去」の個別的・特殊的事実を述べるのに用いられる。たとえ，一瞬間前の出来事でも「過去」として扱われたり，また「現在」を示す副詞とも一緒に用いられもする。例．

जाड़ा आ गया। 「冬が来た」

आहा! बादल आये। 「やあ！ 雲が出たぞ」

आज आप क्यों शीघ्रता से आये? 「きょう，なんで急いでいらっしゃいましたね」

（2）ほとんど「現在」同然に用いられる。例

अच्छा, क्या हुआ? (1) 「さて，(ここで) どうなりますか」

आज क्या हुआ? 「今日はどうしたんだ」

注 1) 上記の通り，特に होना の完了分詞は，そっくり全く「現在」の意になることが多いが，特に詩文では他の一般動詞にして「…た」の意になることが少なくない。

यदि वह आया तो 「もし彼が来たら」

2 現在完了時相 (पूर्ण वर्तमान)[1]

「行った」

1	मैं गया हूँ	1 3	हम [वे] गये हैं
2 3	तू [वह] गया है	2	तुम गये हो

(註) 1) 女性形では 単複ともに主動詞の語尾 आ や ए が ई に変わるだけてある。

用 法

(1) 本時相は一種の「過去時相」でありながら，「過去」を述べたり，「過去」を示す副詞とは一緒に用いられない。たとえ，過去に行われた事柄でも，その結果が現存するものでなければ使用されないのである。例

क्या आज डाक-खाना खुला है ? 「きょう，郵便局は開いていますか」

मुझे बड़ी प्यास लगी है । 「私はひどくのどが乾いた」

(2) 時には「現在時相」の代用をすることがある。例

क्या यह सड़क पटने को गई है ? 「この道はパトナへ行くのですか」

しかし，この場合，「現在時相」जाती है を以てする方が一層好ましい。

(註) 一見，本時相と混同し易いものに次のような場合がある。それは，上に「状態」を示すために，主動詞の完了分詞に添付した होना の完了形の省略に因るものである。例 यह जो तुम्हारे पास बैठी (हुई) है वह कौन है ? 「君の側に座っていた彼女は誰ですか」。

3. 過去完了時相 (पूर्ण भूत)

「行った」

1 2 3 मैं [तू, वह] गया था हम [तुम, वे] गये थे

---

(1) また，Āsanna bhūt (kāl)「近接過去」ともいわれる。

注　単複の女性形は，それぞれ गयी थी, गयी थीं。

用　法

（1）単に口調の良さのために，「近接過去」のみか，一瞬間前の事柄にも用いられる。例

कल तुम कहाँ गये थे ?　「君は昨日どこへ行っていたか」

वह अभी मुझे मिला था।　「彼はたった今私と出会った」。

従って，前項の「不定完了」即ち「過去時相」と大差ないことになり，物語の冒頭などでも本時相で始められることさえある。例

शाम हो गयी थी।　「夕暮になっていた」

わけても，主動詞を調子づけ，かつ強めるための添え物として盛んに主動詞に付加される जाना の完了形から成る複合動詞は，単なる「過去時相」と本質的には少しも変わらない。例

वह तो चली गयी।　「彼女は去った」

（2）ある「過去」の前に起こった事柄に。例

मुझे एक पत्र मिला। इसमें लिखा था। भाई!　「私は手紙を受取った。その中に「兄弟分！・」と書いてあった。」

注　1）接続詞 कि を伴いながら，「　するや否」の意を示すことがある。しかし，この場合も，कि で導かれる句において示される動作の方が常に時間的に後になるので，前項(2)の一種と見られぬこともない。例

वह अभी गया ही था कि दूसरा मित्र आया।　「彼がたったいま行くと直く別な友人がやって来た」

この形式は，特に動詞 पाना「得る」「許される」か「過去完了」になる場合によく用いられる。例

वह आने भी न पाया था कि मैं चला गया।　「彼が来ると直く私は出かけた」

しかし，この構文では，先立つ不定法語尾が ए 化することと，間に否定詞が置かれる。

2) 本時相もまた，「現在完了時相」同様，時々助動詞が省かれるために，「不定完了時相」と同形になることがあるから注意しなければならない。

4. 可能完了時相 (सम्भाव्य भूत)

「行っていたら」「行っていたかも知れない」

1	मैं गया होऊँ	1 3	हम [वे] गये हों
2 3	तू [वह] गया हो	2	तुम गये होओ

備考 主動詞の完了形に होना の「不定時相」を添付したもの。女性形は，その単複とも主動詞の語尾を यी または ई 化する。本時相は सम्भाव्य पूर्ण वर्तमान「可能現在完了」とも称される。

用　法

（1）前記「可能未完了」（III 4）が「現在」に関連して，ある事柄の起こる「可能性」を述べるに対し，本時相は「過去」に関連しての「可能性」を述べるのに用いられる。すべて，「過去」を対象としての「願望」「推定」「条件」などが言及される。例

यदि मर गया हो तो　　「もし（彼が）死んでいたら…」

वे आ गये हों तो उनको बुला लो।　　「彼らが来ていたら呼びなさい」

（2）本時相が「可能現在完了」とも称されるだけに，「現在完了時相」の意にも用いられる。例

दोनों प्रकार के पेड़ लाना। ऐसे भी जो आप से उगे हों और ऐसे भी जो बोये हुए हों।　　「2種の樹木を持って来なさい。自然に生えたものと，植えられてあるものとを」

5. 推定完了時相 (संदिग्ध भूत)

「行ったに違いない」

1. मैं गया होऊंगा [~—हूंगा]　　1 3　हम [वे] गये होंगे

2 3　तू [वह] गया होगा　　2　तुम गये होंगे

(注) 女性形では，単複・人称の如何に関係なく，すべて主動詞も助動詞も，男性形の末字が ई 化するだけである。

用　法

（1）この時相も，「現在」に関連される前記「仮定未完了」(iii) 5) と対比されるもので，本時相は「過去」に関連して，「ありそうな事柄」を述べたり，確かな事柄を仮定的・推定的に述べたりするのに用いられる。

例

आप थक गये होंगे ।　　「貴方はお疲れになったに相違ない」

मेरा नाम सुना होगा ।　　「私の名を聞いたに違いない」

（2）本時相に，正規な「進行形」はなく，形は「仮定未完了」の場合と共通である。例えば जा रहा होगा は，「現在」「過去」「未来」，つまり「時」に関係なく用いられるので，前後の文脈次第で，「行きつゝあるに違いない」「多分行きつゝあった」「行きつゝあるだろう」の意になり得るわけである。

6　過去可能完了時相 (सम्भाव्य पूर्ण भूत)[(1)]

「行っていたら」「行っていたかも知れない」

1 2 3.　मैं [तू, वह] गया होता　　हम [तुम, वे] गये होते

(注) 1) 女性形は，複数形において助動詞が होतीं となる以外，主動詞も単数

(1) pūrn hetuhetumad bhūt「完了過去条件」とも称される。

形の助動詞も、それらの末字か一様に ए 化する。

2) 否定詞は，既述の１２３の場合とも नहीं，４５６の場合とも न が用いられる。

用 法

（1）「過去」に関連して，事実と相反した「条件」や実行不可能な「願望」を述べるのに用いられる。例

यदि वे वहाँ गये होते तो फिर यहाँ वापस न आते।	「もし彼らか，そこへ行っていたら再びここに帰って来なかったかも知れない」
यदि उसने मुझे कहा होता तो मैं ले कर(1) आता।	「もしも彼か私に言ったら連れて来たのに」

（2）本時相は常は条件文の条件句にのみ用いられるとは限らない。(i) 主文にも，また (ii) 全然条件文でないものにも用いられる。例

(i) कोई न कोई बात है, कदाचित् वह नहीं आएगा, नहीं तो अब तक वह आ गया होता।	「何事かあって，多分彼は来まい。さもなければ今までに彼は来ていたかも知れない」
(ii) तू मारा गया होता, परन्तु बच गया।	「お前は殺されたかも知れないが救われた」

〔b〕 他 詞 動 (सकर्मक क्रिया)

（1）ここでは，不規則動詞の一つである他動詞 देना の「不定時相」「与えるかも知れぬ」「与える」「与えよう」の活用だけを記するに留める。

(1) 接続分詞。

単 数		複 数	
1	मैं दूँ, देऊँ(1)	1 3	हम [वे] दें, देवें(2)
2 3.	तू [वह] दे, देवे	2.	तुम दो, देओ(2)

備考 1)「未来時相」は、この「不定時相」に、それぞれ単複両性の「未来時相」語尾が付されゝば得られること、自動詞の場合と変わらない。(3)

2) 不規則動詞 लेना「取る」の活用も देना のそれと似たものである。すなわち、その「不定時相」の単数は लूँ や ले, 複数は लें や लो となる。(3)

用　法

（1）他動詞が自動詞と異なる点は単に前節〔III〕所載の完了分詞から作られた6時相において主語に後置詞 ने が採られることだけである。従って、この場合、動詞は常に目的語の数や性と一致する。例

मैंने एक पुस्तक पढ़ी ।　　「私は1冊の本を読んだ」

मैंने पुस्तकें पढ़ी हैं ।　　「私は本を読んだ」

たゞし、目的語が को を伴えば動詞は常に第三人称単数男性にとゞまる。例

मैंने उन पुस्तकों को पढ़ा है ।　　「私はそれらの本を読んだ」。

（2）しかしながら、たとえ他動詞の完了分詞で作られた時相でも動作格の採られないこともあれば、逆に自動詞の完了分詞で作られた時相でありながら動作格の採られることもある。従って、最も根本的な問題は他動詞と自動詞との定義の決め方ということであろう。

そこで、それら特殊な動詞の主なるものを挙げてみれば次のようなものである。

(1) 地方的。U P 州イタワ市周辺に使用。　(2) 共に地方的。

(3) 共に123ページ備考 1) の中頃参照。

(i) 他動詞 देना「与える」が自動詞の語根や抽象名詞と合して一種の慣用句的複合動詞に成るとき ने を採らない。例.

वे मुसकुरा दिये ।　　　「彼らは笑った」

वह चल दिया ।=वह चल पड़ा ।　　　「彼は出発した」

वह आता हुआ [=आते हुए] दिखाई दिया ।　　　「彼の来るのが見えた」

なお, सुनाई देना「聞える」, पकड़ाई देना「逮捕される」も ने を採らぬ。ただし, (का) साथ देना （を)助ける」 （と)協力する」や自・他兼用動詞との結合語 घबरा देना-घबराना「困惑させる」には ने が採られる。

(ii) 他動詞 लेना「取る」が होना の語根に伴われる時にも ने が採られない。例

वह मेरे पीछे हो लिया ।　　　「彼は私の後について来た」

वे मेरे साथ हो लिये ।　　　「彼らは私と同行した」

(iii) लाना=ले आना「持って来る」や ले जाना「持って行く」「運ぶ」のように, 他動詞の語根に自動詞が添付されたものも同様である。例

मैं यह लाया हूँ ।　　　「私はこれを持って来た」

ちなみに, 自動詞 लाना は受動態にもなれる。例

वह काम में लाया जाता है ।　　　「それは役にたつ」

〔直訳=それは仕事の中にもたらされる〕

(iv) 自・他兼用動詞 जनना「生む」「生まれる」もそうである。例

माता मुझे जनी ।　　　「母は私を生んだ」

(v) 自動詞 बोलना「話す」, 他動詞 समझना「了解する」, 自動詞 खाँसना「せきをする」, छींकना「くさめをする」などは, ने の採否任意である。

例

तुम मुझसे झूठ क्यों बोले [=तुमने··　「君はなぜ私に虚言をいったのか」
बोला] ?

वह मेरी बात नहीं समझा [-उसने　「彼は私の言葉が分らなかった」
समझी] ।

同様，मैं (ने) खाँसा ।「私はせきをした」である。

なお，強意複合詞 समझ जाना が ने を採らないのはいうまでもないが，समझ लेना は採る。また，यह सब से अच्छा समझा जाता है ।「これは最も良く感ぜられる」などと受動態にもなる。बोलना も वहाँ दो भाषाएँ बोली जाती हैं ।「そこには二つの言語が話される」などと受動態にもなる。

(vi) लड़ना「戦う」は単独に用いられるとき ने を採らないが，同義の目的語が用いられる時には ने が採られる。例

वे लड़े ।　「彼らは戦った」

वह अपने शत्रुओं से लड़ा ।　「彼は自身の敵らと戦った」

उन्होंने लड़ाइयाँ लड़ी ।　「彼らは数々の戦を戦った」

また，この動詞の使役形 लड़ाना「戦わせる」「戦う」の語根に देना を添んた強意複合詞にしたものが ने や目的語を採ることは当然である。例

उन्होंने जानें लड़ा दीं ।　「彼らは命がけで戦った」。

備考 1) 大体，この動詞が目的語を採るのは，9分通り「戦争」が対象とされる。これに反し，目的語を採らぬ方は，「戦争」以外に，「個人間の争い事」にも用いられる。たゞし，कुश्ती*F* लड़ना「すもう（相撲）を取る」は例外。

2) 自動詞にして動詞と同義の目的語を採り得るのは लड़ाई लड़ना「戦いをする」や खेल खेलना「遊戯をする」以外にも見出される。例

आओ, झूला झूलें ।　「来給え，ぶらんこをしよう」

वे पूरी नींद सोते हैं ।　　　　「彼は熟睡している」

(vii) चाहना「欲する」「愛する」も単独の時にはその主語に ने か採られるが, मेरा जी चाहा कि 「私は　を欲した」(訳直　私の心は　を欲した) の構文では, 主語 जी「心」に ने が採られない。

(viii) भूलना「忘れる」も主語に ने を取らない動詞であるが, この動詞は単独に用いられることはほとんどなく, 常に語調のために जाना を伴う。例

अपने को भूल जाऊं ।　　　　「自分を忘れよう」

मैं उसे लाना भूल गया ।　　　　「私はそれを持って来るのを忘れた」

उसे यह कहना न भूल जाना ।　　　　「彼にこれをいうのを忘れないで下さい」

備考　1) 上記のほか वे इसको सुना किये ।「彼らはこれを聞くのが常であった」のように「習慣」を表わす場合, および他動詞 पाना「得る」が「許される」意に用いられる時には, 主語に ने が採られない。(1)

2) 自動詞 खेलना「遊ぶ」「かけ事をする」は, जुआ「とばく」 ताश「トランプ」, गतका=गदका「打球棒」「バット」, (का) शिकार*P*「狩猟」その他 कुश्ती*P*「すもう」以外の競技名などを目的語として用いられると共に, 例えば यहाँ यह खेल नहीं खेले जाते ।「こゝではこれらの遊戯はやられない」のように受動態にもなる。本来, 自動詞は目的語を採り得ない原則になっているにもかゝわらず, インド語では自動詞と同義の名詞がよく目的語として用いられる。例 कूद*, कूदना「(跳びを) 跳ぶ」, झूला झूलना「(ぶらんこを) ぶらんこをする」, थरथर काँपना「(身震いを) 身震いする」, (का) नाच नाचना「(の) 踊りを踊る」。用例

वह कितनी मीठी नींद सो रहा है !「彼は何という甘味な眠りを眠っていることよ」。

(1) 156ページ(1) および 161ページ(2)(ii) 参照。

3) 完了形動詞の主語が二つ以上から成るとき，その各々に ने が添付される。例

उसने और उसकी पत्नी ने देखा। 「彼と彼の妻とが見た」

4) ある種の他動詞は，その単一語と複合語との如何に関係なく，自動詞的な意味に用いられることもある。例 उल्टी* करना=–आना「はき気を催す」「はく」，देर* करना「遅れる」。用例．

मोटी निब वाला साफ-सुथरा लिखता है। 「太いペン先きのはきれいに書ける」。

5) ヒンディーで自動詞扱いされる डरना「恐れる」は目的語に से が取られる。

II・受動動詞 (कर्मप्रधान क्रिया)(1)

1. 作り方

他動詞の完了分詞に，動詞 जाना「行く」の各時相を添えて作られる。例 देखा जाना「見られる」。試みに，これが語根，未完了分詞および完了分詞にわたり，その代表的な時相を掲げてみることにする。

(i) 不定時相(2)

「見られるかも知れぬ」「見られる」「見られよう」

	単　数		複　数
1.	मैं देखा जाऊँ [देखी जाऊँ]	1.3	हम [वे] देखे जाएँ [देखी जाएँ]
2 3	तू [वह] देखा जाए [देखी जाए]	2	तुम देखे जाओ [देखी जाओ]

(ii) 不定未完了時相

「見られたら」

(1) または karm vácya kríyâ* ともいわれる。

(2) 能動動詞の場合には「性」の差別は無かったが 受動動詞の場合には主動詞の語尾だけに性別が起こる。なお「希求法」では「 は さるべきだ」の意となる。

1 2 3. मैं [तू, वह] देखा जाता　　हम [तुम, वे] देखे जाते
[देखी जाती]　　[देखी जाती]

(iii) 現在完了時相

「見られた」

1　मैं देखा गया हूँ [देखी गई हूँ]　1 3　हम [वे] देखे गये हैं [देखी गई हैं]

2 3　तू [वह] देखा गया है [देखी गई है]　2　तुम देखे गये हो [देखी गई हो]

2. 用　法

(1) 元来，ヒンディーには，いわゆる「受動的自動詞」(कर्मकर्तृक)，つまり自発的行為の暗示される受動的意味を自ら備えた自動詞を初め，受動態的性質を持つ幾通りかの構文があるので，जाना を補助動詞とする普通の受動態の使用範囲が比較的狭い。(1)

(2) 従って，いわゆる受動態の使用されるのは次のような場合である。

(i) 行為者が不明であるか，またはたとえそれが分っていても表明する必要のない場合。例

गाँधी जी महात्मा समझे जाते थे ।　「ガーンディーさんは「偉大な魂」と了解されていた」。

(ii) 接続詞 कि が書かれると否とにかゝわらず，従属文を伴いながら，無人称的に事を述べるような場合，常に第三人称男性単数の受動態が採られる。例

कहा जाता है (कि)　「 と言われる」

यह देखा जाता है कि　「…ということが見られる」。

(3) 慣用的に主語によく対格が採られる。例

(1) 145ページ〔備考〕5) 参照。

तुम्हें बताया गया था कि · 　「君は…ということを告げられた」

लड़के बुलाये जाते हैं । 　「少年達が呼ばれている」
=लड़कों को बुलाया जाता है ।

यदि यह[इसे] न हटाया गया तो 　「もしも，これが退けられなければ，
हम ठोकर खाएंगे । 　われわれはつまづくだろう」

注2 主語と目的語から成る構文では，真の主語が与格にされるために意味上の主語化され，真の目的語が文法上の主語となる。例

उसको दण्ड दिया गया । 　「彼は罰を与えられた」(直訳=「罰が彼に与えられた」)

このような構文は，「・が と認められる」とか，「 が に作られる」とかいった種類の補語と他動詞から成る述部を有する「物」を示す主語にも採られる結果，その補語名詞が文法上の主語になる。さもない限り，このような固苦しい気取った形式は避けて，普通の主格主語を採る受動態が望ましい。

（4）特に動作の「行為者」を示す必要のある時には，その行為者に से「によって」; के हाथ (से)=के हाथों (से)「・・の手で」「・・によって」などが採られる。[1]例

वह शत्रु के हाथ से मारा गया । 　「彼は敵に殺された」

（5）この「行為者」に से を採る受動態の構文にはよく「能」「不能」の観念が表わされる。例

वह मुझसे देखा न गया । 　「それは私には見ていられなかった」

वह काम मुझसे लिया जाता है । 　「その仕事は私にできる」

क्या तुमसे यह कवितासंग्रह पढ़ा नहीं जाता ? 　「君にこの詩集が読めんのか」

たゞし，से が「事物」に付けば「原因」が表わされる。[2]例

(1) 251ページ「器格」備考参照。
(2) 251ページ「器格」と258ページ「奪格」項，および次節「非人称動詞」参照。

इससे क्या काम लिया जाता है ?　「これは何の役に立つか」

(6) 強意のために，普通の順位を変えて，主語か受動々詞の間に置かれることがある。例

देखा यह गया कि　「　ということが見られる」

備考 1) अपनाना「自分のものとする」=अपना करना のような代名詞的動詞も受動態になれる。例

अपनाये जाने के कारण　「自身のものとされるために

2) 一見 普通の受動態に見えても，実は他動詞の語根に強意の जाना が添付されたものがある。(1)例

राजा उसको राज्य दे गये हैं।　「王は彼に王座〔即ち統治権〕を与えた」

3) 例えば，बुझाये नहीं बुझना「如何にしても消されない〔火や燈などが〕」や हटाये नहीं हटना「どうしてものけられない」などのように，ある種の他動詞は「強い否定」を打出すために，受動態用の補助動詞 जाना の代りに，それ自身の自動詞を採るものがある。一種の否定擬態受動態ともいうべきものであろう。これが真の受動態と異なる点は両動詞に常に否定詞が置かれるばかりでなく補助動詞となる自動詞が主語の性や数と一致するか，主動詞となる他動詞の完了形が常に語尾が ए (=ये) 化されることである。例

यह लकडी उठाए नहीं उठेगी।　「この材木は到底持ち上げられまい」

4) 受動態の「現在分詞」や「過去分詞」は，それぞれ बनाया जाता हुआ「作られる」; बनाया गया हुआ「作られた」となる。主語の性や数に一致することは無論で，形容詞にも転用される。

5) そのほか，普通の受動態以外の構文にして，受動詞的意味になる主なるものを列挙してみよう。

1) 受動的自動詞。(2)例

वहाँ पक्के आम बिक रहे हैं।　「そこに熟したマンゴーが売られている」

---

(1) 154ページ(5)参照。　(2) 149ページ(2)参照。

これを一般受動態の構文と比較してみれば，例えば उसकी घडी फाडी गई। において，「彼の時計が（誰かに）壊された」ことになるが，同一動詞の受動的自動詞を使って फूट गई または टूट गई とすれば「自然に壊われた」ことになる。

また，例えば「私は非難されている」という場合に，मुझको दोष लगा है। という単なる「現在完了時相」の代りに，受動態の「現在完了時相」मुझको दोष लगाया गया है। を以てすれば，「私は何も悪いことをしないのに」の意が暗示される。

ii) 名詞や形容詞と होना との結合から成る複合動詞。例 (का) प्रयोग होना「(が) 用いられる」，प्राप्त होना「得られる」(1)

iii) ある種の名詞や動詞の不定法に伴われる में आना の構文。例 वह काम में आता है। [— में लाया जाता है]「それは役に立つ」，वह देखने में आया।=वह देखा गया।「それは見られた」。

iv)「状態」を示すために，他動詞の「過去完了時相」の中間に होना の完了形をさしはさんだ構文。例

वे घर गये हुए हैं।　　「彼らは帰宅している」

दराज में ताला दिया हुआ है।　　「引出しにじょうかかゝっている」。

v) चला जाना「行く」「去る」は，चलना「行く」「歩く」の使役形 चलाना「行かせる」に जाना を添付したので，外形だけは受動態と同じであるが，意味は自動詞である。本複合動詞は「人」以外のものにも使用される。例 यह पानी कहाँ चला जाता है?　「この水はどこへ行くのか」。

vi) खाना「受ける」「こうむる」から成る名詞動詞も常に受動的意味になる。例 मार* खाना「打たれる」; जूती* खाना「くつで打たれる」, रगड* खाना「こすられる」。

(1) 162ページ5 (1) 238ページ(19) (i), および239ページ2 (a)(i)(1)参照。

III　無人称動詞 (भाववाच्य क्रिया)(1)

これは受動態の一変種である。たゞ，普通の受動態が常に他動詞を基礎とする受動形にして，主動詞も補助動詞も共に主語の数や性に一致するに対し，無人称動詞は外形が似ているだけである。すなわち　自動詞が基礎となる受動形であって，主動詞も補助動詞も常に第三人称の男性単数にとゝまることである。そして，主語が表明されるとき　常に से が採られる。本構文は専ら「能」「不能」を示すのに用いられる。例

उनसे जाया(2) [आया] नहीं जाएगा। 「彼は行け（来られ）まい」

उनसे चुप चाप बैठा नहीं गया। 「彼［または彼女］らは黙って座っていられなかった」

मुझसे नहीं रहा जाता। 「私には我慢できない」(3)

備考　この रहा जाना は「せざるを得ない」の意を表わすために　従格化即ち語尾が ए 化した完了分詞を伴ったり伴われたりする否定前置詞兼後置詞 बिना「せずには」を有する否定文中によく用いられる。例

मुझसे बिना खाये नहीं रहा जाएगा। 「私は食べないでいられまい」。

また，これと同じ意味は後で言及される自動詞 सकना「できる」を用いた रह सकना を以ても表わされる。たゞし　この場合には　受動態でないから　主格主語が採られる。例

मैं वहाँ गये बिना न रह सका। 「私はそこへ行かぬわけにいかなかった」。

なおまた後で言及される पड़ना も「せぬわけにいかなかった」との意を示すのに用いられる。

---

(1) 一名 bhāva pradhān kriyā 「無人称の動詞」とも称される。

(2) 不規則完了分詞 गया でなく，規則的完了分詞が使用されているのに注意。

(3) 「ジッとしていられない」「座視するに忍びない」意。

IV. 使役動詞 (प्रेरणार्थक(1) क्रिया)

1. 概　説

これは，自身が「…する」「…させる」意を示すための普通の使役動詞(2)と自身が「第三者をして…させる」「第三者から…してもらう」意を示す第二使役動詞(3)とから成る。共に他動詞であるから動詞の「完了時相」から作られる6時相の場合，主語に ने の採られるのは当然である。

しかしながら，全動詞が皆自動詞，両使役動詞を具備するわけではない。例えば他動詞 पाना(4)「得る」「受取る」のように使役形を欠くものを初めとして，自動詞 जाना(5) や होना(6) などのように他動詞や使役形を欠くもの逆に，पढ़ना「読む」など多くの他動詞のように自動詞を欠くものがある。そして，意味的内容はとにかく，規則的な使役形の作法としては，普通の使役動詞の場合，語根に आ または ला を，また二重使役動詞の場合には वा または लवा を添付するのが一般的である。意味的内容としては，例えば他動詞 करना の両使役形 कराना＝करवाना「させる」のように，両使役形が同義に扱われる動詞もまた少なくない。

(1) 受動的自動詞	他動詞	使役動詞
बनना「作られる」	बनाना「作　る」	बनवाना「作らせる」
पिटना「打たれる」	पीटना「打　つ」	पिटवाना「打たせる」

(1)「励ます」意の形容詞。
(2) 第一使役 (पहली प्रेरणार्थक) といわれる。
(3) 第二使役 (दूसरी प्रेरणार्थक) といわれる。
(4) देना「与える」が「得させる」意の使役的概念を与えるのに用いられる。
(5) भेजना「送る」が「行かせる」「派遣する」といった使役的意味に用いられる。
(6) 他動詞 करना が「あらしめる」意の使役動詞として代用される。

(2) 能動的自動詞　　使役動詞　　二重使役動詞

चलना「歩〔動〕く」　चलाना「歩〔動〕かせる」　चलवाना「歩〔動〕かせてもらう」

उठना「起きる」　उठाना「起こす」　उठवाना「起してもらう」

चढ़ना「登る」　चढ़ाना「登らす」　चढ़वाना「登らせてもらう」

なお，受動的自動詞 ढलना「注がれる」の他動詞は ढालना「注ぐ」て，二重使役動詞は ढलवाना「注いでもらう」である。

2. 作り方

各動詞の意味的な内容は別として，単に使役動詞の作り方を示せは次の通りである。

(1) 短母音に先立たれ，かつ，その語根が子音にて終る動詞にあっては，他動詞や使役動詞または二重使役動詞を作るのに，基礎となる動詞の語根にそれぞれ आ または वा が添付される。例.

सुनना「聞く」　सुनाना「聞かせる」　सुनवाना「聞かせてもらう」

同類語＝उठना「起きる」，उड़ना「飛ぶ」，बनना「作られる」「できる」，लिखना「書く」，पढ़ना「読む」，जलना「燃える」，दौड़ना「走る」，करना「する」，खेलना「遊ぶ」[1]　गिरना「落ちる」，मिलना「会う」。

また，二つの短母音や二重母音に先立たれる時，および語根が Anusvára にて終る時にも同様である。例

बदलना「変わる」，भटकना「路を迷う」，पकड़ना「捕える」，चिपकना「粘着する」，चमकना「輝く」，समझना「了解する」(自・他)

खौलना「煮える」「沸く」，औटना「煮る」「沸かす」「煮える」

---

[1] これの使役形と二重使役形とはそれぞれまた खिलाना, खिलवाना ともなる。

तैरना「泳ぐ」, दौड़ना「走る」, फैलना「拡げる」, बैठना(1)「座る」, हँसना「笑う」。

たゞし，この場合，基礎動詞や二重使役動詞における第2短母音が，他動詞や使役動詞において無声になる。例．badalnâ「変る」→badlanâ「変える」, samajhnâ「了解する」→samjhânâ「わからせる，「説得する」。

なお，कहना「話す」「名づける」の使役形 कहलाना が「称される」との受動的意味を有し、その代用語 कहलाना「話させる」「名づけさせる」「…と称される」कहलवाना が「話してもらう」「名づけてもらう」となるなどは例外である。

（2）前項とは同一の語根であるが，その使役形〔他動詞兼用〕を作るのに，語根の短母音を長母音化し，二重使役形において再びもと通りの短母音に वा を添付するもの。例．

बँटना「分配される」　बाँटना「分配する」　बँटवाना「分配してもらう」

पिटना「打たれる」　पीटना「打　つ」　पिटवाना「打ってもらう」

たゞし，この場合，短母音 उ で終るものに限り，他動詞において ऊ でなく ओ 音に変わる。例

घुलना「溶ける」　घोलना「溶かす」　घुलवाना「溶かしてもらう」

同類語＝कटना「切られる」, खिचना「引張られる」(2), खुदना「掘られる」, खुलना「開かる」「開けられる」, छिनना「奪われる」, छिलना「皮がむかれる」, तुलना「秤られる」(3) दगना「発砲される」「焼印を押される」, दबना(4)「圧さ

(1) 正規の形 बैठाना のほかに बिठाना も容認される。बैठलाना, बिठालना, बिठलाना などの形は卑語である。

(2) この使役形は खींचना ともなる。

(3) 使役動詞はまた तौलना とも言われ，二重使役動詞は तुलाना, तौलाना となる。

(4) これが使役形は दबाना のほかに दबाना が使用される。

れる」，पलना「育てられる」，पिसना「(粉に)ひかれる」，बँधना「縛られる」「結ばれる」，मरना「死ぬ」(1)，मुड़ना「曲る」「曲げられる」，रुकना「止まる」，लदना「積まれる」，लुटना「盗まれる」，सिचना「水をやる」「かんかいする」。

たゞし，次の諸動詞にあっては，基礎動詞である自動詞における短母音 इ が，その他動詞において ई 音にならないで ए 音となる。例

छिदना「孔が開く」　छेदना「孔を開ける」　छिदाना / छिदवाना }「孔を開けさせる」

同類語=घिरना「囲まれる」 फिरना「帰る」「うろつく」 फिंकना「投げられる」(2) मिटना「除かれる」「ふき消される」(3)，दिखना「見られる」(4)。

なおまた，短母音から成る２音節語においては，その第２短母音が，他動詞において長母音化される。例

उखड़ना「根こそぎにされる」　उखाड़ना「根こそぎにする」　उखड़वाना「根こそぎにしてもらう」

同類語=उतरना「降りる」，बटुरना「集められる」，बिगड़ना「損われる」(5) सम्भलना=सम्हलना「支えられる」，निकलना「出る」。

（３）長母音に先立たれながら子音にて終る基礎動詞にあっては，その長母音が他動詞や使役動詞において短母音化されたうえ，それぞれ आ, वा が添付される。例

---

(1) 使役形では「殺す」意味のほかに「打つ」「負かす」などの意にもなる。

(2) 二重使役形において फिरवाना とも फेरवाना ともなる。

(3) 使役形では मेटना よりも मिटाना の方が一層多く使用される。

(4) 他動では他動詞「見る」の意にもなる。その時 दीखना と同義語になり，自動詞の意味の時 共に दिख [—दीख] पाना がよく用いられる。

(5) 使役形に बिगड़ाना bigṛānā も使用される。

जागना(1)「目がさめる」 जगाना「目をさます」 जगवाना「目をさましてもらう」
भीगना「ぬれる」　　भिगाना「ぬらす」(2)　भिगवाना「ぬらしてもらう」
डूबना「没る」「沈む」 डुबाना「没す」「沈める」(3) डुबवाना「沈めてもらう」
同類語=सीखना(4)「習う」，घूमना「散策する」，देखना「見る」(5)。

たゞし，この場合にも，前項（2）の逆に語根が ओ で終るものは उ に変わる。例

जोतना「耕す」　जुताना「耕させる」　जुतवाना「耕してもらう」

（4）語根が，長母音 आ, ई, ए にて終る1音節語である他動詞の場合にも，その長母音を短母音化する点では前項同様であるが，そのうえ更に両使役形にそれぞれ ला lā, लवा lwā が添付される。例.

खाना「食べる」 खिलाना「食べさせる」(6) खिलवाना「食べさせてもらう」
पीना「飲　む」 पिलाना「飲ます」　　पिलवाना「飲ませてもらう」
देना「与える」 दिलाना「与えさせる」　दिलवाना「与えてもらう」

同類語=सीना「縫う」。

लेना「取る」の使役形は लिवाना「取らせる」であり，लाना「持って来る」の使役形には特に लिवा लाना「持って来させる」が使用される。(को) लिवा ले जाना「(に)運ばせる」もよく用いられる。また गाना「歌う」も गवाना「歌わせる」となる。

---

(1) また जगना ともなる。　(2) または भिगोना.　(3) または डुबोना.

(4) 使役形 सिखाना「教える」に対する सिखलाना は稀。

(5) 使役形 दिखाना「見せる」に対する दिखलाना は俗語である。

(6) また，使役形で「養う」，二重使役形で「養わせる」意ともなる。この形はまた खेलना「遊ぶ」や खिलना「花開く」などの使役形をも兼ねる。

ただし，ऊ や आ にて終るものは短母音 उ になる。例

सोना「眠る」　सुलाना「眠らせる」　सुलवाना「眠らせてもらう」

同類語=रोना「泣く」。

たゞし छूना「触る」には正規の使役形 छुवाना「触らせる」のほかに छुआना があり，खोना「失う」には使役形 खुवाना, खोआना「失わせる」がある。また，बोना「(種子などの)まく」にも使役形 बुवाना や बुआना などが用いられる。(1)

（5）全く不規則なもの。例

विकना「売れる」	बेचना「売　る」	विकवाना「売らせる」
टूटना「壊れる」	तोडना「壊　す」	तोडवाना / तुडवाना「壊させる」
फटना「裂かれる」	फाडना「裂　く」	फडाना / फडवाना「裂かせる」
फूटना「破れる」(2)	फोडना「破　る」	फोडवाना「破らせる」
छूटना「解放される」	छोडना「放　つ」	छुडाना / छुडवाना「放たせる」
धुलना「洗われる」	धोना「洗　う」	धुलाना / धुलवाना「洗わせる」

3　用　例

(i) 使役動詞と，(ii) 二重使役動詞との用例。

(i) दूत दौडाये गये।　「使者達が走らせられた」

उसने मुझको लौटा दिया।(3)　「彼は私を帰らせた」

हमको दिखाओ (=दिखलाओ)।　「ぼくに見せ給え」

(ii) हाथ मुँह धुला दो।(3)　「手足を洗わせなさい」

---

(1) बोआना, छूआना の形は正しくない。

(2) 「裂ける（豆などが）」「発芽する」「わき出る」「拡がる」その他の意にもなる。

(3) 共に 155 ページ「複合動詞」〔備考〕参照。

उसने तुझे बुलवाया है।　　　「彼はお前を呼びによこした」

एक कोट बनवाने की मेरी इच्छा है।(1)　「私は上衣を一着作らせたい」

たゞし，「誰某をして　させる」のように，「誰某を　」と被使役者を明示する必要のある時には，それに具格 से が採られる。例

इसका उत्तर मुझसे लिखवा लो।(2)　「この返事を私に書かせなさい」

मैं उससे तुम्हें क्षमा करा दूँगा।　「彼が君を赦すようにさせましょう」

V　複合動詞 (संयुक्त क्रियाएँ)

その構成上から見るならば，大体，主動詞の基礎となるものが，(i) 動詞の語根 (ii)「未完了分詞」，(iii)「完了分詞」，(iv)「不定法」の４種から成っている。それに，いわゆる「名詞動詞」や「熟成語」も，これに加えることができよう。

1. 語根を基礎動詞とするもの

この場合における主なる補助動詞は次の通りである。

（1）आना「来る」——ある動作を済まして来る意に用いられる。例 लौट—「帰って来る」，निकल—「出て来る」，हो—「行って来る」。時々，「　しかゝる」意にもなる。例

वह सो आयी।　　　「彼女は眠りかかった」

この補助動詞は，語根と同形にもなり得る接続分詞の後にもよく用いられるので，真の複合動詞と甚だ混同され易い。つまり，接続分詞の印である कर その他の同種の添付語が省略される場合のことである。この場合，常に「　してから来た」意となる。例

(1) 直訳=「一着の上衣を作らせるべき私の念願がある」
(2) 155 ページ「複合動詞」(8) およびその付記参照。

(2) आना——「感じる」「感じ出す」の意として抽象名詞と結合する場合。この時にも意味上の主語に与格が採られる。例

मुझको उसपर दया आई । 「私は彼に同情した

उसको बहुत [=बड़ा] क्रोध आया । 「彼は非常に怒った

註 1) आना が「知る」 で用いられる時にも同一の構文が採られる 例

मुझे अंग्रेजी नहीं आती । 私は英語を知らない

2) なお आना と結合する主なる抽象名詞を挙げてみるならば नींद*「睡眠」 विचार「思考」 रतौंदी*「鳥目」その他の病名を初め नजर*A「見えること」 पसंद*P「愛好」, यादP「思い出し」「記憶」, शर्म*P「恥入り」 होशP「感覚」「正気」など 特にウルドゥー系のものが少なくない。

3) काम (में) आना は「役立つ」で、

(3) पड़ना——抽象名詞に伴われて。例

उसको चोरी की आदत पड़ गई । 「彼には盗癖があった」

मुझको यह समझ पड़ता है कि वह न आएगा । 「私は彼が来まいと想う」

本助詞は，特に次のような特定の抽象名詞との成句によく用いられる。例 दिखाई पड़ना [=—देना]=देख [=दीख] पड़ना=दीखना「見える」，सुनाई पड़ना [= —देना]= सुन पड़ना「聞こえる」，जान पड़ना = मालूम पड़ना [=—होना]「知れる」「 らしい」などである。用例

उसको दिखाई पड़ता है कि 「彼には するのが見える」

मुझे उसकी आहट सुनाई पड़ी । 「私に彼の足音が聞こえた」

(4) लगना——名詞や形容詞と結合して「感じる」「見える」「くっつく」意に用いられる時，意味上の主語に与格が採られる。例

मुझको भूख [प्यास] लगी । 「私は空腹〔渇〕を感じた」

मुझे यह वस्तु बुरी लगती। 「私はこの品物を好まない
[=—अच्छी नहीं लगती](1)

注 1) 現在完了時相 मुझको भूक (=भूख) लगी [हुई] है। は「私は空腹を感じている」 現在時相 मुझको भूख लगती है। は，病気などの折 医師から食欲の有無を訊かれた時の返事で，「私はお腹が空く」 意。単なる मुझको भूख है। や मैं भूखा हूं। は 共に，ひもじさを訴える時のことばの言葉である。従って 「お腹がすきますか」の意味で क्या आप भूखे हैं? というのは誤りである。

2) उसे चोट लगी।「彼は負傷した」や उसको दसवाँ वर्ष लग गया।「彼は10歳になった」なども それぞれ前項の(2)や(3)と互に相当するものがある。また उसकी बात मुझको लग गई। は 「彼の言葉が私の気に障った」意の慣用句。

3) なお 本項に属する2 3の例を挙げるならば चसका—「習慣となる」 लू—「日射病になる」などがある。

(5) रहना——抽象名詞や形容詞に伴われる。「継続」が表わされる以外，構文その他の点で होना と抽象名詞や形容詞から成る名詞動詞と同じである。例 बुखार ♂—「熱がある」 याद ♀—「記憶し続ける」 用例

मैं वहाँ खड़ा रहा। 「私はそこに立ち続けた」

उसको अच्छे बुरे का ज्ञान न रहा। 「彼には善悪の認識がなかった」

注 以上列挙したいわゆる「名詞動詞」に似たものに 目的語としての名詞と動詞とが結合した複合詞がほとんど無数に存在する。これらは 真の 名詞動詞」と違って 動詞は常にその先立つ目的語の名詞の性や数と一致させなければならない。つまり पसंद* करना「好む」や दिखाई* देना「見える」 におけるis補助動詞がその先立つ語とは決して一致することなく，それらの複合詞に先立つ真の目的語の数や性と一致するのと異なるわけである。例

(1) 名詞動詞中の形容詞は 目的語の数や性と一致する。

i) उठना「起ち上る」——例 जी—「よみがえる」。

ii) उठाना「挙げる」——例 लाभ—「利益を挙げる」, त्याग का आनन्द—「自己犠牲を喜ぶ」。

iii) खाना「食べる」「こうむる」——例 धोखा—「欺かれる」, ठोकर* —「つまつく」, शपथ s —「誓う」, पछाड—「仰向けに倒れる」「苦悩する」。

iv) देना「与える」——例 जन्म s —「生む」, दर्शन s —「会う」, पहरा—「見張る」, प्राण s —「死ぬ」。

v) मारना「打つ」——例 ठोकर—=—लगाना=लात—「け(蹴)る」, छलाग—=—लगाना「跳ぶ」, (की) गप-शप*—「(の)雑談をする」, गोली*—「弾で打つ」, मुक्के—「けん骨で打つ」。

vi) रखना「置く」「持つ」——例 उपवास s —=—करना「断食する」, (पर) भरोसा—=—करना「信頼する」, गिरवी*—「抵当に入れる」。

vii) लेना「取る」——例 उधार—「借金する」, उबासी*—「あくびする」, करवट[=करवटें]—「寝返りする」, जन्म—「生れる」, बदला—「報復する」。

viii) लगाना「結合する」「用いる」——例 गले—「抱く」, चक्कर s —「歩き回る」, डुबकी*—[=—मारना]「もぐる」「沈む」, देर*p —「遅れる」。

6 畳成語 (दुहराये हुए शब्द)

名詞や形容詞にも見られたように, 語調を良くするため類似音や同義語の動詞を並用することがある。例 कहना-सुनना「批判する」「議論」, घूमना-घामना「うろつく」, पढाना-लिखाना=शिक्षित करना「教育する」, सजना-सजाना「飾る」「整える」, समझना-बूझना「了解する」。用例.

उसने मुझको समझाया-बुझाया। 「彼は私を説得した」

वह घूमती घामती मेरे पास आई। 「彼女は回り回って私の所へ来た」

第九章 副 詞[1] (क्रियाविशेषण)[2]

副詞にはその単一語と複合語，基礎語と派生語など幾多複雑な内容や種類があっても，大別して (i)「時を示すもの」(ii)「場所」または「方向」を示すもの (iii)「分量」や「程度」を示すもの (iv)「様態」を示すものとに分類される。[3]

1 「時」の副詞 (काल-वाचक)

सदा s =सदैव s =हमेशा P 「常に」, आज 「今日」, कल 「昨日」「明日」[4], आजकल 「昨今」, परसों 「一昨日」「明後日」[4], तरसों=अतरसों 「一昨々日」「3日後に」[4], नरसों 「4日前に」「4日後に」[4], प्रतिदिन s, रोज P =हर रोज P 「毎日」, प्रतिवर्ष s 「毎年」, बहुधा s =अक्सर A 「しばしば」, पुनः s =फिर (से) 「再び」, तुरन्त s =चट=झट पट 「直ちに」, अचानक s =यकायक P 「突然」。

この種のものには「時」を示す名詞からの転用語が多い。例 दिन 「日」「昼」「昼に」, रात 「夜」「夜に」, दिन रात=रात दिन 「日夜」, दिन दिन 「日毎に」「毎日」, प्रात s =प्रातःकाल 「早朝」「朝早く」。

そして，名詞が副詞に転用されると，単数従格化 即ち आ で終るものの語尾が ए 化される。例 सवेरा =तड़का 「早朝」→ सवेरे=तड़के 「朝早く」。

---

(1) 副詞 後置詞 接続詞 感動詞の4品詞は 不変語として अव्यय avyaya s 「語形変化をしない語」と称される。

(2) viśeṣan だけでも「副詞」「形容詞」「修飾語」などの意になる。kriyā と一緒になって「動詞を修飾する語」の意。

(3) いわゆる「代名副詞」も この4種の分類中に含まれる。

(4) いずれの意に用いられるかは 動詞の時相で見分けがつく。そして これらは 名詞にもなる

その他 आगे(1)「先きに」「先程」, पीछे(1)「後で」「後刻」, महीने महीने「毎月」, हफ्ते हफ्तेr「毎週」などすべて आ で終わる名詞からの転用語である。また, この反復に当り, 慣用的に前語か複数従格形か採られることかある
例 दिनों दिन「日ごとに」「毎日」, रातों रात「夜中の内に」「夜中」。

なお,「状態」「時」を示す名詞か一般の形容詞や指示形容詞に導かれる場合にも副詞化する。その際, आ で終るものはやはり従格化することに変わりない。例 एक दिन「ある日」, दो सालr「2年間」, अगले साल「来年」, पिछले साल「去年」, दूसरे दिन=अगले दिन「翌日」, तीसरे चौथे वर्ष「3・4年目に」, इस साल「今年」, उस दिन「その日」「当日」, उन दिनों「その頃」「当時」, किस समय「いつ」, किसी समय「いつか」, किसी दिन「いつか」「いつの日にか」, कुछ दिन「数日間」。

また, まれに,「時」を示す両名詞が के で結合しながら副詞句を作ることもある。例 दिन के दिन「毎日」, साल के साल「毎年」, पल के पल「毎瞬間」。

2 「場所の副詞」(स्थान-वाचक) と「方向」の副詞 (दिशा-वाचक)

अलग「離れて」, आगे=सामने=आमने-सामने「前方に」「前に」, आस-पास「周囲に」, पास=निकटs「側に」, ऊपर「上に」, ऊपर नीचे「上下に」, नीचे「下に」, पीछे「背後に」, भीतर=अन्दरr「内側に」, बाहर「外に」, वार「こちら側に」, परे「向うに」, दूर「遠方に」, सर्वत्रs「到る所に」, बाएं「左に」, दहिने「右に」, उस ओर「その方へ」, किस ओर「どの方に」, बाईं ओर「左の方へ」, दहिनी ओर「右の方へ」。

---

(1) 両者とも「場所」にも用いられ「前方に」とか「背後で」の意になる。

注 「建物」を示す名詞や「地名」などは副詞的となる。例 वह उसे घर लाया। 「彼はそれを家へ持って来た」，तुमको थाने ले चलूँगा। 「君を交番へ連れて行こう」，वह पाठशाला [बक=बङ्क, स्टेशन, पूना, आगरे] गया। 「彼は学校（銀行，駅，プーナー，アーグラ）へ行った」。

3 「分量」「程度」の副詞 (परिमाण वाचक)

原語の示す通り，「分量」「程度」「額」を示すものではあるが，これに所属する副詞が最も少ない。例 अत्यन्त $_s$，अति$_s$，बहुत「大いに」「非常に」，किंचित$_s$「やや」「幾分」「少し」，प्राय $_s$「ほとんど」，केवल$_s$,सिर्फ$_A$，बस「たゞ」「単に」，ज़रा(1)「少し」「ちょっと」，बिलकुल$_A$「全く」「全然」，लगभग「ほとんど」「およそ」。その多くは他の品詞からの転用語であって，その主なる場合は次の通りである。

(i) 一般形容詞から。——例 थोड़ा「少し」「やゝ」，थोड़ा-बहुत「ある程度」「少し」，बड़ा「大いに」「非常に」，अधिक$_s$「大いに」「非常に」，अधिक से अधिक「多くとも」，कम से कम$_P$「少なくとも」。

これらは，名詞を修飾する他の一般形容詞に先立つ場合に副詞となることが多い。そして，आ で終るものは副詞転用の場合でも，やはり आ で終る形容詞もろとも，名詞の性や数と一致する。例 बड़ी बुरी आलोचना「非常に悪い批評」。

(ii)「不定代名詞」から。——例 कुछ, कुछ कुछ「少し」「やゝ」「幾分」，बहुत-कुछ「大いに」「たいへん」。

(iii)「代名詞形容詞」から。——例 इतना「これだけ」，उतना「それだけ」，

(1) 本語に限り 決して語尾変化しない。

v) この副詞句の間に否定詞 न が置かれることもある。例

रुपया पैसा नहीं है तो न सही ।　　「(もしも私が) お金を持たなくても (私は) 気にしない

備考 1) 強意詞 सही だけが単独に文の末尾に用いられる時 「…とさせよ」「…たと仮定せよ」の意の一種の「譲歩」が意味される 例

यदि रुपया नहीं आठ आने सही ।　「もし 1ルピーが無ければ8アンナでもよい」

तुम नहीं और सही, और नहीं और सही ।　「(もしも)貴女が否とあれば他の者でよし, 他の者も否なら また それ以外の者でもよい」(1)

副詞句 न सही は「構わぬ」意となる。例

साथ रहना नहीं है न सही ।　　「一緒に住めなくとも構わない」

यदि वह न आए न सही किन्तु तुम तो आना ।　「もし彼が来なくとも構わないが 君は来なさい」

ただし, नहीं सही は一層強意的で, 「…してはいけない」の意になる。例

औरों से पूछने की नहीं सही ।　　「他の人達に尋ねてはいけない」(2)

2) तो は「強意」とか「好調子」のために用いられるほかに 時々 यदि s = अगर$_p$, जब, जो の相関詞 तब の代りとして用いられる。

3) 接続詞 भी 「もまた」は「さえ」の意にも用いられる(3)。例

रहने भी दो ।　　　　　　　「放っておきなさい」

なお कुछ には कुछ भी「何でも」, कोई भी「誰でも」; जो भी「何でもする者は」, अब भी「今でさえ」, तब भी「その時でさえ」「それでさえ」, जब

---

(1) 「貴女が私の言うことをきいてくれなくとも, 他にまだ貴女の代りが沢山存在する」意。

(2) 勝負ごとなどで 側から相手に告げたり 第二者に援助を求めたりしてはいけない。正々堂々と勝負せよとの意。

(3) 同じく「さえ」の意になる तक についてはは279ページ〔備考〕3) 参照

भी「いつでも」, जहाँ भी「どこでも　する所に」, वहीं भी「どこにでも」; यों भी「このようでさえ」といったような成句がある。ちなみに कुछ भी क्यों न हो। は「よもや」「決して」の意。

ただし, तो भी は「それでも」「なお」「にもかかわらず」の意の接続詞である。

4) 動詞 भरना「満たす」「満たされる」の語根 भर が名詞接尾辞や形容詞接尾辞として用いられることは既説の通りであるが, 「時間」「距離」「目方」等を示す名詞に添付されながら副詞句をも作る。例 जन्म भर「終生」, रात भर「終夜」, क्षण भर「瞬間」, मन भर「1マンの重さだけ(の)」, कोस भर「1コース(約2マイル)の道のりだけ」。(1)

5) ある種の名詞の反復もよく副詞句を形成する。例 घर घर「家ごとに」, बाल बाल「危機一髪で」, बूँद बूँद「一滴また一滴と」, जगह जगह「所々に」。

用例

कमर कमर घास है।　　「腰まで草がある」

वह सड़क सड़क गया।　　「彼は道路伝いに行った。」

6) पर, में, से, को などの単一後置詞が名詞に付いて無数の副詞句ができる。(245ページ(ii)　260ページ備考4)　271ページ備考3), 277ページ備考3)参照)

また, 複合後置詞の場合でも同じことである。例 एक क्षण के लिये「一瞬の間」, सदा के लिये「永久に」, नित्य की तरह「いつものように」, बड़े आनन्द [=उत्साह] के साथ「非常に喜んで」。

7) 「接続分詞」「現在分詞」「過去分詞」からも多くの副詞句が作られる。(327ページ備考6), 330ページ, 335ページ参照)

5 代名副詞 (सर्वनामिक क्रियाविशेषण)

これは, 字義通り, 代名詞から派生した副詞のことである。

(1) 72ページ(備考)4), および92ページ(vi)参照。

で」; कल से「明日から」「昨日以来」, पहले से「最初から」などとなる。अभी से は「ほかならぬこの時から」。

2) 特に「時間」を示す代名副詞に属格後置詞がつき、この様な副詞句が作られる。例 अब के＝अब की(1)「今度」。

また、この種の代名副詞に添付される का はよく से の同義語となる。例 अब का「この時以来」; कब का「いつから」「どの位の間」(2)

3) अब तब करना は「延期する」の意。

(4) कभी の用法

(i) 否定詞 नहीं と一緒になって「決して…せぬ」の意に用いられる。例

मैं कभी नहीं जाऊँगा। 「私は決して行きません」

(ii) कभी कभी は「時々」の意であるが、कभी——कभी は「時には…時には…」の意の接続詞の役目をする。例.

वह कभी रोती है कभी हँसती है। 「彼女は時には泣き、時には笑う」

(iii) कभी न कभी「いつか」または「まれに」の意。また जब कभी は「いつでも…する時には」の意となり、कभी के [時には का, की] は「ずっと以前に」の意の副詞句。

(5) कहाँ の用法

(i) 否定詞として反語的に用いられる。例.

मेरे यहाँ सेवक कहाँ है? 「私の所に召使がいない」（直訳…召使がどこにいるか）

मेरा जी चाहा कि भागूं, परन्तु भागने की शक्ति कहाँ? 「私は逃げたかったが逃げる力がなかった」。

---

(1) この女性属格を採る方はラクナウ地方での使用。

(2) また形容詞として「今の」「昔の」の意にもなる。

(ii) कहाँ कहाँ は時々「大差」の意を表わす接続詞的副詞として用いられる。例

कहाँ आप कहाँ मैं ।　「あなたと私とは比較にならん」

कहाँ हिंदू कहाँ मुसलमान ।　「インド教徒と回教徒とは大違いだ」

(iii) कहाँ कहाँ は「方々」「あちこち」の意。用例

मैं कहाँ कहाँ हो भी आया ।　「私はあちらこちらを通って来た」

(iv) कहाँ का कहाँ は「非常に遠方に」「ちりぢりばらばらに」「ここかしこに」などの意。

(6) कहीं の用法

(i) 時々「かつて…であるか」の反語的否定詞になる。例

मैं उसे क्या समझाऊँ, कहीं वह मेरा उपदेश सुनता है ?　「私は彼に何を言い聞かせよう，かつて彼は私の忠告を聞いたことがあるか」

(ii) 形容詞の前では「はるかに」の意になる。例

यह उससे कहीं बड़ा है ।　「これは，それよりもはるかに大きい」

(iii) कहीं…न が「命令文」では「…せぬように」の意になるが，「可能完了時相」では「多分」の意になる。例

दौड़ो मत, कहीं गिर न पड़ो ।　「ころばぬように，走ってはいけない」

उसने कहीं इस पुस्तक को न पढ़ा हो ।　「彼は恐らくこの本を読まなかったかも知れない」

(iv) その他——कहीं कहीं「こゝかしこに」「時々」; कहीं न कहीं「どこか」; कहीं नहीं「どこにもない」。

注意 कहना「言う」の女性複数の過去形も同形の कहीं となる。

(7) जहाँ の用法

(i) この関係副詞の正式な相関詞は तहाँ ではあるが今日では廃語となっているために वहाँ か普通の指示代名詞かが用いられる。そして，先行詞を採らぬか जो が「何でも」「誰でも」の意を暗示するように，जहाँ に導かれる場合にも「どこでも」の意が暗示される。例

जहाँ चाहो वहाँ जाओ ।　「君の望む所へ行きなさい」

जहाँ फूल वहाँ काँटा ।　「花のある所にトゲあり」

जहाँ समझ में न आया हो उसको पूछ लिया करो ।　「分らぬ所は常に質問しなさい」

この種の構文では相関詞はよく省略される。例

जहाँ चाहो जाओ।　「どこへでも好きな所に行きなさい」。

(ii) 副詞句 जहाँ कहीं「あちこちに」も，「どこへでも」の意の関係副詞句として用いられることがある。例

वह वस्तु जहाँ कहीं हो ले जाओ ।　「その品物をどこへでも運びなさい」

सेवा पर जहाँ कहीं तुम्हें भेजें विरोध तो नहीं करोगे ?　「勤務上で君をどこへ送っても異存ありませんか」

(iii) 副詞句 जहाँ तक「・する所まで」「・・だけ」は「程度」を示すのに用いられる。例

जहाँ तक हो सके[1] झटपट करो ।　「できるだけ早くしなさい」

वह जहाँ तक हो सका दौड़ गयी ।「彼女はできるだけ走った」

जहाँ तक भाग सको भागो ।　「逃げられるだけ逃げなさい」

[1] 次例のように「過去の事柄」ではなく，事がこれからなされようとすることが暗示される。

(iv) 本詞は まれに जब の代用をすることがある。例

जहाँ [=जब] घंटा बजता, सब लोग बाहर चले जाते । 「鐘が鳴ると皆が外へ出るのでした」

備考 1) जहाँ तहाँ も反復されて जहाँ जहाँ तहाँ तहाँ「どこでも それらの場所では」などと言われることもある。

2) जहाँ का [=के] तहाँ は「同じ場所で」「元の所に」の意の副詞句。

3) यहाँ वहाँ も「あちこちに」の意であり, यहाँ वहाँ も一種の接続的副詞となる。

(8) जिधर の用法

(i) この接続副詞の正式な相関詞は既に廃語となった तिधर であるが, 普通一般に用いられているのは उधर=उस ओर である。時々指示代名詞も用いられる。例

जिधर तुम जाओगे उधर मैं भी जाऊँगा । 「君の行く方へ私も行こう」

जिधर से सूरज निकलता है, उसे पूरब कहते हैं । 「太陽の出る方を東という」

(ii) この場合にも相関詞はよく省略される。例

जिधर जाते गालियाँ सुननी पड़ती । 「行く先々で (彼らは) 悪口を聞かねばならなかった」

जिस ओर चाहता है मोटर को फेर ले सकता है । 「望む方へ自動車を向けさせることができる」

備考 जिधर तिधर=जहाँ तहाँ=इधर उधर は「あちこち」の意。

(9) ज्यों の用法

(i) ज्यों ही=जों ही=ज्यों 「 するや否や」。用例

जो ही वह चला गया वह आई । 「彼が去ると直ぐ彼女が来た」

この場合，相関詞として，時々 त्यों ही が採られる。例

ज्यों ही सूर्य अस्त हुआ, त्यों ही कमल का फूल सिकुड़ता है । 「太陽が没すると直ぐハスの花はしぼむ」

注 ज्यों ही त्यों ही は「 するや否や」の意の接続副詞である。

(ii) 反復語 ज्यों ज्यों=जों जों「 するにつれて」「 すればするほど」。用例

जों जों दिन ढलता है धूप मद्धम पड़ती जाती है । 「日が傾くにつれて日光が鈍ってゆく」

この場合，相関詞 त्यों त्यों=तों तों が時々採られる。例

जों जों औषधि पीता हूँ तों तों रोग बढ़ता जाता है । 「(私が)薬を飲めば飲むほど病気が高じてゆく」

(iii) 以上のように「時間」を示す以外に，この関係副詞やその相関詞が結合すると，幾つかの「様態」を示す副詞句ができる。例 ज्यों त्यों=जों तों=जों तों (=ज्यों त्यों) कर के「やっと」「どうにかこうにか」。たゞし ज्यों का त्यों=जों का तों「元のまゝの」「そのまゝで」は，主語の性や数に応じて का が के や की に変わる。

2) 同じく第4列目に属する क्यों の複合詞 क्यों कि は「なぜなら」の意の接続詞，क्यों नहीं は「もちろん」，क्यों न हो「なぜ…でないのか」も，肯定を反語的に述べたまでゝである。いまは廃語同然の क्यों कर は，かっては कैसे「どうして」の同義語として用いられたことがあった。

(10) जब の用法

(i) もしも主節が「命令文」ならば，従属節には「不定時相」が採られる。例

जब वह आए तो मुझ से कहा । 「彼か来たら私に言いなさい」

(ii) もしも上節に「未来時相」か採られれは，従属節には同しく「未来時相」か，または「不定時相」か採られる。例

जब वह आएगा [=आए] तब तुम जाओगे । 「彼か来たら君は行くでしょう」

注 1) जब の同義語として जिस समय s =जिस घड़ी=जिस वक्त a なとか用いられる。

2) वह जब जब यहाँ आता है (तब तब) ताश खलता है ।「彼はここに来るたひに一カート遊ひをする」なとと जब を反復させるのは良くない。田舎者 子供 無教育者と いった人達の間にしか用いられない。

3) まれに जब か省略され その相関詞たけか用いられることもある。例

बछडा बडा हो जाए तो उसे क्या कहते हैं? 「子牛か大きくなると それを何という か」。

4) जब कि は जब の同義語であり जब कभी は「いつでも する時には」の意。

(11) जब तक の用法

(i)「 する間」「 する限り」(ii)「 するまて」の意の時には न の採否は任意である。しかし，न を採らぬ方か一層よろしい。

例

(i) ठहरिये जब तक मैं वस्त्र पहिनूं । 「私か着物を着る間お待ち下さい」

जब तक मै (न) आऊं ठहरिये । 「私か来るまでお待ち下さい」

(ii) जब तक आपका जी चाहे बैठ रहिये । 「お好きなだけお座り下さい」

जब तक वह लौटा मैं ठेरा रहा । 「彼か来るまで私は待ち続けた」。

備考 1) ただし जब तक मैं देखूँ は「私が（それを）見る間」であるが न が採られると「私が（それを）「見ぬうちは」「見なければ」の意

2) 上記(1)の場合 接続詞 कि を余分に伴うこともある 例

जब तक कि जान में जान है　　「生命のある限り」

また この場合 その相関詞として तब तक がよく採られる 例

जब तक साँस तब तक आस ।　「生命のある限り希望がある」

वह जब तक जीवित रहा तब　「彼は生きている限りその言葉に気
　तक उसन मरी बात का सदा　をつけ」
　ध्यान रखा ।

6　副詞兼用代名形容詞(1)

（1）様態を示す ऐसा「このように」 वैसा「そのように」，कैसा「どのように」，जैसा「のように」 तैसा「そのように」や「数量」や「程度」を示す इतना=इत्ता「これだけ」「これほど」 उतना[उत्ता](2)「それだけ」「それほど」 कितना [कित्ता]「どれだけ」「どれほど」「幾ら」，जितना [=जित्ता]「 だけ」「 ほど」 तितना [=तित्ता]「 それだけ」などが原形のままで 形容詞にも副詞にもなることは बडा थाडा अच्छा एक「一つの」「第一（に）」などの一般形容詞と異ならない。

殊にそれらが従格化されるとき 一層副詞的になることもその他の形容詞の場合と異ならない。例 जैसे「例えば」「 のように」 पहले「まず」「第一」，दूसरे「第二に」 चौथे「第四に」。

（2）その従格化したものに強意詞 ही を添付すれば新たな強意副詞ができる。例 ऐसे ही「ちょっとこのように」「あたかも」，वैसे ही「ちょっ

(1)「文章論」「代名形容詞」(305ページ) 参照。

(2) 括弧内は今では廃語 以下皆同じ

と〜のように」, कैसे ही「如门に とも」, जैसे ही「ちょっと のように」, कितने ही「とれほと でも」。

（3）そして，その「程度」や「数量」を示すものに限って，後置詞 में やまれに को を伴うことができる。例 इतने में「かれこれするっちに」, वितन में [まーはको]「幾ら（の値）て」。

（4）「方法」「様態」を示すために 前記 जैसा か वैसा を相関詞として用いられる。(111ヘージ参照) 例

जैसा किया वैसा पाया ।(1)=जैसा करोगे वैसा पाओगे ।(2)=जैसा「因果応報」 वाए वैसा काट ।(3)

この場合にも両者の順位か逆に用いられることもあれは また वैसा の代りに ऐसा「こんな」「このように」か文の初めに用いられることもある。例

वैसा तो नहीं जैसी मुझको आशा थी । 「私う希望した通りてはない」

ऐसा करा जैसा [=एसे करो जैसे] 「私か言った通りにしなさい」

(कि) मैंने बताया

（注） जैसे हो वैसे は「できるだけ」の意で यथा शक्तिs と同義

（5）「程度」を示すために 前記 जितना かその正式な相関詞 तितना よりも 寧ろ इतना や उतना を相関詞代用語として用いることか多い。

जितना चाहिये उतना लाओ । 「要るだけ持って来なさい」

この場合 जितना か उतना や इतना に先立たれることも極めて多い。例

---

(1) 直訳—「したように そのように得た」
(2) 直訳=「(君は)するように その通りを得よう」
(3) 直訳 「(種子を)まく通り! か り取ろう」

उतना ले लो जितने की आवश्यकता है। 「要るだけ取りなさい」

तुमको इतना दूंगा जितना कि तुम मांगो। 「君の望むだけ差上げましょう」

注意 जितना が副詞的にも形容詞的にも用いられるように「程度」を示す其の他の副詞 यावत् も「だけ」も形容詞的に用いられる。例

वहाँ रखी हुई यावत् वस्तुओं का 「そこに置かれてあるだけの品への」。

第六章 後置詞 (सम्बन्धबोधक अव्यय)(1)

後置詞といっても，その単一語は既に随所に言及したので，ここでは専ら複合後置詞を扱うことにする。(2)いわゆる複合後置詞の多くは，名詞，副詞，形容詞に由来するもので，わけても名詞由来語が多いために性別に支配され，属格後置詞 के か की に伴われる。

1. 男性扱いされ के に伴われるもの。

〔1〕 サンスクリット

अतिरिक्त atirikta=सिवाय siwa'e *P* 「(の)ほかに」。

अधीन adhīn=आधीन*H* 「(の)もとで」「(の)支配下に」。

अनन्तर anantar 「(の)後に」「(の)直後に」。

अनुसार anu sar 「(に)基いて」。——まれに के が省かれることがある。

例 आज्ञा के अनुसार=आज्ञानुसार âgyânusâr 「(の)命令で」

कारण karaṇ=मारे*H* 「(の)ために」「(の)理由て」。——के が省かれることもある。例 इस कारण 「このために」。

द्वारा dvârâ 「(に)よって」——उसके द्वारा 「それによって」。(3)

निकट nikat=समीप *s* 「(の)近くに」。——この निकट の前に他の副詞が置かれることもある。例 यह हिन्दी की अपेक्षा उर्दू के अधिक निकट है। 「これはヒディーよりも一層ウルドゥーに近い」。

परे pare 「(を)越えて」「(の)向う側に」。——उसके परे 「その向う側に」，विवेक के परे 「理性を越えて」。के の代りに से が探られることもある。例

(1) sam bandh bodhak avyaya とは，「関係を示す不変語」の意，後置詞は विभक्ति *s* とも称される，「名詞の語尾変化」「格の記号」の意。

(2) 58ページ「格」参照。 (3) この場合の के も省略可能。

उस किनारे के परे「その岸辺の向うに」。

पार pār「(の) 向う側に」「(を) 横切って」——例 सड़क के पार「道路を横切って」。また、उस पार「その向う側に」ということもある。また これに के の代りに से も用いられることもある。

पूर्व pūrv「(の) 前に」「以前に」—— 時間 に用いられる 例 जाने के पूर्व「行く前に」ただし、से が用いられることもある 例 वर्षा से पूर्व「雨の前に」。

प्रति prati「(の)代りに」。

प्रतिकूल pratikūl = विरुद्ध viruddh「(に) 反して」——例 आपके प्रतिकूल「あなたに反対して」。

बल「(の) 力で」「(に) よって」。用例 पेट के बल चलना「はう」(直訳「腹によって歩く」)。

यथासमय yathāsamay「(の)時間通りに」。

योग्य yogya = लायक lāyaq「(に)適して」(2)用例 वह अब विवाह करने के योग्य नहीं है।「彼(または彼女)は、もう結婚に適しない」。ちなみに本後置詞句の के は、動詞の不定法や指示代名詞に伴われるとき के は採否任意であるが、名詞に伴われるとき के は省略される。例 यह स्थान रहने (के) योग्य नहीं है।「この場所は住むのに向かない」, उस (के) योग्य「それに適した」, यह अभी विवाह योग्य नहीं है।「彼(または彼女)はまだ結婚に適しない」。

विपरीत viparīt「(に) 反した」「(と) 違って」。

---

(1) このまゝ物の名詞文句にもなる。

(2) 92ページ (vii) 参照。

विषय viṣay＝विषय *n*「(に) 関して」——में を伴うこともある。例 इस विषय में「これについて」。

समान saman＝सदृश sadṛsh *s*＝तुल्य tulya *s*＝「(の) ように」「(と) 等しく」「(と) 同じに」。

समीप samip＝पास *n*＝नजदीक *n*「(の)近くに」。用例 मेरे समीप「私の側に」。

本語は形容詞的にもなる。例 बनारस के समीप सारनाथ में अशोक स्तम्भ「バナーラスに近いサールナートにおけるアショーカの円柱」。

सहित sahit「(と) 一緒に」「(を) 携えて」。——ほとんど常に के が省かれる。例 अपने भाइयों सहित「自分の兄弟達と共に」, भोजन सहित「食物を携えて」, दया सहित「同情を以て」「親切に」。

हेतु hetu「(の) 理由で」「(の) ために」。—— 同義語 वास्ते＝लिये などと同じく, 代名詞の後では के が省かれる。例 इसी हेतु「ほかならぬこのために」。

〔注〕 योग्य は形容詞としても用いられる。例

वही मेरे योग्य वर है।　　「あの人こそ私に適した婿です」

(ii) ヒンディー

आगे「(の) 前に」「(の)前方に」「(に) 先んじて」。——「場所」「位置」などを示すのに用いられる。例 मेरे आगे जाओ।「私の前に (なって) 行きなさい」。

「場所」や「位置」を示す場合, 時々 से に伴われる。例 मुझसे आगे चलो।「私の前に (なって) 歩きなさい」。

また,「比較」にも用いられることは既述の通りである。〔88ページ(2)参照〕

आमने-सामने「(の) 前に」「(と) 向かい合って」「(に) 面して」。——例

तेरे आमने-सामने है।「(それは) お前の真向かいにある」。

आस-पास=इर्द-गिर्द=गिर्द「(の) 周囲に」。

उपरान्त「(の)後に」「(の) ほかに」「なおその上に」。用例 इसके उपरान्त「その上に」「それに加えて」。के が省略されることもある。例 दो वर्ष उपरान्त「2年後に」。

ऊपर「(の) 上に」「(の) 上の方に」。——単一後置詞 पर と同一扱いされることもあるが，別扱いされることもある。例えば，पर が英語の on に当る場合が多いなら，本語は up や over に当る場合が多い。また，मुझपर, मेरे ऊपर とはいえるが，この両後置詞に対し両代名詞を逆に使用することは許されない。

また，本語は पर に劣らず，よく「論理的な事柄」にも用いられる。例 उसके ऊपर भगवान की कृपा हुई।「彼の上に神の恩恵があった」。

तले[1]「(の)下に」「(の)足もとに」。——多くの場合 के が省かれる。例 पाँव (के) तले「足の下に」。

द्वारा「(の) 手段で」「(を) 経て」「(に) よって」。——この के もよく省かれる。例 शाप द्वारा「のろい (呪) によって」; रेल द्वारा「汽車で」。また，本語の直後に से を伴うこともある。

なお，本語も形容詞的にも用いられる。例 नृत्य प्रतियोगिता में उदयशंकर द्वारा नृत्य「舞踊コンクールにおけるウダイ・シャンカルによる舞踊」。

नाम[2]「(の) 名で」「(に) 宛て」。——これも形容詞的にも用いられる。例 उसके नाम पत्र「彼あての手紙」。

---

(1) 名詞 तला「底」「かかと」「支持」「保護」からの転用語。

(2) ペルシャ語とも共通。

निमित्त「(の) 理由で」「(の) 目的で」「(の) ために」。——例 उसके निमित्त「彼のために」。時々，के が省かれる。例 इस निमित्त「このために」。

नीचे「(の) 下に」——「場所」や「身分」に。

पहले=पहिले「(の) 前に」。——「時間」を示す場合に限り，(i) के が省かれたり，(ii) के の代りに से が採られることもある。例 (i) एक घंटा [=घंटे] पहले「1時間前に」。(ii) उठने से [=के] पहले「起きる前に」，घर जाने से पहले「家へ行く前に」。

पास「(の)側に」。——「移動」を示す動詞や भेजना「送る」と共に用いられるとき「(の) 所へ」の意となり，「存在動詞」と共に用いられるとき「所有」が表わされる。[1]

なお，पास में「側に」は単なる पास と同義の副詞句である。

पीछे「(の) 後に」。——「場所」にも「時間」にも用いられる。用例 मेरे पीछे「私の背後に」「私の不在中に」; सोने के पीछे「睡眠後に」。この場合にも के か省かれることがある。例 घर (के) पीछे「家の背後に」。

बदले「(の) 代りに」「(の)報いとして」。用例 अपने बदले「自身の代りに」; उसके बदले「その代りに」。में が余分に添付されることもある。

बस「(の) 支配の下に」「服従して」。

बारे में「(に)ついて」。用例 प्रमाणपत्र के बारे में「証明書について」。なお，本語の前の के も省略可能である。

बाहर=बाहिर「(の) 外部に」。——本語でも時々 से が के に代用される。例 नगर से [के] बाहर「市外で」; सारी समझ से [=के] बाहर [= के परे]

(1) ただし所有されるものは「無生物」や「動物」で，「人間」なら「召使」に限られる。

「すべての理解を越えて」「人知を絶して」。

बीच「(の)中に」。——これも「場所」にも「時間」にも用いられる。また，しばしば में や से मे を伴うこともある。例 देखने के बीच में「見ているうちに」，इस बीच में「かれこれするうちに」。

भरोसे「(を) 信頼して」。

भीतर「(の) 中に」「(の) 内側に」。

मारे「(の) ために」。用例 लज्जा के मारे「恥かしさのために」。順位が逆になれば反意になる。例 मारे अभ्यास के「練習のために」。

यहाँ「(の) 所に」。用例 उसके यहाँ「彼の所に」。

लगभग=करीब「(の)頃」「ばかり」。——「時間」や「数」に用いられる。例 आयु दस वर्ष के लग भग होगी।「年齢は10歳頃でしょう」，उसकी संख्या २ लाख के लगभग है।「その数は20万ばかりである」。

ただし，本詞が「約」「およそ」の意の副詞の場合，के を必要としないのは無論である。例 उसकी जनसंख्या लगभग ३ करोड़ है।「その人口は約3 000万である」。

लिए=वास्ते「(の)ために」「(の)間」。——「目的」や「時間」に用いられる。例 चिट्ठी पत्री के लिए「文通のために」，कुछ समय के लिए=कुछ देर के लिए「暫くの間」。

なお，वे वन के लिए चल पड़े।「彼らは森へ出かけた」などと「へ」の意にも用いられるが，不定法に伴われるときよく省かれる。例 मैं अपने कुत्ते को ढूंढ़ने (के लिए) गया था।「私は犬を探しに行った」。

また，本詞が指示代名詞や疑問代名詞に伴われるとき，के が省かれると否とで意味の異ることがある。すなわち，इस के लिए か「これがために」

「彼がために」であるが，इस लिए は「だから」「それ故」である。また，किस के लिए が「誰のために」であるに対し，किस लिए は「なぜ」「何のために」である。

なお，本語も形容詞的にも用いられる。例　काम के लिए आवाहन「仕事への召集」。

वरे「(の)こちら側に」。

सहारे「(の) 助けで」。

साथ=संग「(と)共に」「(に)対して」。例　मेरे साथ「私と共に」，मैंने उसके साथ बड़ी बड़ी बुराइयाँ की।「私は彼に対しいろいろ非常に悪い事をした」。

ただし，किनारे के साथ साथ は「岸辺伝いに」の意。また，本語は形容詞的にもなる。例　एक पुष्प के साथ राजकुमार「花を持つ王子」。

सामने=साम्हने「(の)前に」「(の)考えでは」「(と) 較べて」。——時折，「比較」や「判断」に用いられるほかに，主として「場所」特に「位置」に用いられる。सामने ही की सड़क「直ぐ前の道」，घर के सामने वाला पुल「家の前の橋」などと属格や वाला を伴うこともある。

हाँ=यहाँ「(の)所に」。用例　मेरे यहाँ「私の所に」。

हाथ「(の) 手で」「(に) よって」。

〔111〕 ペルシャ由来語

अन्दर andar「(の)中に」「以内に」。——「場所」にも「時間」にも用いられる。反復されて，महीने के अन्दर अन्दर「１ケ月足らずで」などともいわれる。

また，「強意」のために，ही を隔て，反復されることもある。例　जहाँ

मिट्टी के अन्दर ही अन्दर फैलती रहती है।「根は土の中へ中へと拡がってゆく」。

दर्मियान dar miyân「(の) 間に」「(の)中間に」。——「時間」と「場所」に。時々, में を伴うこともある。

नज़दीक nazdîk「(の)側で」「(の)意見では」。

बजाय ba jay「(の)代りに」。

बमूजिब ba mûjib「(に)基いて」「(の)理由で」。

बराबर bar â bar「(と)等しい」「(の)ように」。用例　वह मेरे बराबर लम्बा है।「彼は私ほど背が高い」，मेरे पास आपके बराबर रुपया नहीं है।「私はあなたほどお金を持たない」。

また，形容詞的にも用いられる。例　पिता के बराबर मित्र「父によく似た友人」。

बावजूद bâ wajûd「(に)かかわらず」。

रूबरू rû ba rû「(に) 面して」「(の) 面前で」。

सुपुर्द supurd=सपुर्द「(に) 委ねて」。

(iv)　アラビヤ由来語

अलावा 'alâwa「(の) ほか」「(を) 除いて」。

करीब qarîb「(の) 近くに」「ばかり」「およそ」。

काबिल qâbil「(に) 適して」。

खिलाफ़ khilâf「(に) 反して」。

बाद ba'd「(の) 後に」。——「時間」に。के が省かれることもある。

मुआफ़िक muâfiq=माफ़िक「(に) 基いて」「(に) 適して」。

मुक़ाबिल muqâbil「(の) 前に」「(と) 相対して」「(と) 較べて」。

मुताबिक mutâbiq「(に) 基いて」。

लायक lâyaq, la'iq「(に) 適して」。

सबब sabab「(の) 理由で」「(に) よって」。

備考 ある種の副詞化した代名形容詞もこの部類に属させることができよう。例 के ऐसे「(の) ように」; कुछ हिन्दुओं (के) जैसे「あるインド教徒達のように」。

2. 女性扱いされ की に伴われるもの。

(i) サンスクリット

अपेक्षा「(に) 比し」「よりも」

(ii) ヒンディー

जगह「(の) 代りに」「(の) 場所に」。——ただし, इस जगह=यहाँ「ここに」は単なる副詞句である。

देखा-देखी 「(を) 真似て」。

नाईं「(の) ように」「(と) 似て」。

भाँति「(の) ように」。用例. किसी भाँति「何とかして」。

時々, 形容詞的にもなる。

用例. कफन की भाँति उजले वस्त्र「きょうかたびらのように白い着物」。

सन्ती=सन्ते[男性]「(の) 代りに」

(iii) ペルシャ由来語

ज़बानी zabânî「(の) 言葉で」「(の) 口頭で」。

बदौलत ba-daulat「(の) 手段で」「(に) よって」「(を) 経て」。

(iv) アラビヤ由来語

खातिर khâtir「(の) ために」。

तरफ़ taraf「(の) 方に」「(の) 方へ」。

तरह tarah「(の) ように」。

बाबत bâbat「(に) 関して」。——में を伴うこともある。

वजह wajah「(の) 理由で」。

3. 前置詞兼用語にして के の取捨任意なもの。

बिना=बिन「 なしに」。——これは i) 後置詞としても，ii) 前置詞としても के か省かれることもある。例

i) आपके बिना「あなたがいなくては」，मेरे बिना「私無しでは」，पख बिना「翼がなくて」；उस बिना=उसके बिना=बिना उसके「それがなくては」。

ii) बिना सन्तान के「子孫なしに」，बिना अपराध「罪なしに」。この方が i) の場合よりも強意的である。

ただし，iii) 後置詞，iv) 前置詞の別なく，動詞の完了分詞〔常に ए 化〕と共に用いられるとき के は用いられない。例 iii) उससे पूछे बिना「彼に訊かなくては」；दु ख में पड़े बिना「苦痛に陥らないで」。iv) बिना परिश्रम किये「努力しないで」；बिना अर्थ समझे「意味が分らないで」。

बग़ैर ba gair *P*——これも बिना の場合と同一の用法を持っている。例

i) मेरे बग़ैर「私なしに」；उन के बग़ैर「それらの物〔または彼ら〕なしに」。ii) बग़ैर किसी रोक टोक के「何らの妨害なしに」；बग़ैर पास=बे पास「パス無しで」。iii) मरे बग़ैर「死ぬのでなければ」；कुछ और पूछे बग़ैर「他に何も尋ねないで」。iv) बग़ैर देखे「見ないで」；बग़ैर काम किए (ही)「仕事をしないで」。

सिवाय siwây *P* =सिवा*P*「(の) ほかに」「以外に」「(を)除いて」。——同

じく，前置詞・後置詞兼用語ではあるが，前二者と違って，完了分詞と一緒に用いられない。また，属格後置詞が省略されることもない。例 i) उसके सिवा「それ（または彼）以外に」; देखने के सिवाय「見る以外に」。ii) सिवाय मेरे「私のほかに」; सिवाय इसके「これ以外に」; सिवा डंक मारने के「針（蜂などの）で刺す以外に」。この場でも，ii) の方が強意である。

〔注〕 बिना と名詞とでは形容詞にもなる。例 बिना रोग「病気の無い」「無病な」「健康な」; बिना पाई（=बे पाई）वाले अक्षर「垂直線の無い文字」。(1)

4. 前置詞の時と後置詞の時とで属格後置詞の性が変るもの

つまり，ある種のものは，後置詞として用いられる時には की に伴われるが，前置詞として用いられる時 के を採る。例 उस की मानिंद=मानिंद उसके「それ（または彼）のように」; घर की ओर（=तरफ*A*）=ओर（=तरफ）घर के「家の方に」。かく，ओर（=तरफ）が単数扱いの時には की が採られるにもかかわらず，本語が दोनों, तीनों, चारों 等々の集合数詞に修飾されると，男性複数属格後置詞 के が採られる。例 उसके चारों ओर（=तरफ）「それ（または彼）の四方（=周囲）に」。

なお，बनिसबत ba nisbat *P*.「(に) 較べて」「(に) ついて」も，本項に属するものである。

〔注〕 1) ओर（=तरफ）は 前記の पार や बारे में 同様「側」に関連して用いられるとき，इस, उस, किस, जिस の後において常に置かれる

2) मेरी ओर（=तरफ）से は，「私の側から」「私に代って」の意。

5. 属格後置詞を採らないもの

वश *A* =वस「(の) 支配下に」「(に) 服従して」。

---

(1) ट, , ड, ढ など垂直線のない文字を ष, न, ग などと区別したもの。

第七章 接続詞 (समुच्चय बोधक अव्यय)[1]

(1) 連辞的 (संयोजक)

(i) और, तथा s[2], तथैव s, औ「および」「また」「そして」「と」

(ii) एव s ; एवम् s「かつまた」「・でもありまた」。

(iii) भी「もまた」「そして」「さえ」「同様」

注意 1) ペルシャ由来語 व ō, wa「そして」「と」も，まれに2名詞の連辞として用いられることがある。しかし，今は廃語同然である。

2) 副詞 फिर「再び」が，時々接続詞的に用いられる。「それから　それから　」といったぐあいに，同一文中に数回反復されることもある。और फिर や फिर भी は「なおまた」の意の接続詞。

3) 名品詞を通じて連辞的接続詞はよく省略される。例 भूख-प्यास「飢渇」，खाना-पीना「飲食」，हजारों लाखों वर्ष पहले「幾千幾十万年前に」，लिख-पढ कर「読み書きしながら」，दुगुने तिगुने चावल का「2・3倍の米の」，उसने मुझको डाँटा डपटा।「彼は私を脅迫した」。

4) 二つ以上の名詞，形容詞または動詞の不定法などが並用される場合，一般に末尾のものの前にのみ連辞的接続詞が置かれる。

(2) 反意的 (विरोध दर्शक)[3]

(i) परन्तु s，किन्तु s，पर s H，लेकिन A「しかし」

(ii) प्रत्युत् s，बल्कि A P. (=बल्कन)； बरन (=वरन्=वरच)[4]「しかし」

---

(1) sanyojak avyaya とも称される。san yojak は「接続詞」の意。sam uccay とは「語または文の接続」の意。

(2) 副詞 yathā s「このように」の相関語兼接続詞である。

(3) vi rodh s は「反対」，darshak s は「示す物」の意。

(4) 今は廃語。

「むしろ」「それに反し」。——これらはよく否定詞に伴われて，「のみならず」の意に用いられる。用例

न केवल मुसलमान बल्कि हिन्दू भी। 「回教徒ばかりでなくインド教徒(मुसलमान तो मुसलमान हिन्दू भी) も」。

同じく किन्तु も「単に…でない」意味の前文を受けるとき，「のみならず」の意にも用いられる。例

तलवार वैरी का केवल नष्ट ही नहीं करती, किन्तु शरीर को फुर्तीला भी बनाती है। 「剣は単に自分の敵を打倒すばかりでなく，身体を敏活にする」

〔備考〕 1) तो भी (तौ भी) も「それでも」「にもかかわらず」の意に用いられる。

2) 「のほか」「でなければ」などと，「除外」を示すのに用いられる मगर *s* も，単なる反意的な「しかし」の意に用いられることが少なくない。

3) まれに मुदा *s* 「しかし」も用いられる。

(3) 断接的 (विभाजक)(1)

(1) या, अथवा *s* (2), वा *s* (3) 「または」「即ち」——用例

गाँव या नगर का नाम	「村または町の名」
ठिकाना या पता	「住所，即ち所番地」

つまり，二つの物が「別個のもの」であるとき「または」の意となり，両者が「同一物」または「類似物」であるとき，「即ち」の意になる。(4)

---

(1) vibhājak *s* 「分ける」「配分的」「断接的」の意。

(2) athavā。発音は athwā。

(3) wā vā。今は廃語。

(4) 206ページ(9)〔備考〕1) (1) 参照。

(ii) या (तो) या, चाहे चाहे, चाहो चाहो, चाहे अथवा, चाहे या, वा वा「 かまたは か(そのいずれかを)」「そのいずれても」。用例

या (तो) वह आए, या उसका मित्र।「彼か来よっか彼の友人ぅ来よっか」

चाहे [चाहो] देखो चाहे [-चाहो] 「(君か) 見よっか見まいか」。
न देखा।

(iii) चाहे पर, चाहे तो भी「たとえ てもなお」

(iv) क्या क्या「 か か」「 てあろっとあるまいと」「いずれも」。用例

क्या पुरुष हो क्या स्त्री।　「男にせよ女にせよ」

क्या भीतर क्या बाहर　「内でも外でも」。

(v) न कि「(しかし) でない」。用例

मैं आप से कहता हूँ, न कि उस से।　「私はあなたに言っので 彼にてはありません」。

(vi) न (तो) न=न कि न कि 「とちらも てない」。用例

तुम न बड़े हो न छोटे।　「君は大きくも小さくもない」

न धूप है, न गरमी।　「日光も暑熱もない」

न कि बैकुण्ठ न कि नरख।　「天国てもなければ地獄てもない」

(vii) नहीं तो, अन्यथा s「さもなけれは」

(viii) कि[(1)]「それとも」「または」。用例

यह गाय का दूध है कि भैंस का?　「これは雌牛の乳ですか，それとも水牛の」。

---

(1) 俗語。ほとんど या の同義語となる。

(4) 仮定的 (कल्पित)

(i) यदि $_{S}$ (=अगर$_{P}$) तो「もしも　ならば」。用例

यदि वहाँ कोई भी नहीं हो तो　「もしもそこに誰もいなければ　」。

(ii) जो　तो「もしも　ならば」。用例

जो जाएँ तो मालूम होगा।　「もしも(あなたが)行けば、お分りでしょう」

जो वह सज्जन पुरुष है तो　「もしも彼が紳士なら　」。

備考 1) この場合, तो の代りに सो が用いられることもある。例

जो आएँ सो जानें।　「もし(あなたが)来ればお分りでしょう」。

2) 仮定的接続詞はよく省略される。相関詞さえあれば文意の不明をきたす恐れがないからである。例

यह न हो तो　「これがなければ　」

बड़े बनना चाहो तो छोटे बनो।　「大きくなりたければ小さくなれ」(「伸びようとすれば(先ず)縮まれ」の意)。

3) जो はまた जब の代りに用いられることもある。(207ページ備考2) 参照)。例

जो मनुष्य केवल ईश्वर को सोचता है「人が神のみを考えるとき　」

(5) 譲歩的 (स्वीकृति दिखलाने वाला)

चाहे, यद्यपि $_{S}$, यदि ऐसा हो「たとえ　とも」。

備考 1) 前句中に चाहे のある場合, 後句の初めに पर, परन्तु, किन्तु, तो भी=फिर भी などが用いられる。例

डिब्बी की सूई चाहे जितना भी हिलाओ, किन्तु वह सदैव घूम कर ध्रुव की ओर हो जाएगी।　「羅針盤の針はたとえどれ程振り動かそうとも, それは常にぐるぐる回って北極の方に向く」。

2) यद्यपि の場合にも，後句は तो भी や फिर भी で始められることもあるが，正式なのは तथापि「なお」である。例．

यद्यपि वह सुन्दर थी तथापि गंभीर नहीं थी। 「たとえ彼女は美しかったとしても，まじめではなかった」。

(6) 結論的 (परिणाम दर्शक)(1)

इस लिए; तो; इस से; अतः s.; अतएव s「だから」「それだから」(2)

(7) 推論的 (कारण वाचक)(3)

(i) क्योंकि, इस लिए कि「なぜならば」。

(ii) चूंकि P「…だから」

[注] この2種の接続詞の用法は多少違っている。すなわち，(i) 前者が結句を導くのに対し，(ii) 後者は前句を導くために後句の前によく इसलिये(4) が相関詞的に置かれることがある。例

(i) वह नहीं गया क्योंकि वर्षा होने लगी। 「彼は行かなかった。なぜなら雨が降り出したので」。

(ii) चूंकि वायु चल रही है इसलिये खिड़की बन्द कर दो। 「風が吹いているから窓を閉めなさい」。

(8) 目的 (उद्देश्य वाचक)(5)

ताकि P(6); कि, इसलिये…कि「…するために」。

[注] これらの接続詞が使用されるとき，それに導かれる句の動詞は常に不定時相

(1) 「結果を示す」の意。

(2) 関係語 सो は今では廃語。

(3) 「理由を示す」の意。

(4) ウルドゥーでは，副詞 पस ; 「だから」「そこで」も用いられる。

(5) uddeshya は「目的」「主語」の意。

(6) tā ki ではあるが tā kē の如く発音される。

を採らねばならぬ。例

(i) स्पष्ट लिखो ताकि प्रत्येक समझ सके। 「誰もが了解できるように明確に書きなさい」

(ii) मुझको क्या करना चाहिये कि उसके समान हो जाऊँ। 「彼と同等になるためには私はどうしなければならぬか」

(iii) वह इसलिये दौड़ रहा है कि एक पक्षी पकड़ ले। 「彼は鳥を1羽捕えるために走っている」

(9) 説明的 (स्वरूप वाचक)(1)

(i) अर्थात्, याने=यानी 「すなわち」

(ii) मानो=माना「あたかも」

(iii) कि「 ということを」。用例

(क्या तुम) जानती हो कि मैं कौन हूँ। 「(君(彼女)は) 私が誰か知っていますか」

पता नहीं कि कहाँ गया। 「(彼が)どこへ行ったか分らない」

ただし、この種の कि はよく省略される。例

कहा जाता है, एक दिन 「ある日 だったといわれる」

कहते हैं 「 ということだ」

注 1) कि が「または」や「 するために」の意に用いられることは既述の通りであるが(2)なお次のような用法もある。

(i) या「即ち」の同義語として。例

सूर्य था कि आग का गोला। 「(それは) 太陽即ち火の玉 (であった)」

---

(1) svarupa は「同一の」「類似の」「似た性質の」などの意。

(2) 203ページ(3) (viii) および205ページ(8)参照。

(ii)「かどうか」の意に。例

जाकर देखो कि वह भोजन कर चुका है। 「彼が食事を終ったかどうか行って見給え」

(iii)「その時突然」の意に。例

मैं जाने लगा कि वह आ पहुँचा। 「私が出かかった時に彼が来合せた」

(iv)「してから」の意に。例

दस वर्ष हुए कि वह आया। 「彼が来てから10年になった」

2) कि には他の語との併用接続詞 जो「もしも」も कि と同様の接続詞として上記(iii)の意に用いられることがある。例

अच्छा हुआ जो [=कि] आप आ गए। 「よくいらっしゃいました」。

第八章 感歎詞 (विस्मयादि बोधक अव्यय)

(1) 呼び掛け (पुकारना)

अजी!, अहो!s, ऐ!s, हे!, ओ!, हा!, ए!s, ए लो!——用例

हे राम!「おゝラーム よ!」[1], ओ बेटे「おゝ息子よ」。

上記はいすれも相手の注意を喚起するためのものであるが 特に呼び掛ける相手が目下である時には, अरे! अबे (=बे)! रे! などが使用される。例 अरे भैया [=भाई]!「おい兄弟分!」。ただし 相手が女性であれば अरी や री になる。例 अरी राक्षसी!「おい女悪魔奴!」。

(2) 驚き (आश्चर्य)

ओह!, ओहो!, है!, है है!, ऐं!——前項所載の अरे や अहो も「驚き」を示すのに用いられる。例

अरे क्या सो रहा है! 「まあ (お前は) 眠っているのか!」。

また, 疑問詞 क्या も同様, 本項所属の感歎詞にもなる。例

आज क्या ही सुहावना प्रात काल है! 「まあ! 今朝は何と心地のよいことだ!」。

(3) 喜び (हर्ष)

आहा!, अहा!, आहा आहा! अहाहा! वाह!「何とすばらしい!」

वाह!, वाह-वाह! शाबाश! P「すてき!」「でかした!」

---

[1] 「ラーム」はヴイシヌ派のイソド教徒からラーム チャンドラの略語として「神」の意にも解されることがあるので, よく「おゝ神よ」の意にも用いられる、本章(5)参照。

（4）賞賛 (प्रशंसा)

वाह!, वाहवाह! धन्य ![1], धन्य धन्य!, अच्छा!, बहुत अच्छा!, शाबाश! P, खूब! P 「万歳」「でかした」

जय!, जय जय! 「万歳」「ようこそ」

（5）悲しみ (शोक)

हा!, हा हा!, हाय!, हाय हाय! हाय रे! आह! ओह! उह!, अफ!, उफ!, अफसोस! P「悲しや!」「あゝ!」

हे राम!, हे भगवान्!, राम राम! राम! हा राम!, या-अल्ला ![2], दैया रे![3]「おゝ神様!」「あゝ!」

त्राहि! S「あゝ!」「助け給え!」

（6）失望 (नैराश्य)

अरे रे! वाह!, वाहवाह!, अरे बाप![4] (−रे बाप!−बाप रे!−बाप रे बाप! =बाप मरा!) 「あゝ!」「悲しや!」

用例 ——बाप रे! क्या हुआ? 「あゝ!どうしたことか!」

（7）軽侮 (तिरस्कार)

छि! छि छि!, छी!, छी छी!, फिस!, थू!, थू थू!, उफ! A

「ちえっ!」「へん!」「ふん!」「ばかな!」

धिक्! S, धिक्कार! S「ちえっ!」「まあ、みっともない!」

दूर (हो)! 「去れ!」「退れ!」

---

(1) 「有難う」の意に用いられる名詞 dhanya vād S「感謝」は この dhanya S「幸運な」に vād S − bād H「陳述」「話」を加えたもの。

(2) 回教徒の専用。「おゝ神よ」の意。

(3) 「おゝ母よ」の意。

(4) 「おゝ父よ」の意。अरे रे と共に(5)項にも用いられる。

用例 ——धिक्' यह क्या कर डाला ?「ちえっ'これは一体どうしたんだ」

注 呼ひ掛けの वे' も「軽侮」を示すのに用いられる。例

क्यों वे ' यह क्या किया ?　　　「こいつめ！これはどうしたんだ」

(8) 同意 (स्वीकृति)

हाँ', हाँ हाँ', जी', जी हाँ'「そうとも'」

भला', अच्छा', बहुत अच्छा'「結構々々'」

(9) 祝福 (बधाई)

आशिष'$_s$「祝福あれ'」, चिरजीव'$_s$「長生きするように'」, सुखमय$_s$ हो', खुश$_p$ रहो'「幸福であるように'」, सफल हो'「成功するように'」「成功を祈るぞ'」; धन्य (हे)'「何と幸福な！」。

注 1) これらは，長老や先輩が若者や目下の者か敬意を払われた場合の答礼用語である。

2) लो'「見よ'」「そら！」は相手の「注目」をうながす場合に用いられる。

第九章 接頭辞 (उपसर्ग)

接尾辞については，名詞や形容詞の末節においてそれぞれ述べてあるので，ここでは接頭辞だけにとどめた。

本言語に使用される接頭辞の大部分は Tatsama 語であるが，ここでは主として少数である Tadbhava 語や外来語の主要なものを掲げることにした。

（1）「否定」を示すもの

(i) अ *s*——अप्रसन्न *s*「不興の」「怒った」; अयोग्य *s*「不適当な」, असंख्य *s*「無数の」; अविश्वास *s*「不信」「不信の」, असफलता* *s*「不成功」「失敗」。

(ii) अन् *s*——अनजान=अजान「知らぬ」「無知の」, अनपढ़「無学の」, अनमोल「価の知れぬ」「高価な」。

(iii) नि *s*——निडर *s*「恐れない」「大胆な」, निश्चिन्त *s*「心配のない」「無関心な」, निरोग=नीरोग「無病の」「健康な」。

(iv) निर् *s*[1]——निरुत्तर *s*「返事の無い」, निराश *s*「希望のない」, निर्बल=निबल「力の無い」「弱い」, निर्बलता* *s*「虚弱」「無力」

(v) बिन[2]——बिनधन「無資の」「貧しい」, बिनब्याहा「未婚の」, बिन दाना पानी「穀物や水（即ち，飲食物）の無い」。

ただし，本接頭辞や前記の अन は，動詞の過去分詞の前にもよく付く。例 बिनदेखा=अनदेखा「見えない」, बिनबोया=अनबोया「(種子を) まかない」「野生の」, बिनजाने「知らない」, बिनसोचे「考えない」。

---

(1) Tatsama 語に用いられる。24ページ（7）参照。

(2) 同義語 बिना と同じ。

(vi) वि $_{s\,(1)}$——विफल s「実らない」「無益な」, विमलs「よごれてない」「清潔な」, विदेश s「他国」「外国」。

本語はまた「否定」とは無関係に,「特殊な」「多種な」の意にも用いられる。例 विज्ञान s「科学」, विजय「勝利」。

(vii) बे $_{PH}$——बेसुध=बेहोश P「無感覚の」「人事不省の」 बेचारा P「助けの無い」「惨めな」。

(viii) ना $_P$——नादान $_S$「無知な」「無学な」, नापसन्द $_P$「好かない」, नासमझ「分らない」「解しない」。

(ix) ग़ैर $_A$「他の」「別の」「外国の」——ग़ैरमामूली$_P$「変な」「妙な」, ग़ैर सरकारी P「非公式な」。

(x) फ़ी $_A$「各」「…につき」, फ़ी रुपया「1ルピーにつき」, फ़ी सैकड़ा「パーセント」。

(2) その他

(i) अध「半」——अधन्ना「半アンナ」(即ち「2パイサ銅貨」), अधखिला「半開の(花について)」, अधखुला「半開の(一般的)」, अधपका「半熟の」「半煮の」。

(ii) कु s「悪」「無用」(1)——कुरूप s「見にくい」, कुमार्ग s「悪道路」, कुसंग s「悪い交際」, कुस्वभाव s「悪い性質」。

(iii) स s「…を有する」(1)——सफल s「実った」「栄えた」「成功した」, सकुशल s「安泰な」「健康な」, सफलता$_*s$「成功」。

(iv) सुs「良い」「美しい」(1)——सुजान s「よく知る」「賢い」, सुडौल s「良い形の」「均整の取れた」, सुफल s「栄えた」, सुसंग s「善い交際」, सुसाधन s「善行」。

---

(1) すべて Tatsama 語。

(viii) सह *s* (1)「一緒に」「共に」——सहपाठी*「校友」; महानुभूति* *s*「同情」; सहायक *s*.「仲間」「相手」。

(ix) हर *P*.「各」——हर एक「各人」; हर बार「毎度」「いつも」; हर साल「毎年」。

〔注〕 Tatsama 語に用いられるその他の接頭辞にはなお次のようなものがある。अति「たいへん」「非常に」; अधि「特別の」「余分の」; अनु「に基く」「に従った」「・真似て」, अप「反対の」「に欠けた」; अभि「に反して」「優れた」, अव「反対の」「欠けた」「劣った」, आ「まで」「反対の」; उद्「上の方へ」; उप「副の」「劣った」; दुर्, दुस्「悪い」「難しい」; परि「十分に」「よく」, पुनर「再び」, प्र「非常に」「過多」; प्रति「各」「各々の」「反対の」; प्राक्「前の」; सम्「と共に」「良い」。

〔付記〕 (अधिकतर वर्णन) 文法ではないが, ここに少し必要な事項を添付することにした。

1. 月名 (मास का नाम)

(1) インド教徒の月

1. चैत「3月—4月」		बसन्त「春」
2. बैसाख「4月—5月」		
3 जेठ「5月—6月」		ग्रीष्म「夏」
4 असाढ़「6月—7月」		
5 सावन「7月—8月」		वर्षा*「雨期」
6 भादों「8月—9月」		
7. कुआर(2)「9月—10月」		शरद* *s*「秋」
8 कातिक「10月—11月」		

(1) Tatsama 語, 以上, 本語を明記しなかった分は, 接頭辞そのものはたとえサンスクリット語であってもヒンディーの Tadbhava 語と共に用いられるものである。

(2) कुआर, कुआर, कवार, क्वार ともいわれる。

9. अगहन「11月—12月」 } हेमन्त s「冬」
10 पूस 「12月—1月」
11 माघ s「1月—2月」 } शिशिर s「冷期」
12 फागुन「2月—3月」

以上6期の名称はほとんど文章，殊に詩文に限って用いられる 一般に，1年は कातिक の月からほぼ各4ケ月に区切って जाड़ा「冬」, गर्मी *「夏」, बरसात *「雨期」の3期に分たれる。

(ii) 英語の月

1 जनवरी janwarī * 2. फरवरी farwarī * 3 मार्च mārc
4 अप्रैल aprail * 5 मई mai * 6 जून jūn
7 जुलाई julāī * 8 अगस्त agast 9 सितम्बर sitambar.
10 अक्तूबर aktūbar 11. नवम्बर nawambar 12 दिसम्बर disambar.

2. 週名 (सप्ताह का नाम)

日曜日 इतवार, रविवार s
月曜日 सोमवार s
火曜日 मंगल (वार)
水曜日 बुध (वार) s
木曜日 बृहस्पति (वार) s, गुरुवार s
金曜日 शुक्रवार s, शुक्र (वार) s
土曜日 सनीचर, शनिवार

3 紀元 (सन)

(i) सम्वत samvat (=विक्रम-संवत)— विक्रमादित्य 王の創めたもので インド教徒の間に最も広く行はれている。西暦よりは57年早い。この暦

年は चैत の月の16日から始まる。

(ii) फसली fasli *p.*——これは，Akbar 大帝の創めた太陽暦で，特に地代の支払いなどに使用される。西暦1555年の9月10日に起こり，毎年 कुआर の月の1日から始まる。

(iii) शाक shāk(a)——これが創始者は明確でないが，一般に शालिवाहन 王とされている。西暦78年の चैत の月から始まる。前二者に較べて使用者が少ない。

(iv) हिजरी hijri *a*——広く回教徒の使用するもの。西暦622年7月16日の金曜日に教祖が मक्का から मदीना に逃亡 (hijrah) した日を起原としている。

(v) सन् ईस्वी san 'iswi——つまり「西暦」のことで，宗教を超越して用いられる。

4. 寸法 (नाप)

16 गिरह्* *p* (=[illegible] गिरह)(1)=1 गज *p*「ヤール」

½ गज=1 हाथ

½ हाथ=1 बालिश्त* *p*(2) (=बिलांद*=बित्ता)「9インチ」

16 जौ(3)=1 गिरह「1/16ヤール」

8 जौ=1 अंगुल(4)

注 1) 地方によって多少の変化が見られるが，ある地方では24 अंगुल=1 हाथ，4 हाथ=1 दण्ड *s*(5)，2,000 दण्ड=1 कोस，4 कोस=1 योजन *s*(6) が用いられている。

2) ほかに चौवा=चप्पा「4本指の長さ」がある。また，井戸の深さを測る

---

(1)「結び目」の意。　(2) 親指と小指とを拡げた時の長さ。
(3)「大麦」の意。　(4)「指」の意、指の長さ，即ち大麦8粒の長さ。
(5)「さお」の意。　(6) 約9マイル。

のに पुर्सा「人の手の届く高さ」がある。गोली*「弾丸」「着弾距離」は一層長い距離に用いられる。

5　面積（क्षेत्रफल）

20　नन्वासी*=1 कच्वासी*

20　कच्वासी=1 विस्वासी*

20　विस्वासी=1 बिस्वा

20　बिस्वा=1 बीघा

बीघा もまた地方によって多少異なるわけであるが，大体凡そ我が2段5畝15歩〔約25 3a〕に相当するものとされている。

6　時間（समय）

पहर「3時間」「1昼夜の⅛」

घडी=60 पल「24分」

1 पल=60 अक्षर「24秒」

1 अक्षर=$\frac{24}{60}$ 秒

60 घडी「24時間」「1昼夜」

第三編　文章論 (कारक प्रक्रिया)

第一章 名　詞 (संज्ञा)

I. 単数・複数の用法 (वचन का प्रयोग)

〔a〕 名詞が不定の場合 (जब संज्ञा का अर्थ अनिश्चित हो)

例えば，मैंने उसका हाथ पकड़ लिया।「私は彼の手を捕えた」では片方の手だけを捕えたことになるが，मैंने उसके हाथ पकड़ लिये। では両方の手を捕えたことになる。同様，सोने वाले उठो।「眠っている人よ，起きなさい」では相手は1人であり，सोने वालो उठो। なら相手は2人以上であることになる。このように名詞が個別的特殊的意味に用いられるとき，単数複数の扱い方や見分け方は直ぐに分るが，ばく然と不定的に用いられる場合，なかなか煩雑なものがある。

1. 複数扱いされる場合

(1)「1対」から成るもの。例 कान「耳」，बूट「長ぐつ」，होंठ「口びる」。

備考 1) しかし，たとえ1対から成るものでも，時折単語的に任意に単数扱いされることもある。例

जरा जूते [または जूता] दिखाओ।「ちょっとくつを見せなさい」

2) 特に片方の眼とか手とかで単数扱いされるのは当然である。ただし，जूते का जोड़ा「くつ1足」なとど「1対」を意味する語が単数扱いされるのは異例である。

(2)「多数」が意味されるもの。例　दाँत「歯」，रग*「血管」，वस्त्र s「着物」，बाल「毛髪」，पर「羽毛」「(魚の)ひれ」，हाथ पाँव「手足」。

(3) दोनों「両者とも」，तीनों「三者とも」などの数形容詞で修飾されるとき。例

यहाँ गाजर और मूली दोनों हैं।　「ここに人参と大根のどちらもある」

[注] सब が形容詞または副詞として用いられるとき 多くの場合 動詞は複数となるが単数の採られることもある。例

वह सुख-दुख सब उठा चुका था।　「彼は苦楽を皆経験済みだ」

ただし सब कुछ の場合(1)や「家財道具」を示す名詞の場合には単数動詞が用いられる。(2) 例

सब सामान तैयार है।　「すべての荷物が準備されている」

(4)「敬意」のために，単数名詞が複数動詞を採ることがある。例

मेरे अध्यापक (=शिक्षक s) आ गए।　「私の先生がいらっしゃいました」

गंगा जी बह रही हैं।　「ガンガーが流れている」(3)

[注] この場合 主格形男性名詞に限られる。たとえ語尾変化可能の आ で終る男性であっても その単数従格形は用いられるが その複数従格形は用いられない。更に 語尾変化可能の女性名詞に至っては その主格複数形さえ用いられぬ。

(5) 物質名詞・抽象名詞などの内容如何に関係なく，常に複数扱いされるもの。例　आँसू「涙」，दर्शन s「面会」，अंडे-बच्चे「ふとかえりのひな鳥」[卵](4)，गाय-बैल「家畜」　बाप-दादा「祖先」　माता पिता s =माँ-बाप「父

(1) 290ページ(4)参照
(2) 221ページ(2)第2例参照
(3) 河名に敬称を添付したのは インド人が古来神聖視して来たガンジス河の擬人化
(4) 冗談以外 人間の「妻子」には用いられぬ

母」「両親」; माने₄ (1)「意味」; लोग「人々」「…人」, सुख-दुख「苦楽」; हिज्जे₄「つづり」。

（6）複数化し得る抽象名詞。例　कालs「時代」; गुणs「美徳」「長所」; अवगुण「欠点」「短所」; प्राणs「生命」「呼吸」; बुराई*「悪事」, बुद्धि*s＝होश₄「感覚」; मिजाज₄「気分」「健康」; मुसकुराहट*「笑い」; साधनs「手段」「方法」「原因」; सुखs「幸福」。

用例　स्वर्ग के सुख भोगो।「天国の楽しみを受けなさい」, चिड़ियों के चहचहे「鳥のさえずり」。なお, डुबकियाँ लगाना（＝—मारना）「もぐる」（水中に）; चीखें मारना「叫ぶ」; भूखों [भूखा] मरना「餓死する」は慣用的である。

注　1)　आवश्यकता*s（＝ज़रूरत*₄）「必要」(2)や काम「仕事」「用事」などのように, 抽象名詞が普通名詞化して複数扱いされるものもある。

2)　दाम「価」「代金」も単複同様に扱われるが, 複数の方が一層好ましい。用例.

क्या दाम होगा ?　「幾らになるでしょう」

इतना दाम क्यों है ?　「どうしてこんな値か」

दाम मेरे हाथ में नहीं है।　「代金は私の手にない」

यहाँ केवल एक दाम है।　「ここでは正札だけです」

たゞし बड़े दामों का रत्न「大した値の宝石」は慣用的である。なお, 類語 भावs「価」「相場」; लागत*「原価」「経費」「投資」; कीमत「価」など, いずれも複数にも扱われる。

2)　「多量」が暗示されるような場合にも抽象名詞が複数化される。例

---

(1)　この mane の同義語 अर्थs は単数に扱われる。

(2)　複数名詞化すれば「必要物」の意となる。

उनकी नीदें उचट गई। 「彼の睡眠が破れた」

इस तांगे में बड़े हिचकोले हैं। 「このトンガ馬車は非常に振動する」

3) 同様物質名詞も複数化することがある。例

बादला के दलm 「雲の塊」「密雲」

(7) 複数化し得る物質名詞。例

ओला 「あられ(霰)」, खाना 「食物」, दवाA 「薬」, दुआA 「祈り」, धुवाँ [धुएँ と複数化する]「煙」, बादल 「雲」, रोटी 「パン」。

注 1) 強意的に用いられるとき 水や汗さえ複数化する。例

वहाँ बड़े पानी है। 「あそこは大変な水だ」

पसीने बहते हैं। 「汗が流れる」

2) ある種の名詞動詞で普通名詞が複数化しているのは種々の原因に基くものである。例えば (के) हाथ लगना 「入手する」や (को) जूते मारना 「(を)くつて打つ」では में や से の省略が考えられ (को) गले लगाना 「(を)抱く」や (के) गले मिलना [=लगना]「抱き合う」でも में の省略が考えられぬでもないが 2人の人間の「のど」の接触が意味されぬでもない。

2. 単数扱いされる場合

(1) 抽象名詞や物質名詞の大部分。用例

उन्होंने अरबी फारसी पढ़ी। 「彼(ら)はアラビヤ語やペルシャ語を学んだ」

सेरों दूध सड़ गया। 「幾セールかの牛乳が腐った」

注 1) 一般の抽象名詞はたとえ同義語と結合しても単数扱いされる。例 चाल* +ढाल-चाल-ढाल* 「行儀」, दुख+दर्द P =दुख-दर्द 「苦痛」, शादी*P + ब्याह=शादी-ब्याह 「結婚」。また, तनP-बदनA 「身体」のように, 普通名詞の同義結合語でも単数扱いされることもある。ただし, ペルシャ語系の同義語結合抽

(1) これはまた物質名詞 दल の複数化の用例にもなる。

一名詞 रस्म व[1]रिवाज「習慣」は単複両様に扱われる。

2) समुदाय–समूह「群」「群集」「多数」, जनता*「大衆」「国民」のようなサンスクリットの集合名詞は単数扱いされる。

(2)「家財道具」「財貨」などを一括的に述べる場合。例

उनका सामान माल-असबाब	「彼(ら)の家財道具」
उसके पास लालटेन और लाठी है।	「彼はカンテラと警棒とを持っている」
उसने उनको कई गाँव और नकद रुपया दिया।	「彼は彼らに幾つかの村や現金を与えた」

3 単複任意に用いられる場合

चावल「米」, बादल「雲」, दाम「価」「代金」, मिजाज*「気分」, वचन s「演説」, वक्त*「時間」, होश*「感覚」のような物質名詞や抽象名詞ばかりでなく, 集合名詞や普通名詞にして任意に単複両様に扱われる場合も少なくない。例

जाड़े [–जाड़ा] में ठंड पड़ती है।	「冬には寒くなる」
कबूतर झुण्ड [=झुण्डों] में रहते हैं।	「ハトは群をなして住む」
कुत्ता चतुर पशु है। [–कुत्ते हैं]	「犬は賢い動物だ」
आलू आजकल बहुत महँगा है। [–महँगे हैं]	「ジャガイモは昨今甚だ高い」
सच्चा मनुष्य प्रसन्न रहता है। [=सच्चे रहते हैं]	「正直な人は楽しく暮らしている」

[illegible] 同様 बहुत दिन [=दिनों] से「随分以前から」であるが 抽象名詞 काम–कार्य s「仕事」「用事」「行為」「義務」も単複任意に扱われるにしても, 単数扱

(1) 末字 व o はペルシャ語の接続詞。「そして」の意。

いが一層好ましい。例

हमको बहुत काम है। 「ぼくは忙しい」

मुझे कुछ आवश्यक कार्य है। 「私に少し急用がある」

たゞし，ここで कुछ の代りに कई「幾らかの」が採られゝば述部は複数化する。

また एक हाथ की उंगलियाँ पाँच है।「1本の手の指は5本ある」でも，単語的に उंगली と単数扱いされることもある

4 単複の相違による語義変更

（1）「金銭」を示す場合。

(i) 単に「金銭」を意味する場合には単数扱いされるが，(ii)「貨幣」を指す場合には複数扱いされる。例

(i) आपके पास बहुत पैसा है। 「あなたはお金を沢山お持ちだ」

बहुत रुपया नहीं लगता। 「余り金がかゝらない」

(ii) रुपये पैसों से 「貨幣で」

रुपयों से भरा हुआ डब्बा 「金の詰った箱」

備考 1) यह दस रुपया [रुपये] लो।「この10ルピーを取りなさい」; दो रुपया होगा [रुपये होंगे]।「2ルピーあろう」におけるように，数詞に先立たれる場合でも，単複の相違によって「金額」と「貨幣数」との区別が暗示される。

2) रुपये पूरे है? [=रुपया पूरा है?] でも，前記と同一の相違がある以外に，両者とも銀貨でも紙幣でも構わない，金額さえ合っていればよいので，それが尋ねられている。しかるに रुपये ठीक है? [=रुपया ठीक है?] では，金額に過不足はないか，にせ金でないかどうか，貨幣の品種などについて満足かどうかゞ尋ねられることになる。(221ページ，備考3) 参照)。

（2）「日」や「時間」の場合。

（ｉ）दिन「日」「昼」——例えば，शुक्र का दिन「金曜日」や छुट्टी का दिन「休日」のように，単に１日か意味されるとき単数扱いされるが，जाड़े के दिन「冬の日」や पूस के दिन「第10月の日」，बुरे दिन「悪い時代」「不運時代」なとのように，「季節」「時代」「建日」か意味されるとき複数扱いされる。たゞし，आज के दिन「きょうの日」は副詞句である。

（ii）घंटा「時間」——例えは काम के घंटे में「仕事の時間に」は「１時間前後の仕事」か意味されるか，घंटों を以てすれば「多数の時間」か意味される。

（3）抽象名詞の場合。

（ｉ）छुट्टी* 「休み」——例えば महीने में कितनी छुट्टी मिलती है？「月に幾日の休みかもらえるか」では「期間」か尋ねられるか，これを複数扱いして छुट्टियाँ हैं を以てすれば「日数」か尋ねられる。

（ii）दिल* 「心臓」「心」「魂」——例えば，उनका दिल बैठ गया।「彼らは意気阻喪した」におけるように，दिल か「心」「精神」を意味するとき単数扱いされるう，उनके दिलों पर से「彼らの心臓の上から」のように「心臓」か意味されるとき，普通名詞として複数にもなる。

（iii）हाथ「手」——例えば उनके हाथों में「彼らの手中に」では，普通名詞の複数化に過ぎないか，これを単数扱いにすれば，「掌握」「権力」「占有」なとの抽象的意味になる。

〔b〕名詞が数詞に伴われる場合

１　一般的な場合

（1）普通一般の名詞の場合には，当然複数扱いされる。例 चार बेटे

「4人の息子」; एक दो बातें「ひとことふたこと」, एक बजने मे दो मिनट बाकी है।「1時2分前である」。

しかし，動詞は複数でも，時には単語的に単数名詞が用いられることもある。例

उसकी दो बेटियां [=बेटी] हैं। 「彼には2人の娘がある

(2)「1対」から成るもの，および物事を総括的に述べるような場合には，単複任意に扱われる。例 दोनों आंखों [=आंख] से 「両眼で」, दोनों हाथों [=हाथ] का「両手の」。

備考 1) この点，「一般不定の場合」とやゝ趣きを異にしている 〔217ページ前項1 の(1)参照〕

2)「時間」の場合，दस वर्ष बीत गये।「10年か過ぎた」, रात के नौ बज गये।「夜の9時が鳴った」のように，動詞は複数になっても，数詞に付われる名詞そのものは単数扱いされる。例.

दो चार दिन [सप्ताह$_s$, वर्ष$_s$, महीने] में 「2・3日〔週，年，月〕中に」

この場合，दिन 以下の諸名詞を従格複数化させるのは良くない。

3)「金銭」と「貨幣」との関係も，「一般不定の場合」と変わりのないことは前述の通りである。〔222ページ(1)とその備考参照〕

例えは，दस अशरफियां「10アシラフィーの金貨」では，貨幣の数を示しているが，単数形を以てすれば「金額」を示すことになる。

たゞし मेरे पास दस अशरफी है।「私は10アシラフィー持っている」などと，名詞だけ複数化させないこともある。

2. 特殊な場合

(1)「金銭」「寸法」「目方」「面積」などを示す場合。例

एक आने [=आना] गोली 「1アーナの丸薬」

कितने गज मलमल 「幾ヤールのモスリン」

दस सेर शक्कर	「10セールの砂糖」
एक बीघा(1) भूमि	「1ビーガーの土地」

注意 1) 例えば आना टिकट＝एक आने का टिकट「1アーナの切手」, आठ बीघे (का) खेत「8ビーガー〔約5/8エーカー〕の畑」などでは、属格後置詞の有無によって語義の相違はないが、大体、「金額」に関する場合、通例、「 額に価する物品」の意となる。例

दस आने का इनाम	「10アーナに価する賞品」

同様, छ सेर भार「6セールの重さ」においても、属格後置詞 का を中間に入れゝば「6セールの重さを持つ品物」の意となる。

(2) ある特殊な名詞と結合する場合。例

चार रास घोडे [–जजीर हाथी]	「4頭の馬」〔象〕
एक घूंट [गिलास] पानी	「ひと飲み〔いっぱい〕の水」
तीन गाडी(2) [टोकरे] फल	「荷馬車3台分〔かご3杯分〕の果物」
दो प्याले(3) [बोतल] कहवे (＝काफी)*	「2杯〔びん〕のコーヒー」
दस जोडे जूते	「10足のくつ」

II. 同　　格 (समानाधिकरण)

(1) 名詞はよく他の名詞や代名詞と同格になる。例.

परम मित्र परमेश्वर	「最良の友(である)神」

(1) このように用いられた ā で終る男性名詞でも、その次に来る女性名詞の数に一致して e 化しない。

(2) このように用いられた女性名詞は2以上の数詞に伴われても複数化しない。

(3) このように用いられた ā で終る男性名詞は男性複数名詞の前に単数従格化する。

भारतीय नृत्यकार रामगोपाल 「インドの舞踊家ラーム・ゴパール」

そうして，この場合，後置詞を伴えば，同格関係にある前後の名詞も代名詞も従格化するのは当然である。例

अपने पोते राम का 「自分の孫ラームの」

मुझ बच्चे से 「子供の私から」

（2）広義での同格関係で最も注意を要するのは (i) 指示代名詞と名詞または (ii) 指示代名詞と疑問詞とが互に同格関係に立つ場合である。例

(i) उसने यह कैसी बात कह डाली ? 「彼は何という事を言ったんだ」

(ii) उसने यह क्या लिख मारा ? 「彼は何というたわごとを書いたもんだ」

すなわち，(i) では यह と कैसी बात と，(ii) では यह と क्या とは互に同格関係に立ちながら動詞の目的語になっている。

また，वह कौन पुकारता है ?「あれは誰が呼んでいるのか」では，वह「彼」と कौन「誰」とは互に同格主語であるから，वह だけを省いても一向差支ない。たゞし，「彼は誰を呼んでいるのか」の文意なら，कौन を किसे (=किसको) に変更しなければならぬのは無論である。

同様，(i) のように指示代名詞と名詞との同格の場合に，強意のために両者が動詞によって分離されることもある。例

यह लो अपनी टोपी । 「これ（即ち）自分の帽子を取りなさい」(1)

ここでは，同格関係を切り離せば，यह लो「これを取れ」と अपनी टोपी लो「自分の帽子を取れ」との２文になる。つまり，強意的でない普通の文章に直すならば यह अपनी टोपी लो । となる。

---

(1) 買物の折りなどで，店員なり同行の友人なりが御自身の帽子には，「これを求めよ」「これにしなさい」の意で忠告する場合の文句。

[illegible] 1) 職業を示す語か人名と同格関係をなす場合，両語の語順は任意である。
例. कवि टैगोर「詩人タゴール」; राम सहाय लोहार का「ラーム・サハーエ鍛冶屋の」。

しかしながら，人名の説明語が比較的長いならば，句点か括弧かを入れて人名の後に置く。例

डा॰ अवनीन्द्रनाथ टैगोर, आधुनिक भारतीय चित्रकला के(1) जन्मदाता「現代インド絵画の父アバニーンドゥラ・ナート・タゴール博士」

2) 原則として，称号は人名に先立つ。例

महात्मा गांधी(2)「マハートマー・ガーンディー」; राजा दशरथ「ダシャラト王」。

ただし，शाक्य मुनि(3)「シャキャ族の聖人」「釈尊」は別扱のもの。また，敬称 महाराज(4) も，バラモン僧や貴顕に対する敬語として用いられると共に，一般に民間でも साहब, や जी の同義語として「　さん」や「あなた」の意に用いられ，नमस्ते महाराज「今日は」などとも言われるが，これは人名の前にも後にも任意に用いられる。例 महाराज कृष्ण＝कृष्ण महाराज「クリシュナさん」。

3) पुत्र राम「息子（の）ラーム」とか भाई राम「兄弟（の）ラーム」もそうであるが，職名と血縁関係を示す語との並用 बढ़ई भाई「大工兄さん」や बढ़ई बेटे का「大工である息子の」などの言い方は，共に兄弟や息子の内の1人が大工である場合であるが，両語の関係は同格というよりも，一方が他方を説明する形といえよう。

4) 2名詞の並用は常に同格関係にあるとは限らない。例 ब्रह्मणावाद सिंध की तबाही「シンド（州），ブラフマナーバード（市）の破壊」。ここでは，両固有名詞中，後者が前者の位置を示しているだけである。

---

(1) 複数形を取ったのは敬意から。
(2)「香水屋」の意。ヴァイシャ階級の一派の名でもある。
(3) 漢訳で「釈迦牟尼」。
(4) この方は特に呼格の場合に用いられる。「大王」の意。

III 名詞の転用 (संज्ञा-परिवर्तन)

1 副詞への転用

単一または複合の一般普通名詞や従格複数形がしきりに副詞に転用され，あるいは名詞の反復が副詞になることは既述の通りである。(1)

また，「時間」「位置」「方向」などを示す名詞に！ー その語尾が आ にて終るものが ए 化すると副詞になるものの少な ないこと (167ページ末節参照) また आ で終わる終わらぬに関係なく普通名詞や固有名詞でもよく副詞化することも既に説いた。(169ページ同参照) 例

कोई घर रहे, कोई परदेश चले। 「ある者は家に留まろうし，ある者は外国へ行くかも知れない」

उत्तर [घर के पूरब] एक पेड है। 「北〔家の東〕に樹木が1本ある」

वह भारत [पाठशाला*] गया। 「彼はインド〔学校〕へ行った」

しかしながら，特にここで述べたいのは副詞扱いされることのある一部特殊な名詞についてである。例

चारी छुपे सोने के भाव 「非常な高値で」

पनीर किस भाव बेचते हो ? 「チーズは幾らで売るのか」

कुछ सामान नगद खरीदता हूं, कुछ उधार। 「(私は) ある品物を現金で，ある(品物) を掛けて買う」

उसने दो सौ रुपये नगद दिये थे। 「彼は 200 ルピーを現金で与えた」

वह प्रति दिन दो पडाव [—मील] चलता है। 「彼は毎日2駅程〔2マイル〕歩く」

---

(1) 56ページ 3 (a) および 177 ページ5) 参照。(2) 直訳＝「こっそり盗まれた黄金の値で」。

2 形容詞への転用

この場合にも極めて少数の特殊な名詞に限られる。例

घर एक मील है।　　「家は1マイル離れている」

बार बार थूकना ऐब है।　　「度々つばをはくのは悪癖である」

備考 1) 名詞の結合が形容詞になることがある。例 हँस मुख [हँस「笑い」+मुख *f*「顔」]「陽気な」, बाग बाग [बाग *m*「庭」+बाग]「陽気な」「楽しい」。

主として、この場合、前語がよく形容詞的になることがある。(1) 例 पुत्र शोक「息子(を失った)悲しみ」, साथी यात्री「相手の旅人」, एक हाथी सवार「ある象の乗り手」, ग्राम युवती *f.s*「村の娘」; वसन्त समय *s*「春の季節」; उत्तर दिशा *f.s*「北方」, हिन्दू विवाह「インド教徒の結婚」。

2) 名詞が反復されれば物質名詞でさえ形容詞的になることがある。例

वह पसीना पसीना है।　　「彼は汗だくだ」

3) 形容詞が用いられそうな所に抽象名詞がよく用いられる。例

आज बहुत ठण्ड *f* [=सर्दी *f*] है।　「今日は非常に寒い」

आपका स्वागत है।　　「ようこそいらっしゃいました」(直訳=「あなたの歓迎がある」)

IV. 名詞の反復 (संज्ञा की पुनरुक्ति)

(1) 複合語形成(2)——よく「手段」や「状態」が表わされる。例

(1) मैं सड़क सड़क आयी।　　「私(女)は道路伝いに来た」

मेंड़ मेंड़ (=मेड़ मेंड़) जाओ।　「あぜ(田の)伝いに行きなさい」

---

(1) 227ページ備考3)参照。

(2) 177ページ備考5)参照。

(ii) वहा कमर कमर घास है। 「そこには腰まで草がある」

जङ्गल जङ्गल [जङ्गलों जङ्गलों] 「(彼は)森から森をうろついている」
फिरता है।

後置詞を伴っとき 「状態」の意が一層強く示される 例

बातों बातों में 「話をしているうちに」

पानी घुटने घुटने तक है। 「水がひざまである」

भरोसे भरोसे में दस दिन हो गये। 「当てにしているうちに10日経った」

また बीच बीच में 真中に」 दूर दूर तक 「はるか遠方まで」なとも同様である

(3) 「諸々」の意に。例

देश देश के राजा 「諸国の王」

नगर नगर के लोग 「町々の人達」

(4) 強意のため。例

वहा पानी ही पानी है। 「そこは水ばかりだ」

वे आपस में भाई भाई है। 「彼らは互に皆兄弟だ」

備考 1) 反復された名詞の間に強意詞 ही を入れれば一層強意化される。例

यह कहानी ही कहानी है। 「これは単なる(作り)話に過ぎない」

शिकार की खोज ही खोज में रात 「獲物を探し回っているうちに夜になった」
हो गयी।

また पानी ही पानी 「水ばかり」, फूल ही फूल 「花ばかり」なとも同様である。

2) なおまた 反復の場合, 属格後置詞が用いられることがある。この場合例えば मूर्खों का मूर्ख 「愚人中の愚人」におけるように「人」を示す時には単なる「強意」であるが 「抽象名詞」や「人」以外の「普通名詞」と共に用いられる

時には 一元全「全体」のなか表わされる。例 घर का घर 「家全体」, झूठ का झूठ「全くのうそ」, देश का देश「国という国」国全体 , दिन का दिन「終日」「1日中」, सभा की सभा「集会全体」。

しかし 複数民格後置詞 के か用いられゝは「多数」「複数性」か表わされる。例 गाँव के गाँव「村また村」, घर के घर「家という家」「家々」, झुण्ड के झुण्ड「群という群」。

V 名詞の省略 (संज्ञा का छोड़ देना)

主として次のような場合に名詞の省略か行なわれる。

(1) 反復を避けるため。例

यह दूसरा कमरा सोने का है। 「この第2部屋は寝室である」

कुछ लोग घर में हैं कुछ बाहर। 「幾人かは屋内に, 幾人うは外にいる」

(2) 「目方」「製作」などに関連して。例

पैर मन मन भर के हो गये। 「足か非常に重くなった」(1)

मन चालीस सेर का होता है। 「1マンは40セールある」

वह लोहे का बना हुआ होता है। 「それは鉄て作られている」

(3) 「値段」「借金」などに関連して。例

सब ही इतना देते हैं। 「皆かこれだけ出します」

सिलाई का क्या होता है? 「縫賃は幾らてす」

हम पर तुम्हारा कितना आता है? 「ぼくは君に幾ら借りかありますか」

क्या हम को तुम्हारा कुछ देना है? (2) 「ぼくは君に幾らか借りがありますか」

(1) 直訳=「足がマンいっぱいになった」。108ページ(2)参照

(2) 直訳=「ぼくは君の幾らかを与えねばならぬか」。

注　上例中，最初の2例では दाम「価」「料金」が省かれている。第4例では「何も借りたくないはずだが」との反問的な意味で使われている。

(4)「人」が暗示されるとき。例

मैं दस वर्ष का हूँ।	「私は10才（の者）です」
क्या वह अच्छे कुटुम्ब का है？	「彼は良家の人ですか」
बहुत से भाग गये और बहुतेरे मारे गये।	「非常に多くの者が逃げ，多くの者が殺された」

(5) बात*f*「言葉」「事柄」の省略によるため　例

उसने किसी की न सुनी।	「彼は誰の言うことも聞かなかった」
उन्होंने एक न मानी।	「彼らは一つも言うことを守らなかった」
हमारी कुछ न पूछिये।	「ぼくの事を尋ねないで下さい」

注　मेरी उससे नहीं बनेगी। においても同様であるが，しかし，これは (i)「(私と彼　つまりわれわれ2人は) 互いにうまく協調してゆけない」，(ii)「われわれは意見が常に合わない」の意となる。

उसकी मेरी आजकल लगी हुई है।「昨今，彼とぼくとの間はよくない」の慣用句においても，省略されている女性名詞は बात でなければ लड़ाई「けんか」のようなものであろう。

(6) शरीर*m*（=बदन*m*）में「身体に」の省略によるため，例

यह कोट मेरे ठीक नहीं आया।	「この上着は私に合わなかった」
उसके चोट लगी।	「彼は負傷した」
क्या तुम्हारे पसीना आता है？	「君は発汗しますか」

(7)「所有物」「所属物」「味方」などの意が暗示される場合，例

उसने इस आना रक्खा था।	「彼はこれを自分のものとしていた」

न घर का न घाट का　　　「どっちつかずで役に立たない」(1)

आप पूर्ण रूप से उसकी हाजाएंगी।　「貴女は完全に彼のものとなろう」

〔注〕 名詞の主語や目的語のよく省略されることも代名詞の場合と変らない。例えば अब मान गये।「そこで（言うことに）従った」では「人」を示す複数名詞の主語と「事柄」を示す目的語とが省かれていることが分る。

VI 格 (कारक)

1 属 格 (सम्बन्ध)

(1) 所　有

この場合，更に次のように分たれる。

(i) 所有されるものが「人」であれば के が用いられる。例

क्या उस के पत्नी है ?(2)　　　「彼に妻があるか」

मेरे बेटी नहीं है।　　　「私に娘がない」

〔注〕 上記の第2例で मेरे の代りに मेरी を以てすれば「(それは) 私の娘でない」の意になる。

(ii) 所有されるものが，「身体」を初め「一般事項」の「部分」を示す時には，それぞれの伴う名詞の数や性と一致するのが原則である。例

उसकी बड़ी डाढ़ी है।　　　「彼には大きなあごひげがある」

साँप की बहुत सी हड्डियाँ होती है।「へびには多数の骨がある」

इस सङ्गम की चार शाखाएं हैं।　「この協会には4支部がある」

たゞし，उसके एक ही हाथ है।「彼は1本の手しか持たない」〔片手なた〕では，का が用いられない。〔232ページ(6)参照〕

(iii) 所有されるものが，「売買され得る物」であれば，複合後置詞

(1) 直訳=「家のものでも渡し場のものでもない」。
(2) 女性形属格に先立たれれば「彼の妻か」の意。

के पास 「 の所に」「 の側に」が用いられる。例

मेरे पास एक गाय है। 「私は雌牛を1頭持っている

उसके पास लाखा रुपये हैं [=रुपया हैं]। 「彼は幾10万ルピーを持って る

注 1) 例外的に मेरे पास एक अच्छा नौकर है। 私は立派な召使を1人持っている なととも言われるのは かって召使を隷属物視した古代イ の名残りであろう。

2) 上記とは逆に मेरे दो घर हैं। 私は つの住家を占める としてある か पास を用いれば 普通の「所有」が意味される

(2) 所 属

जो वस्तु सबकी है वह किसी की भी नहीं। 「皆に属する物は誰にも属しない」

यह पुस्तक किसकी है? तुम्हारी या उसकी? तुम्हारी है तो हमको दो। 「この本は誰のか。君のか。それとも彼のか。君のなら，ぼくにくれ給え」

(3) 組 成

वर्ष के बारह महीने होते हैं। 「1年は 12 ケ月から成る」

सात दिन का एक सप्ताह कहलाता 「7日は1週間と称される」

らの力ですか」なども本項に属すべきものである。〔257ページ(22)参照〕

（5）材　料(1)

वह घडी सोने की बनी है। 「その時計は金で出来ている」

यह खिलौना कागज का (बना हुआ) है। 「このおもちゃは紙製だ」

（6）年　齢(2)

उसकी अवस्था लगभग दस बर्ष की थी। 「彼〔または「彼女」〕の年は約 10 才でした」

（7）属格は多くの場合，उनका पढना「彼らの勉強」，अंग्रेजो के शासन काल「英国の統治時代」のように，主格的であるか，時々目的格的にもなる。(3)

ईश्वर की भक्ति 「神に対する信仰」

शिमले की रेल-गाडी 「シムラ行〔または「発」〕の汽車」

（8）否定文において，不定法に伴われながら「未来」の意を表わすのに用いられる。

मैं मक्के नही जाने का। 「私はメッカへ行くまい」

हम ऐसी बाते नही सुनने के। 「われわれはこんな事を聞くまい」

वह अच्छी होने की नही। 「彼女は治るまい」(病気などが)

（9）形容詞の前にも用いられる。(4)例

वे भाग के बली हैं। 「彼らは運が強い」

वह बात का पक्का है। 「彼は言葉を守る」(5)

वे रङ्ग के सफेद हैं। 「彼らは色が白い」

(1) 258ページ(23)参照。 (2) 232ページ(4)参照。 (3) 281ページ備考 2) 参照。
(4) 305ページ備考 2) 参照 (5) 直訳＝「彼は言葉が堅固だ」。

(13) 属格とそれが関連する語との間に他の語句が置かれることもある。例

मेरा तुम को प्यार।　「よろしく」(1)

उनका तुमसे नाक में दम है।　「彼らは君でたいへん迷惑している」(2)

(14)「敬意」のために単数名詞が複数扱いされるとき，属格後置詞も共に複数化する。

वह मेरे पिता हैं।　「あれは私の父です」

वे हमारे देश के राजा हैं।　「あの方はわれわれの国王です」

(15) しばしば，位格後置詞と並用される。例

इसमें का पानी　「この中からの水」

पत्थर पर की लकीर　「石の上のしま(縞)」

पाँच महीने तक के समाचार-पत्र　「5ヶ月間の新聞」

(16) 次のような句では属格の取捨は任意である。例 दिल्ली (का) शहर「デリー市」; हिमालय (का) पहाड़「ヒマーラヤ山」; कृषि (का) शब्द「農業という語」

(17)「強意」のために名詞や形容詞の反復を連結するのに用いられる。(3) 例

रात की रात यहाँ काटें।　「終夜をここで過しましょう」

वह भूखे का भूखा ही वापस चला गया।　「彼は空腹のまゝ帰って行った」

注意 代名形容詞 सब も同じ方法で反復される。例

वे सब के सब मर गये।　「彼らは全部死んだ」

तुम्हारे सब के सब बच्चे　「君のすべての子供」

---

(1) 目下の者とか子供とかにのみ用いられる。pyār は「愛情」の意。

(2) 直訳=「君によって彼らの鼻の中に呼吸が（詰って）ある」。un kā は dam にかかる。

(3) 72ページ備考3）参照。

(18) 動詞の (i) 現在分詞も, (ii) 過去分詞も, 共に属格後置詞をさし挟んで反復される。(1) 例

(i) वे सोते के सोते रह गये।　　彼らは永遠に眠り続けた

हम देखते के देखते रह गये।　　ぼくはあきれて見続けた

वह देखती की देखती रह जाती है।　　彼女はあきれて見続けている」

(ii) उसे आया का आया समझिये।　　「彼を行って来た者と思いなさい」(2)

[(複) उन्हें आया का आया समझिये]

वह आया का आया धरा है।　　「彼は来ているのも同然だ」(3)

[(複) वे आये के आये धरे हैं]

(19) ある種の「名詞動詞」において, 対格同然の働きをする。例 मेरी आज्ञा का [=को] पालन करना「私の命令を守る」。その主なるものを次に列挙しよう。

(i) का に伴われるもの ——

आदर s करना「(を)敬う」	अपमान s करना「(を)辱める」
उद्धार s 〃「(を)救う」	उपयोग s 〃「(を)用いる」
नाश s (=नास〃) 〃「(を)滅ぼす」「(を)破る」	पार 〃「(を)横切る」
प्रयत्न s =प्रयास s 〃「(を)試みる」「(を)努力する」	संकल्प s 〃「(を)決心する」
स्वागत s 〃「(を)歓迎する」	स्मरण s 〃「(を)思い出す」
ध्यान रखना「(を)注意する」	साथ देना「(を)助ける」

(1) 非文法的 慣用的 270ページ参照。

(2) 余り速く行って来るので

(3) 彼は必ず遅滞なく来るので まるで早やここに来ているようなものとの意

(ii) की に伴われるもの，——

खेती करना	「(を)耕す」	चिन्ता s करना	「(を)心配する」
तलाश p 〃	「(を)探す」	देखभाल 〃	「(を)世話する」「(を)監督する」
पूजा s 〃	「(を)拝む」	प्रतीक्षा s 〃	「(を)待つ」
बड़ाई 〃	「(を)賞賛する」「誇る」	बदली 〃	「(を)取替える」
रक्षा s 〃	「(を)大切にする」「護る」	रखवाली 〃	「(を)見張る」
रच्छा s 〃	「(を)世話する」「護る」	वर्णन s 〃	「(を)述べる」
सम्भाल 〃	「(を)監視する」	हत्या s 〃	「(を)殺す」

आज्ञा s देना「(を)命ずる」

備考 1) この形は常に対格的となるとは限らない。時々与格的にもなる。例 (का) सामना करना「(に)直面する」，(की) सेवा s करना「(に)仕える」，(की または का) शरण s लेना「(に)避難する」「(の)保護を求める」。

2) 対格が疑問代名詞を伴う場合については 281 ページ(5)の備考1)および 292 ページ(3)参照のこと。

2 与　格 (सम्प्रदान)

〔a〕 意味上の主語に用いられる場合

〔1〕 ある種の動詞と結合して ——

(1) प्राप्त होना「得られる」および मिलना が「得る」「見出す」「出会う」の意になるとき。例

उसको एक छुरी प्राप्त हुई।　　「彼はナイフを1本入手した」

मुझे सड़क पर दो बालक मिले।　　「私は路上で2少年に出会った」

備考 ただし上記末例におけるような場合，出会の2人が共に人代名詞で表わされるとすれば，どれが主語かの点で不明確を来たすおそれもあるので，会う人の方には主格が，その相手の方には与格が採られる。

वह मुझे मिला।　　「彼は(偶然)私に会った」

मैं अपने अध्यापक को मिला था।　　「私は(偶然)私の先生に出会った」

なお，意志があっての面会や訪問の場合には，常に面会者に主格主語が取られ，その相手には奪格の後置詞が採られる。(254ページ「奪格」7 参照)

(2) चाहिये が「要る」意に用いられるとき。例.

आपको कितने सहायक चाहियें ?　　「幾人の助手が要りますか」

मुझको ऐसी दस मेजें चाहियें।　　「私はこんな机が10脚欲しい」

備考 1) この種の चाहिये には「人」を示す意味上の主語がよく省略されたまま用いられる。例. क्या चाहिये ? 「何が要りますか」; नहीं चाहिये। 「何も要らない」; एक अण्डा चाहिये। 「卵が1個欲しい」; दोनों चाहियें, प्याला भी और पानी भी। 「両方とも欲しい，コップも水も」, क्या प्रतिदिन चाहिये ? 「毎日，要りますか」。

2) 動詞の不定法が चाहिये 「ねばならぬ」, चाहिये था 「はずであった」及び होना や पड़ना を伴う時にも意味上の主語が与格になる。(322ページ(2)参照)

(3) सूझना「見える」「思い当る」。例.

आपको क्या बात सूझी ?　　「何をお思いつきになったんですか」

मुझको रात्रि में नहीं सूझता।　　「私は夜見えない」

(4) भाना「好む」と सुहाना「好む」「喜ぶ」。例.

मुझको वह गीत भाता [=सुहाता] है।　　「私はその歌が好きだ」

प्रत्येक को छाया भाने लगी।　　「皆が木陰を好むようになった」

備考 1) 以上のほか，आना「感じる」「覚える」「知る」場合については，164ページ「名詞動詞」(2)およびその〔備考〕1)参照。

2) 抽象名詞が होना や पड़ना と共に成句をなす場合については，163ペー

ジ「名詞動詞」（1）の第2段とその〔備考〕3）および同じくその（3）〔164ページ〕参照。

3）लगना「感じる」「覚える」「くっつく」の意の場合については164ページ「名詞動詞」（4）とその備考参照。

4）「受動ト詞」の意味上の主語に与格が採られる場合については142ページ（3）とその備考参照。

5）「完了分詞」関係の構文において主語が与格を採る場合については336ページ（2）(1) およびその〔備考〕4）参照のこと。

〔11〕 形容詞と結合して

（1） ज्ञात *s* =मालूम *A* 「知れる」。例

उसको यह सब समाचार ज्ञात हुआ। 「彼はこれらすべての消息を知った」
मुझे यह बात अच्छी मालूम हुई। 「私はこの事を良いと思った」

（2） प्रिय *s* =प्यारा *H* 「可愛い」「いとしい」。例

कमल की सुगंध मुझे बड़ी प्रिय है। 「はすの芳香が私には愛らしい」
अपनी जान सब को प्यारी है। 「誰もが自分の生命は可愛い」

（3） उचित *s* =योग्य *s* =मुनासिब *A* 「適す」「向く」。例

यह काम करना तुमको उचित नहीं। 「君はこの仕事をするのに向かない」
उसको इङ्गलैंड देश जाना योग्य है। 「彼が英国へ行くのはふさわしい」

（4） आवश्यक *s* =उचित *s* =जरूरी *A* =लाजिम *A* 「必要な」。例

तुम्हें यह आवश्यक नहीं। 「これは君に必要でない」
क्या तुम्हें यह उचित नहीं है कि 「‥することは君に必要でないか」

（5） कठिन *s* =मुश्किल *A* 「困難な」。例

हम सब को बड़ा मनुष्य होना कठिन है। 「われわれ全部が偉くなるのはむずかしい」

(6) निश्चय f「確実な」。例

मुझे निश्चय था कि उसको दण्ड होगा। 「彼が罰せられるだろうことは私に確かだった」

(7) पैदा f「生れる」「生ずる　起こる」「明らかな」。例

मेरे मन में यह बात पैदा हुई कि 「私の心に　ということが浮んだ」

(8) その他次のような形容詞と共に。例

यह मुझको बहुत ही लाभदायक है। 「これは私に非常にためになる」

मुझको दोनों बराबर है। 「私には両者同じだ」

मुझे दो रुपये ही काफी हैं। 「私には2ルピーだけで十分だ」

注 1) 上記の諸例で見られる通り，ある特定の形容詞と共に用いられる को その他の与格の形は　すべて「に」または「にとり」の意になる。

そして，この場合，補語になるのが特定の形容詞に限られるわけでなく，普通の名詞であっても一向差支えない。例

वह मुझे आग पानी है। 「彼は私にとり火と水(の関係)だ」

2) 形容詞 योग्य や आवश्यक の抽象名詞も दिखाई देना [=— पड़ना]「見える」と同一の構文が採られる。(1)例

हमको उसकी आवश्यकता नहीं। 「ぼくにはその必要がない」

मुझ में ऐसा काम करने की योग्यता नहीं। 「私はこんな仕事に向かない」

〔b〕 目的語に用いられる場合

(1) 間接目的語に。——(i) 他動詞と (ii) 使役動詞とに分けて例を挙げてみよう。

(i) तुमको यह न बताऊँगा। 「(私は)これを君に言うまい」

---

(1) 〔164ページ(3)参照〕。

तुमने रुपये-पैसे किसको दिये ? 「君はお金を誰に与えたのか」

(ii) उसने मुझको मिठाई खिलाई । 「彼は私に菓子を食べさせた」

हमें उसे दिखाओ (=दिखलाओ)। 「ぼくにそれを見せなさい」

注意 例えば、उसने मुझे जाने दिया।「彼は私を行かせた」のように、「許可」を示す場合でも同じことである。また、मुझे उसको दस रुपये देने है [-देना है]।「私は彼に10ルピー与えねばならぬ」では、両代名詞とも、与格形である。〔322ページ(2)参照〕

(2) लगना やこの他動詞 लगाना が (i)「付着」や (ii)「所要」の意を表わすとき。例

(i) घडी को चाबी लगा दो। 「時計にねじをかけなさい」

गोली मुझको लगी। 「弾丸が私に当った」

(ii) मुझे अढाई घंटे लगे। 「私には2時間半かかった」

धोती को कितना कपडा लगेगा ? 「腰巻にはどれほどの布が要るでしょうか」

注意 たゞし、次のような場合には、को よりも मे の方が一層適切である。

मेरे शरीर में मिट्टी लग गई। 「私の身体にとろが付いた」

इन कपडों मे कीडा नही लगेगा। 「これらの着物には虫が付くまい」

〔c〕 को の特別用法

〔1〕 一般的な場合

(1) 目的を表わすのに用いられる。これには、(i) 動詞の不定法につく場合と (ii) 名詞につく場合とがある。例

(i) यह करने को तुमसे किसने कहा ? 「これをするように誰が君にいったか」

(ii) वह मृगया को गया। 「彼は狩猟に行った」

注意 この「目的」を示す को はよく省略される。例 खेलने आइये।「どうぞ遊

ひに来て下さい」，हम सवारी जाएंगे।「(馬などに) 乗りに行きましょう」，हम शिकार गये।「ぼくは狩りに行った」。

（2）होना の直前では「　しかゝる」の意となる。例

वह अब उड जाने को है।　　　「彼は今飛び去ろうとしている」

वह कार्य करने को थी।　　　「彼女は仕事をしかか　ていた」

（3）「値段」を表わすとき、例

आप इसे कितने को बेचेंगे?　　　これを幾らでお売りですか」

वे बहुत दामों को बिकते हैं।　　「それらは非常な高値で売れる」

सौ रुपये को यह महंगा है।　　「100ルピーではこれは高い」

注　以上の को は，すべて में に変えることができる。(269ページ「位格」(15)(ii) および 276ページ(7)参照)

（4）「感謝」「会釈」「祝福」(1)「非難」「のろい」(2)などの対象となる者に。

मैं अच्छा हूं आपको(3) धन्यवाद है।「私は元気です。有難う」

साधु बाबा को प्रणाम।(4)　　　「行者さん今日は」

तुमको (=तुम्हें) (मेरा) प्यार।(5)　「よろしく」

補注　1) インド教徒による朝夕のあいさつ用語中最も普通な नमस्ते「私はなんじにお辞儀する」や नमस्कार「会釈」は，「今日は」「お早う」「今晩は」「左様なら」などの意に用いられる。प्रणाम *s*「私はあなたにお辞儀する」は　目上の人や年長者に会った時に用いられる敬語である。これに答えて，先輩は आशीर्वाद *s*「私はなんじを祝福する」を用い　तुम को आशीर्वाद　とあいさつすることになっている。सलाम *a*「平和」「会釈」その他のウルドゥー系　つまり回教系のあい

---

(1) बधाई *f*　(2) धिक्कार *s*　(3) आप को としても悪くはない。

(4) 直訳―「行者さんに会釈」。बाबा は「行者」や「老人」などに対する敬語。

(5) 直訳―「君に(私の)愛情を」目下の者に対してのみ用いられる。

さつ用語はヒンディーには余り用いられない。जय हिन्द「インドの勝利」が नमस्ते の同義語としてインド教徒の間に流行し出したのは独立後のことである。インド教各宗派はそれぞれ別個のあいさつ用語を持っている。例えば，राम राम=सीता राम=जय राम जी (की)「ラームの勝利(あれ)」や जय गोपाल जी (की)「クリシュナ神の勝利(あれ)」などはヴィシュヌ派に属する人達のあいさつ用語である。また，インド教の革新宗派シク教徒による नमस्ते の同義語は सत् श्री अकाल「真の神は永遠不滅」である。これも，नमस्ते 同様，時々手紙にも書かれる。

2) 特に「表題」「見出し」などでは，को はよく形容詞的にも用いられる。例 मित्र को पत्र「友人への手紙」。

(ii) 副詞的用法

(1)「方向」を示すとき。例

पीछे को चले जाओ।　「後の方へ歩きなさい」「後退せよ」

यह सड़क मेरे घर को जाती है।　「この道路は私の家の方に通じている」

注意 この種の को もよく省略される。例 आओ घर चलें।「来なさい，家へ行きましょう」。

そして，「方向」の対象となるものが無生物や抽象的なものでなく，「生物」である時には (के) पास が用いられる。例 मेरे पास आओ।「私の所に（＝私の方へ）来なさい」。この場合，また मुझ तक आओ। ともいわれる。

(2)「日」「昼」「夜」「朝夕」「午前」「午後」などを示すとき。例

मई मास की पहली तिथि को　「5月1日に」

बारह बजे दिन को = दोपहर को　「正午に」

注意 1) सुबह को नौ बजे「午前9時に」などの言い方の場合，よく के が को の代理をする。cf. रात के नौ बजे=नौ बजे रात को「午後9時に」; दिन के

नौ बजे「午前9時に」。

なお एतवार (=रविवार ♂) को「日曜日に」, आधी रात को「夜半に」, दिन को「昼に」, तीसरे पहर को「午後に」, दम भर को「瞬間」, आगे को「今後」「将来」などといわれる。

そして，これらの को もよく省かれる。例 नौ बजे रात「午後9時に」, सुबह शाम「朝晩に」, बाद「後で」。

ただし，「日付」や「週名」に को は省略できない。

2) पानी दो,चार दिन को काफी है। 「水は2，3日間充分である」などともいわれる。

3) कहने को=नाम को「名目上」は単なる副詞句である。

4) なお「時間」については，261ページ(1)，および271ページ(1)とその備考1)参照のこと。

3. 対　格 (कर्म)

この場合，従格形のほかに主格形の用いられることが与格と異なる。それで，如何なる場合に主格形が採られ，如何なる場合に従格形が採られるかということに一応の考慮が払われなければならない。

〔a〕 代名詞の場合

指示代名詞が「物」を示すとき，主格・従格両形の選択は任意である。例.

मैं वह [=उसको] तुझे दूंगा।　「私はそれを君に与えよう」

हमें वह [=उसे=उसको] दिखाओ।　「ぼくにそれを見せなさい」

मैं वह [=उसको] पढना पसंद करता हूं।=मुझे उसको [=उसे] पढना पसंद है।　「私はそれを読むのが好きだ」

たゞし，指示代名詞が「人」を示すとき，それは常に必ず与格形の従格が採られなければならない。

〔注〕 疑問代名詞 कौन「誰」「何」「どれ」の場合には それ自体の意味の相違や構文の相違などで一様に扱われない。即ち 間接目的語 つまり対格ばかりでなく 主語も「人」を示し 次のような種類の動詞が用いられるとき कौन の従格形が採られる。例

तुम किसको (=किसे) देखते हो?　「君は誰を見ているのか」

वह किसको (=किसे) पुकारता है?　「彼は誰を呼び止めているのか」

上記第1例で もし「何」が意味されるならば किस वस्तु$_s$ (=चीज़$_p$)「何物」または क्या「何」が使用されなければならない。従って 君は誰を打ったのか」の場合 तुमने कौन मारा? とするのは誤りで तुमने किसे (=किसको) मारा? としなければならない。

しかしながら 次のような構文では कौन がたとえ 人」を示さず「何」の意味の場合でも 同様，その従格形が採られる。例

थाना किसे (=किसको) कहते हैं?「交番とは何をいうか

この種の構文では 両対格形中 किसे の方が一層一般的である。

〔b〕 名詞の場合

原則的には，対格名詞が「物」と「人 あるいは「動物」「抽象的な事柄」のいずれを示す場合でも，それらの対格名詞の語意が不定の時には主格形，逆にその語意が限定されている時には को が採られる。しかしながら必ずしも常に原則通りにゆかないので 対格名詞の扱い方にはかなり煩わしいものがある。例えば，मैंने एक चिट्ठी पढ़ी।「私はある手紙を読んだ」や मैंने चिट्ठियाँ पढ़ी हैं।「私は(数通の)手紙を読んだ」などにおける対格名詞は共に不定であるが，मैंने (उस) चिट्ठी को पढ़ा।「私はその手紙を読んだ」や मैंने (उन) चिट्ठियों को पढ़ा है।「私はそれらの手紙を読んだ」では，

対格名詞の意味が限定されている。「人」を示す場合もこれと同じことである。

しかしながら，上記の原則に反し，मैंने यह चिट्ठी पढ़ी है। とか मैंने एक चिट्ठी को पढ़ा। とかのように 全然逆にも用いられることもある。

(1) 語意限定の対格名詞か「人」以外のものを示すとき，主格・与格両形の選択は任意である。例

मेरा कुत्ता [=मेरे कुत्ते को] पकड़ो। 「私の犬を捕えなさい」

वह काम [उस काम को] करो। 「その仕事をしなさい」

मैंने उसका आना [=उसके आने को] 「私は彼が来るのを好んだ」
पसंद किया।

一般に，「人」を示す以外の対格名詞が限定的意味に用いられていても，その意味が不明にならない限り，日常の会話では主格形の採られ場合が多い。

(2) 以上とは逆に，対格名詞の語意が不定でありながら को を採る場合がある。

(i) 一般的な場合。例

समय (को) व्यर्थ मत गँवाओ। 「時間を空費するな」

मैंने परे एक मोर (को) देखा। 「私は彼方に1羽のくじゃくを見た」

注意 「強調」または相手の「注意」を引くために不定対格名詞に को が用いられることもあるが好ましい現象ではない。

(ii) 他の格との混同を避けるために。例

धन को धन कमाता है।(1) 「金が金を生む」

---

(1) 直訳=「富が富をもうける」。

वे दुःख को सहन न कर सकीं। 「彼女らは苦痛を我慢し得なかった」

注 1) 「को」のための語順もあるために 上例のような場合 対格に को がないと主語と目的語との見分けはつきにくい。

2) なお、को については、「代名」(19)〔238ページ〕「名詞」(2)—(6)〔251ページ〕「助詞」(a)(13)および(14)の(i)〔266,7ページ〕参照のこと。

(iii) 二つの対格を必要とする動詞が用いられる場合、最初の対格名詞はたとえ不定的意味であっても、それに को が採られる。例

पुस्तक को गुरु जानना। 「本を師と思いなさい」

साथ पढ़ने वालों को भाई समझो। 「一緒に学ぶ人達を兄弟と思いなさい」

注 しかし、このような場合、最初の対格名詞の意味が限定されていれば को の採用は任意である。例

यह बात मैं किस प्रकार सच जानूँ? 「この事を私はどうして真だと思おうか」

ただし、最初の対格が代名詞であれば、それが常に को 格を採ることはいうまでもない。例

उसने मुझको झूठा कहा। 「彼は私を嘘言者と呼んだ」

मैं आपको अपनी माता समझता हूँ। 「私はあなたを母と思う」

なお、二つの目的語を採る動詞には、他に देना「に　を与える」, देखना「を　と見なす」; पाना「を　として見出す」, पूछना「に　を尋ねる」, बताना「に　を告げる」「に　を説明する」, बनाना「を　にする」, सुनना「を　として聞く」などがある。

(3) 常に को を採る場合。

(i) 人名の時。例

मैंने राम को मारा 「私はラームを打った」

(ii) 動詞 बुलाना「呼ぶ」と共に。——この場合、語意の不定・限定に

無関係である。例

किसी सेवक को बुलाओ। 「誰か召使を呼びなさい」

備考 1)「誰かが…するのを見た」「誰かが…するのを聞いた」の構文中，「人」を示す「誰かが」に対格が採られる。例

मैंने उसको बातचीत करते देखा। 「私は彼が話をしているのを見た」

मैंने उसको बोलते सुना। 「私は彼が話しているのを聞いた」

この場合「見聞き」を示す動詞の前の分詞の従格化に注意（329ページ〔備考〕2)参照）。

また वह मुझको अपने से बढ़ जाना पसंद नहीं करता। 「彼は私が彼自身より秀れるのを好まない」なども同じことである。

2) 同一文中に को を採った与格と対格とが並用されることもある。例

उसने मुझको उन्हें समझाने-बुझाने को लगा दिया। 「彼は私に彼らに何もかも分らせるようにさせた」

3) 数学の割算や掛算にも को が用いられる。例

चार को दो से भाग दो। 「4を2で割りなさい」

दो को तीन से गुणा करो। 「2に3を掛けなさい」

4 器 格 (करण)[1]

(1) 器 具

रूमाल से आँसू पोंछो। 「ハンカチで涙をふきなさい」

तुम इससे क्या करते हो? 「君はこれで何をするのか」

(2) 手 段

मैं रेल-गाड़ी से जाऊँगा। 「私は汽車で行きましょう」

इस सड़क से नहीं गुजर सकते। 「この道は通れない」

---

(1) ウルドゥーでは奪格の一部として扱われる。

注 この形の से は हाथ「手」と一緒に用いられるとき、よく省略される。例)

वह उनके हाथों मारा गया। 「彼は彼らの手で殺された」

(3) 行為者に

मेरी रक्षा उनसे हो चुकी। 「私は彼に保護されてしまった」

यह पत्थर मुझसे नहीं उठा।(1) 「この石を私は持上げられなかった」

यह तुमसे दबना नहीं। 「彼(または「それ」)は君の手に負えない」

5 奪 格 (अपादान)

(1) 愛情・愛着

मैं आपसे प्रेम करता हूं। 「私はあなたを愛します」

सब को अपने शरीर से प्रेम है। 「皆が自分の身体を愛する」

माँ को बच्चे से (-का) प्रेम होता है। 「母は子供を愛する」

उपन्यासों से उसे बहुत लगाव था। 「小説を彼は非常に好んだ」

(2) 恐怖・嫌悪

आप किससे डरते हैं। 「あなたは誰を恐れているんですか」

उनसे छेड़छाड़ न करना। 「彼らをいらだたせてはいけない」

वह मुझसे रूठा हुआ है। 「彼は私に立腹している」

इस विवाह से सब लोग प्रसन्न [अप्रसन्न] हैं। 「この結婚を皆が喜んでいる(喜んでいない)」

(3) 憎悪・ねたみ

वह मुझसे द्वेष करता है। 「彼は私を妬んでいる」

---

(1) 143ページ(5)参照。

वह मुझसे कुढ़ गई। 「彼女は私をきらった」

वह मुझसे बहुत जलता। 「彼は私を大変ねたんでいる」

वह मुझसे मुँह फुलाये रहती। 「彼女は私に顔をしかめていたものだ」

(4) 拒絶・禁止

मैंने बेचने से अस्वीकार किया। 「私は売ることを拒んだ」

उसने मुझको आने से मना किया। 「彼は私が来るのを禁した」

ただし、देखने को [=से] कोई रोक नहीं सकता।「見ることを誰も差し止め得ない」と言われる。一方、कोई सुनने से नहीं रोकता।「誰も聞くのを差し止めない」である。

(5) 承知・通知

वह मुझसे भली-भाँति परिचित है। 「彼は私をよく知っている」

आपसे यह निवेदन किया गया था। 「あなたにこの事が通知された」

मुझको इस बात से खबर दो। 「私にこの事を知らせなさい」

たゞし、मेरी उससे जान-पहचान नहीं है।「私は彼と知合いでない」「直訳=彼と私との親しさ(知己)はない」」; मेरी आपसे जान-पहचान हुई।「私はあなたと知り合いになった」などである。

備考 その他、例えば उसने लोगों को बुरे कामों से रोका है।「彼は人々に悪い行いを止めさせた」のような「防止」を初め「節制」「放棄」「忌避」「恐怖」「恨み」「反対」「奪取」などの意を表わすのにも、上記のように、目的格に用いられることが多い。

(6) 陳述・質問

उससे यह बात कहो। 「彼にこのことを言いなさい」

मैं उससे यह पूछता हूँ। 「私は彼にこれを尋ねます」

तुमसे एक भेद की बात खोलता हूं। 「君に内証事を一つ開陳しょう」

注 1) कहना が「呼称」または「命令」の意になるとき，主格の代りに与格が採られる。例

इसको हिन्दी में क्या कहते हैं? 「これをインド語で何といいますか」

मैंने उसको यहाँ आने को कहा। 「私は彼にここへ来るように命じた」

たゞし，कहना は人称代名詞と共に用いられる時に限り，卑語的に その第二形の与格が से に代用されることがある。例 मैं तुमसे [=तुम्हें(1)] यह कहूँगा।「私は君にこれを言おう」。

2) बोलना は「言う」意でなく，「話す」意である。従って，वह अच्छी उर्दू बोलता है।「彼は立派なウルドゥー語を話します」，वह मुझसे बोला।「彼は私に話した」であるがもし वह अच्छी उर्दू कहता है। となると「彼は立派なウルドゥー語の詩を作る」意になる。

また बोलना は鳥獣の鳴声にもいわれる。例

मेंढक बोल रहे हैं। 「かわずが鳴いている」

3) पूछना が「顧慮する」「気付く」意に用いられる時にも，やはり与格の形が採られる 例

किसी ने मुझको न पूछा। 「誰もが私に気がつかなかった」

4) たゞし，बताना=बतलाना「告げる」としては 主格の代りに与格が採られる。例

उसको (=उसे) यह बताओ। 「彼にこれを告げなさい」

मुझको बतलाया क्यों नहीं? 「私になぜ言わなかったのか」

5) 特にバンガール (बंगाल) 即ちベンガル地方の人達や無教育な者は単なる「陳述」や「命令」を表明する場合でも，よく誤って उसको कहो [बोलो, पूछो] などといったりする。同様，मेरी नमस्ते [=मेरा सलाम(2)] सब को कह

(1) kahnā と共に本語を用いるのは地方的。
(2) インド教徒以外の者によって使用。

दो।「皆によろしく」などと，को が से よりも一層多く使用されてはいるが，से を用いる方が正しい。

(7) 面会・訪問

प्रेमचन्द से भेंट	「プレーム・チャンド[1]との面会」
उससे मेरी भेंट हुई।	「私は彼に会った」
(=मैंने उससे भेंट की।)	
मैं तुमको उससे मिलाऊँगा।	「私は君を彼に会わせましょう」

備考 1) ただし，दर्शन s「面会」「訪問」は常に複数形扱いされるので आपके दर्शन कब होंगे?「いつお目にかゝれるでしょうか」などといわれる。

2) 上記のように「意志」あっての「面会」や「訪問」でなく，「偶然の出会」が意味される時の構文については，239ページ2 (a) (1)「1」とその備考参照のこと。

(8) 要請・祈願

मैं आपसे विनती करता हूँ।	「私はあなたに嘆願します」
उसने मुझसे क्षमा माँगी।	「彼は私に容赦を求めた」
ईश्वर से प्रार्थना करो।	「神に祈りなさい」
मुझसे क्या चाहते हैं?	「私に何をお望みですか」

(9) 闘争・衝突

वह मुझसे लड पडी है।	「彼女は私とけんか〔または衝突〕した」
उससे मेरा प्रतिदिन झगडा रहता है।	「彼と私とは毎日けんかだ」
उसको पत्थर से ठोकर लगी।	「彼は石につまづいた」
=उसने पत्थर से ठोकर खाई।	

(1) ヒンディー・ウルドゥー両語における著名なインド小説家 (1880 7 31—1936 10 7)

(10) 交換・報復

अपनी घडी उसकी घडी से बदलूंगा। 「自分の時計を彼のと交換しましょう」

मैं भी तुमसे इसका बदला लूंगा। 「ぼくも君にこの仕返しをしょう」

[=मैं भी तुमको इसका बदला दूंगा।]

(11) 充満・空虚

फूलों से भरा स्थान 「花で満たされた場所」

वह सड़क कीचड़ से भरी है। 「その道はどろだらけた」

घर रुपये से खाली है। 「家にはお金かない」

〔直訳 「家は金に空しい」〕

(12) 愛好・興味

मुझे सुरा से अनुराग नहीं। 「私は酒をたしなまぬ」

मुझे इससे बड़ा अनुराग है। 「私はそれか大好きだ」

उसे पढने लिखने से आकर्षण था। 「彼は読み書きに興味があった」

(13) 協　調

पड़ोसियों से सहयोग 「隣人達との協力」

सबसे मेल रखना चाहिये। 「皆の者と協調しなければならぬ」

उनसे मेरी(1) मित्रता है। 「彼らと私は仲良しである」

備考 動物などが人になれることも本項に所属させ得よう。例

यह पशु हमसे शीघ्र हिल जाता है। 「この動物は直ぐわれわれになれる」

(14) 合　致

आँखों से आँखें मिल गयीं। 「眼と眼とか出会った」

घडी (को) तोप से मिला दो। 「時計を午砲に合わせなさい」

---

(1) 最初の2語を मेरी उससे, उसकी मुझसे, उसकी और मेरी などと3様に変更しても同じことである。

मै स्वतन्त्रता से शून्य हूं।　　私は自由を奪われている

2)「裸体」や「はだし」を意味する場合には，नगे शरीर मत फिरो।「裸体でうろつくな」，वह नगे पाव है।「彼ははだしである」などという方が一層普通である。

(30)「(と)一緒に」の意に。

वह लडको से खेला कूदा।　　「彼は少年らと一緒に遊び回った」

उन्होंने मुझसे व्यापार किया।　　「彼らは私と商売した」

रोटी मक्खन से खाओ।　　「パンをバターと一緒に食べなさい」

備考 1) 第1・2例におけるように主語の相手が「人」であるとき के साथ「(と)一緒に」を用いる方が一層好ましい。この種の से も形容詞的になる。例

प्रकृति से तादात्म्य　　「自然との合一」

2) その他「相談」「注意」および物の送り先きなどの対象となるものにも से が用いられる。例

उसको मुझसे सम्मति लेनी पडी।　　「彼は私に相談することを余儀なくされた」

उससे सावधान रहना।　　「彼に気をつけなさい」

मेरे पते से भेज दो।　　「私宛に送りなさい」

3) なお，मै उसके स्वभाव से सतुष्ट नही था।「私は彼の性格に満足しなかった」などと「満足」の対象にも से が用いられる。しかしこれは「満足」を意味する形容詞や名詞の如何に因って पर や मे も用いられる。(266ページ111参照) 例

मै उसके हृदय को बहलाने में कृतकार्य हुआ।　「私は彼の心を楽しますことで満足した」。

4) 特に副詞句を作るのに用いられる。例 स्पष्ट रूप से「明確に」; बडी नम्रता से「たいへん恭々しく」，अधिक से अधिक「多くて」「せいぜい」。

6 位　格 (अधिकरण)

〔a〕 पर

（1）時　間

この場合，(i)「分」「時」など比較的短い時間か (ii)「一定時」を表わすのに用いられる。例

(i) दस बज कर दस मिनट पर(1)「10時10分に」

(ii) ठीक समय पर「正確な時間に」, इस अवसर पर「この好機会に」, वापसी पर「帰ってから」, उसकी विदाई पर「彼が出発の時に」。

備考 1) また पर は慣用的に「まで」の意に用いられることがある。例 आज का काम कल पर मत छोड़ो [=टालो]।「今日の仕事を明日に延はしてはいけない」。ここで तक の使用は不可。

2)「時刻」を示すのに，普通 動詞 बजना「時を打つ」を用いて एक बजा है।「1時だ」(直訳=「1時を打っている」), दो बजे हैं।「2時だ」(直訳=「2時を打っている」) などと言われる。

また，副詞的用法としては，दस बजने पर आओ।「10時になったら来なさい」における様に「…すると」の意になるほかに，次のように，पर なしにも用いられる。एक बजे「1時に」, डेढ़ बजे「1時半に」, पौने दो बजे「2時15分前に」, दो बजे रात से「午前2時から」; दो बजे तीसरे पहर「午後2時に」,

3) पर は特に「時間」を示す副詞句を作るのによく用いられる 例 समय पर「時間通りに」, समय समय पर「時々」, अवसर हाथ लगने पर「機会があると」。

ただし，समय=वक़्त が他の品詞で修飾されるとき，その後の पर はよく省かれる。例 उस समय「その時」「その頃」, आते समय「来る時」[illegible]

---

(1) दस बज कर の代りに बजने में をもってすれば「10時10分前に」[illegible]

पल पल (पर=में) は「絶えず」である。(1)

(2) 場　所

(i) 上・表面

पुस्तक के अगले पन्ने पर	「本の次の頁に」
मेरी टोपी खूंटी पर है।	「私の帽子はクギにかかっている」
छत पर बहुत मक्खियाँ हैं।	「天井に沢山のハイがいる」
पारा २० दर्जे पर है।	「温度は20度である」〔直訳=「水銀は20度の上にある」〕

また、転じて「人」または抽象的なものの「上」の意にも用いられる。例

जान पर खेलना	「生命をかける」〔直訳=「生命の上に遊ぶ」〕
वह भ्रम पर है।	「彼は混迷している」
लोहे का बाजार चढ़ाव-उतार पर है।	「鉄相場は上ったり下ったりだ」

備考 1) पेड़ों पर (=में) फल लगते हैं।「樹々に花がついている」であるが、कोट मेरे शरीर पर (=में) ठीक बैठा है।「上着は私の身体にあう」では पर の方が一層適切である。

2) वह सड़क पर आ रहा है।「彼は路上をやって来るところだ」に対し、वह सड़क में मर गया।「彼は途中で死んだ」であるが、後者では「徒歩」または「乗物」の途中で亡くなった意。(264ページ(4)とその備考参照)

3) 本項や次項(ii)該当の पर は形容詞的にも用いられる。例 गंगा पर संध्या「ガンガー(河)上の夕暮」; समुद्र तट पर मछुआ「海岸の漁夫」。

4) 各種の乗物のうち、自転車や牛馬などのように、屋根や覆いの無いものに対しては पर が用いられ、汽車・電車・自動車などのように覆いのあるもの

(1) 245ページ「与格」(ii)(2)、および271ページ「位格」(b)(1)参照。

に対しては その意味の用途によって पर と में が随時に用いられる。例

वह उस सड़क से टट्टू पर गया। 「彼はその道を小馬で行った」

ただし ठेले पर (-में) फल लदे हैं।「手押車に果物がのっている」などでは両後置詞が任意に用いられるが ट्रेम में मेरी टोपी खो गयी। 「電車内で私の帽子が失くなった」では 紛失した場所が 電車内に限定されるが पर をもってすれば 車内と限らず 待合室でも改札口でもよい 電車に関係のある地域でなくなったことが示される。(273ページ「位格」(6)(2)(1)備考1)及び274ページ(3)備考3)参照)

5) पर と複合位格後置詞的副詞の ऊपर とは同一扱いされることもあるが本質的に違っている。पर は (के) ऊपर「(の)上に」のように属格後置詞 के を伴われることも出来ないし ऊपर का「上へ」のように का を伴うことも出来ない。また 例えば जड़ से ऊपर का भाग「根から上の部分」においても後置詞 पर をもって副詞 ऊपर と取替えることはできない。第一 上例で見られるように पर とでは3後置詞が並用されるということはあり得ない

(ii) 傍・畔

टेलिफोन पर आओ।	「電話の所へ来なさい」
वह गंगा तट पर पहुँचा।	「彼はガンガー河畔に着いた」
मेरी पीठ पर एक कुत्ता है।	「私の背後に犬がいる」

その他 अलाव पर「かがり火の所で」, किनारे (पर)「岸辺で」, कुवें (=कूएँ) पर「井戸ばたで」, द्वार पर「入口の所に」, फाटक पर「門の所で」。

(iii) 境界・線上

वह पश्चिमी सीमा पर है।	「それは西の境界上にある」
अलगनी पर कपड़ा पड़ा है।	「物干さおに布がかかっている」
वह नगर रेलवे-लाइन पर है।	「その町は鉄道沿線にある」

(iv) 距離・間隔

वह कितने फासले पर है?	「それはどれ程の距離の所にあるか」
वह यहाँ से दो मील पर है।	「それはここから2マイルの所にある」

(v) 地 点

घर पर सब कैसे हैं?	「家では皆さん如何ですか」
पहले मोड़ पर घूम जाओ।	「最初の曲り角で回りなさい」
वह एक स्थान पर आ पहुँचा।	「彼はある場所にたどり着いた」

(3) 準 拠

आदर्श (नमूने) पर काटना	「見本に基いて切る」
वह मेरे इशारे पर चलता है।	「彼は私の合図に従って動く」
घड़ी की लय पर हिला।	「車のリズムに基いて振動した」

(4) 方 法

बैल घास पर जीवन व्यतीत करता है।	「牛は草で生活する」
कौन से रास्ते पर जायें?	「どんな方法で行きましょうか」

注意 第1例では से の使用は余り良くない。第2例は「どんな方法が採らるべきか」が尋ねられているが से を用いれば単なる「手段」が示される。रास्ता 自身に「道路」の意のほかに「方法」の意があるので रास्ते पर は「路上に」のほかに「方法で」「流儀で」の意にもなる。例 अपने अपने रास्ते पर चलो। 「めいめいの方法でやって行きなさい」「それぞれの流儀に従って行動しなさい」。

なお वह शत्रुओं की तलवारें अपने हाथ पर रोकता था। 「彼は敵たちの刀を自身の手で食い止めていた」でも से を用いれば「手段」が示されることになる（250ページ「道具」(2)および274ページ(b)(3)参照）

（5）義　務

वह लड़ाई पर गया।　「彼は戦争に行った」

वह अपने काम पर गया।　「彼は自身の仕事に行った」

वह छुट्टी पर गया है।　「彼は休暇を取っている」

वह पहरे पर है।　「彼は見張り中だ」

注意 1) 第1例で पर の代りに को は用いられない。第2例で को を代用すれば，「義務」のためでなく，「自身のため」が意味される。

2) 特に動詞 लगना「従事する」の前によく用いられる。例

वह अपने काम पर लग गया।　「彼は自身の任務についた」

उसने मुझको अपना घर बनाने पर लगा दिया।　「彼は自身の家を建てるのに私を従事させた」

（6）原　因[1]

इस पर उसने कहा।　「この事で彼が言った」

उनमें रुपये पर लड़ाई हुई।　「彼らの間にお金のことでケンカが起こった」

छोटी छोटी बात पर भी बिगड़ जाता है।　「(彼は) 極くささいな事にも腹を立てる」

（7）関　連[2]

उत्तर दिशा जान लेने पर　「北の方角を知ることについて」

जर्मनी पर लिखी हुई पुस्तकें　「ドイツに関し書かれた本」

注意 पर は特に表題などによく用いられると共に　形容詞的にもなる。例 हिन्दू धर्म पर निबंध「インド教に関する論文」。

---

(1) 258ページ「奪格」(2)参照

(2) 256ページ「奪格」(5) および 276ページ「位格」(b)(8)参照。

(8) 優 劣

वह सब वस्तुओं पर श्रेष्ठ है। 「それはすべての物に優れている」

वह विद्या में मुझ पर श्रेष्ठता ले गया। 「彼は学問では私よりも優れた」

(9) 待 遇(1)

वह मुझ पर बड़ा कृपालु है। 「彼は私に非常に親切だ」

उसने मुझपर अधर्म किया। 「彼は私に不法なことをした」

備考 से が बर्ताव「待遇」その他「取扱い」などを意味する名詞と共に用いられるに対し पर は説明語が「親切」「圧迫」「不快」などを示すとき各々に用いられる。

(10) 結 末

अब हम सिरे पर आ गये हैं। 「今やわれわれは終りに来た」(2)

मैं इस परिणाम पर पहुँचा कि 「私はこういう結論に達した、 」

(11) 満 足(3)

इस पर सन्तुष्ट रहो। 「これで満足せよ」

इस पर सन्तुष्टता करो। 「これで満足しなさい」

(12) 注 意

गाड़ी पर ध्यान रखो। 「車に注意しなさい」

उसने गाड़ी पर ध्यान न किया। 「彼は車に注意しなかった」

(13) 行為の対象に

(1) 攻 撃

वह मुझ पर टूट [=पिल] पड़ा। 「彼は私を襲うた」

---

(1) 258ページ「称格」(5)参照。

(2) 物語などの。

(3) 260ページ〔備考〕3）参照。

मैंने उस पर चढ़ाई की।　　「私は彼を攻撃した」

मैंने उस पर झपट्टा मारा।　　「私は彼に飛びかかった」

注 तलवार चलाना 「(に)刀を振り回す」, बन्दूक चलाना 「(に)発砲する」などでも पर が用いられる

(ii) 占　領

हमने उस पर अधिकार कर लिया। 「われわれはそれを占領した」

वहाँ पर मेरा अधिकार हो गया। 「そこを私は占領した」

(iii) 統　治

वह चीन पर राज करता है।　　「彼は中国を支配している」

वह ईरान पर राज करने वाला हुआ। 「彼はイランの統治者になった」

注 (पर) ताक लगाना [=बाँधना] 「(を)見つめる」「(を)ねらう」など「注視の対象」もこの項に所属さすべきものであろう。単に「見る」(देखना) よりならばこの対象が探られるだけである。ただし मेज पर देखा। なら「机を見たこと」ではなく「机の上に何かあるかを探せたのだ」。

(14) 感情の対象に

(i) 信・不信

मुझ पर [=मेरे ऊपर] भरोसा रखो। 「私を信用しなさい」

मुझे उसकी प्रतिज्ञा पर भरोसा नहीं। 「私は彼の約束を信用しない」

मुझको उस पर सन्देह है।　　「私は彼を疑う」

注 第1例では करना の使用も可。第3例にて उसमें とすれば「人」でなく「物」「事柄」が対象とされる。

(ii) 同情・親切

सब पर दया रखना।　　「みんなをあわれみなさい」

वह मुझपर [मेरे ऊपर] कृपालु है। 「彼は私に親切だ」

उसने मुझ पर बड़ी कृपा की। 「彼は私に大変親切でした」

=उसकी मुझ पर बड़ी कृपा हुई।

(iii) 魅 惑

मैं उसपर लट्टू हो जाता हूँ। 私はそれに見とれている

वह मुझ पर मुग्ध हो गयी। 彼女は私に恋した

मैं उस पर मोहित हो जाता था। 「私は彼に魅せられていた

(iv) 後 悔

अपनी बुराइयों पर पछताओ। 「自分の悪いことを後悔しなさい」

अपने आलस्य पर हाथ मल रहो। 「自分の怠惰を悔みなさい」

(v) 笑 い

तुम किस पर हँसते हो? 「君は誰を笑っているのか」

उसका मुझ पर बड़ी हँसी आई। 「彼は私を大いに笑った」

(vi) 自 慢

आपको किस वस्तु पर अभिमान है? 「何か御自慢ですか」

उसको पुत्र पर बड़ा घमंड है। 「彼は息子が大自慢だ」

備考 「立腹」「ねたみ」などの感情も本項に属すること勿論である。例

उस पर [=उसके ऊपर] क्रोध मत कर। 「彼を怒るな」

तुम उसके वेतन पर क्या जलते हो? 「君は彼の給料を何でねたむのか」

(15) 金銭関係に

(i) 借 金

मुझ पर उसका उधार है। 「私は彼に借金がある」

हम पर तुम्हारा कितना आता है? 「ぼくは君に幾ら借りがあるか」

मेरा उस पर कुछ रुपया चाहिये।　「彼は私に若干の借財がある」
=मुझे उससे कुछ रुपया लेना है।

(ii) 値　　段(1)

किस दाम पर [=में] बेचोगे?　「(君は)幾らで売るのか」
वह साँकर तुमको कितने पर पड़ी।　「その鎖は幾らしたか」

備考 この場合, को や में の方が一層普通である。上記の第2例などはむしろ慣用的。वह कितने को [=में] आयी?「それは幾らしたか」などの言い方の方が一般的である。

(iii) 賃貸借・利息・保険料

सूद पर उधार लेना　「利子付で借りる」
मैं यह बँगला किराये पर लूँगा।　「私はこのバンガローを賃借りしよう」
घर का दस लाख येन पर बीमा हुआ है।　「家には100万円の保険がついている」

備考 「罰金」も本項に属し, उस पर जुर्माना हो गया।「彼は罰科に処せられた」などと, 意味上の主語に पर が用いられる。

たゞし, この場合, 他動詞の構文を採れば, उन्होंने मुझ पर जुर्माना कर दिया [=अर्थदण्ड दिया]।「彼らは私に罰金を課した」のように, पर が目的語に付く。

(16) 動詞の不定法に

(i)「…すると」の意に。例

उसके पूछने पर　「彼が尋ねると」
विपत्ति पड़ने पर　「禍が起きると」

---

(1) 244ページ「与格」(c)(i)(3), および276ページ「位格」(b)(1) 参照。

(ii) होना を伴って「…しかかる」の意に。例

वह मरने पर था।　「彼は死にかかっていた」

गेहूं पकने पर आते है।　「小麦が実りかかっている」

〔注〕 時に पकना は省略される「煮える」ようであるが अब पकने पर आया।「もう熟した」であって省略ができないことになっている

(iii) भी を伴って「…にもかゝわらず」の意に。例

पूरा प्रयत्न करने पर भी　「充分な努力にもかゝわらず」

〔注〕 1) この意には必ずしも不定詞に付く場合とは限らず भी が付いても付かなくても同様に 抽象名詞や代名詞に付く場合でも同じ意味になることもある。例

इतनी सुन्दरता पर　「これほどの美しさにもかゝわらず」

उस पर भी वह प्रसन्न था।　「それにもかゝわらず彼は喜んだ」

2) 「にもかゝわらず」の意は भी を伴う分詞の構文でも表わされる。例

अनेक प्रयत्नों के होते हुए भी वह असफल हो गया।　「多くの努力にもかゝわらず彼は失敗した」

(iv) भी を伴って「…のみならず」の意に。例

इतना होने पर भी　「これほど在るばかりでなく」

वह सुन्दर होने पर भी चतुर है।　「彼女は美しいばかりでなく賢い」

〔注〕 上記、(iii) は前句と相反した意の後句を伴うときに、(iv) は前後の両句とも互に反意的でない場合であることは自ら明らかで、そのいずれであるかは一に前後の文脈によってきまることである。

(17) 名詞や動詞の反復の際に。(1) 例

(i) प्याले पर प्याले चढ़ना　「1杯また1杯と乾杯する」

बात बात पर झुंझलाना　「事々にいらいらする」

---

(1) 237ページ「関格」(7)参照。

(ii) आएगा पर आएगा।　「(彼は) 結局来よう」

आ गया पर आ गया।　「(彼は) 結局やって来た」

मच्छर हमारा लहू पीते और सताते पर सताते।　「か(蚊)はわれわれの血を吸い悩まし続ける」

注意　1) 以上のほかに「賛否」などもある。例

मैं इस पर विरोध नहीं करता।　「私はこの事に反対しない」

2) पर は「場所」の場合に特によく省略される。例

वह मेरे घर (पर) रहता है।　「彼は私の家にいる」

मैं एक गाड़ी किराये (पर) लूँगा।　「私は車1台雇おう」

3) पर は「様態」「時間」「場所」「距離」に関連した副詞句を作るのによく用いられる。

〔b〕 में

(1) 時　間

(i) पर や को よりも一層長い時間，即ち「数時間」「週」「月」「年」「年齢」「時代」「季節」「始め」「終り」などに用いられる。例．

दो दो घंटे में [= बाद]「2時間毎に」; सप्ताह में दो बार「週に2回」; अगले महीने में「来月に」; पिछले महीने में「先月に」，दस वर्ष की अवस्था में「10の歳に」，प्राचीन काल में「古い時代に」「昔」; ऐसे समय में「こんな時に」; इन्हीं दिनों में「ほかならぬその頃〔または季節，時代〕に」; ग्रीष्म ऋतु में「夏季に」，आरम्भ (=प्रारम्भ) में「初めに」。

注意　1) दिन में「日中」; रात में「夜中」におけるように，いずれも「期間」が示される。この点 को が一般に「時の一点」を示すのと違っている。しかし，बाद में [=को]「後に」; अन्त में [=को]「終りに」「遂に」などのように，में が को によく代用されること，ならびにこれらの両後置詞とも省略されたまま，つ

まり名詞そのまゝの形で副詞として用いられることは既述の通りである（169ページ〔備考〕および246ページ〔備考〕1）の末節参照）

2) また दोपहर को　बारह बजे दिन को「正午に」も　दोपहर में などともいわれるが余り良くない。たゞし दिन दोपहरी में कहाँ फिर रहे हो? 「君は)昼日中どこをうろついているのか」などといわれる。

3) (1)項の場合の में が特に一般の形容詞や指示形容詞に伴われる場合によく省略される。例 अगले वर्ष「来年」, बारह महीने「一年中ずっと」, हर दूसरे सप्ताह「2週間ごとに」, उन दिनों「その頃「当時」」, उन्हीं दिनों「ちょうどその頃」。

4) 例えば अगले महीने में क्या प्रोग्राम है? 「来月のプログラムは何か」では「如何なる内容のプログラム」または「プログラムの本質と部分的なもの」が尋ねられるに対し，में の代りに属格 का をもってすれば，1ケ月中の全プログラム」が尋ねられることになる。

(ii)「一定期間以内に」の意に。例

दो तीन दिन में　「2・3日中に」

एक घंटे में आओ।　「1時間以内に来なさい」

(iii)「期間中」の意に。例

काम के घंटों में　「仕事の時間中に」

बातों बातों में झगड़ा हो गया।　「一緒に話している内にケンカになった」

備考 1) बात की बात में は単に「直ちに」の意であるが，बात ही बात में には「直ちに」と「話をしているうちに」との2意がある。

2) 上記 (i) (ii) 所属の में もよく省略される。例 एक वर्ष「1年で」, दो वर्ष「2年間」, कई कई महीने「数ケ月間も」, कुछ दिनों「数日間」

(2) 場　所

(i) 中，内部

घड़ी में चाबी दे दो।　「時計にネジをかけなさい」

वह जापान के बीच में है।　「それは日本の真中にある」

転じて，抽象的なものにも用いられる。例

वह क्रोध में भर गया।　「彼は怒りに満たされた」

備考 1) वह घर में है।「彼は家の中にいる」は，家という建物の内部にいることが意味されるに対し，वह घर पर है।「彼は在宅する」は，彼が家屋内と限らず，納屋の中でも庭園の中でも一向差支えない。家敷内にいることが意味される。

同様，वह घर पर पढ़ता है। は，彼は学校でなく，家で勉強している意。また स्टेशन पर मिलो।「駅で会いなさい」も，駅の構内なら，たとえ建物の前でも構わない。

2) बीच में「真中に」は，आगे「前に」，पीछे「後に」などと同様に「位置」を示すものであるが，इस बीच में「とかくするうちに」では「時間」が示される。

3) में の省略については，277 ページ備考 2) 参照のこと。

(ii)「身体」を示す語と。[1] 例

उसने मेरी पीठ में [=पर] गोली मारी।　「彼は私の背中に弾丸を打込んだ」

मेरे पाँवों में मोच आ गई है।　「私は足をくじいた」

कोट मेरे शरीर में ठीक बैठा है।　「上着が私の身体に合う」

(iii) 間

देखने और सुनने में बड़ा अंतर है।　「見ると聞くとは大違い」

備考 दोनों में「両者の間に」，तीनों में「三者の間に」；आपस में「互に」なども同様である。

(1) 259ページ「身体」(ii) 参照。

には में も से も等しく用いられる。例

सुनने में [-से] और देखने में 「聞くと見るとは大違い

[=से] बडा भेद है।

इसमें (और) उसमें [=इससे उससे] 「それとこれとは似ている

सादृश्य है।

2) पर は特に1対から成るものを対比的に述べる場合に限り 対比」を示すのに用いられる。例

हथेली के नमूने पर तलवा। 「手のひらに対して足の裏」

(7) 値 段(1)

कितने में लाये? नौ रुपये में। 「幾らで持って来ましたか。9ルピーで」

यह दो आने में आता है। 「これは2アンナで入手される」

दो रुपये में यह महँगा है। 「これは2ルピーでは高い」

注 यह कितने में आता है? 「これは幾らしたか」の構文は，また यह कितने का है? とすることもできる。

(8)「・に関して」の意に。(2) 例

तुम इसमें क्या कहते हो? 「君はこれについて何というか」

इसमें तुम सहायता करो। 「この事で君は援助し給え」

उसकी उत्पत्ति के संबंध में 「それの起原について」

注 1) この場合，ある特定の名詞との成句の形で用いられることが多い。例

शिलालेख के बारे में 「碑文について」

(1) 269ページオ格 (a) 05 (11)，および 244ページ「与格」(c) (1) (3) 参照。

(2) 256ページ「従格」05 および 265ページ (7) 参照。

2) में も慣用的に省略されることがある 例

मैं भूखा रहता हूँ।　「私は飢えています」

यह किस काम आता है?　「これは何の役に立ちますか」

क्या गाडी कोबे रुकती है?　「汽車は神戸に停まりますか」

3) में も副詞句を作るためによく用いられる。例 अन्त में「終りに　遂に」, वास्तव में「実に」, संक्षेप में (=—से)「簡単に」, मेरे (पास-) पडोस में「私の付近に」, देर में「遅くれて」

4) 時々 属格後置詞を伴うことがある。例

इस बकस में का रुपया खो गया।「この箱の中の金がなくなった」

5) また よく形容詞的にも用いられる。例

कश्मीर में बसन्त　「カシミールの春」

पुष्पदान में पीले पुष्प　「花びんの中の黄花」

चित्र में तोते को देखो।　「絵の中のおうむをご覧なさい」

〔c〕 तक

(1) 時　間

この場合, (i)「時の終止点」 または, (ii) 単なる「期間」が表わされる。例

(i) १०० से २०० ईसवी तक　「西暦100年から200年まで」

मैं कल तक वापस आऊँगा।　「私は明日までに帰りましょう」

(ii) मुझको दस दिन तक ठहरना पडता है।　「私は10日間滞在しなければならない」

注意 1) この「期間」の場合には तक はよく省かれる。例 कुछ [=थोडे] दिन 「数日間」, कुछ [—थोडी] देर「暫時の間」, एक महीने「1ヶ月間」, बहुत दिन「長い間」。

たゞし，このように省略されると，前項〔b〕(1)(iii) 備考2)〔272ページ参照〕と見同し易い。よって そのいずれであるかは前後の文脈によって察するほかない。

2)「どれほどの期間」を意味する कितनी देर तक [または से] は「時」「分」などの短期間を尋ねるのに用いられ，कितने दिन तक [または से] は，「日」「月」「週」などの比較的長期間を尋ねるのに用いられる。例

वह कितनी देर (तक) पढता है?　「君は幾時間勉強しますか」

3) 上例とか कई दिन तक [または से]「数日間」に見られるように同じ「期間」を示す से と तक との使い分けにも紛らわしいものがある。大体の用法は次の通りである。

原則的には，से は「以来」，तक は「期間」の意を示すのであるが，常に動詞の「時相」をも考慮に入れなければならない。例えば，मैं दस दिन से छुट्टी पर हूँ।「私は10日以来休暇中だ」におけるように，「以来」の意が強調されない限り，動詞が「現在時相」である時には，上記 2) の末例や前記 (1)(ii) の例を初め मैं दो दिन तक ठहर सकता हूँ।「私は2日間滞在できます」におけるように तक が用いられる。しかしながら，「現在時相」の「進行形」では से が用いられる。例

मैं दो दिन से ठहर रहा हूँ।　　「私は2日間(以来)滞在している」

वह कितनी देर से पढ रहा है?　「彼は幾時間勉強しているか」

また，(i)「過去時相」や (ii)「未来時相」(iii)「過去継続時相」が用いられる時には तक が採られる。例

(i) मैं दस दिन तक छुट्टी पर रहा।　「私は10日間休暇でした」

(ii) दस वर्ष तक आपस में शान्ति रहेगी।　「10年間 相互間に平和が続こう」

(iii) मैं बहुत देर तक उसकी राह देखता रहा।　「私は非常に長く彼を待った」

たゞし，「副詞 जब से 『その時以来』『して以来』は「過去」や「現在完了」の用いられる文をも導くことができる。例

जब से वे गये　　「彼らが行ってから」

जब से हम यहाँ आये हैं　　「私達がこゝへ来てから」

なお，जब तक の用法については，185ページ (11) 参照のこと。

4) 慣用的に पर 「…から…まで」の意に用いられることについては，261ページ (1) 備考 1) 参照のこと。

(2) 場　所

उसने यह बात मुझ तक पहुँचाई।　「彼はこの事を私まで伝達した」

यहाँ से नारा तक कितनी फासला है?　「ここから奈良までどれほど遠いですか」
=यहाँ से नारा कितनी दूर है?

注意 1) 上記第1例の मुझ तक は मेरे पास としても可。

2) तक は属格後置詞を伴うこともある。例

पूरब से ले कर पश्चिम तक के सब देश　「東から西までの全国」

たゞし，この種の तक は省略されることもある。例

वहाँ (तक) का किराया　「そこまでの料金」

3) また，तक は「さえ」の意味で，(i)「名詞」や (ii)「動詞」あるいは (iii)「動詞の不定詞」を強めるのに用いられる。例

(i) उसे कहीं एक बूँद[1] तक न मिला।　「彼にはどこにも1滴の水も得られなかった」

(ii) उसने मेरी ओर देखा तक भी नहीं।　「彼は私の方を見もしなかった」

(iii) क्या तुम्हें समाचार भेजने तक का भी समय नहीं मिला?　「君は便りをする時間さえ得られなかったのか」

---

(1) たとえ語尾変化し得る आ で終わる名詞でも，この意味の तक の前では原形のまゝが用いられる。

第二章 代 名 詞 (सर्वनाम)

I 人称代名詞と指示代名詞
(पुरुषवाचक सर्वनाम तथा संकेतवाचक सर्वनाम)

(1) 各人称代名詞が並用される場合，第１２３人称の順に並べるのが原則とされる。そうして，各代名詞に対する動詞の一致は，तुम にて始まる場合に限り動詞がこれと一致する以外，常に男性複数形が採られる。例

तुम और वह परिश्रमी हो ।	「君と彼は勤勉だ」
मैं [तू] और वह मित्र हैं ।	「私〔お前〕と彼とは友人だ」
हम तुम बरसों से एक साथ रहते हैं ।	「ぼくと君とは数年来，いっしょに住んでいる」

(2) 人称代名詞の複数形がたとえ単数の意に用いられる場合でも，述部は一切複数化する。

हम बड़े [=बहुत] भूखे हैं ।	「ぼくは非常にお腹が空いている」
वे लम्बे और मोटे विदेशी थे ।	「その方は背の高い肥えた外人でした」

(3) 格の如何に関係なく，人称代名詞も指示代名詞も，接続詞省略のまゝよく並用される。例

हम तुम दोनों	「ぼくと君〔即ち 私達〕２人とも」
हमारा तुम्हारा हो तो क्यों हो ?	「ぼくと君とがいっしょになるなんて，どうして出来よう」
यह वस्तु हमारे तुम्हारे काम आती है ।	「この品物はぼくと君とに役立つ」

कोयल कभी इस कभी उस डाली पर चहकती फिरती है। 「ほととぎすが，時にはこの小枝，時にはその小枝と，さえずり回っている」

（4）人称代名詞は常に他の代名詞に先行する。例

तुम्हारी इस बात से 「君のこの言葉で」

हमारी कौन सी गाड़ी है? 「ぼくの車はどれですか」

मेरा अपना पेट ही नहीं भरता। 「私自身のお腹さえ満たされぬ」

（5）主格の第二人称代名詞及指示代名詞は，後に来る主格形疑問代名詞とよく同格的に用いられる。そして，後者が前者の説明語化する。例

यह क्या पड़ा है? 「あの横たわっているのは何か」

तू यह क्या कर रहा है? 「これはお前何をしているのか」

यह तुमने क्या किया? 「これは君どうしたのか」

वह कौन आता है? 「あのやって来るのは誰か」

注 1）次のような構文では，属格が意味上の主語になる。例

तुम्हारा क्या खो गया? 「君は何を失くしたのか」

2）属格が目的格的になることがある。(1) 例

क्या कल आपके दर्शन होंगे? 「明日，あなたにお目にかかれましょうか」

（6）与格，即ち いわゆる 間接目的語が「人」「物」その他の「生物」に限り用いられるに対し，対格，即ち いわゆる直接目的語は「生物」「無生物」の如何に関係なく用いられる。例

यह मुझे (=मुझको) दे दो। 「これを私に下さい」

मैं इन्हें (=इनको) पसंद करता हूँ। 「私は彼ら又はこれらを好む」

---

(1) 235ページ（7）参照

上記の指示代名詞 यह は当然 इसे または इसको ともなることができる。しかし，それでは対格・与格とも同形になるため文意があいまいになり，口調も悪くなるので，たとえ文法的には正しくとも，この場合の यह の従格化は望ましくない。

もっとも前後の文脈にも因ることではあるが，同一文中に直接・間接の両目的語が並用される場合，それらの主格・従格の形如何に関係なく，直接目的語が間接目的語に先立つことが原則的である。例

मैं उसको तुझे दूंगा ।　　　「私はそれをお前にやろう

इसको उसे दो ।=इसे उसको दो ।　　　これを彼に与えなさい

たゞし，次のような構文では，両者互に幾分混同し易い　例

मुझे तुम्हें (=मुझे तुमको=मुझको तुम्हें) अपनी प्रतिज्ञा याद दिलानी है ।　　　「私は君に約束を思い出させなければならない」

मुझे आपको यह बताने में आनन्द है ।　　　「私はあなたにこれをお知らせするのがうれしい」

（7）人称代名詞も指示代名詞も，後置詞を伴う時のほかに，次のような場合にも従格化する。

(1) जैसा, ऐसा, सा に先立つとき。例

उस [उन, मुझ, तुझ] जैसा[1] [=ऐसा=सा]　　　「彼〔彼ら私，君〕のような」

उस जैसा बड़ा लड़का　　　「彼のような大きい少年」

उस कन्या जैसी सुन्दर　　　「その娘のように美しい」

---

(1) 三つの類語のうち，これが最も適切。そして3語とも，आ にて終わる形容詞や代名詞は，語尾が ई や ए に変わる。

बन्दर हम जैसे होते हैं। 「さる(猿)は私達のようなものだ」

注 一般に，都会人が तुम सा बालक「お前のような子供」; मुझ जैसी दाई「私のような乳母」などと述べるに対し，地方人は人称代名詞を斜格化させないで，所有格の तेरा, मेरा を用いる。

(7) 後置詞を伴う名詞や形容詞と同格的に用いられるとき。例

मुझ पापी ने 「罪人のわたしが」

मुझ अन्धे की लाठी 「盲目な私のつえ」

मुझ बेचारी [कंगाल] का 「気の毒な〔貧しい〕私(女)の」「私のような気の毒な〔貧しい〕者の」

(8) 単数人称代名詞の属格は，敬語的に後置詞を伴って複数斜格化することがある。例

तुम्हारे घोड़े हमारों से सुन्दर हैं। 「君の馬はぼくのより美しい」

तेरों से हमें क्या काम? 「お前らとぼくらは何の拘りがあるのか」(ぼくらはお前らに用はない)

(9) 主格指示代名詞は時々 ऐसा や वैसा の意にも用いられる。例

बात यह है कि 「事はこうです，即ち 」

यदि उनकी यह दशा है तो 「もしも，彼らの状態がこうだとすれば 」

II. 再帰代名詞 (निजवाचक-सर्वनाम)

1. 主格の場合

मैंने आप ही इसको किया। 「私自身これをした」

उसको स्वयं ही आना है। 「彼は自身で来なければならぬ」

आप ही इन से पूछिये यह आप 「御自身この人にお尋ね下さい。

कहते हैं?[1]「音節とは何を言いますか」において，主語か「事柄」であるから कौन の対格は「物」を表わすが，主語が「人」を表わせば対格も「人」を表わすことになる。ところが，तुम किस पर हँसते हो? 君は誰を笑うのか」では「何を笑うのか」の意に解せぬこともない。よって後者の意味なら，किस の次に बात「事」「事柄」を入れゝば文意か明確になる。

また，यह किस का चित्र है?「これは誰の絵か」では，किस は「人」のほかに「動物」にもいえる。

なお，本語は「職業」などを尋ねるにも用いられる。例

वह कौन है, शिक्षक या सैनिक?　「彼は学校教師ですか軍人ですか」

（3）属格にも伴われる。例

वह आपका कौन है?　「彼はあなたの誰にあたりますか」

=वह आपका क्या लगता है?

【注】 1）上記の場合，第1例の कौन と第2例の क्या との入れ替えも可能。しかし，共に क्या の方が一層好ましい。

2）単複同形の本語では，特にその複数性強調の必要ある場合には，前記の通り लोग を添付するか，本語を反復するほかない。例.

यहाँ कौन कौन आएँगे?　「ここに誰々が来るだろう」

B. 疑問形容詞として

（1）この場合，普通名詞にも抽象名詞にも用いられるが，कौन 自体は「人」を示す名詞を伴うのでなければ「誰の」の意になることはない。常に，「何の」「どの」「どんな」などの意となる。例

यह घोड़े किन लोगों के हैं?　「これらの馬は誰々のか」

बाहर जाने का कौन मार्ग है?　「外部へ行くのはどの道か」

(1)「・を　と呼ぶ」の言い方には，常に主語「人々が」が省かれる。

(2) कौन に सा [से, सी] を添えれば，「どれ」「どの」「どちらの」の意になる。例

कौन सी कन्या है? 「どの少女ですか」

कौन सा अच्छा है, यह या वह? 「これとそれと，どちらが良いか」

भारत के बड़े बड़े नगर कौन से हैं? 「インドの大都会はどれか」

注 1) もしも，第1例において，単なる कौन をもってすれば，少女の名が尋ねられる。

2) この種の सा は卑語的に時々省かれることもある。例

जापान में सब से बड़े कौन (से) छ नगर हैं? 「日本の6大都市とはどれか」

3) कौन सा は時々「どんな種類の」の意となる。

कौन सा साबुन लगाते हो? 「(君は)どんなシャボンをつかいますか」

इस क्यारी में कौन से फूल हैं? 「この花壇にどんな種類の花があるか」

この場合にも，卑語的に सा が省かれることがある。例

आप कौन (सी) पुस्तक पढ़ते हैं? 「どんな本をお読みになりますか」

4) この種の कौन もよく反復される。例

कौन कौन से दिन 「何日と何日とに」

हिन्दुओं के चार आश्रम कौन कौन से हैं? 「インド教の4生活段階はどれか」

5) 本語と क्या や कैसा などとの使い分けについては特に注意すべきものがある。例

कल कौन छुट्टी है? 「明日は何の祝日か」

ここでは祝日や祭日の名称が尋ねられる。しかし，कैसी छुट्टी とすれば祝日や祭日の種類が尋ねられることになる。そして，この場合 कौन や कैसी などを用いなければ，単に「明日は休みか」の意。また，कोई छुट्टी をもってすれ

は「明日は何かの休日か」の意となる。

6）疑問語等と तिथि$_{s}$ =तारीख$_{4}$「日付」や दिन「日」 वार「(週の)日」等と共に用いられる時にも特別の考慮が要る。例

आज क्या [–कौन सी(1)] तिथि है？ 「今日は何日ですか」

आज क्या [कौन सा] दिन [वार] है？ 「今日は何曜日ですか」

前者に対する返答は जून की दसवी तारीख है। 「6月10日です」などとなり 後者に対する返答は सोमवार (का दिन) है। 「月曜日です」などといわれる。

7）सा を伴わぬ場合の疑問形容詞もよく反復される。例

गुलाब के फूल किस किस रंग के होते हैं？ 「ばらの花にはどんな色があるか」

पढने के लिये किन किन वस्तुओं की आवश्यकता होती है？ 「勉強にはどんな品物が必要か」

2 क्या

(1) 疑問代名詞としての用例。

तुम क्या देख रहे हो？ 「君は何を見ているのか」

तुमको क्या हो गया है？ 「君はどうしたのか」

注意 本例は病気や過失に対していわれる。単なる क्या हुआ？ や क्या है？ もその同義語として用いられる。

और क्या？ は「ほかに何か（あるか）」の意のほかに，反語的に「もちろん」の意にもなる。

जानना「知る」の「不定時相」と結合した क्या जाने？ も反語的になって「誰が知るものか」「 か知らん」の意になる。

(1) この सा には7対まで置かれる。しかし，この場合，क्या の使用が最もよろしい。

（2）属格にも伴われる。(1)

वह मेरा क्या कर सकती थी ?　「彼女は私に何ができたか」

इसका क्या किया जाए ?　「それで何がなさるべきか」

एक सवारी का क्या होगा [लोगे(2)] ?　「一乗り幾らですか」

（3）反復されれば「どんな品々」「いろいろ違った物」の意が表わされる。例

और क्या क्या है ?　「ほかにどんな物があるか」

इसमें क्या क्या डाला है ?　「この中に何々を入れてあるか」

備考 कल यहाँ क्या क्या न हुआ ? は「きのうここに種々さまざまな事件が起こった」の意の反語であるが、この文章から否定詞を除けば「きのうここにどんな事件が起こったか」の意となる。

なお、この反復の場合、時々複数動詞が採られることもある。ことに「物」を示す名詞が省略されていなければなおさらのことである。

（4）疑問形容詞としての用例。

तुमने क्या मूखता की ?　「君はどんな愚行をやったのか」

आपका क्या नाम है ?　「お名前は何ですか」

備考 कसी पुस्तक は単に本の名が尋ねられるが、कैसी पुस्तक ではその種類が尋ねられる。

同様、वह क्या काम करता है ?「彼は何（仕事）をしているか」では職業が尋ねられるに対し、कैसा काम をもってすれば「彼はどんな仕事をしているか」という意になり、彼の職業は分っているが、目下どんな種類の仕事に従

---

(1) 292ページ(3)、および290ページ〔備考〕4参照

(2) この「取る」意の動詞が用いられれば「料金」を意味する目的語の名詞 [illegible] 省かれていることが分る。

かゞきかれる。

(5) その他の用法。

(i) 疑問符として，文の初めに用いられる。[1] 例

क्या यह आप का है? 「これはあなたのですか」

(ii) 反語として。例

मनुष्य क्या देवता है। 「(彼は) 人間どころか神だ」

गुण का तो पूछना ही क्या। 「美徳のことを尋ねるなんて」

(iii) 反語的否定に。例

इसमें क्या सन्देह है? 「この事について疑いない」

कष्ट की क्या बात है? 「迷惑はない」「構わない」

(iv) 感嘆詞として。例

आज क्या ही सुहावना प्रात काल है! 「今日は何と心地よい朝だことと」

क्या ठंडी ठंडी वायु चल रही है! 「何と冷い風が吹いていることよ」

注意 1) क्या—क्या は「 も も」の也の副詞的接続詞である。両者とも区別し難いことをあらわすのに用いられる。例

क्या दिन क्या रात 「昼も夜も」〔副〕

क्या हिन्दू क्या मुसलमान सब ने यही कहा। 「インド教徒も回教徒も皆こう言った」

2) क्या से क्या は常に状態の「予期しない急変」や「急激な悪化」が暗示される。例

आजकल संसार की दशा क्या से क्या हो गयी। 「昨今，世界情勢は全く一変した」

---

(1) ただし，語尾さえあげれば疑問文になるので，この疑問詞はよく省略される。

V 関係代名詞 (सम्बन्धवाचक सर्वनाम)

これは，先行詞の有無によって 二つの場合が生ずる。

1 先行詞を採る場合

（1）先行詞の名詞や代名詞を単に説明する。この場合 相関詞は要らない。例

यही वह घडी है जो मेज पर पडी थी।	「これこそ，机の上に置かれていた時計だ」
पुत्र वही है जो अपने माँ-बाप का कहना मानता है।	「息子とは自分の父母の言いつけを守る者にほかならぬ」
फलो में दाने होते है जिन को बीज कहते हैं।	「花の中に実がある，それを種子と呼ぶ」
एक ऐसी हाँडी ले आओ जिस का मुँह छोटा हो।	「口の小さいとびんを一つ持って来給え」
उसने मुझसे वह पुस्तक माँगी जिसका मैंने वचन किया था।	「彼は私が約束した本を請求した」

注意 1)「こういうものだ」「こんなのもある」といったような言い方には 先行詞と関係代名詞との間に ऐसा「こんな」を入れる。例

माँ-बाप ऐसे है जो अपने बेटे को सब बातो में बडा देखना चाहते है।	「父母は息子をあらゆる事で偉く見たがる者だ」
गाडियाँ में ऐसी भी है जिन्हें जन्तु खींचते हैं।	「動物が引っぱるような車もある」

2) जो はペルシャ語の関係代名詞 [illegible] कि と [illegible] 合したものはめったに用いられなくなっている。例

देहली में जो कि भारत की राजधानी है　「インドの首府デリーにおいて」

वह मेरे वास्ते जो कुछ कि वह कर सकता है करेगा।　「彼は私のために彼がなし得ることを何でもしょう」

（2）先行詞と共に用いられても，関係代名詞の意味が i) 限定される場合と (ii) 不定な場合とがある。従って，後者の場合，जो कोई や जो कुछ などの複合詞の同義語となる。例

(i) जो स्त्री कल यहाँ थी वह अब कहाँ है ?–वह स्त्री जो कल यहाँ थी अब कहाँ है ?(1)　「きのう，ここにいた婦人は今どこにいますか」

जिस कमरे में मैं बैठा करता था उसकी एक खिडकी खुला करती थी।　「私が常に座っていた部屋の窓が一つ常に開けてあった」

जिन किसानो को कोई महाजन एक रुपया तक उधार नही देता　「どんな金貸しも１ルピーさえ貸さぬような百姓達には　」

(ii) जो काम तुमको अच्छा न लगे उसे मत करो।　「何でも君の気に入らない仕事はするな」

जिस काम को तुम आज कर सकते हो, उसे कल के लिये मत छोडो।　「何でも君が今日やれる仕事は明日に残すな」

जो लोग प्रतिदिन व्यायाम करते है उन्हें रोग नही होता।　「毎日運動をする人々は誰でも病気にならない」

2　先行詞を採らぬ場合

（1）この場合は，ほとんど常に「何でも」「誰でも」の意が表わされ

(1) स्त्री जो… とも言われることもあるが，上記の方が一層可。

。例

जो शरण में आए उसे बचाना। 「誰でも避難して来る者を救いなさい」

जिस का जी चाहा नागरिक हो सका। 「誰でも希望する者は市民になれた」

जिन्हें ईश्वर ने दिया है वे प्रसन्न रहते हैं। 「誰でも神から恵み与えられている者は幸福だ」

जो माँगूँगी वह आप देने का वचन दें तो मैं माँगूँ। 「何でも私(女)がねだる物を貴方が下さるとお誓いになれば，私はねだりましょう」

जो तुम कहो वह मैं करने को तैयार हूँ। 「何でも君のいうことを私はしようとしている」

注意 第2例のような構文では相関代名詞は不要であり，第3例における相関詞 वे が主格的である以外，その他の例においては，対格形・主格形の別はあっても，いずれも目的格的になっている。

事実，この種先行詞を探らぬ文章における主格形相関詞はよく省略される。例

जो चाहो (वह=सो) करो। 「何でも希望通りにしたまえ」

जो तुम कहोगी करूँगा। 「何でも君(女)の言う通り(私は)しょう」

वह जिसे चाहे खा सकता है। 「何でも彼が望む物を食べることができる」

जो लाता है, आप खाता है उन्हें खिलाता है। 「何でも(彼が)持って来たものを自身も食べ，彼らにも食べさせる」

(2) 「一般性」を述べるに便利なこの先行詞無しの用法は，格言・ことわざの類によく使用されるのは当然である。例

जिस की लाठी उस की भैंस।(1) 「正義は力なり」

(1) 直訳＝「水牛は誰でも棒を持つ者のもの」。

(3) 強意詞 ही を添えれば，常に副詞となる。वैसा ही は「同一の状態で」で वैसे ही は副詞 वैसे「その方法で」の強意詞である。共に，それぞれ単独にも用いられるし，जैसा の相関詞としても用いられる。例

अभी तो वैसा ही हूँ।　(私は) 今も相変らずだ

जैसा मैंने सोचा था वैसा ही हुआ। 「私が考えたようにな　た」

वह जैसे थे वैसे ही रहे। 「彼らは，元のままでした」

備考 1) 第1例では，病気などで「前と同じ状態」にある意。なお強意詞 ही は，時折，複合副詞のためでなく，純粋な代名形容詞としての वैसा に付くこともある。例

वह फिर वैसा ही करता है। 「彼は再び同じことをする」

2) वैसा का वैसा は「前の通りに」「元あったように」「同一状態で」の意の副詞句である。用例

पशु वैसा का वैसा (=ज्यों का त्यों) रहता है। 「動物は元のあるがまま(の姿)である」〔少しも進化しない〕

3 कैसा

(1) 形容詞として。例

वह कैसी दुलहिन है? 「彼女はどんな花嫁か」

कैसे घोड़े महँगे होते हैं? 「どんな馬が高価ですか」

आप कैसे हैं? 「ごきげんは如何ですか」

備考 1) ただし，आप का कैसा विचार है? 「お考えはどうですか」や आप कैसा विचार करते हैं? 「あなたはどうお考えですか」などにおいては कैसा よりも क्या をもってする方が一層好ましい。

2) 「多種多様」の意を示すために，やはり反復される。例

कैसी कैसी अच्छी वस्तुएँ 「何と種々立派な品々」

（2）副詞として。例

कैसे आग लगी ?	「如何にして火が起こったか」
वह कैसे जा सका ?	「彼はどうやって行けたか」[1]
उसने अपना धन कैसे खोया ?	「彼は自分の財産をどうして失ったか」[2]

注 例えば，उसका घर कैसा बना है? において，कैसा は形容詞であるから，「堂々たる」の意の感嘆詞として「彼の家は非常に美しく作られている」意になるが，副詞 कैसे をもってすれば，どうやって作られたかその方法，作り方の巧拙，資金関係などが質問されることになる。

（3）感嘆詞として。例

कैसे अफसोस की बात है !	「何と気の毒なことだ」
तू कैसी भोंडी समझ का पुरुष है।	「お前は何とひねくれた考えの男だ」
मेरा खेत कैसा हरा भरा दिखाई देता है।	「私の畑は何と青々と見えることよ」

（4）反語として。例

उससे ऐसा भारी पत्थर उठाया जाएगा कैसे ?	「彼にこんな重い石がどうして持ち上げられよう」
पिता की आज्ञा को जो पुत्र नहीं मानता, वह पुत्र कैसा !	「父の命令に従わないような息子は息子であろうか」

注 कैसे ही हो は「とにかく」または「どうにかこうにかして」の意の副詞句。

4　जैसा

（1）形容詞として。

この場合には，形容詞接尾辞 सा のような働きをする。例

---

(1) 徒歩でか，車でか，あるいは走ってか　はってか，とにかく行き方が尋ねられる。

(2) 失くした理由がきかれる。

मुझ जैसा प्रतिहारी　　「私のような家令」

उस जैसे प्रहरी का　　「彼のような見張人の」

उस कुमारी जैसी सुन्दर　　「その娘のように美しい」

यह कुमार जापानी जैसा है।　　「この若者は日本人のようだ」

備考　1）例えば तुम जैसा「君のような」というところを　やゝもすれば तुम्हारे जैसा などと जैसा の前に属格を用いるのは良くない。

2）また　बच्चे सब एक जैसे हैं।「子供達は皆一様〔同じ〕である」などともいわれる。

（1）副詞として。例

जैसा[1] आप चाहें..　　「お望み通りのことを　」

चाहे जैसे[2] करो।　　「(君の) 好きなようにしなさい」

जैसे は、時々、「例えば」の意の副詞となる。例

जैसे गिरजा घर तो वहाँ न था।　　「例えば、教会かそこになかった」

備考　जैसे ही「ちょうど　のように」「ちょうど同じ方法で」は、単なる जैसे「のように」「あたかも」の強意詞である。

（2）副詞的接続詞として。例

（イ）これは、前々項2で述べた通り、वैसा と相関的に用いられる場合が最も多い。そのため、なおここに2・3の例を挙げてみることにする。

जैसा देश वैसा भेष।[3]　　「郷に入りては郷に従え」

जैसा राजा वैसी प्रजा।　　「この王にして、この人民あり」

जैसे गुरु वैसे चेले।　　「この師にして、この弟子あり」

---

(1)(2)共に जैसा　を以てすれば代名形容詞になり、それぞれ「あなたの好きなことを　」や「君の好きなことをせよ」の意となる。従格化すれば共に副詞的になる。

(3)　直訳＝「国に従って服装も」「装いも所次第」

そして、両者の相互関係は जिस तरह उस [強意の時には उसी] तरह の関係と全く等しい。例

वह फल जैसा [=जिस तरह] बूढ़े और जवान को भाता है वैसा ही [=उसी तरह] बच्चे को भी प्यारा है। 「その果物は老人や若者に好かれるように子供にも喜ばれる」

(ii) जैसा はまた वैसा のような同類の相関詞を伴うばかりでなく，指示代名詞や同類の ऐसा を初め，उस〔強意の時には उसी〕तरह「そのように」や उस〔強意の時には उसी〕भाँति「そのように」などともよく相関的に用いられる。例

जैसा वह चाहे उसे करने दो। 「彼が望むようにさせなさい」

हमारे बाल ऐसे ही काटना जैसे अब हैं। 「ぼくの髪を今まで通りかって下さい」

जैसे पहले वह मेरे पास आता था उसी भाँति वह अब भी आता है। 「初め，彼が私の所へ来ていた通りに，今もやって来る」

(iii) なお，जैसा はしばしばペルシャ語の接続詞 कि を伴う。例

जैसा कि आपको मालूम है. 「ご存じの通り・」

जैसा कि वहाँ हुआ था यहाँ भी । 「あそこにあったように，ここでもまた…」

उसकी लम्बाई[1] ऐसी ही है जैसे कि मेरी। 「彼の身長はちょうど私ぐらいです」

ऐसा करो जैसा (कि) हमने बताया था=ऐसे करो जैसे । 「ぼくが言ったようにしなさい」

---

(1) 物の「高さ」が意味される時には ऊँचाई が用いられる。

さい」などと名詞語尾になったり，また例えば एक बच्चे वाली गाय「子供のある雌牛」，सुन्दर परों(1) वाले तीतर「美しい羽毛のある ノ　コ (5)」，मेरे आस पास वाले लोग「私の周囲の人達」などと形容詞語尾になることはほゞ説明済みである。(2)

しかしながら，作因動詞状名詞としての वाला は，名詞や副詞に添付して「所有」や「関係」を示す名詞や形容詞を作るのでなく，常に単数従格形不定法に添付されることである。そして，(i) 名詞としても，(ii) 形容詞としても，वाला か他動詞に伴われゝば目的語も採れる。例

(i) यात्रा-सामग्री पाने वाली　「手荷物の受取人〔女〕」
तेरा पीछा करने वाले　「お前を追跡する人々」
(ii) सीधे मार्ग पर चलनेवाली स्त्री　「真っ直くな道を行く婦人」
सब जीवों पर दया कर सकने वाले लोग　「すべての生き物に同情し得る人達」

備考 1) 本語か होना の各時相を伴う時には「　しかかる」意になる。例
वह बाहर जाने वाला है।　「彼は外出しようとしている」
यह चारपाई टूटने वाली है।　「この寝台はこわれかかっている」

2) 「人」を示す接尾辞としての वाला は，その略語 वाल と共に出身地名に添付されて氏姓として用いられることがある。例
थानावाला(3)， आगरवाल(4)

---

(1) 先立つ名詞の複数従格化に注意。
(2) 67ページ(2)および92ページ (v) 参照。
(3) この姓はザンベー地方に見出される。thāna は「交番」「見張り」などの意。
(4) आगरा वाला「アーグラの人」の意。アーガルワール姓は北印一帯における Baniya 商人階級所属30副階級中の一つ。その大多数がヴィシヌ派で，一部がジャイナ教徒である。銀行，貿易 金融などに従事する者が多い。すべてが厳格な菜食主義者であり禁酒主義者でもある。

II　接続分詞 (पूर्वकालिक कृदन्त)(1)

原語 पूर्व 「過ぎ去った」「過去の」の語義の示すように，本分詞は，本来，主動詞で表わされる動作に先行する動作を表わす場合に用いられる。つまり，接続詞を隔てゝ二つの主動詞が表わされるところを最初の動詞を分詞形にしたゝめ，その接続詞が節約される結果になる。

その形としては，(i) 動詞の語根そのまゝが使用されるか，(ii) その語根に कर, के あるいは कर के か添付される。例

(i) यह देख वह प्रसन्न हुआ।　「これを見て彼は喜んだ」

यह सुन वह बहुत दुखित हो कहने लगी।(2)　「これを聞いて彼女は大いに悲しんで言い出した」

(ii) वह ठोकर खा कर गिर गया।　「彼はつまずいて倒れた」

वह सड़क घूम के जाती है।　「彼女は回り道して行く」

इधर पीठ कर के न बैठ।　「こちらに背を向けて座るな」

備考 1)　たゞし，上記のような単文ではなく，複合文中，कि にて導かれる従属文を接続分詞か受けるような場合には，その कि 以下の従属文が接続分詞の目的語になることを予め明示するために分詞の前に यह が置かれる。例

यह देखकर कि मेरा बैरी भागा जा रहा था मैंने उसका पीछा किया।　「私の敵が逃げて行くのを見て私は彼を追っかけた」

また，関係代名詞の使用される複合文において，その関係代名詞自体が接続分詞の目的語になることもある。例

कुछ कहानियाँ ऐसी हैं जिन्हें　「ある物語は読んでお笑いになるようなも

---

(1) 「過去時相に関する分詞」の意。pūrv-kālik kriyā。「過去に関する動詞」とも訳される。

(2) ここでは सुन と हो とが接続分詞になっている。

さい」などと名詞語尾になったり，また例えば एक बच्चे वाली गाय「子供のある雌牛」; सुन्दर परों[1] वाले तीतर「美しい羽毛のあるシャコ鳥」，मेरे आस पास वाले लोग「私の周囲の人達」などと形容詞語尾になることはほゞ説明済みである。[2]

しかしながら，作因動詞状名詞としての वाला は，名詞や副詞に添付して「所有」や「関係」を示す名詞や形容詞を作るのでなく，常に単数従格形不定法に添付されることである。そして，(i) 名詞としても，(ii) 形容詞としても，वाला が他動詞に伴われゝば目的語も採れる。例

(i) माल-सामग्री पाने वाली	「手荷物の受取人『女』」
तेरा पीछा करने वाले	「お前を追跡する人々」
(ii) सीधे मार्ग पर चलनेवाली स्त्री	「真っ直ぐな道を行く婦人」
सब जीवों पर दया कर सकने वाले लोग	「すべての生き物に同情し得る人達」

注 1) 本語が होना の各時相を伴う時には「 しかかる」意になる。例

वह बाहर जाने वाला है।	「彼は外出しようとしている」
यह चारपाई टूटने वाली है।	「この寝台はこわれかかっている」

2) 「人」を示す接尾辞としての वाला は，その略語 वाल と共に，出身地名に添付されて氏姓として用いられることがある。例

थानावाला[3]; आगरवाल[4]

---

(1) 先立つ名詞の複数従格化に注意。

(2) 67ページ(2)および92ページ (v) 参照。

(3) この姓はボンベー地方に見出される。thāna は「交番」「見張り」などの意。

(4) आगरा वाला「アーグラの人」の意。アーガルワール姓は北印一帯における Baniya 商人階級所属30副階級中の一つ。その大多数がヴィシヌ派で，一部がジャイナ教徒である。銀行，貿易，金融などに従事する者が多い。すべてが厳格な菜食主義者であり禁酒主義者でもある。

II. 接続分詞 (पूर्वकालिक कृदन्त)(1)

原語 पूर्व 「過ぎ去った」「過去の」の語義の示すように，本
来，主動詞で表わされる動作に先行する動作を表わす場合に用
つまり，接続詞を隔てゝ二つの主動詞が表わされるところを最
分詞形にしたゝめ，その接続詞が節約される結果になる。

その形としては,(i) 動詞の語根そのまゝが使用されるか,(ii
に कर, के あるいは कर के が添付される。例

(i) यह देख वह प्रसन्न हुआ। 「これを見て彼は喜んだ」

यह सुन वह बहुत दुखित हो कहने लगी।(2) 「これを聞いて彼女は大いで言い出した」

(ii) वह ठोकर खा कर गिर गया। 「彼はつまずいて倒れた」

वह सडक घूम के जाती है। 「彼女は回り道して行く」

इधर पीठ कर के न बैठ। 「こちらに背を向けて座」

〔注〕 1) たたし，上記のような単文ではなく，複合文中，कि にて主文を接続分詞が受けるような場合には，その कि 以下の従属文が接続語になることを予め明示するために分詞の前に यह が置かれる。例

यह देखकर कि मेरा बैरी भागा जा रहा था मैंने उसका पीछा किया। 「私の敵が逃げて行くのを見追っかけた」

また，関係代名詞の使用される複合文において，その関係代名詞目詞の目的語になることもある。例．

कुछ कहानियाँ ऐसी हैं जिन्हें 「ある物語は読んでお笑いにな

(1) 「過去時相に関する分詞」の意。pūrv kālik kriyā, s 「過去に関する動詞」る。

(2) ここでは सुन と हो とが接続分詞になっている。

पढ़कर आप हँसेंगे ।　　のです」

2) 接続分詞で示される動作と主動詞で示される動作とが，一見 同時に起こる動作のように感せられるのは，多くの場合，接続分詞が副詞化しているためである。例

समझ कर पढ़ो ।　　「(意味を) 了解して読みなさい」

निश्चिन्त हो कर बैठो ।　　「遠慮なく座りなさい」

वह जान ले कर भागा ।　　「彼はいのち (生命) からがら逃げた」

なお，数個の分詞的副詞句を掲げよう。例 जान तोड़ के「いのちを砕いて」「大いに骨折って」; जान बूझ कर [=के]「知りながら」, जी [=मन] लगा कर「心をこめて」, जी भर कर [=के]「心を満たして」「満足して」, भूल कर भी「よもや」(直訳≈「忘れても」)。

3) 接続分詞が भी を伴うとき一層副詞的になる。例

यह जान कर भी मैंने उसको छोड़ दिया ।　　「これを知りながらも，私はそれ〔または彼〕を放してやった」

बरसों घर में रह कर भी　　「幾年間も家に居ながらなお」

4) लेना「取る」の接続分詞 लेकर が，「時間的」にも「場所的」にも，よく奪格の से と一緒に補足的に用いられる。例

उस समय से लेकर अब तक　　「その時から今まで」

हिन्द महा सागर से प्रशान्त महा सागर तक　　「インド洋から太平洋まで」

5) 動詞 बढ़ना「前進する」「増加する」の बढ़कर は，आगे बढ़कर उसने मुझको मारा ।「前に進んで彼は私を打った」なとと，普通の意味の接続分詞になる以外に，(i)「優れた」意の「形容詞」にもなれば，(ii) また「比較級」を示すために，補足的に से に伴われることもある。〔89ページ〔備考〕2) 参照〕 例

(i) वह वीरता में सब से बढ़कर है ।　　「彼は武勇において誰よりも優れている」

(11) इस गाँव में इस घर से बढ़कर कोई नहीं है। 「この村には，これよりも上等な家はない」

6) कर や कर के は 名詞や形容詞にも添付して一種の副詞句を形成する。例 कृपा कर (के) 「どうぞ」，देर कर के 「遅れて」，एक एक कर के 「一つずつ」「1人ずつ」，थोड़ा थोड़ा कर के 「少しずつ」，एक दिन बीच कर के 「隔日にこと」。

7) 接続分詞も 時々反復される。例

एक चील फड़क फड़क कर उड़ गई। 「1羽のトビが羽ばたきをしながら飛んで行った」。

III 未完了分詞 (वर्तमानकालिक कृदन्त) と完了分詞 (भूतकालिक कृदन्त)

概説——名称から言えば，前項所説の「接続分詞」も等しく分詞(कृदन्त)の中に包括すべきものではあるが，本質的には全然別種のものであることは外形だけを観ても分ることである。いわゆる「接続分詞」が多分に動詞の特質を有するに対し，これら二つの分詞，つまりいわゆる「現在分詞」と「過去分詞」とは共によく名詞や代名詞を修飾するなど多分に動詞状形容詞の性質を持っている。あたかも आ で終る一般形容詞のように，名詞や代名詞の数・性・格と一致する。

そして，両分詞の場合とも，その数や性に応じて होना の完了形 हुआ, हुए, हुई の3種が盛んに添付されもするが，またよく省略もされる。

なお，「未完了分詞」が「未完了の動作」即ち現在行われつゝある動作や事柄を表わすに対し，「完了分詞」は「完了した動作」即ち「状態」を表わすのに用いられる。

以下，〔a〕〔b〕両分詞の各項目を，絶えず互に照らし合わせること。

〔a〕 未完了分詞

1. 複合動詞に

（1） रहना を伴って「動作や状態の継続」を，जाना を伴って「動作や状態の進行」を示すことは既に述べた。(157ページ2 (1)参照) 例

गर्मी बढती जाती है।　　　　「暑さが増加している」

उजाला बढता जाता है।　　　　「日光が増加している」

以上両文とも，ただ今の一時的な現象を述べているが，第1例において रहना を以てすれば常に暑さが加わるという「習慣的な状態」が暗示される。この意味において第2例でも रहना を以てすることは理論的に不適当である。

（2） बनना 「作られる」「できる」を伴えば「適当に…する」意が表わされる。たゞし，この場合，分詞は常に従格化する。例

यहाँ से चलते बनो।(1)　　　　「いゝ加減にここから出て行きなさい」

उसने मुझसे यह बात कहते न बनी।　「彼は私にこの事を適当に言わなかった」

2. 形容詞として

（1） 形容言形容詞の場合，例えば मरती (हुई) भेड 「死にかけている羊」；धुँधला दिखाई देता (हुआ) तारा 「かすかに見える星」などにおけるように一般の形容詞と変わらない。

（2） 叙述言形容詞としても同様であるが，主語や目的語の性や数との一致の点において多少考慮を要するものがある。例

---

(1) 相手を侮辱していう時のけんか用語。

कुमारियाँ आती हुई दिखाई दीं। 「娘達の来るのが見えた」

बालक सिसकता हुआ दीख पड़ा। 「子供がすゝり泣くのが見えた」

注意 1) 自動詞が主動詞となるとき，分詞は主動詞同様，主語の性や数に一致する。ただし，分詞の詞尾を ए 化させ副詞的にすることも可能である。例

वह हँसती हुई [=हँसते हुए] आई। 「彼女は笑いながら来た」

वह हँसता हुआ [=हँसते हुए] दिखाई दिया। 「彼が笑っているのが見えた」

मैं वहाँ जाता हुआ [=जाते हुए= जाने से] डरता हूँ। 「私はそこへ行くのがこわい」

2) 「誰某は誰某が するのを見た」または「聞えた」の構文において他動詞 देखना 「(を)見る」と सुनना 「(を)聞く」とは，それら両動詞の目的語ではあるが，分詞自体の主語となるものに与格形が採られると共に，ए 化語尾の分詞の用いられるのが原則的である。例

मैंने उसको बोलते सुना। 「私は彼が話すのを聞いた」

उसको फल खाते देख (कर) मैंने कहा। 「彼が果物を食べているのを見て私は言った」

しかしながら，この場合でさえ，時折，分詞の主語の性や数に一致させることさえある。例

वह मुझको रोता (हुआ) [=रोते (हुए)] देखता है। 「彼は私が泣くのを見ている」

もっとも，同じ構文を採るにしても，上記２種の知覚動詞以外の一般動詞が用いられる時には，分詞は主動詞同様，常に第三人称男性の単数形になること肝要である。例

मैंने घर के सब लोगों को जागता (हुआ) पाया। 「私は家人が皆目をさましているのを見出した」

3) 上記の構文以外の一般構文において他動詞の完了形が主動詞であるとき，

採り，(ii) 無生物であれば को を採らない。例

(i) मुझको उससे मिले हुए बहुत दिन हो गये। 「私が彼に会ってから久振りだ」

तोक्यो गये हुए तारो को दो महीने हो गये। 「太郎が東京へ行ってから2ケ月になった」

(ii) चन्द्रमा निकले ढाई घंटे हो गये हैं। 「月が出てから2時間半になった」

यह घर खरीदे(हुए) एक वर्ष हो गया। 「この家を買うてから1年になった」

備考 1) この種の構文は，時折現在分詞の場合にも用いられる。例

तुमको वहाँ सेवा करते हुए कितने दिन हुए? 「君があそこに勤めてからどれほどになりましたか」

2) 上記 (ii) の構文は名詞の場合にも用いられる。例

उसका विवाह हुए एक महीना हो गया। 「彼が結婚してから1ケ月になった」。

3) 上記の諸例における हो जाना 「(に)なる」は，すべて हो चुकना 「済む」を以てすることも可能である。

4) 過去分詞によって示される「行為」が，それと直結する諸分詞なり主動詞なりによって示される事柄と同時に起こる場合，その過去分詞は，その目的語がたとえ与格の形を採っていても，その目的語と一致する。例

उसे घबराया [=उन्हें घबराये] देखकर 「彼が当惑しているのを見て」

उसको आया (हुआ) जान (कर), मैं बहुत प्रसन्न हुआ। 「彼が来ているのを知って，私は大いに喜んだ」。

この場合，両例における「彼」が「彼ら」となったら，それぞれ उन्हें घबराये देख कर や उनको आये (हुए) जान (कर)…となる。

(3) 否定前置詞兼後置詞 बिना=बिन् と共に用いられると，完了分詞

の語尾が常に ए 化される。例

(i) बिना पानी से धुले	「水で洗われるのでなければ」
तुम्हें बिना मारे न छोड़ेंगे।	「(ぼくは) 君を殺さずにおくまい」
(ii) दुख में पड़े बिना	「苦痛に陥らないで」
देश-प्रेम उत्पन्न किये बिना	「愛国心を発生させないで」

備考 1) 他の同義語 बिन や बग़ैर ba gair *A P* も時折用いられる。例 बिन जाने 「知らないで」, किसी से बात किये बग़ैर 「誰とも話をしないで」。

2) 比較的まれではあるが 未分詞からも副詞句が作られる。例 आधी रात गये 「真夜中に」; दिन चढ़े 「朝遅く」 (直訳=「日が上って」), दिन छुपे 「日没時に」; सूरज निकले 「日の出時に」。

4. 名詞として

उसका चाहा नहीं होता।	「彼の願いは容れられない」
मैं उसका लिखा (हुआ) नहीं पढ़ सकता।	「私は彼の書いた物が読めぬ」
उस पादरी का कहा सच है।	「あの宣教師の言う事は本当だ」
मेरा कहा सुना क्षमा कीजिये।	「私の失言はどうぞおゆるし下さい」

備考 1) ただし, मुझसे उसकी कहा सुनी हो गई। は「私と彼とは不和(争)になった」の意。

なお, किया 「行為」, लिखा 「書いた物」「文書」, लिखा-पढ़ी 「文通」 पछताया 「後悔」, देखा-देखी* 「真似」なども名詞への転用語である。

2) 分詞がひとたび名詞化し, 従格化すれば, 完了・未完了の両分詞に添付される हुआ までが複数化する。例 अपने किये का 「自身の行為の」, चोट

खाये हुआ का「負傷した人々の」, डूबते हुआ का「おぼれる人々の」, मरे पर वैद्य।「後の祭」(直訳=「死後に医者」)。

3) 完了分詞 即ち過去分詞が चाहना や करना を伴って「 しかかる」や習慣を示す構文については「複合動詞」(158ページ(1)(2)および159ページ(3)) 参照のこと。

4) 238ページ「具格」iii(ii) および271(ii)ページ「位格」第2例参照。

Ⅳ 条 件 文 (आश्रित वाक्य)

1 概 説

(1) 条件文では原則として条件句が第一文となり，結句が第二文となるのが，まれには両者の順位が逆になることもある。そして，条件句は接続詞 यदि か अगर に，結句は相関詞 तो に導かれるのが普通である。しかし,「条件」を示す接続詞はしばしば省略される。例

हो सके तो आना।	「できたら来なさい」
तुम्हें कुछ मालूम हो तो बताओ।	「君が何か知っていたら言いなさい」

(2)「条件」を示す接続詞は条件句の冒頭に置かれるのが普通であるが 他の品詞に先立たれることもある。例

वहाँ यदि स्त्रियाँ हों तो	「そこにもしも婦人達がいたら 」
वह अगर कोई भी व्यापार न करता	「彼がもし何も商売をしていなかったら 」

〔注〕 1) 関係代名詞 जो も यदि の代りに用いられることは既述の通りである。(301ページ3(1)参照)

2) तो もまれに省略されることがある。ただし 条件を示す接続詞が 省

略されていれば तो は省略し得ない。逆に，結句即ち主文が，前句に置かれれば तो の不要なのは勿論である。

2. 用　法

(i) 不可能条件の場合

「命令」以外のすべての時相は条件を示す接続詞に導かれることができる。そして，直説法諸時相が「確定的な事柄」を仮定的に述べるのに用いられるに対し，仮定法諸時相は，「不可能な事柄」「不確かな事柄」「ありそうな事柄」などを述べるのに用いられる。諸時相中，1.の「不定時相」即ち「可能未来時相」，3.の「不定未完了時相」即ち「条件過去」，9.の「可能未完了時相」，10.の「可能完了時相」，13.の「過去可能未完了時相」，14.の「過去可能完了時相」の6時相がそれである。わけても，上記の3，13，14の3時相は，実現しない事柄を示す，いわゆる「不可能条件」を示すのに用いられる。例えば，यदि यह जानता, तो… 「もしも，これを知っていたら…」では，実際に知らなかったことが暗示される。

そして，「不可能条件」の条件句に，上記の通り，3種の別があっても，結句即ち主文は常に同一の時相，つまり「条件過去」が採られる。(124ページ2，128ページ6，135ページ6参照)

(ii) 可能条件の場合

（1） 両句とも「確定的な事柄」が述べられるとき，両句に「未来時相」が用いられる。例

यदि आज्ञा होगी तो मैं आऊँगा।　「もしも命令があれば私は来ます」

यदि आप कहेंगे तो मैं चली जाऊँगी।「ご命令下されば私は出かけます」

（2） 前項の場合，条件句である動作の起ることが仮定的に述べられるならば，条件句に「不定完了」即ち「過去時相」が用いられる。例

यदि वह गया तो मैं भी जाऊँगा। 「もし彼が行くなら私も行く」

अगर तुमने किसी को मारा तो मैं तुम्हारे साथ नहीं रहूँगा। 「もしも君が誰かを殺せば私は君と一緒にいまい」

(3) もしも両句とも「可能性」の有無を初め,「疑問」「不確実」など不定的意味を示すとき,両句に「不定時相」が用いられる。例

अगर चाहें तो आप चले जाएँ। 「ご希望ならお出かけになれます」

गाय न हो तो दूध-घी न मिले। 「雌牛がいなければ乳やギーが得られまい」

(4) もしも条件が単なる「可能性」や「不確実性」を示し,結句が「確実性」を示せば,条件句に「不定時相」,結句に「未来時相」が用いられる。例

यदि आप चाहें तो चले जाइएगा। 「あなたがよければどうぞ行って下さい」

मैं निकल जाऊँ तो वह भी चला जाएगा। 「私が出て行けば彼も出かけよう」

(5) 文意の如何に関係なく,結句が「命令」であれば,条件句には常に「不定時相」が採られる。例

अगर आप चाहें तो मेरे साथ आना। 「ご希望なら私と一緒に来て下さい」

कोई सेवा हो तो बताइएगा। 「何かお役に立つことがあったら言って下さい」

注意 1) 前記(2)の場合は,彼の行くことは確実であるか,または彼が既に行っていることが暗示される。

2) 同じく(5)の形式は,他の接続詞や関係代名詞の場合にも適用される。例

जहाँ चाहो वहाँ जाओ। 「君の好きな所へ行きなさい」

जो चाहो वह (=सो) करो। 「君の好きなことをしなさい」

जब वह आए तब मुझ से कहना। 「彼が来たら私に言って下さい」

3) 前記(1)と(4)に関連することであるが、概して文章の如何に関係なく、時と条件の接続詞や関係代名詞に導かれる時でも、主節に「未来時相」が採られれば、従属節には「不定時相」または「未来時相」が採られる。例

जो कुछ कहूँ, करोगी? 「何でもぼくのいうことを君(女)はしますか」

जब वह आए [または आएगा] 「彼が来たら君も行くでしょう」
तब तुम जाओगे।

4) 条件句と結句との間に格別な時相の差異がなければ、同一時相の動詞が両句に採られるのが普通である。例

यदि मैं आता तो वह भी आता। 「もし私が来たら彼も来たのに」

यदि मुझको आज्ञा मिले [=हो] 「もしも許しが得られたら私は行きます」
तो मैं जाऊँ।

5) 上記4)の第2例では「許可」なり「命令」なりの発せられるのを待つばかりの姿勢を暗示しているが、もしも結句に「未来時相」が用いられれば、必ずしも行きたくはないが、命ぜられたら行く意になる。これに対し、条件句に直接法「現在時相」の है が用いられ、結句に普通の「未来時相」が用いられれば、自分が行きたがると否とに関せず、命ぜられれば行く意になる。なお、前記(1)項の場合をも参照のこと。

6) 直説法諸時相と仮定法諸時相との差異を例証すれば次の通りである。例えば यदि वह थका हुआ हो [=थक गया हो] तो 「もし彼が疲れていたら」では、彼が実際に疲れているかどうかは不明であるが、हो のかわりに है をもってすると、彼の疲労は既成事実であるのを単に仮定的にいってみただけのことになる。

また यदि उसने मुझको देखा हो तो 「もし彼が私を見たら」でも、彼

か私を真に見たかどうかは不明であるが，देखा है なら，確かに見たことが暗示される。

V. 動詞の省略 (क्रियाओं का छोड़ देना)

次のような場合に，動詞はよく省略される。

（1） 存在動詞 होना の暗示される नहीं が末尾に用いられるとき。例

यह काम का नहीं।	「これは役に立たない」
वहाँ कोई देखने वाला नहीं।	「そこには誰も世話する人がいない」

上記の場合，存在動詞の採否は任意であるが，「未来」の意味を暗示するために動詞の不定法と共に否定詞が用いられれば，動詞は常に省かれる。(1)

（2） 動詞の反復を避けるために，後句の動詞がよく省かれる。例

न मैं हूँ न तुम।	「(それは) 私でもなければ君でもない」
कहवा पीते है या चाय?	「コーヒーをお飲みですか，それとも茶を」

（3） 疑問詞が反語的に用いられるとき。例

झगड़े से क्या लाभ?	「けんかが何の得になるんだ」
अब वह बात कहाँ?	「今やその事はどこにある」(2)

（4） 「程度」や「様態」を示す形容詞が कि を伴うとき。例

कहानी लम्बी इतनी कि…	「物語は…ほどに長かった」
जितना कि यहाँ से मेरा घर।	「ここから私の家ほど」(3)

---

(1) 235ページ(8)，および171ページ (v) 参照。

(2) 「事は既に終わった」意。

(3) 「距離」を尋ねられての応答。

（5） ことわざ。例

अपने मुँह मियाँ मिट्ठू।　「自画自賛」(1)

चिराग तले अँधेरा।　「燈台下暗し」(2)

（6） ことわざ類似の言い方をするとき。例

यथा राजा तथा प्रजा।　「この王にしてこの民」

जब तलक साँस तब तलक आस।　「生命のある限り希望がある」

（7） 表題。例

नाम बड़े दर्शन थोड़े।　「聞くと見るとは大違い」(3)

मुन्शी प्रेमचन्द, हिन्दी के महान लेखक।　「偉大なヒンディー作家ムンシー・プレーム・チャンド」

VI 動詞の一致 (क्रिया का उद्देश्य या कर्म से सादृश्य)(4)

（1） 性を異にする両主格主語が並用されるとき，動詞は常に男性の複数を採る。例

कुमार और कुमारी खेलते हैं।　「少年と少女とが遊んでいる」

मेरे कोई भाई बहन नहीं थे।　「私には兄弟姉妹がなかった」

（2） まれに動詞に最も近い主格主語に一致させることもある。例

एक बालक और एक बालिका आये [または आयी]।　「1少年と1少女とが来た」

मैंने एक बूढ़ा और एक बुढ़िया देखे [または देखी]।　「私は1老人と1老婆とを見た」

---

(1) 直訳=「自身の口で（自身を）首長（呼ばわり）」。(2) 直訳=「燈台の下は暗い」。

(3) 直訳=「名は大きいが会ってみたら小さい」。

(4) 原語の意は「主語 目的語と動詞の一致」。

注意 近頃の傾向として，主格主語が全部女性でもない限り，男性の複数形が採られる場合が多い。

（3） 離接々続詞が使用されると，動詞は末尾の主格主語の性や数と一致する。例

पिता अथवा उसकी पुत्री आएगी। 「父かその娘かが来よう」

注意 ただし，次のような場合には，動詞の反復を避けるために，最初の主語にしか動詞がない。（342ページ「動詞の省略」(2)参照）例

क्या तुम हो या वह? 「(それは)君か，それとも彼か」

क्या बेटा आता है या बेटी? 「息子が来るのか，それとも娘か」

（4） 二つの主格名詞のうち，後の方が述部主語として前の方のものの補語となる場合，そのいずれに動詞を一致させるかは未だインド人の間でさえ決まっていない。例えば，हमारी सबसे प्राचीन राजधानी तोक्यो नहीं थी। 「われわれの最古の首都は東京でなかった」におけるような言い方では，動詞は第一主格主語である女性名詞 राजधानी 「都」に一致させるのが常識的で，「東京」に一致させて था にするのは悪いが，逆に ओसाका एक प्राचीन राजधानी थी। 「大阪は古都であった」になると，動詞を第二主格名詞である女性の राजधानी に一致させるべきか，第一主語の男性名詞「大阪」に一致させて था にすべきか，一定しない。結局，どちらでもよいことになる。बम्बई एक टापू था। 「ボンベーは一つの島であった」においても，女性名詞である主語 बम्बई に一致させないで，補語の टापू 「島」に一致させている。

また，उसका तोता बहुत सुन्दर चिड़िया थी। 「彼のおうむは非常に美しい鳥でした」においては，चिड़िया のような女性名詞と雄も雌もある「おうむ」のような中性名詞とが並用されたゝめ，自然に女性的意味が強調される結果になり，動詞が補語としての第二主格名詞に一致させられたも

の。

従って，この場合，女性名詞 चिड़िया の代りに同義の男性名詞 पक्षी *s* を以てしたら，動詞は था でもよいわけである。しかしながら，一般的に観て，動詞は第一主格主語に一致させるのが最も普通である。

なお「値段」などが述べられる場合，よく並用される「値段」と「金額」とを示す両主格名詞に対する動詞の一致も一定していないが，いずれかといえば，この場合にも「値段」を示す第一主格語に一致させる方が一層適当である。例

इसका दाम दस आने है [-हैं]। 「これの価は10アンナだ」

उसका मूल्य आठ रुपये है [-हैं]। 「その価は8ルピーだ」

（5） 動詞がいわゆる名詞動詞であれば，動詞は主格主語の性や数と一致し，名詞動詞中の主格名詞とは一致しない。例

सूरज देखने में बहुत छोटा दिखाई देता है। 「太陽は見たところ甚だ小さく見える」

मुझे पक्षियों के चहचहे सुनाई देते है। 「私に鳥どものさえずるのが聞える」

[illegible] また，मैंने प्यालियाँ भर भर कर देनी आरम्भ की। 「私は小さいコップを満たし続け出した」においても，動詞は名詞動詞中の男性名詞 आरम्भ *s* 「開始」とばかりでなく第1主格形の複合目的格句・कर देनी とも一致しないで，その目的格句中の目的語 प्यालियाँ と一致したもの。

（6） 「作為」「呼称」「任命」などを示すいわゆる「作為動詞」を初め，जानना「(と)知る」「(と)認める」，देखना「(と)見る」，मानना「(と) 認める」，पाना「(を) 見出す」，समझना「(と) 解する」などの動詞では二つの対格が採られる。この場合，第一対格が代名詞であっても名詞であっても，与格形が採られるが，それらの主語が動作格となる場合，第二対格の

性や数の如何に関係なく動詞は常に第三人称男性の単数にとゝなう。例

(i) राजमन्त्री ने उसका रक्षामन्त्री बनाया। 「首相は彼を国防相にした」

मैं उसको देशभक्त समझता हूँ। 「私は彼を愛国者と思う」

(ii) राष्ट्रपति ने उपराष्ट्रपति को सभापति बनाया। 「大統領は副大統領を議長にした」

अकबर ने आगरे को अपनी राजधानी बनाया। 「アクバルはアーグラを自分の都とした」

(7) 同じく動作格の採られる文中，第一対格がそれ自身を修飾する形容詞または形容詞として用いられる動詞の分詞を有する場合にも，(i) それらの形容詞や分詞は，主動詞もろとも，対格と一致し (ii) その対格が को を採れば動詞も形容詞も第三人称男性単数にとゝなう。例

(i) मैंने एक गाडी खडी देखी। 「私は車が停まってるのを見た」

उसने भूल से सियाही से अपनी मेज काली की। 「彼は誤って黒インキで自分の机を黒くした」

(ii) उसने दो गाडियों को खडा किया। 「彼は2台の車を停めた」

(8) たとえ対格名詞が को を採っても，それを修飾する形容詞または形容詞として用いられる分詞は，その対格名詞と一致する。例

मैंने उस मिठाई का बढिया मान लिया। 「私はその菓子を上等と思った」

तुम अपनी खाने पीने की वस्तुएं खुली (हुई)[=वस्तुओं को खुला (हुआ)] न छोडो। 「君は自分の飲食物を開けっ放しにして置いてはいけません」

たゞし，名詞動詞を構成する形容詞はその種の与格・対格とは一致しな

い。例.

गाडी को खडा करो।　　「車を停めなさい」

=गाडी खडी करो।

注意 1) 「代名詞と動詞との一致」については280ページ(1),(2)参照のこと。

2) 「不定法と動詞との一致」については321ページ4 および323ページ(参考)2) 参照のこと。

3) 「未完了分詞と動詞との一致」については323ページ2.2 およびその参考全部参照のこと。

4) 「完了分詞と動詞との一致」については333ページ2.(3) 参照のこと。

5) 「文章論」中に「時相」関係を扱わなかったのは，既に「品詞」において言及したためである。

(ii) 散文　सुत! तुमने क्या सुख हमारे संग पाया। (तुम) निज प्रण पूरा कर प्राण देके सिधारे।(1) 「息子よ！お前は私達と共に何と楽しかったことか。(2) (お前は) 自身の契約を果たして死んだ」。

韻文　सुत! सुख तुमने क्या संग पाया हमारे।

निज प्रण कर पूरा प्राण देके सिधारे॥

上記，2例とも脚韻が押韻されている。すなわち，第1例では両句とも आया で終り，第2例では両句とも आरे で終っている。

注 1) 韻 (तुक) とは各行の末尾の音をそろえて揃えることにほかならない。なお若干の例を示すならば，रंग「色」の同韻語は उमंग*「熱情」「有頂天」，जंग*f「戦争」，ढंग「方法」「流儀」，पतंग「とんぼ」（とんぼ）「たこ（紙製の）」，विहंग「鳥」などであり，同じく नाम「名」のそれは काम「仕事」，चाम「皮革」，दाम「価」，राम（人名），लगाम*f「手綱」，श्याम*「黒い」などである。

2) 大部分の詩句は4行から成っているが(3)，その全部が同韻であるとは限らない。(i) 第1行目と第2行目，第3行目と第4行目とが，それぞれ同韻であったり，(ii) 第1行目と第3行目，第2行目と第4行目とが交互に同韻であったりする。また (iii) 全然押韻されないものもある。つまり，押韻詩 (तुकान्त छन्द) に対する無韻詩 (अतुकान्त छन्द) である。

要するに，押韻するかしないか，押韻するとすればどの形式の韻を選ぶかは作詩者の好み次第である。

2　音量 (मात्रा) と音節 (वर्ण)

ヒンディー詩句調整のための音 (ध्वनि) は，その音の計算 (संख्या) 法の相違で，音量と音節とに分たれる。即ち，मात्रा とは音の発音に要され

---

(1) ここでは接続分詞が二つ並用されている。直訳＝「生命を棄て去った」

(2) 直訳＝「お前はわれわれと一緒で何たる楽しみを見出したことよ」。

(3) しばしば 1，2，3，5，6行またはそれ以上のものも見受けられる。

る最も短い時間の単位，換言すれば短母音の発声に占められる時間の長さが意味される。これが詩句律動の基調となる。

各短母音は1 मात्रा として計算され，これの2倍の音量や時間を要する長母音は2 मात्रा として計算される。この長短の両音を区別する記号として，। 印が短音，ऽ 印か長音を示すのに用いられる。(1)

これに対し，वर्ण (=अक्षर) はその基礎を母音に置くことにおいて音量の場合同様であっても，音の長短に全然無関係であることが違っている。つまり，長短の母音も二重母音も，それらが子音を伴おうか伴うまいが，字数の如何に一切関係なく，1音で発声可能のものは1音節として計算されるのが散文の場合である。

例えば，त ta や प्र pra を初め，क्या「何」，लाभ s「利益」などは散文では皆1音節である。ところが，韻文における音量・音節の判定で特に注意しなければならぬことは，語の終りにある子音字の発音についてである。例えば，上記の लाभ や人名の राम は，その現代音 lābh や Rām は1音節語であるが，韻文では lābha や Rāma と発音されるので2音節語になる。つまり，散文ではほとんど常に無声になる語尾子音字も，韻文では有音にな。そのために，1字が1音節・1音量を形成することになる。この事はサンスクリット由来語の場合だけでなく，普通のヒンディー語の場合でも同様である。インドの国歌 (राष्ट्रीय गीत) がそのよい例で，これには動詞以外，サンスクリットの品詞が使用され各子音字とも短母音化されている。

जन(2) गण(3) मन(4) अधिनायक,(5) जय हे

jana gaṇa mana adhināyaka jaya he

(1) 英詩における ⌣ 印や — 印に当る。

(2)「人」「人々」「人類」。　(3)「群」「団体」。　(4)「心」「魂」　(5)「指導者」。

索　　引 (अनुक्रमणिका)

A

B

C (チ)

D

L

M

N

O

P

Z

正 誤 表 (शुद्धिपत्र)

脚注 (पृष्ठ के नीचे की टीका) に使用された1ポ活字あるも，次の通り，若干なりの誤いものがある。

ページ (पृष्ठ)	誤 (अशुद्धि)	正 (शुद्धि)
76	ो	वो
87	[illegible]	भला
161	अ ा	आला
213	च र	बचार
315	लिया	लिया

昭和35年4月1日印刷
昭和35年4月15日発行

著者 沢 英 三

発行所 アーリヤ学会
大阪市天王寺区上本町8
大阪外国語大学内
(振替口座=大阪83527番)

発売元 丸善株式会社
東京都中央区日本橋2丁目6
(振替口座=東京第5番)
丸善大阪支店
大阪市東区博労町4丁目
(振替口座=大阪74番)

印刷所 株式会社 天 学 社
代表者 山 間 照 久
大阪市福島区野田町43

[定価 金六百円]